C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト

竹本孫一

（元民社党衆議院議員
元党政策審議会長）

オーラルヒストリー

GRIPS

政策研究院
政策研究大学院大学

C.O.E. オーラル・政策研究プロジェクト

竹本孫一　オーラルヒストリー

〈目 次〉

［竹本孫一・略歴］／2

《第１回》

田川中学・旧制五高に学ぶ／5　英国労働党に傾倒／10　社会民衆党の応援演説／14　内閣調査局から企画院へ／17　社会主義とは何か／21

《第２回》

奥村喜和男氏の配下として／29　「新体制」、大政翼賛会／33　国土計画の立案／39　内閣情報局時代――出版統制に従事／41　革新官僚の同志と……／45

《第３回》

共産主義と全体主義／55　「新党計画」の顔ぶれ／58　企画院事件と昭和研究会／62　満州への左遷／65　帰国、終戦内閣構想／68　敗戦、そして「科学と政治の会」／72

《第４回》

片山内閣の誕生――総理大臣秘書官／81　次官の人選に関与／85　片山内閣の顔ぶれ／90　六年間の公職追放／94　衆議院選挙に出馬／99

《第５回》

統一社会党の浜松支部長／107　社会党分裂、民社党の結成／111　地盤固め――東海学院の設立／113　初のヨーロッパ旅行／118　衆議院議員に初当選／121　「政策の竹本」として／126

《第６回》

政策審議会長として／131　大蔵委員として活躍／135　「個の解放」とネオ・ナショナリズム／139　歴代総理との関係／143　民社党低迷の理由／146

《第７回》

余力を残して／153　大蔵省の人脈を活かして／156　豊富な外遊経験／160　戦前・戦後の交遊関係／164　株で読む日本経済／167　日本再生の戦略／170

［あとがき］　政策研究大学院大学教授　伊藤　隆／177

［竹本孫一著作リスト（年次順）］／178

〈速記〉　ペンハウス・片岡裕子

竹本 孫一（たけもと・まごいち）　略歴

明治３９年１２月	山口県に生まれる
昭和　３年　３月	第五高等学校文科甲類卒業
昭和　６年　３月	東京帝国大学法学部政治学科卒業
昭和１０年　７月	内閣調査局勤務
昭和１４年　６月	企画院調査官
昭和１５年１１月	大政翼賛会制度部副部長（～昭和１６年３月）
昭和１７年　６月	情報局総裁官房第二（文書）課長
昭和１８年　４月	情報局第二部出版課長
１２月	満州国国務院総務庁参事官
昭和２２年　６月	片山内閣総理大臣の秘書官を務める
昭和２６年　４月	海上保安大学校事務局長兼教授
昭和２８年１２月	東海大学講師
１２月	日本体育大学講師
昭和３４年　４月	東海学院校長兼理事長
昭和３８年１１月	衆議院議員初当選（民主社会党、昭和４５年４月民社党に改称、静岡３区）
昭和３９年　１月	党中央執行委員（～昭和６０年４月）、同政策審議会副会長（～昭和４２年６月）
昭和４１年度	党教宣局長
昭和４２年　６月	党政策審議会長（～昭和５２年３月）
昭和５２年　３月	党政権ビジョン委員会委員長（～昭和６０年４月）
１１月	勲二等瑞宝章受章
１２月	衆議院沖縄及び北方問題に関する特別委員会委員長（～昭和５３年１２月　第８４回常会～第８６回臨時会）
昭和５６年　２月	党国会議員団長（～昭和６０年４月）
昭和５８年１１月	衆議院議員引退
昭和５９年１１月	旭日中綬章受章
昭和６０年　４月	民社党顧問
平成１４年　５月	逝去、９４歳

竹本孫一
オーラルヒストリー

第1回

[2000年6月8日14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

竹中治堅(政策研究大学院大学助教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

田川中学・旧制五高に学ぶ

竹本　私が、いま考えてることが二つあります。それを先に申し上げます。それは、ワン・スモール・ワールド・アフター・オール（One small world after all）――結局のところ、世界は小さなスモール・ワールドであるということが、僕の基本的な考え方です。そういう意味で、ちょうど今日の新聞で大きく出ましたが、世界の十の証券市場がつながっちゃう。私の思う通りになるんだ。ワン・スモール・ワールドと。これを小さくしているのは、金融と証券が中心ですね。いずれにしても、スモール・ワールドだということが、私のすべての考え方の根底になってるということです。

それから、もう一つは、スローガンみたいなものですが、私はウィープ・ナット・フォア・ザ・パスト（Weep not for the Past.）――過去に泣くなと。フィアー・ナット・ザ・フューチャー（Fear not the Future.）――未来を恐れるなと。そういう気持ちなんです。だから、割に大胆に自分の行動も、突飛なことをやる。この二つが私の考え方の基本です。

伊藤　いままで先生は回想や何かを書いておられますけれども、お生まれのこととか、ご両親のこととかは全然書いていないんですよ。

哲子夫人　全然、覚えてないんですよ。過去に泣くとか喜ぶとか全く関心がありません。お父さんは、大学を卒業の年――昭和六年に亡くなったのね。

竹本　昭和六年、不景気の真っ最中で……。

伊藤　そのお父さんは、何をされていたんですか。

哲子夫人　農業ですけどね。途中で商売をやって福岡のほうへ行ったものですから、だから田川中学なんです。本当は山口県で生まれて育ったわけですけどね。

父の名は竹本勝太郎、母は小ぎく（平成六年十一月十九日、伊藤隆・楠精一郎・季武嘉也の三氏による聞き取り）。

伊藤　小学校は、どちらなんですか。

哲子夫人　山口県です。

竹本　山口県の、安倍源基と同じところです。だから、徳山のちょっと手前です。

哲子夫人　田布施のほうです。田布施と光の間の……。

竹本　難波大助も生まれたところなんだ。

哲子夫人　伊藤博文の生まれたところから、一里ぐらい離れたところです。

伊藤　そんな裕福な家に生まれたわけではないんですか。

哲子夫人　いえいえ、それほどではないです。

伊藤　でも、貧乏というわけでもないんでしょう？　お生まれになったのが明治三十九年でしょう。それで、小学校まで……。

哲子夫人　私はよく知らないけど、小学校は山口にいて、それから田川で中学に入ったみたいですよ。

伊藤　高等小学校も入られたんですか。

竹本　ええ。

伊藤　そうすると、小学校はその当時は六年ですね。六年の上に二年行って、それで中学の一年になるんですか。

哲子夫人　だから、慌てて中学四年で高校へ入ったんです。それで少し追いついて……。
伊藤　じゃあ、田川中学に入る前は、高等小学校。
竹本　そうそう。それから中学に入ったんです。
伊藤　それは、何で田川に移ったわけですか。
哲子夫人　お父さんの商売で。お父さんの親戚が田川のほうにいたりして、商売を始めた。
伊藤　何か縁があったんですか。
哲子夫人　ええ、そうですね。
伊藤　あの辺りは近いから、人の行き来もあるんだと思いますけれども……。
哲子夫人　そうらしいです。
伊藤　ご自分で、どんな子供だと考えておられましたか。
竹本　あまり興味ないね、そんなことは。
伊藤　私のほうは興味がありますから、そんなことは言わないでください。
哲子夫人　何も言わないんですよ。
伊藤　嫌なんですか。
哲子夫人　嫌なんですね、きっと。何か潜在意識があるのか。
伊藤　あまりいい思い出がないのかもしれない。
哲子夫人　お父さんがすごい癇癪持ちで、よく兄弟はぶたれてね。それで、みんな耳が遠くなったの。だから、思い出が悪いのよね。
竹本　そういうことも、一つの資料にはなるのかもしらんけど、僕はあまり興味ないね。僕は、国策以外には興味ない（笑）。
伊藤　中学の時に、将来どうしようというふうにお考えだったですか。
竹本　中学の時は、僕はだいたい数学が好きなんです。数学者になろうかと思ったことがある。それで高等学校が、初め理科ですな。ところが、僕はドロー（作図）が大嫌いだった。それで、理科から文科へ変わった。
伊藤　僕ら、当時の中学というのは、分からないわけですよ。だからどんな状況だったのかということを、ちょっと話してくださいよ。
哲子夫人　中学校の一年の時に、音楽で丙をもらった話をしたら……。
竹本　それは二年の時だ。
哲子夫人　音痴なんですよ、耳が悪いでしょ。
伊藤　最近の話じゃないんですか。その頃から耳が……。
竹本　校長が、偉い人だったけど、ちょっと変わっておられた。音楽を正科にしてたんだ。僕はその頃、まだ中学二年の時ですから、一所懸命英語を勉強してた。だから、唱歌なんていうのは問題にしないんだ。ということで、英語の本を読んでた。そうしたら校長が回って来て、ゲンコツをくれた。その時、唱歌は丙をもらったんだな。
伊藤　英語はどうして好きになったんですか。
竹本　どうしてですかね。
伊藤　でも、何か切っ掛けがあるでしょう。
哲子夫人　割合と好奇心が強いんですよ。だからじゃない？
伊藤　それは中学に行ってからですか。
竹本　もちろん。
伊藤　じゃあ、中学の先生が良かったんでしょう。
哲子夫人　きっと、そうでしょう。
竹本　先生が良かったんですね。

伊藤　もう二年の時は、英語の本が読めるようになったんですか。
哲子夫人　英語は、大変得意なんです。
伊藤　数学と英語が得意なんだ。
哲子夫人　そうですね。
伊藤　田川って言ったら、田舎のほうでしょう。
哲子夫人　炭鉱地です。
伊藤　英語の本なんか、買えたんですか。
竹本　英語の本は買いはしないけどね。
伊藤　教科書ですか。
哲子夫人　勉強の仕方が違ったんじゃないかしらね。字引を全部暗記したとかって……。
竹本　参考書を読んだんでしょうね、いま思えば。英語と数学、僕はどっちが好きか分からん。同じぐらい好きなんです。いまでも、そうです。
伊藤　英語は、会話もだいぶお出来になるようですけれども、会話はいつ出来るようになったんですか。
竹本　会話は高等学校に入ってからだね。英国人がいましたからね。メイヤーさんという先生がいましてね。その人は、詩人なんだ。非常に気が合いまして、いつも日曜日は散歩をご一緒していた。詩人でしたからね。

L・メイヤー先生、ロンドン出身（「我が青春」一、昭和五十九年二月八日付『静岡新聞』）。

伊藤　中学から高等学校に入るのに、どこの高等学校に入ろうかというのは、選択しなきゃ……。
竹本　僕が中学時代には、高等学校と言えば一高、三高、五高と言われたんです。東京と京都と熊本。それだから、熊本に行こうということになったわけですね。
伊藤　かなり入学試験の競争は激しかったですか。
竹本　激しかったでしょうね。
伊藤　当時確か、高等学校の入学試験は大変だった。
竹本　そういうことを言うなら、五高は熊本ですね。熊本の五高で、当時は一高、三高、五高というのが、二十五校あるうちの花形だった。その時に我々は、とにかく一高と三高を押さえてみせるという気持ちが強かった。事実、僕は押さえた。
伊藤　それは勉強でですか。
竹本　勉強の面では、三高も一高も問題にしなかった。
伊藤　ずいぶん自信だな（笑）。
竹本　僕らが押さえて、その結果、高等学校から大学に入った当時は、皆さんご存知でしょうか、「八紘一宇」という言葉があった。僕はそれを高等学校の総会の時に――東京でやる時に、「いま、そういうのは違う。五高一宇だ」と（笑）。それは、大蔵大臣が池田勇人だ。それから、文部大臣は剣木亨弘だ。これも五高だ。そういうふうなわけでね。佐藤栄作も五高だ。それから、我々のグループで言いますと、大蔵次官をした平田敬一郎、それから日銀総裁は森永（貞一郎）だ。目ぼしいのは、みんな五高ですよ。だから僕は、そう言っちゃ悪いけれども、他の高等学校なんか問題にしてなかった。
伊藤　五高の時に、転科するわけですか。
哲子夫人　そうです。
伊藤　五高に最初入った時は、理科ですね。
竹本　入った時は理科で入ったの。ところが、絵を描くのがある。僕

は、あれが大嫌いなんだ。それで、一年が終わった時、初めて文科へ転科が可能になった。それで七人が試験を受けて、通ったのは僕一人だ。あとは、みんな落ちた。それで僕は文科に行った。その文科に変わる時に、試験を一週間も受けるんだ。体操以外は全部試験だった。その時にノートを貸してくれたのが、大蔵次官になった平田なんです。彼は同級生なの。

伊藤　平田さんは文科なんですね。

竹本　平田の文科一年のノートを……。体操以外は全部の科目が試験ですからね。それを借りて、文科の転科試験を受けて、通ったわけだ。そして文科へ変わって、それで文科二年の一学期は、三組ありましたね。ＡＢＣ、甲類がね。その甲類のなかで、僕は……。

伊藤　文甲が三クラスあるんですか。

竹本　ああ、百二十人おった。四十人が三つ。

哲子夫人　文科の甲類が三つあるの。

竹本　ＡＢＣ、三つある。百二十人おるわけだ。

伊藤　その他に、文乙とか文丙があるわけでしょう。

竹本　いや……四つあるわけですね。甲が三つあると思ったな。それから乙があって、乙はドイツ語だ。丙はフランス語だが、熊本にはなかった。福岡にはあった。それで僕は、理科から文科の二年に、転入した。一年生の体操以外の全科目の試験を受けて、二年に編入した。一年も、全科目は平田君のノートで学んだ。平田のノートを借りて、受けて……。それで文科二年一学期の試験では、僕は百二十人のうちでトップだった。それで平田が、「ノートを貸すのではなかった」と言った（笑）。

伊藤　いちばん最初に理科を受けられた時、将来は何になろうと思ったんですか。

哲子夫人　数学の先生じゃないですか。

竹本　それは細かいことは分からん。数学者になるつもりだったかもしれないね。いまでもそうだ。数字が飯より好きなんだ。

伊藤　書いてあるものを見ると、数字がいっぱいですからね。じゃあ、今度は文科に移られた時は、何になろうと思っていたわけですか。

竹本　あの時はね、国際連盟がちょうどできた当時で、いちばん華やかなのは国連だった。それで英語が好きだから、ちょうど合わせて、国連のいわゆる外交官になろうと思ったんですね。

伊藤　高等学校の時代の思い出が、何かありますか。

竹本　高等学校時代はね、特に思い出と言えば、『Our English』という英語の雑誌を出した。これは、後に九大の英文学部へ入った男がおりまして、僕は仲が良くて、二人でだいたい責任を持って、『Our English』を出した。まあ、面白かったというか、楽しかったというか。

伊藤　五高には、外人の先生はいなかったんですか。

竹本　いますよ。

伊藤　それが、この人（メイヤーさん）ですか。

竹本　ドイツ人と英国人と、二人おる。

伊藤　じゃあ、その雑誌を作るのに、そういう人達の指導もあったわけですか。

竹本　出す時には何も指導はなかった。我々が勝手に出した。ちょうど、このぐらいのやつをね。

伊藤　どこに配るんですか。

竹本　生徒に配ったんだ、学生に。

伊藤　あと、よく旧制高校だと、バンカラと言われるでしょう。やっぱりそうでしたか。

竹本　バンカラでしたね。

哲子夫人　そうでもなかったでしょ。あなた、写真を見ると一人だけ髪を伸ばしたり、着物を着たり、お洒落だった。外交官になろうと思ったからかしら（笑）。

竹本　先生は高等学校はどこですか。

伊藤　僕は、もう新制高校ですからね。

竹本　どこですか。

伊藤　秋田ですから。高等学校の時代は、学生生活は楽しかったんですか。

竹本　まあ、英語の雑誌を出したりしてね。その点は楽しかったですね。

伊藤　じゃあ、そこで友達もたくさん出来たわけですか。

竹本　そこで、ちょっとついでに言うと、僕は中学時代、ランニングの選手だったんだ。一〇〇メートルが十二秒五分の一だった。十二秒五分の一というのは、当時、オリンピックの地方の予選では、だいたいトップですよ。だから、極端に言えば、ランニングの選手になろうかなと思ったこともあるんだ。ところが、僕は頭で生きていこうということだから、反対なの。選手というのは、低能が多いから。でも、私の熊本の高等学校の体育の先生はね、高等学校に入った人を、いっぺん、一年生を全部走らせるの。それで適性検査をやる。そうすると、僕はどれやったってトップですよ。それで見込まれちゃって、「体育部に入ってくれ」ということで、先生が職員室に呼んで説得したんです。

僕は昔から、そう言っちゃ悪いけど、頭が自慢なんだ（笑）。だから、体育の選手なんかは恥さらしだと。それで僕は体育の先生に……。いい先生なんだ。後にその先生は、体育大学の教授。最後は学長だ。それで僕を引っ張り通した。でも私はね、いま言ったように、頭で行こうと思ってるんで、体育でやろうとは思っていないもんだから。先生には悪いけれどもね。しかし幸いに二年の一学期、いま言ったように試験を受けてトップになったでしょ。そうしたら体育の先生が僕を呼んで、「君が体育部に入らないという気持ちは分かった」と言ったよ（笑）。それで話は円満になって、それからその先生とも関係が良くなって、先生が体育大学の学長になった時に、僕は体育大学の経済学の講師になった。死ぬまで親しかった。

栗本義彦。当時、五高教授、陸上競技部部長。のち日本体育大学学長（『私のなかの昭和史』一〇頁）。

黒沢　日体大ですよね。

伊藤　旧制高校と言うと、よくストームとか、ああいうのやりましたか。

竹本　やりましたよ。あれは寄宿舎に入ると、夜中に起こされて必ずやるんだ。それは、いま思い出しても楽しい思い出です。

伊藤　やっぱり楽しいですか、あれは。

黒沢　先生はやったほうですか、やられたほうですか。

伊藤　やったほうじゃないんですか（笑）。旧制高校というのは、友達がたくさんできるでしょう。どんな方々と親しくされましたか。

竹本　それはいま言ったように、大学を出るまで無二の親友というのは平田ですよ。彼はいま言ったように、彼のノートを借りたお蔭で僕は文科に行って、それで文科でトップを通した。それにも拘わらず、

非常に親しい仲でね。よその高等学校の卒業生で、ともかくも僕らに太刀打ちができるというのは、第二高等学校の出身の愛知揆一だけだ。あれは、僕は親しいだけじゃなくて……。ちょうど我々の時に、先生の時はそうでもないでしょうけれども、席次順番がなくなったの。その前には、恩賜の銀時計があったの。我々の時からなくなる。

伊藤　なくなったんですか（笑）。それは残念だ。

竹本　これが、いちばん残念なんだ（笑）。もし銀時計があれば、僕と愛知の争いだった。……と思うけれどもね、ないんだから（笑）。それから、一級下だけれども、日銀総裁の森永貞一郎。

伊藤　やっぱり親しかったんですか。

竹本　あれ、一級下だ。だけど同じ高等学校で、法学部も同じですから、仲が良かった。それから、野球で言えば朝日の広岡（知男）。

伊藤　社長になった。

竹本　私は後から入ったもんだから、三組に行くのが普通なんですけど、ＡＢＣと三つある、Ｂのクラスに入ったんだ。それは、一人転科で後から入ったから。

哲子夫人　理科のお友達の、黒川さんは？

黒川宗雄、五高出身。柳町病院長（『私のなかの昭和史』一一頁）。

竹本　ああ、理科系統では黒川というのがおるね。黒川君というのは、私が熊本の関係で引っ張った。仲のいいグループであって……。いまの自衛隊のなかに医務室ができて、そこの主任に引っ張ったの。防衛庁の……。

伊藤　お医者さんですか。

竹本　医学博士だ。これも死んじゃったな。

伊藤　生きてる人なんていないでしょう（笑）。

哲子夫人　広岡さんは、まだ生きていらっしゃる。

伊藤　広岡さんは、お元気なんですか。

哲子夫人　お元気ですよ。あの方はものすごくお元気で、この間電話をかけてきて、「奥さんが出て良かった。竹本君じゃ、耳が遠いから……」って（笑）。耳が遠くないらしいですね。

英国労働党に傾倒

伊藤　五高のことはいいとして、五高から東大の法学部に行く時は、試験があったでしょう。

哲子夫人　試験がありました。

伊藤　他の学部は、あまりないですからね。法学部だけは試験があったと思いますけど……。

竹本　さあ、試験のないところもあったかもしれませんね。

伊藤　文学部なんてないんでしょう。

竹本　法学部は、もちろんありました。

伊藤　それは問題にならなかった？

竹本　僕は東京に試験を受けに来る時に、全部、引っ越しの荷物を持って来たんだ（笑）。絶対、自信があった。下宿のおばさんがびっくりしとった。絶対、通ると。荷物を持って来てるんだから。

伊藤　東京は、その時が初めてですか。

竹本　ほとんど初めてだね。

伊藤　どうやって下宿を決めたんですか。

竹本　さあ……。東大の、すぐそばなんだ。僕は、だいたい田舎育ちだから、電車が嫌いなんだ。電車に酔うんだ。それで、東大の赤門のすぐ近くが食堂になっていて、そこの二階が一部屋空いてたんだ（笑）。

伊藤　それは、学資は誰が出してくれたんですか。

竹本　それは家で出したよね、学資は。

伊藤　ご両親がまだ……。

哲子夫人　お父さんは、大学を卒業した年に死んだんです。

伊藤　じゃあ、良かったですね。

哲子夫人　でも、おじさんも出してくれたみたいでしたね。何しろ初めは、長男だから家を継がせるって言うんで、大学へやらないつもりだったから。だからお父さんは、「一番にならなかったら、やめさせる」って。中学の時から、そういうふうな単純なあれでね。それで、こうなっちゃったの（笑）。

伊藤　いま長男とおっしゃったでしょ。ということは、弟さんたちもいらっしゃったということですか。

哲子夫人　本当は男が五人いたんですよね。男が五人いて、長男で、いま誰もいないわけ。弟はみんな死んじゃって。二人は戦死でしたからね。

伊藤　高等学校とか大学の時に、社会主義の洗礼を受けましたか。

竹本　社会主義の洗礼というのは、我々の高等学校の時代は、ものすごく左翼のグループが強かったです。だけど私は、左翼グループは嫌いだったの。だから、研究会とか何とかで議論は大いにしたけども、中には入らなかった。私はどちらかと言うと、大学でもそうですけど、南原繁、河合栄治郎、あるいは蠟山政道という先生ですから、いわゆる理想主義だ。だいたいが、そうですから。だから、左翼には興味がなかった。

伊藤　当時、五高なんかで、左翼のリーダーというのは、どんな人がいました？

竹本　高等学校は席次順にするんですけど、僕は後から入ったもんだから、いちばんトップへ行くところだが、二番目ぐらいにいたんだ。隣が唯物の研究で、左翼の親方だった。そいつは、大学の時は九大のオルグになって、博多へ行ったんだ。僕は東京へ来た。でも、仲はいいですけどね。東大では、そういう活動には僕はノータッチでしたね。

伊藤　その人は共産党になりました？

竹本　その人は九州帝大だ。九大のオルグになって行って、その後いろいろやっておったけれども、最後は熊本の市役所に入ったんだ。だから、転向したのかもしれないな。

伊藤　東大の法学部の時代、将来どうしようというふうに考えておられたんですか。

竹本　その時は、やっぱり若い時ですから、決定的には決まっていませんでしたから、フラフラしてたと思いますね。外交官になりたいと思ったこともあったし……。それから大学教授は、そう言っちゃ悪いけど、僕はなる意思はなかったの。成績はあったけど、なりたいという意思は全くなかった。それは、妙なことを言うと悪いけど、僕はバスに弱いんです。それで大学時代にも、金もないくせにタクシーに乗ってたの。それで、東大の教授の刑法は牧野英一。牧野さんが、あんな人でもバスに乗ってくる。その当時、東大の教授で自分で車を持ってるのは、末弘の厳ちゃん（末弘厳太郎）だけですよ（笑）。それで僕は、成績はあると思ってたけれども、大学教授は一生苦労してタクシーもやっとこせだと（笑）。ということで、大学教授は全然なる気

はなかった（笑）。

哲子夫人　愛知さんが、「お互いに君も僕も……」って。

竹本　僕と愛知が、断然トップだったんだ。僕のあれで言えば、敬意は表してたんだ。だけど、非常に仲が良かった。それで愛知がね、「僕らの顔じゃあ、外交官にはなれない」って言ったのかな。

哲子夫人　「お互いに君も僕も、外交官にはちょっと顔が……」ってね。スタイルが悪いってね。

竹本　もっとスマートにならんと、だめだって。

哲子夫人　同級の松井さん（後のフランス大使）なんか、美男子だったのね。ああいう方と一緒でしたからね。外交官はなかなか立派な……。いまは、そうでもないようですよ。

松井明、昭和四十二年九月～同四十五年九月までフランス大使（秦郁彦編『日本官僚制総合事典　一八六八―二〇〇〇』東京大学出版会、二〇〇一年、一六七頁）。

伊藤　それで、外交官はだめだと思ったわけですか（笑）。

哲子夫人　愛知さんが言ったっていうことを、言ってたわね。

伊藤　それじゃあ、何になるつもりだったんですか。

哲子夫人　だから、政治家（笑）。

伊藤　じゃあ、初めから政治家になろうという希望もあったんですか。

竹本　それは、いま言ったように外交官になる意思はなかった。それから、学者になる意思もなかった。ということからいくと、会社員なんていうものは考えたこともない。だからやっぱり、政治家みたいなね。だから僕は大学を卒業して、三月三十一日に安部磯雄先生のところに行ったんだ。全然、関係なく行っちゃった。

伊藤　それまで全然、関係がなかったんですか。

竹本　ええ。さっきも言ったように、フィアー・ナット・ザ・フューチャーだ。ウィープ・ナット・フォア・ザ・パスト――過去に泣くな。未来は恐れるな。信念をかける。それで、安部先生のところに行ったんだ（笑）。そうしたら、安部磯雄先生がえらく喜んでね。「今頃の学生と言えば、みんな左になるのに、あなたのようなのは珍しい」と言って、安部先生がえらく喜んだんだ。それでその後、そのご縁で安部先生は可愛がってくれたんですがね。

伊藤　何で安部先生なんですか。

竹本　それはやっぱり、英国労働党に対する興味があったからですね。安部先生の指導を願った理由は四つ。第一は南原先生の社会正義を行えという指導、第二は英国労働党の蔵相P・スノーデンの伝記に感銘を受けたこと、第三は前年に旧平価解禁が実施された結果、国内は極度のデフレ状況にあり社会不安が高まっていたこと、第四は『中央公論』の赤松克麿論文に共感したこと（「わが青春」三、昭和五十九年二月十五日付『静岡新聞』）。

伊藤　じゃあ、社会主義じゃないですか。

哲子夫人　だから、民主社会主義ではあったんだよね。

黒沢　共産主義と社会主義と、はっきり区別しているんですよね。

哲子夫人　昔は、そうだったんですよ。

竹本　僕は、社会主義というのは、ちょっとまとめて言いますとね……。というのは、大学時代の講義で、いま言ったように僕がいちばん感銘したのは南原先生だった。しかし、面白いと思ったのは吉野作造と牧野英一と末弘の厳ちゃんだ。しかし、やっぱり河合栄治郎先生が中心で、英国労働党のことをいろいろ講義で聴いたんですね。だいたい私は、英国労働党に非常な共感を覚えたんですよ。ついでに言いま

すと、後のほうで出るかもしれんが、僕が英国労働党を好きな理由は三つある。そういう話だったら、いくらでも出来る。

伊藤　しょうがないですね、そこへ行きましょう。

竹本　第一は、英国労働党のスローガンは、社会主義をして英語を語らしめるということで、これが英国労働党の、ご存知のように基本精神なんだ。ドイツ語の翻訳した社会主義ではだめだと。英語を話す。スピーク・イングリッシュ。それを僕は、スピーク・ジャパニーズと。日本の社会主義運動は、日本の歴史と伝統の上に立った、日本語の話せる社会主義でなければだめだというのが、第一だ。

それから第二は、英国の労働党はH・G・ウェールズだね。あれは、ずいぶん僕も読んだ。H・G・ウェールズの本の結論は、センチメンタル・ギャングになるなということ。労働組合はセンチメンタル・ギャングだと。

それから第三番目は、僕はさっき言ったように数字が好きだから、経済が好きなんです。それで財政に興味がある。そこで英国の労働党も、大蔵大臣にいちばん興味があった。英国労働党の大蔵大臣はフィリップ・スノーデンと言った。それでスノーデンの伝記がある。その伝記を読むと、スノーデンは自転車で怪我をして病院に入っちゃう。それで病院で社会主義の本をずっと読んで、病院を出る時は立派なSocialist（社会主義者）になっていた。それで彼は、病院を出る時に誓いを立てる。その誓いは、日本語で言えば、自分が出たら爵位も勲一等もいらないと。ただ、自分が死んだ時にトム・ストーン（お墓）に、ファイブレターズ（five letters）――五つの文字を書いてもらいたいと。ヒー・ワークド・フォア・ザ・プア（He worked for the poor.）――「彼は貧乏人の味方として闘った」ということを書いてもらえば、日本語で言えば勲一等はいらないということを、病院を出る時に誓いおったと。それが僕の、東大を出て安部磯雄を訪ねた、一つの動機なんだ。それで私も、スノーデンには非常に影響された。

伊藤　さっき、経済、財政がお好きだと。大学時代は、そういう講義は、誰の講義をお聴きになりました？

竹本　講義は、河津暹だ。この講義はつまらなかったね（笑）。僕は、英国労働党のパンフレットは、蠟山政道（河合栄治郎の誤りか）先生から借りて、ほとんど全部読んだ。

河津暹、大正十五年五月～昭和四年五月まで東京大学経済学部長（『日本官僚制総合事典　一八六八―二〇〇〇』一二二頁）。

この前の部分で、河合栄治郎先生に英国労働党の講義を受けたとある。「蠟山」は「河合」の間違いでは？

伊藤　じゃあ、蠟山先生とは、その時はもう個人的に親しかったわけですか。

竹本　ええ、どういう関係かね。あの人はね、マキャベリーかなんか、法学部の学生を相手にして特別講座みたいなことを、ボランティアと言うんだか、熱心にやってた。その時の関係で蠟山（河合？）さんとは親しくなって、とにかく英国労働党のパンフレットは全部貸してくれた。だから私は、その点は英国のことは詳しかった。パンフレットを読んでるから。

伊藤　英国労働党に心酔するような仲間はいたんですか。

竹本　英国労働党に共鳴するというようなやつは、特にいませんね。僕は平田とか何とかは個人的に仲はいいけど、一緒に勉強してという同学の志ではなかったね。

伊藤　いつも一人で、インディペンデントで、という感じなんですね。

竹本　要するに、いつの間にか英国労働党幹部になって、理想主義になって、その理想主義を、また南原さんとか河合栄治郎先生が非常にバックアップしてくれたから。

社会民衆党の応援演説

伊藤　さっきのお話で、安部さんのところに行って、それで大学卒業でしょう。それで、どうすると……。

竹本　安部先生のところへは、その後は時々ですが、お邪魔をして、話を聞いたり議論したりして……。安部先生も、学生で左翼でないのが珍しいと言って、えらい喜んでね。いろいろ演説会なんかにも、ついて行ったですからね。

伊藤　でも、卒業してからの仕事はどうしたんですか。

竹本　それが、理想の夢ばかり考えとったもんだから、就職試験は受けなかったの（笑）。助かったのは、国際労働局というのがあった。

伊藤　ＩＬＯ。

竹本　市政会館にあった。浅利順四郎が安部先生と懇意だった関係もあって、そこで月二十円で仕事をやった。

伊藤　しかし、月二十円じゃあ食べていけないでしょう。

竹本　あの頃、大学を出たやつは、いちばんいいところで七十五円なんだ。それから、僕らの昭和六年が、いちばん不景気だった。だから、その年は十円下がって、六十五円。東京都はまた一つ下がって、月給五十円。その時に、その浅利順四郎先生のところのお手伝いは、月に二十円。安部先生が紹介した関係でしょうね。

伊藤　食べていけないでしょう。生活できない。

竹本　生活？　関係ない（笑）。雑誌などに原稿を書いた。

伊藤　どんな仕事があったんですか。

哲子夫人　調査研究ですね。

竹本　国際労働局で、浅利先生が責任者で、「日本経済の将来」というテーマを担当しとったわけ。それを僕がずいぶん論文を書いたわけだ。それで、月二十円ずつくれたわけだ。

浅利は国際労働局東京支局長。その下で竹本氏は太平洋問題調査会の研究テーマ「日本産業の将来」を担当（前掲「わが青春」三）。

伊藤　それで、一緒にやる人はいないんですか。一人でやっていたんですか。

哲子夫人　誰かいたわね。福田さんとか。

竹本　いや、国際労働局の職員は何人もおったけれども、担当のテーマは僕一人。

伊藤　先生は職員になられたわけじゃあないんでしょう。

哲子夫人　嘱託。

伊藤　他に嘱託の人もいたんですか。

竹本　僕一人でやった、「日本経済の将来」は。

伊藤　その「日本経済の将来」は、どうなりましたか。

哲子夫人　本になったでしょ。

竹本　いや、本になってない。なったかもしれないけど、僕は知らない。もう、出したら終わりですよ。

平成六年十一月十九日の聞き取りでは、竹本氏はこの報告書は国際労働局東京支局長浅利順四郎氏の名前で活字化されたと語っている。しかし管見

の限り、該当する書籍は確認できず、結果は不明である。なお国際労働局東京支局訳編で、フェルナン・モーレット『日本の産業的発展の社会的形相』が、一九三五年に刊行されている。

伊藤　いま、その内容は覚えていますか。

竹本　覚えていませんね。

伊藤　残念だな。どんなイメージを持っていたのかね。

竹本　だから、日本経済の将来についてなんていうのは、昭和六年頃から、僕にとってはずっと一貫したテーマなんだ。僕が内閣でいろんなことをやったことね。

哲子夫人　だいぶ長く資料があったみたいだったけど、あまりあちこち引っ越したからね。

伊藤　でも、まだ何か残っていますか。

黒沢　国際労働局というのは、いま何になっていますか。

伊藤　ＩＬＯ。

黒沢　ああ、そうですか。

伊藤　その当時だって、ＩＬＯと言っていたと思います。

竹本　浅利順四郎さんが、そこのメンバーだから。

黒沢　それじゃあ、外交官とまるっきり無関係じゃないんだ。

竹本　市政会館は、そこの東京支局だった。

伊藤　それは何年ぐらいやったんですか。

哲子夫人　三年ぐらいじゃない？

伊藤　昭和六年に卒業されて……。

哲子夫人　それで、昭和十年に役所に入ったんだから。

竹本　内閣調査局ね。

伊藤　やっぱり四年ぐらいやっているんですね。四年間、ずっと同じテーマをやっていたんですか。

竹本　まあ、この頃は勉強が半分で、あとは社会民衆党の応援演説だ。

平成六年十一月十九日の聞き取りによると、この論文をまとめた関係で、この間ずっと巣鴨高商（私立巣鴨高等商業学校）の講師か講演（？）をやっていたとのこと。

伊藤　社会民衆党ですか。

哲子夫人　片山（哲）さんとかね。

伊藤　じゃあ、社会民衆党と言えば、たとえば亀井貫一郎とかね。

竹本　亀井さんも、その頃から親しい。いまでも……。

伊藤　そうですか。「いまでも」と言っても、向こうはもう亡くなられちゃった。

竹本　亀井という人は、演説がとてもうまいんだ。それで、昭和五年、六年、産業合理化ということを攻撃するのに、半分踊ってやるんだ。それで、有名な話がある。どこだったか忘れたけど、福岡だかどこかで、遠くから来ると、小学校は超満員だ。それでやって、「産業合理化ドンドコドン」と言うて踊るんだよ（笑）。どこだったか忘れたけど、小学校で、中へ入れなくて、外で木に登って聞いてたんだ。そうしたら、その人が、「産業合理化ドンドコドン」て言うたら、うっかりして手を叩いて、落っこちたの（笑）。あれは有名な話だ。

伊藤　亀井さんの他に演説のうまい人は？　安部さんはどうですか。

竹本　演説のうまい人はね……。しかし、亀井さんがずば抜けておったね。最近、亀井さんの本が出ましたね。あれに書いてある通りで。他には、字は違うけれども、阿部温知とかいうのが、都会議員かなんかに出た。

哲子夫人　小池四郎とか……。

竹本　小池四郎も、話はあまりうまくないわ。

哲子夫人　それから、赤松（克麿）さんは。

竹本　赤松さんは、ちょっと変わってましたね。あれは才気煥発で、吉野作造さんの娘をもらったのかな。そういう関係で、非常に良かったけど、あの人はいわゆるファッショ的なところがあった。それで僕は、好きな人ではあるけど、ちょっとね。僕は、いま言ったように英国派だ。だから、ファッショ的なところだけは、ちょっとついて行けなかった。

伊藤　亀井さんも、後でそうなるでしょう。

竹本　亀井さんは、軍部に通ずる人だった。だけど、あの人は赤松さんほどはファッショ的じゃなかったね。

伊藤　亀井さんはスタイルもいいし、ハンサムでしょう？

竹本　外交官だもん。なかなかの才子でしたね。いま本を書いた、駒沢大学の教授がおるだろう。

伊藤　高橋正則さんね。それで竹本先生は、くっ付いて歩くだけで演説はされなかったんですか。

哲子夫人　もう、演説の虫みたいなもの。好きだったの。

伊藤　じゃあ、安部先生に付いて歩いて、自分も演説していたんですか。

哲子夫人　応援演説をやったのよね。

竹本　ずいぶんやった。

伊藤　どんな演説をするんですか。

竹本　若い時は元気があるから、いくらでも出て行った。

哲子夫人　みんなに「大蔵大臣」と言われたって、自慢してたの。

竹本　僕はしかし、初めから終いまでやっぱり英国贔屓だし、いろんな流れでですね。

（休　憩）

伊藤　奥様と結婚なさったのは、この頃でしょう。

竹本　大した話もないわね。

伊藤　どういうわけですか。

竹本　安部先生が仲を取ってくれた。家内の教会の牧師と……。

哲子夫人　もう、六十六年も一緒にいるんですから（笑）。竹本は、安部先生に誰かいい人はいないかって頼んだ方が、縁談で持って来てくださったんです。うちの母も、割合と竹本みたいに、勉強ができる人がいちばん偉いと思ってる人だから（笑）。五高で特待生だったって書いてあったもんだから、他のことは何も見ない。八人兄弟の長男なんですけどね。お父さんも亡くなってね。だけど、そんなこと一向に考えない人だったもんだからね。私も考えないほうで……（笑）。

伊藤　奥様は、安部先生とはどういうご関係だったんですか。

哲子夫人　直接は関係ないんです。安部先生のところに出入りする方と、うちの母がお友達だったんですね。

哲子夫人の母が、所属する巣鴨教会の野口牧師を通じて安部磯雄氏に縁談を頼んだという関係。昭和九年二月二十五日、安部氏を媒酌人として結婚（前掲「わが青春」三）。

伊藤　奥様のほうは、その頃は何をされていたんですか。

哲子夫人　まだ何も……。昔のことですから、何もしないでいたんです。

伊藤　女学校ぐらい出て……。

哲子夫人　いや、東京女子大。

伊藤　その頃も、東京女子大でございましたか。

哲子夫人　ええ、もう私で十一回（卒業生）ぐらいですかね。

伊藤　そこで、何をお勉強に？

哲子夫人　国文です。

伊藤　それで、源氏物語になるわけですね。それで、いちおうお見合いみたいなことをなさったわけですか。

哲子夫人　ええ、したんです。それでもう、それはとっても失礼な人でね。夜、目に星が入っているように見えたんですって。それで、そんなことないって、みんなが言うのに信じないで、もう一度明るいところで見直すんだって言って……。それで、また私がのこのこと出掛けて行ったんだから。いま考えられないですよね。

伊藤　目に星がある？

哲子夫人　なんか、電気が光って、目に星があるんじゃないかって……。田舎によく昔、目を怪我して、白くなったような、たぶんああいうのじゃないですか。そんなんだろうと思うの……。

伊藤　それで、さっきの話に続くんですが、その時も二十円だったんですか。

哲子夫人　いや、五十円だって言いましたけどね。本当はどうだったか知らないけど。

伊藤　だって、奥様になられて……（笑）。

哲子夫人　私は五十円もらっていましたよ。だけど、どこか何か内職をやってたんでしょうね。不景気なことは嫌いなものだから、言わないんですよ。それで二十円の家賃の家に住んでたの。もう、とても見栄っ張りなもんでね。

伊藤　嘱託で二十円もらって、二十円の家に住んで……（笑）。

黒沢　安部先生のところへ出入りして走り回っているから、演説とか何かで……。

伊藤　そういう手当が出るのかしらね。

哲子夫人　いや、そんなことはなかったみたいですよ。割合と、お金を使わない人でね。

伊藤　だって、本を買ったりなんか、お金を使うでしょう。勉強のできる人だから……。

哲子夫人　それこそ、先生から借りたりして読んでたんじゃないですかね。

伊藤　じゃあ、お宅にはあまり本はなかったんですか。

哲子夫人　あまりなかったですね。

内閣調査局から企画院へ

伊藤　昭和十年に内閣調査局に入る。それは、どういうご縁で入ったんですか。

竹本　あの時は、僕としては普通の就職なんだね。

哲子夫人　大学の先生の紹介でしょ？

竹本　もう一つ、代議士がおったね。勝正憲先生だ。あの人じゃなかったかな。あとは、埼玉の野中徹也先生がおったな。

伊藤　勝さんとお知り合いだったんですか。

竹本　そうそう。

哲子夫人　田川だったんです。

伊藤　田川なんですか。

竹本　ただ、あの時、調査局は立派な天下の秀才が集まると言うて、いまでは想像できないぐらいな大きな期待が集まったからね。我々もそれに憧れて、入ったんだ。

伊藤　その時に一緒に入ったのは誰ですか。

竹本　一緒に入った人は、特に誰もいないと思いますが……。ちょっと後から入ったのが、和田耕作。

伊藤　和田さんは、その時に初めて知ったんですか。

竹本　あそこに入ってから、初めて。まだ、あの時は小僧という程度だから、特に何ということはなかったし、調査局に入ったのは就職のためということが中心だわね。ただ、調査局へ入ってから非常に良かったことは、第一は鈴木貞一さんが総裁で、ある意味では東条（英機）さんを振り回すぐらいの力があった。だから、内閣調査局というのは革新的で、いちばん実力のある役所だった。そういう意味で、非常に勉強にもなったし、思い出の多いところですね。

伊藤　調査局の時代に親しくしていたのは、誰ですか。

竹本　いちばん親しかったのは、奥村喜和男だ。

伊藤　奥村さんとは、年齢的にはどういう関係なんですか。

竹本　ちょっと上だけど……。企画院というのは国策ですからね。電力国営だ。初めは企画庁と言ったかな。

伊藤　いちばん最初は調査局でしょう。それから企画庁、それから企画院となるわけですね。

竹本　そうそう。

伊藤　調査局の時に、奥村さんもいたわけですか。

竹本　初めから、ずっと一緒でした。

伊藤　奥村さんのほうが、ちょっと先輩？

竹本　だいぶ先輩だ。あれは、毛里英於菟なんかと一緒だからね。奥村さんは、美濃部洋次なんかと一緒だからね。奥村さんは、大正十四年だからね。僕は偶然に、奥村さんの配下になったわけだ。それで、やっているうちに、自分で言うとおかしいが、僕は文章が書けるもんだから、奥村さんがえらい喜んでだね、「あれを書いてくれ」「これを書いてくれ」と言われて、ずいぶん書いてました。そのうちに、僕の勉強にもなりましたし……。結局、経済政策、電力国営というやつを、非常に極端に言えば、奥村さんと、荒木万寿夫というのがもう一人おって、それに僕と三人で、書く物はみんな書いたんです。

奥村喜和男は、大正十四年に東京帝国大学法学部を卒業し逓信省に入省、昭和十年五月内閣調査局調査官、十一年七月情報委員会事務官兼任、十二年五月企画庁調査官、同年九月内閣情報部情報官、同年十月企画院書記官となる（同人の略歴は『追憶　奥村喜和男』奥村勝子、一九七〇年、二七六頁）。なお、毛里は奥村と同年に東大法学部を卒業するが、文官高等試験の合格年次は奥村が大正十二年なのに対し、毛里は大正十四年、また美濃部は大正十五年に東大卒業、高等試験合格という関係。荒木は大正十四年に京大経済学部を卒業、高等試験合格（『日本官僚制総合事典　一八六八―二〇〇〇』二四〇・二五〇・二五六―七頁）。

伊藤　電力国営の、いちばん最初の発想は誰なんですか。

竹本　いちばん最初は奥村さん。僕はそれを正しく受け止めて、受け売りをしただけだ。文章を書いた。

伊藤　ご自分でも、それは情熱をもっておやりになったわけですか。

竹本　偶然一致したわけだ。

伊藤　奥村さんの配下には、先生の他に誰かいたんですか。

竹本　逓信省がおるわね。だから、それが本当の事務員で、国策を論

ずる頭がないもんだから、国策案は僕が全部だ。

伊藤　あと調査局で目立つ人というのは、他に誰かいましたか。

竹本　それは、あそこはいちばん革新官僚の牙城だから、何人かおりました。たとえば、大蔵省では迫水（久常）だ。商工省で言えば美濃部洋次。文部省は剣木（享弘）かな。

伊藤　剣木さんも、やっぱり革新官僚ですか。

竹本　あれは半分、関係があった。文部省にも席があったから。ただ、我々とも関係があったから。

伊藤　就職して役人になったわけでしょうから、役人のランクがあるじゃないですか、調査官とか……。

竹本　調査官だ。

伊藤　初めから？

哲子夫人　初めからじゃなかったですね。

伊藤　最初は何なんですか。

竹本　嘱託だね。

伊藤　嘱託も、たくさんいたんですか。

竹本　そうね、最初は調査官が十五人ぐらいおったかね。嘱託が三十人ぐらいだと思うよ。（調査官一人に対し嘱託が）二人おっても三十人だね。

伊藤　それは、どこにあったんですか。

竹本　場所は神田橋だね。神田橋のすぐそばに役所があった。

伊藤　新しい建物ですか。

竹本　いやいや、古ぼけた、倒れるぐらい……（笑）。

哲子夫人　調査局の写真がありますよね。

伊藤　調査官になってからは、月給はどのぐらいになりましたか。

竹本　さあ、いくらでしょうね。百五十円ぐらいかな。

哲子夫人　そんなにはもらえなかったんじゃないかな。

伊藤　もらっていたのかもしれないですよ（笑）。

竹本　だいたい内閣調査局というところは、そういう待遇は悪いところだった。

伊藤　新しい役所ですからね。

竹本　あの頃、普通の本省でいちばん初めに役人になった時――平田なんかが役所に入った時が七十五円。その時に内閣関係が六十五円。それぐらい安かったんだ。

伊藤　奥村さんて、どんな人でしたか。

竹本　人柄は非常に真面目で、単純で、真っ直ぐ走っていました。だから、電力国営ができた。

哲子夫人　そっくり……。共に五高の特待生。

伊藤　（笑）そうですか。

竹本　しかし、あのぐらいの人物は、ちょっといませんよ、いまの連中には。大蔵省というところが、だいたい人間的にはレベルが低い。迫水は、そのなかでは割に常識的な男だった。ある意味では、いい人でしたがね。だけど、「抱負経綸」というのは大したことなかった。それは毛里英於菟のほうが良かった。

伊藤　毛里さんは？

竹本　毛里さんは哲学者だった。

伊藤　美濃部洋次さんはどうですか。

竹本　あれは物知りだね。商工省のことをよく知っていた。それだけ。商工官僚だ。

伊藤　毛里さんとも、よくお付き合いになりましたか。

竹本　毛里さんとは電力国営を中心に……。企画院官僚の色分けをすると、奥村と毛里は、片一方の革新派の中心だ。そういう意味で良かった。

伊藤　先生は、そっちの側なんですね。

竹本　ええ。

伊藤　そうじゃないほうは、誰がいるんですか。

竹本　美濃部、迫水なんかは、役人としては優秀だけれども、思想はあまりなかった。

伊藤　電力国管の他には、調査局、企画庁、企画院の時代に、大きく取り上げた問題というのは何ですか。

竹本　それは、厚生省をつくったのも、僕らだ。厚生省の案が、どこから出てきたんだったかな。

伊藤　それは陸軍ですよ。

竹本　そうだ、陸軍から出てきた。陸軍から出てきた案が、それは軍人だから、まあ幼稚なね。それを企画院に持って来て、これをものにしろということで、それで担当者が二人。僕と、もう一人内務省の……。もう死んじゃったけど、何て言ったかな。二人で中心になってやった。

伊藤　名前は覚えていませんか。

竹本　名前……。

伊藤　後から何になった人ですか。

竹本　何て言ったかな……。小貫さん、それは事務官でした。優秀だけども、思想がない。だから、思想の問題は、みな僕の思う通り書きました。だけど、内務省には顔があった。丹羽喬四郎なんかの一つ上だ。

小貫弘、昭和二年文官高等試験合格、昭和三年東大法学部卒、内務省入省。最終官歴は厚生省能率課長。丹羽喬四郎は昭和五年東大経済学部卒、文官高等試験合格で、翌六年内務省入省（『日本官僚制総合事典　一八六八―二〇〇〇』二六五・二八八頁）。

伊藤　丹羽さんも、企画庁とかそういうところにいたんですか。

竹本　丹羽君は、内務省におっただけだと思うね。それで、ちょうど我々のグループと一緒に、よく連絡は取っておったけれども、特に中へ入ってはいなかったね。

伊藤　さっき鈴木貞一さんの話が出ましたけれども、あの人とはかなり接触はあるんですか。

竹本　翼賛会ができた時に、企画院代表で僕が一人入ったんだ。それは鈴木貞一が決められた。

伊藤　最初の頃から、ずっと鈴木さんとは親しくしていたんですか。

竹本　電力国営の時は非常に反対が強いから、それで役人のなかの反対（派）に喝を入れたのは鈴木貞一だと。そういう意味で、鈴木さんとは非常に関係があった。

伊藤　竹本さんからご覧になって、鈴木さんて、どんな人ですか。

竹本　いい人ですね。頭もあるし、度胸もあるし。奥村さんの電力国営ができたのも、半分は鈴木さんのお蔭でしょう。僕は鈴木さんという人は、軍人には珍しく偉い人だと思ってるね、いまでも。

伊藤　調査局、企画庁、企画院という流れのなかに、軍人さんがかなり入ってきますよね。そのなかで、目立つような人というのは誰ですか。気の合う人というか。

竹本　目立った人というのは、いまの鈴木さんはいちばん抜けておったね。

伊藤　秋永さんは、どうですか。

竹本　秋永月三は、僕はいちばん個人的には懇意だった。

伊藤　そうですか。

竹本　鈴木さんの最高のブレーンだね。秋永さんという人は、軍人に似合わず経済が詳しかった。いい人でしたよ。秋永さんの家の女中なんていうのは、家内が世話した。家が近くだったから。

哲子夫人　困ってらしたから。

伊藤　ええ。

哲子夫人　あら、そうですか。じゃあ、ご存知だと思います。私、奥さんとはそういうわけで行ったり来たりというか、一度伺ったことがありますから。

伊藤　そうですか。

竹本　あの人は、政策を持ってたからね。

伊藤　毛里さんとは非常に親しいでしょう。あの人は？

竹本　毛里さんは思索の面では強かったかもしれんけれども、政策になると秋永さんが良かった。僕は非常に可愛がられたほうだ。

翼賛会をつくる際、「毛里さんが秋永に知恵を入れて、秋永さんが推進力になって」進めた（竹本氏に対する昭和六十年七月十日の聞き取り）。

社会主義とは何か

伊藤　その頃、先生はどこに住んでいたんですか。

哲子夫人　代々木上原ですね。

伊藤　それはさっきお話になった、二十円の家とはまた違うんですか。

哲子夫人　もう自分で建てた家だから。竹本に言うと悪いけど、うちのおばあさんのお金をもらって建てたんです。

伊藤　いやあ、若い役人で家を建てるなんていうのは、ちょっと無理だろうなと思ったんです。じゃあ、調査局、それから企画庁、企画院の時代は、楽しい時代でしたか。

竹本　楽しい時代だった。思うことを、どんどん出来たから。革新官僚の牙城でしょうね。そこで我々が考えたことが、だいたいは出来たから。

伊藤　厚生省と電力国管と、その他に何がありますか。

竹本　その他、科学技術院がどうのこうのね。

哲子夫人　保険国営もやった。

伊藤　保険の話をしてくださいよ。

哲子夫人　保険国営って、書いてたじゃない？

「わが青春」四（昭和五十九年二月十八日付『静岡新聞』）、『私のなかの昭和史』三八頁、昭和六十年七月十日の竹本氏に対する聞き取りに、関連の話がある。

竹本　保険国営というのは、要するに逓信省の仕事を取っちまおうというね。要するに、電力国営ということから、一方では今度は基幹産業のほうで。それから厚生施策の中心も、こちらに厚生省からということで。厚生省というのは、あれは最初の案は軍部が出したんですね。軍部が持って来たのは、徴兵検査なんだ。徴兵検査で強い兵隊をつくるということが狙いなんだ。それで、我々がそれを、引っ繰り返しちゃったわけだ。強い兵隊をつくるというのでは出来ないんだと。社会環境を良くしなきゃだめだということで、初めは衛生省だったかな。

保険とか全部。我々がそれを保険社会省と言うとって、社会を入れちゃったんだ。それが後に、社会省から厚生省になった。だから、社会主義的なものは企画院で、毛里君を始めとして、まだなかった。ただ電力の場合は、ワンマン・コントロールということを中心にして、国営という考えが先に出てしまった。国営化ということが同時に、社会化だというふうに持って行ったのが、我々だ。

伊藤　そうすると、ある意味では社会主義の実現ということになるわけですか。

竹本　社会主義の問題は、電力が国会では大問題になった。それはどういうことかと言うと、あれは奥村さんが言ったんだったかな。「電力国営プラス社会主義」と言ったのかな。そう言うたので、それを誰かがその速記録をばら撒いちゃって、要するに電力国営は社会主義だという宣伝になっちゃった。

共産主義は「ソビエト権力プラス電化」と、奥村氏が貴族院の人々に講演（『私のなかの昭和史』一九頁）。

伊藤　でも、ある意味で社会主義的な方針でしょ。

竹本　それは、そうでしょうね、当然ね。僕は社会主義というのは、一つは社会化であり、一つは計画化だと思ってる。だから、社会主義だと言われても仕方ないね。

伊藤　でも、その当時、「そうです」とも言えないでしょう。

竹本　電力国営化をやった時に、社会大衆党の浅沼稲次郎さんが、僕と奥村さんに御馳走してくれた。その時に、要するに電力国営は社会主義への第一歩だということを言ってた。だけど私は、電力と銀行は社会主義日本の二つの条件だと思ってる、いまでも。

浅沼氏は、その食事の席で電力国営に一番反対するのは誰かと問い、竹本氏等が銀行だと答えると、それは電力の次に銀行国営をやれということだと言ったという（前掲「わが青春」四）。なお平成六年十一月十九日の聞き取りでは、この席にいたのは、浅沼、竹本両氏と三宅正一、そして誰かもう一人とのこと。

伊藤　当時の調査局、企画庁、企画院、こういうところでソ連のゴスプランの研究もやっているでしょう。

竹本　いや、僕は関連してはいろいろ読んだりしているけれども、ゴスプランそのものの研究というのは知らないです。だけど、同じものになるんだね。

ソ連のゴエルロ（全露電化）計画については勉強した（『私のなかの昭和史』一九頁）。

伊藤　（笑）まあ、そうですね。ただ、やっぱり帝国議会なんかで、電力国営とか、そういうものに対しては相当批判があったでしょう。

竹本　いや、それはもう……。一時は奥村さんなんかは、汽車のなかで殺されそうになったことがあった。愉快な話をすると、どこかに行く時に、奥村さんがベッドへ入って寝たんだ。上に。そうしたら下のベッドで、「奥村というやつを殺せ」という話をしている（笑）。そういう話があった。そのぐらいだった。だから、あの頃の電力関係者は意気地がないと言うか、知恵がないと言うかね。だから奥村さんを殺せば、案は流れますよ。あるいは、厚生省の話をしたけど、僕の哲学は、要するに資本主義というものはアナーキズムだと。生産は、みんなが勝手に走るから、生産はアナーキズムだと。アナーキズム・オブ・プロダクションだ。だから、これを計画化するのは、社会主義以外はないと。そういうのが、僕の意見なんだ。同時にそれは、弱肉強食で地獄に落ちたから、社会化しなきゃいかんと。だから社会化と計画化

は、新しい日本の経済改革の中心になるだろうというのが、僕の意見なんです。そこで僕は、保険の問題、厚生省の問題も、その立場で社会化を中心に持って行こうということだったわけね。

伊藤　保険もですか。

竹本　ええ、保険もね。

伊藤　具体的に保険を社会化するというのは、どういうふうなことになるんですか。

竹本　保険の国営の、当時はまだ、案を出したわけではないね。だけど厚生行政を完成させるためには、これは逓信省にそういう改革案が半分はあったわけだ。荒木万寿夫なんかがやっとった。

伊藤　それは、普通の保険会社のやっていることを、国営にしようということですか。

竹本　保険会社を国営に持って行く案ですか。その案は、当時はまだ具体的には挙がってなかった。

伊藤　考えておられたのは、どういうことなんですか。要するに社会保険の話ですね。国民皆保険みたいな話ですか。

竹本　それはもちろん、全部入ることが前提ですけどね。我々が特に、少なくとも僕が特に問題にしたのは、金融国営の一翼だったの。金を預かる。僕はいまでも、電力と銀行――金融は、国営にすべきだという意見なんです。

当時考えていたのは、逓信省管轄の簡易保険の限度額を、保険会社並みの額まで引き上げるという案（『私のなかの昭和史』三八頁、および昭和六十年七月十日の竹本氏に対する聞き取り）。

伊藤　れっきとした社会主義じゃないですか（笑）。さっきのお話を伺っていると、ソビエトとあまり変わらないですね。

竹本　さあ、ソ連とどこが似てるか、変わってるか、あまり調べたことはないんだけどね。しかし僕は、国営をするのはその二つだけ。あとは、たとえば石炭なんていうのは、特に国営にしたからどうと言うことはないでしょう。金融というのは、流れをワンマン・コントロールでやることによって、無駄が半分になる。そのことを言いたいわけ。

伊藤　その当時のソ連というものを、どういうふうに見ておられましたか。ソ連は当時、五ヵ年計画で、次々と発展していたでしょう。

竹本　私は、だからその当時もいまも、能率という問題から見れば、ソ連の能率は上がっているとは思わない。だから、僕は全然、ソ連共産主義には憧れてはいないね。ただ、いま言ったように、アナーキズムに反対だということが、私の中心だ。

伊藤　じゃあ、ドイツのヒットラーのやっていたことは……。

竹本　僕は、あまりヒットラーを勉強していないから、ヒットラーを批判はできないけれども、あれはどこまで経済を計画化したかと言うと、あまりないんじゃないの。

たとえば国家総動員法に関連して、ヒトラーのスローガンを挙げる等、当時はしばしば言及はしていた（『私のなかの昭和史』二一頁）。

伊藤　そうですか。

竹本　権力で抑えただけで……。

伊藤　でもいちおう、経済統制をやっていますよね。

竹本　とにかく、ヒットラーがやったとしても、それは経済統制じゃないわね。僕らが考えてるのは計画化なんだ。統制で抑えなきゃならんとか、抑えるということは二の次でしょう。だから、いま言ったように、僕が特に経済体制として変えなければならんと言うのは、アナーキズムを変えなきゃ無駄が多いと。ヒットラーは、そんなことは考

えたことはないでしょう。

伊藤　そうですかね。

竹本　権力で抑えることは考えたけど。

伊藤　調査局から企画院までの間に、どこか外国に行かれました？

竹本　あの間には行ってないと思いますね。

哲子夫人　満州以外はね。

伊藤　満州には行かれたんですか。

哲子夫人　満州から北支には行きました。

伊藤　満州に行かれたのは、もっと後でしょう。

哲子夫人　だけど、調査に行ったことがあります。

伊藤　満州には何で行かれたんですか。

哲子夫人　企画院にいたころ、満州に行ったことがあったでしょう。細川（護貞）さんが見送りに来て……。何しに行ったの？

竹本　何だったかね。

伊藤　調査に行かれたんでしょうね。その時の満州国の状態については、どういうふうにお感じでした。

竹本　満州建設だ。

昭和六十年七月十日の聞き取りにおいて、竹本氏は、おそらくはこの時のことを次のように語っている。「あの頃はね、沼田という人はね、僕は満州を見に行ってね、満州や中国を見に行って来てね、満州も中国も駄目だと、理想が一つもないと、王道国家建設などと言っておったけれどもね、何もないじゃないかと、哲学とか思想とかビジョンとかがなさ過ぎると、ちょっとがっかりしたと言って帰って来た、そしたら沼田さんという人はね、君みたいな若い純真な人はそうだろうなと言ったのを覚えている。」

哲子夫人　太平洋戦争の前に満州に行ったでしょう。赴任で行く前に調査に行った時は、何を調査したの？　一月ぐらい行きましたよね。

竹本　朝鮮（「調査」の聞き誤り）には行ったことはないと思うね。

月刊『満州』昭和十九年五月号への寄稿では、昭和十四年十一月、企画院の調査官として新京・奉天・撫順・鞍山・ハルピン等を視察したとある（『私のなかの昭和史』二七頁）。なお昭和四十九年四月現在の「経歴書」には、昭和十四年六月と時期がややずれるものの、「満州・北京・天津等中国各地を視察」とある。

哲子夫人　いやいや、ありますよ。

竹本　ああ、なんかちょっと行ったかな。あまり印象に残ってないね。

伊藤　そんなはずはないでしょうよ。だって、この『私のなかの昭和史』のなかで、満州に赴任した時に書いた文章ですけれども、そのなかに前に行ったことが書いてあるんですよね。

「その時の満州の力強い建設譜、逞しい創造的意欲の第一印象が、常に私を満州に惹きつけていたのである」（『私のなかの昭和史』二七頁）。

哲子夫人　赴任したのは、もう戦争になってからだもんね。

伊藤　そうです。この辺を読んでみると、非常に満州に期待していることが分かるんですよね。情熱的な文章ですよ。

哲子夫人　むしろ、ナイーブだって、みんなおっしゃる。

伊藤　理想主義的なんですよ。確かに、あの文章を読むと……。

竹本　期待したのでしょう。半分、期待を裏切られたんだね。

伊藤　だから、最初に行かれた時は期待したんじゃないですか。この時は期待がちょっと外れたんですけれども、だけど最初に行った時は期待したでしょう。

竹本　満州は、初めはそういう夢を持ってやったけれども、それは一代だけで、あとはみなサラリーマンだよ。だめになっちゃった。

伊藤　最初の人達って、たとえばどういう人達ですか。

竹本　日産の鮎川（義介）、その相棒の……。毛里もそうだ。

伊藤　岸（信介）さんだって、そうでしょう。

竹本　あれは、その次だからね。とにかく夢を持って行った人は、一つの理想があったわけだ。だけど、国内がそれを消化するだけの体制が出来ていないし、それから夢を持った人も一代で終わったもんだから、最後の満州国はあんな形になったんだね。やっぱりいちばん大事なことは、本国が革新的でなければ、枝だけが革新的になろうとしてもだめですね。根元が腐ってくるから。

伊藤　でも、あの時の考えは、枝のほうから幹のほうに革新を持ち込もうという考えだったんじゃないですか。

竹本　枝からというよりも、やっぱり根元が強くなければね。しかしあの時は、岸さんを始めとして、中央の官僚の優秀なのは満州国建国の夢を持ったんだから。それは可能だと思ったんでしょうね。

伊藤　竹本さんは、岸さんなんかとはお付き合いはあったんですか。

哲子夫人　隣村だからね。

竹本　同じ村だから、岸さんは。

伊藤　田布施ですか。

哲子夫人　うちは田布施と光の間の岩田というところだから。田布施のすぐそばですから。

竹本　個人的には、党派が違っても、僕は岸さんとはいちばん親しかった。

伊藤　そうなんですか。ちょうど時間になりましたので、また次回、お願いします。どうもありがとうございました。

〈以上〉

竹本孫一
オーラルヒストリー

第2回

[2000年7月3日14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

竹中治堅(政策研究大学院大学助教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

奥村喜和男氏の配下として

竹本　始まる前に、自己弁解を五分ほど。僕は高等学校の時から、あだ名は「憂国病患者」だ。いまでも私生活というものは、一パーセントだけ私がある。一パーセントだけ家内のことを考える。あと九八パーセントは国のことばかり考える。いま僕の心境は、非常にイライラしてるんだ。絶望的に……。それは、いまの総理の森（喜朗）君なんていうのは、身体強健で体操の先生にはいいけど、頭がない。僕は、福田（赳夫）総理といちばん仲が良かった。あれは頭があった。宮沢（喜一）なんかは、頭も二割あるけど、八割はだめだ。おまけに体もああいうふうだし……。だから僕は、一〇〇パーセントと言っていいぐらい、国のことを朝から晩まで考えているけど、頼りになる政治家は、残念ながら、いまはいない。この間までは、福田さんがいたけどね。そういう意味で、非常に気持ちがイライラしている。

それで、ここ（質問要項）に書いておられることは、そう言っちゃ悪いけど、半分は興味がない。僕が興味があるのは、いかにして日本を建て直すかということだけ。それ以外の、ちょっと回りくどい話は忙しいというか、興味がないというか……。まあ、僕の癖ですけどね。悪い癖だけれども……。

伊藤　今回だけ、ちょっと我慢してください。

竹本　せっかく、こうして先生もお出でいただいて恐縮なんだけれども、僕でなければ知らない、言えないということを、先生に申し上げたらどうかと。

哲子夫人　だけど、いまはあなたが先に意見を言う時じゃなくて、インタビューに答える時ですから……。

竹本　そういうインタビューは興味がないの。さっきも言ったけれども、陸軍のまとめ上げた「国際法を遵守しながら東亜新秩序をつくる」という文書を、徳富蘇峰が、「国際法を遵守するとは何事だ。英米秩序である国際法を変えることが、この戦争の目的ではないか」と言ったんですよ。そういうことを知ってますか。知らんだろう。それは、僕しか知らんのだ。蘇峰先生から、僕は直接聞いたんだ。そういうものがいくつもあるので、それを先生に少しでも提供したらいいんじゃないかと。

類似の話は、「わが青春」六（昭和五十九年二月二十五日付『静岡新聞』）に書いてある。

伊藤　だんだんに伺いますから、今回はとにかく私の言うことを聞いてください。お願いします。

竹本　そういうふうにしましょう。

伊藤　それで、この一番を見てください。

第二回質問要項の第一番。――その後の調査研究活動の出発点になったと思われる国際労働局での調査について、調査方法はどなたの指導を受けたのかお聞かせください。また安部磯雄、浅利順四郎両氏についての思い出や、その後のお付き合いについて聞かせてください。

竹本　浅利順四郎は、国際労働局長だった。それで、国際労働局を中心にして、日本経済の躍進ということは何に基づくものか、どういうファクターがあるのかに興味があって、テーマが出てきた。それを、たまたま僕が大学を出てぶらぶらしとったものだから、安部磯雄先生

の関係か何か、とにかく僕をどうか、ということになった。それで、研究と調査は、ほとんど僕が独自にやった。独りでやった、全部……。

伊藤　誰からも学ばないで？

竹本　誰からも学ばない。

伊藤　どうやってやったんですか。

竹本　それはね、僕が大学を出てから、日本経済の強みと弱みという問題を、個人的な趣味というか、興味を持って非常に勉強しておった。それが、そのまま役に立ったわけだ。日本経済の強みと弱み。それは、いまだにずっと僕は持ってますがね。

伊藤　この前の、浅利さん、安部さんはどういう人物ですか。

竹本　安部磯雄先生は、僕らの結婚の仲人だった。ことに僕は、東大を出て、八割までは頭のなかが英国労働党なんです。そういう関係で、河合栄治郎先生と南原繁先生のお二人には、僕は特別親しく教えをいただいた。そういう関係で、経済の問題については、安部先生も社会主義のイントロダクションだけだし、それから浅利順四郎さんは国際労働局長として、一つの日本型になるソーシャル・ダンピングじゃないという程度の認識は持っていたけれども、そう深いものを感じなかった。意外に、僕に対しては一切教えも干渉もしなかった。ただ、僕のやつを持たせただけだ。

伊藤　人柄はいいですか。

竹本　浅利さんは人柄はいいし、やはり国際的な教養があった。国際労働局長だからね。

伊藤　浅利さんは、専門は何なんですか。

竹本　専門は何ですかね。やっぱり社会労働問題じゃないかね。私は特に、話して教えるということはなかった。人柄がいい人であるだけで……。

伊藤　安部磯雄さんは早稲田大学でしょう？　先生は東大でしょう？

竹本　それはどういうわけで、安部さんのところへ行ったんですか。

竹本　安部さんのところに行ったのは、社会民主主義だからよ。

哲子夫人　社会党みたいなものがあったでしょう？

伊藤　社会民衆党。

哲子夫人　この党首だったから、行ったんじゃないんですか。

竹本　社会民衆党だから行ったわけだね。

第一回参照。

伊藤　蠟山（政道）さんなんかは、どうですか。

竹本　蠟山さんも非常に懇意だったけどね。蠟山さんは親しかったし、教えもいただいたけれども、安部先生を高く尊敬しておったけれど、蠟山さんは兄貴程度だね。蠟山さんという人は、南原さんとは違うんだ。南原さんにはドイツの哲学がある。奥行きが深いでしょう。蠟山さんは、何でも入口でこなす。一通り、こなし方はいい。いいけど、大して深みがないね。

　だけど私は、蠟山さんは考え方が英国労働党だから、我が党だと思っていたけど、特に教えを請うようなものはなかったね。それは先生に失礼だけれども、蠟山さんを七〇点とすれば、河合栄治郎は九〇点だ。そのぐらい程度が違う。浅利順四郎なんていうのは、七〇点か六五点だ（笑）。教えられるものが何もないんだ。僕は河合さんからは、英国労働党の資料をほとんど全部、英語で借りて読んだんだ。だから、蠟山さんが知っていることは、こっちも知っている。

伊藤　じゃあ、二番のほうに……。

第二回質問要項の第二番。――内閣調査局に入り奥村氏の配下になったと

のことですが、奥村氏の人柄についてお話しください。また、ほかにどのような方がおられましたか。次に、奥村喜和男著『日本政治の革新』（昭和十三年刊）の本文は、竹本さんが書かれたと言われていますが、それはどのような経緯からでしょうか。同書はナチスの理論に依拠して、ベルサイユ体制、自由主義、資本主義、社会主義を否定し、「東亜経済ブロック」「アジア協同体」「全体主義的計画経済」「協同体的自給経済化」「内閣制度の強化」「日本的翼賛議会」などを主張し、日本は「一君万民の全体主義国家」たるべしと、青年層への「革新」の呼びかけを行っています。この本は大量に売れたと言いますが、反響はいかがでしたか。なお、内閣調査局時代に二・二六事件が起こりましたが、どのように受け止められましたか。

竹本　奥村さんの配下になったのは、初めから、入った時の割り振りだ。配属だ。

伊藤　偶然ですか。

竹本　偶然だ。全くの偶然でね。ただ、あの人はとにかく電力国営で、国営論者だ。私は、資本主義はアナーキズム・オブ・プロダクションと思ってるわけです。それだから、国営にする以外には計画的にものを動かすことはできないということで、いまでも、ずうっと一貫しているんですね。アナーキズム・オブ・プロダクションということを抑えるという意味で、やってきたわけですね。

　奥村さんは、官僚では当時もいまも、あのぐらい優秀な人はちょっといないね。それは偶然だけれども、自己宣伝になって悪いけど、五高には特待生という制度があるんです、よそは知らんけど。奥村さんも僕も、五高の特待生だ。それで、「ああ、そうか」というようなことで、お互いにそれが取り持つ縁で、特に親しくなった。

　僕は、いま言ったように河合先生から英国労働党の資料を借りているものだから、自由経済における欠点というものを十分に知っているから、電力国営ということを考えている（奥村さんの）考えとピタッと一致してるわけだ。それで、奥村さんが主任調査官で、何か原稿を書くという時に、僕に「書いてくれ」ということを言ったことがある。それで何か、名無しの原稿を書いたけどね。それで、奥村さんがびっくりしたんだ。「君の書いた原稿は、全く俺の考えを、俺以上にうまく書いとる」と言った。僕の書いた原稿で、あの時、すっかり感心したんだ。それ以来、奥村さんの書いた電力国営の原稿は、半分以上は僕ですよ。みんな僕が書いたんだ。

伊藤　それは、奥村さんの名前で？

竹本　そうそう。僕の名前で書いたものが一つある。全集が出て、一冊ある。それ以外は、奥村さんの名前で……。

　竹本孫一『電力国営と日本の革新』（啓明社、一九三八年）。

伊藤　奥村さんの配下に、他にどんな人がいましたか。

竹本　配下は、企画院では僕一人だ。企画院というのは、調査官がおって、その補佐役が一人か二人おって……。ある意味では、奥村さんには逓信省という本省があるわけだ。その本省には、いろいろ部下みたいなのがおったかもしらんが、企画院はブレーンだけだから。あとは、いない。

伊藤　人柄はどうですか。

竹本　非常に熱血漢だ。

伊藤　先生も熱血漢でしょう。

竹本　いやあ、僕は……。

哲子夫人　竹本は熱血漢じゃないんですよ。国のことには夢中にな

るけど、あまり情熱的というところはないですね。

伊藤　熱血漢というのとは、ちょっと違うんですか。

竹本　あの人は熱血漢で、電力の問題の時には取っ組み合いになるぐらいやるんだ。僕は、そういうことはやらん（笑）。

哲子夫人　（奥村さんは）太平洋戦争の時の情報局次長だったでしょう。あの時だって、「バンザーイ」とか言っちゃって、もう興奮しちゃってね。そういうところは、竹本にはないですよ。

竹本　開戦の時は、「開戦の詔書」をＮＨＫで放送したの。それで、ラジオの前で万歳やってる。奥村さんは、僕以上だよ。

伊藤　『日本政治の革新』を覚えているかな。

竹本　それは、僕が書いたの。

伊藤　やっぱり、そうですか。

竹本　全部、書いた。序文以外、全部（笑）。あれ、文章を見れば分かるでしょ。僕の文章だって、すぐ分かる。そのぐらい、最後の段階というか、ある段階では、僕は信用されたわけだ。僕の文章を読んで感激して、それ以後、僕の書いたものは無条件だった。

伊藤　この本は、すごく売れたでしょう。

竹本　さあ、どうだったかな。

伊藤　いや、確か売れたんですよ、あれは。

竹本　売れた話も、原稿料も、相談はなかった。まあ、時の花形だから、ある程度は売れたでしょう。

伊藤　これは売れたんですよ。いまでも古本屋にたくさんありますもの。僕も持っています。ほとんど竹本さんが書いたという噂がありましたからね。じゃあ、やっぱり本当なんだ（笑）。その内容なんですけど、これは竹本さんが書いたものだと言われているでしょう。

竹本　僕が書いたというのは、どこでお聞きになったんですか。

伊藤　いや、そういう噂があるんですよ。

竹本　それは、やったかもしれない。奥村さんの文章は、僕がみんな書いてるんだから、それはそうでしょう。

哲子夫人　悪いことも、みんな分かってるんじゃないですか（笑）。

竹本　これは、ナチスのビジョンに依拠すると書いてあるけど、それは違うね。僕は、ナチスはあまり好きでないの。似たところはあるけれども、ナチスのものは特に読んでもいないし……。

伊藤　じゃあ今度、その本を持って来ます。

竹本　だから、ナチスの言葉を引用してるかどうか、僕は覚えてないけどね。ナチスの理論には、世間で言われるような共感は持ってない。

伊藤　やっぱり、ここにあるような……。

竹本　それはまあ、時の流行語だから書いたかもしれません。僕はちょっと、その点は……。一つはナチスと違う。それからもう一つは、僕は「天皇絶対反対」でね。初めからいままで、極端なことを言えば、天皇批判をしとる。

伊藤　でも、その本には、そんなこと書いてないですよ。

竹本　それは、空気としては大いにナチスみたいなことを書いたかもしらんけれども、僕は初めから終わりまで……。

哲子夫人　追放になったぐらいだから。

竹本　僕はとにかく、ドイツでいちばん近いのは「南原哲学」だけだ。

伊藤　いやあ、これは内容が「南原哲学」とは全然違うんですよね。

竹本　いや、だから僕は南原の系統なの。それだから、片山内閣ができた時に、総理官邸に東大の南原さんが訪ねて来た。それで僕は、秘書官をしとったその時に、三人で総理官邸で話した時に、南原教授が、

「竹本君がそばにおるから安心だ。しっかりお助けしろ」と言うて、南原先生が訓示を垂れた。

哲子夫人　安部磯雄先生の「自由・平等・博愛」という、いつも掛けていた掛け軸があって、一時よく刑事が調べに来たけど、その時に竹本はいつも、「おまえ、会え」って言うんですね。そのあれ（掛け軸）を見つけたことがあるんですよ。だから半分、疑われていたところがあるんですね。

伊藤　今度、本を持って来ますから。

竹本　だから先生、電力国営なんかも、見方によっては二つあるんですよ。僕は社会主義的な立場から、電力国営。それから一方は、ナチス哲学で考えた。形は同じだけれども、中身が違う。

伊藤　社会主義なんですね。

竹本　僕は社会主義だ。それで、社会大衆党の麻生久が奥村さんと僕を呼んで、御馳走したことがある。その時に、「電力の次は銀行だ。ぜひそれをやりましょう」と言うて、麻生と僕は話をして、飯を食う会は終わったことがある。だから、極端に言えば、僕らは当時の全体主義をうまく被って、社会主義的なナショナリゼーションを考えたということです。それは、僕らの本心だ。

前掲「わが青春」四には、浅沼稲次郎が、ここでの麻生のように振舞ったとあるが……。

「新体制」、大政翼賛会

伊藤　二・二六（事件）については、どういうふうにお考えでしたか。

竹本　家におった。朝、出掛けようと思ったら、ラジオでワアワアやっていて、青くなって出掛けたことがあるけどね。

哲子夫人　そうじゃなくて、どういうふうに思ったか……。

竹本　二・二六は……。いまちょっと言い方が難しいが……。

伊藤　その当時の言葉で。

竹本　とにかく僕は、全体主義というか、計画経済ということから社会革新という、これが根底にある。あるけれども、当時の企画院の立場もあって……。とにかく安部磯雄先生を訪ねて、安部先生と話し合うんだから……。ちょっと、極端に言えば、ごまかしたような感じだね。だから本心は、麻生さんに会った時も、「次は金融でしょう」と言うて、麻生がえらいヒントを得たと言って喜んだんだ。そういう面と、それからいまの企画院の全体主義的な動きと、二つあったわけだね。

麻生は浅沼の間違いか（直前の注、および第一回を参照）。

伊藤　そういうなかで二・二六事件というのは、どうだったんですか。

竹本　僕は、特に直接関係なかったな。

伊藤　関係はないでしょうけれども……。

竹本　それから、気持ちの上では、あの時はびっくりしただけで、特別にはなかったですね。

伊藤　あのクーデターは成功すると思っていましたか。

竹本　成功するとは思わなかっただろうが、いま特にどうだったか記憶がないですね。我々が全然知らんで、ボンと爆発したからね。僕は、いろいろシグナルはあったけど、あのグループとは何の関係もなかった。だから、期待もしない。だいたい僕は、軍部の動きは半分は批判的だ。軍人というのは頭が単純だから、必ず最後はだめだと。

哲子夫人　二・二六の山口中佐のお嬢さんが、私らの教会でご一緒で……。この間、お父さんのことを書かれて、「西郷さんに、そっくりだった」なんておっしゃって……。

伊藤　二・二六事件の頃の話ですか。

哲子夫人　二・二六の、初めに担がれた方なのね。獄死なさったんですね。その方のお嬢さん。ずいぶん苦労したらしいですね。それでクリスチャンになっちゃって……。

竹本　僕の先輩、同僚の中心は、社会主義陣営ですからね。だから、安部先生はもちろんのこと、安部、片山はもちろんとして、その他の連中でも、軍部ファッショに特に期待をするというのは、あまりなかったと思うね。ちょっと共感するところがあっても、期待するところはなかった。

伊藤　このアジア協同体というのは、何かご記憶はありますか。

竹本　あの頃は、アジア協同体とはちょっと違うと思うけれども、陸軍の中将がおったろう。

伊藤　石原莞爾ですか。

竹本　東条の反対派。あの先生の系統は、満州建国の志士で……何て言ったかな。要するに、満州建国の五人ぐらいの男がおるんだ。その連中が、僕は懇意だった。その連中が、一方から言えば協同体みたいに見えるけれども、当時の陸軍は、僕らが知ってる頃は、全部反対派でしょう。

伊藤　石原はね。こういう人（橘樸）を知っていますか。

竹本　名前は聞いたことあるけど、全然面識ない。

黒沢　軍人ですか。

伊藤　いや、軍人じゃないでしょう。

じゃあ、先に（三番に）行きましょう。

第二回質問要項の第三番。――昭和十五年八月三日付の企画院第一部・竹本孫一調査官作成の「新政治体制確立要綱（私案）」がありますが、この頃は前回お話のあった秋永月三大佐の腹心で、古野伊之助、西園寺公一、三上卓などと親しかったという情報があります。また、同年八月十三日付の竹本作成の「新政治体制確立要綱」があります。これによると、「国民組織の革新たるべき政治組織体（党）」は「指導者組織」かつ「政治推進力の母体」で、「党は勅旨を仰ぎて之を結成すること」、首相が総裁になることなどが内容の中心になっています。近衛新体制運動の中心になっておられたように思いますが、この時期について思い出される点をお話しいただきたいと思います。新体制準備会の常任幹事が小畑忠良で、その補佐役が奥村でした。また、近衛という人物について、どのようにご覧になっておられたのでしょうか。

竹本　古野伊之助は、もっと大物だった。社長だろ。西園寺君は、歳はそう取ってなかったが……。西園寺と三上卓は、その頃会ったことは事実だ。僕は関係なかった。

伊藤　関係ない？

竹本　関係ない。古野伊之助は情報局の関係で知っておったけどね。

伊藤　古野さんは知っていたんですか。

竹本　古野さんは、新聞界の元老だということだけで、遠くから知っていた。直接は知らない。

伊藤　じゃあ、西園寺さんは？

竹本　西園寺君は、二回ぐらい会ったことがある。会ったという程度だけど、別に何も交渉はなかった。

この回の、あとのほうを参照。竹本氏と「同志的結合」をしていた丹羽五郎が西園寺と親しかったため、竹本氏も当時は西園寺と毎月会っていた。

伊藤　三上さんは？

竹本　三上は全然ない。

伊藤　秋永さんとは、この人達は親しかったみたいですけどね。

竹本　秋永さんは、家内が秋永さんのところの女中まで世話したぐらいです。秋永さんは軍人には珍しい、頭の冴えた人だったから、僕は非常に気が合ったですね。だけど、あの人はそんなにファッショじゃないですよ。

伊藤　でも、新体制の案ですけど、それは……。

竹本　あの時の新体制というのは、文章として、何とか新体制が必要ということだった。こんなものが出たことは覚えている。

伊藤　いまでもありますけど……。今度持って来ますが、ご記憶あります？

竹本　僕が書いたのかね。

伊藤　そうです。

竹本　そうかもしれん。

伊藤　書いてる、ちゃんと。

黒沢　亀井（貫一郎）さんも、ずいぶん書いていますね。

伊藤　そうです。

黒沢　それとは別なんですね。

伊藤　だから、亀井さんなんかと関連があったんじゃないかと思うんですけど……。

竹本　亀井さんは個人的に親しかったけれども、そう言っちゃ悪いけど、あの人は非常に頭がずさんなんだ。発想は、いいけどね。まとめて論理的に組み立てるという人でないんだ。だから、要するにポンと演壇に上がったら、ワーッと言うのがうまい。その程度ですよ。だから古い政治家の連中は、話せばうまいから、感心して聞いたろうけど、僕に言わせるとロジカルじゃない。だから、僕は親しい仲ではあったけれども、亀井さんにはそんなに期待をしなかった。まだ、その点をいけば、同じような考え方でも赤松克麿のほうが、頭はよっぽど上ですよ。

伊藤　新体制なんですが……。

竹本　小畑という名が書いてあるけど、あれは何と言うことはないよ。何でもなかったよ。企画院次長だった。

伊藤　いやいや、小畑の話じゃないんですよ。

黒沢　その前の段階の話を聞かせて欲しいということです。

竹本　その頃は、本屋ですよ。本屋が本を出したという程度で、特に具体的な動きは、僕は知りませんよ。

伊藤　いえ、そんなことはないですよ。先生の文章ですから。

竹本　だから、本は出したかもしらんけど……。

伊藤　いや、本じゃないんです。企画院の文書で、竹本さんが書いておられるんですよ。竹本さんの名前で書いてるんです。

竹本　いや、書いたかもしらんが……。

伊藤　その時は、党をつくろうと、前衛党をつくろうと。今度持って

来ますよ。

竹本　いや、そういう組織をつくるべきだということは書いたかもしれませんが、党をつくるというのは、ちょっと僕は……。僕は、あの連中は評価してない。

伊藤　いや、だから、竹本さんがいちばん早いんですよ。新体制の案をつくるのが、いちばん早いんです。それでそのまま、新体制の運動と言いますか、新体制の企画をずっとやられているんです。

竹本氏は、すでに『国民評論』昭和十二年十二月号に「戦時革新内閣論」を発表し、内閣制度の強化が必要で、内閣と国民との有機的聯繋には、「革新的国民内閣を飽く迄支持鞭撻する民的革新政党が絶対に必要である」と述べていた。

竹本　それは、僕がずっとやったかもしれませんがね。

伊藤　国民組織の中核は党だ、ということを書いておられるんです。

竹本　……その経過は、よく分からんね。啓蒙運動のようなつもりで、そういうことを言ったかもしれませんがね。

伊藤　啓蒙運動じゃないんですよ。政策文書ですから。

竹本　だから、政策としてそういうことを訴えた。

伊藤　いや、訴えたんじゃない。それは企画院として立案して、政府に出しているんですよ。

竹本　というのは、何でかと言うと、僕は企画院の当時の連中を、そんなに信用してないんです。期待してないもの。

伊藤　でも、竹本さんの名前で書いてるんですよ。

竹本　だから、企画院としては、そういうことに倣って書いたらいいという、極端に言えばアドバイスを受けて言うたかもしらんけど、本心は……。企画院では、行動力は奥村、頭では毛里、それから事務官僚では美濃部、この三人しか役に立つやつはいないんだ。

アドバイスを受けてということに関して言えば、昭和六十年七月十日の聞き取りで竹本氏は「毛里が僕に一番言ったのは、翼賛会が会である間は駄目だよと、党（タン）にならなけりゃ駄目だよと」いうことだったと語っている。

伊藤　でも、その他の人ではなくて、竹本さんの名前でその文書ができているんです。

竹本　いや、だから、僕の名で書いたかもしらんけどね。

伊藤　今度、持って来ますよ。

竹本　企画院で、そういうことができればいいと思った程度でね。少なくとも僕は、本心で書きはしない。

伊藤　それは、ちょっとね……。

竹本　企画院で言えば、ものを言うのは、いまの連中。二、三人しかいないんだから。それは、買い被りですよ。

伊藤　いやいや、そんなことない。それでは、新体制準備会は？

竹本　その準備会には、僕は入ってないと思う。

伊藤　いやいや、補佐役が奥村さんなんです。

竹本　奥村さんは入ってたかもしらんが、小畑忠良なんていうのは、そんなあれじゃない。

伊藤　だから、（竹本さんは）奥村さんのブレーンでしょう。

竹本　ブレーンとしては、「書いてくれ」って言われて書いたかもしらんけど、少なくとも僕は、そこのグループには期待してないんだ。あの連中にこなせるような問題じゃない、と思ってるから。

伊藤　そうですか。結局、翼賛運動と言いますか、新体制の中核をつくらなきゃならないという議論なんですけれども……。

竹本　それで、できれば一つの大きな力になりたいという意味で、おそらく書いたと思うんだ、僕は。しかし、それを担っていけるような人ではなかった。

伊藤　誰が？

竹本　この連中。いまの小畑とか何とかというのは……。

伊藤　小畑はいいんですけれども、じゃあ近衛（文麿）さんはどうですか。

竹本　昭和研究会の橋本が近衛を担いだんだ。

伊藤　いや、みんなで新体制は近衛を担いでいたんです。

竹本　いや、近衛も、細かいことは覚えがないけれども、初めは革新の期待を集めたんだ。それから、だんだんボロが出て……。細川がおっただろ、あれが僕の親友だったんだ。あれは近衛さんと近かった。

伊藤　細川護貞さんね。

竹本　細川君でも、近衛が最後に国の革新ができる男とは思っていなかった。その点で、僕と意見が一致しとった。しかし、みんなが期待してるんだから、まあやれるだけやらしたらいいという気持ちはありますよ。あるけれども、少なくとも僕も、おそらく細川君も、近衛で、いわゆる昭和維新が出来るとは思っていなかったんじゃないかな。ただ、ムードはそうだった。

伊藤　付いて行ったような話ですけど、やっぱり中心におられたと思うんですよね。

竹本　きょうの話のなかで、力があって頭があったのは秋永月三ですよ。

伊藤　そうでしょうね。

竹本　あれがいちばん頭が良かった。

伊藤　その秋永月三と、それから奥村さんのブレーンですからね。実際に動かしていたわけですよ。だから、ちょっとお忘れになっているか……。

竹本　秋永、奥村、その二人だな。ちょっと一割落ちて、美濃部洋次。敢えて言えば、毛里英於菟。要するに先生はね、誇大理解している。

伊藤　いや、そうじゃないです。他の人のインタビューもやっていますから……。

　では、今度は翼賛会。翼賛会では、企画局の副部長ですね。

竹本　僕は政策の副部長だね。

　制度部副部長。制度部は行政機構大改革をやる部署（「対談　内田健三氏と片山連立政権を語る」『平成日本の志』四二頁）。

伊藤　翼賛会の時はどうでしたか。

竹本　翼賛会は、第一期だけは期待をしたわけだ。期待された。僕らも期待した。

伊藤　翼賛会の、実践要綱というのをつくられましたか。

竹本　そんなのは、あっただろうと思うがね。

伊藤　確か、竹本さんがつくられたんだと思うんですよ。

哲子夫人　昔から、ああいうの、つくるの好きです。

竹本　翼賛会というのは、一〇〇パーセント期待のなかで生まれて、アッという間にだめになった。それでもう、我々が日比谷の建物に立てこもった。

伊藤　東京会館でしょ。

竹本　副部長を中心に、あそこに立てこもった。だからもう、全然期待はなかった。なかったから、立ち上がったんだから。それで我々も、辞表を出すということで、立ち上がった。

伊藤　その時、有馬（頼寧）さんが事務総長でしょう。

竹本　そうそう、有馬さんは総裁だったかな。

伊藤　事務総長です。有馬さんは、どんな印象ですか。

竹本　あの人は、評論家みたいな人でね（笑）。自分で戦うという人じゃないんだ。それはやっぱり、政治家というものが本物で、たとえば亀井貫一郎でも赤松克麿でも誰でも、とにかく体を張って戦うということができる。そうでない人が、ただ名前を並べるだけで、あまり役にも立たんで……。

伊藤　いまお話に出た赤松さんというのは、前からご存知ですか。

哲子夫人　赤松さんは親しかったね。

竹本　いま言ったように、僕は大学を出て、そのまま安部磯雄先生のところに行ったんだ。その時の書記長が赤松。そういう点で、赤松さんも勘がいい男だった。頭もいい、勘もいい。そういう点で僕の好きな人でしたけど、ただファッショ的傾向が非常に強かった。その点が僕はちょっと……。だから、離れた。しかし、役にも立つし、勘は良かった。

第一回参照。『中央公論』の赤松論文に共感したことも、安部先生を訪ねた理由の一つ。

伊藤　その前の、ファッショ的というのは、どういう意味ですか。

竹本　軍部独裁。

伊藤　じゃあ、赤松さんは、陸軍の誰と親しかったんですか。

竹本　何とか中佐というような連中だね。僕はあまり知らんけど。

昭和五十九年四月二十一日の聞き取りでは、竹本氏は「その頃は麻生・赤松等は牧に近かった」と語っている。

伊藤　じゃあ、武藤（章）さんは？

竹本　武藤局長とは、僕は知らんけれども、きっと良かったと思うね。あの頃は、軍の窓口は武藤だから。

伊藤　じゃあ、牧達夫って知ってますか。

竹本　大佐。知ってる。知ってるけれども、親しくはなかった。名前を知ってるだけだ。こっち（武藤）のほうが力があったね。

昭和六十年七月十日の聞き取りでは竹本氏は、氏が満州国参事官の時、牧大佐が関東軍参謀長で「彼としょっちゅう連絡があったんだ」と語っている。

伊藤　いや、牧は武藤の子分ですからね。

竹本　永山忠則、あれはこれだ。

伊藤　と、親しかった。ああ、そうですか。

昭和六十年七月十日の聞き取りで竹本氏は、永山との付き合いは割に古く、有馬のやっていた「産青聯」などの関係で親しくなったと語っている。

竹本　この連中はね、そう言っちゃ悪いけど、陸軍なんていうのは、哲学は本当のものはないからね。

伊藤　いまの立てこもった話ですけど、改組問題について……。

竹本　改組問題の時は、僕たちは辞表を出して、翼賛会の会館の建物に立てこもって、もう終わりだと。「さようなら」というわけで、僕は企画院に帰っちゃったんだ。僕はね、秋永月三や鈴木貞一総裁の考えで、やっぱり力になるかもしれんと。なるかもしれんから、コネも付けとかないといかんということで、企画院が浮かないように、浮き上がらないようにコネを付けておこうというので、企画院代表で僕が行った。

伊藤　じゃあ、企画院の調査官のまま？

竹本　現職のまま。

伊藤　じゃあ、辞職すれば、すぐ企画院に戻ったわけですね。

竹本　戻ったというのは席が戻っただけで、身分はそのまま、前からここだった。

国土計画の立案

伊藤　企画院で、国土計画の話が出て来ます。

竹本　小貫君とは、これの通りだ。

「これ」とは、第二回質問要項の第五番のこと。――昭和十五年四月頃から企画院で国土計画についての本格的検討が始まっています。担当は小貫弘書記官と竹本孫一調査官でした。そして、同年九月二十四日閣議決定「国土計画設定要綱」になります。この発端およびその後について、ご記憶のことをお話しください。

伊藤　小貫さんというのは、どういう人ですか。

竹本　内務省の役人。

伊藤　よくできる役人でしたか。

竹本　まあ、内務官僚としては、思想はないけれども行政能力はある。まあ、いいほうでしょう。感覚も、僕らが言うことが分かる程度ね。分かる程度の頭だったけれども……。

伊藤　国土計画というのは、どこから出て来た問題ですか。

竹本　あれは、僕も小貫君の下に入った。下というか、同じ仕事にね。そういうのが出て来てやったんで、あれをつくり出す時は、誰がそれを言い出したか、ちょっといま記憶にないですね。

伊藤　これは、日本の国土計画ですか。それとも、満州や中国を含めた国土計画ですか。

竹本　日本の国土計画。

竹本孫一「国土計画の現段階的意義」（『工業国策』一九四〇年十一月）や、同「国土計画と文化問題」（『放送』十巻十二号）によれば、この国土計画は日満支を通じての総合国力発展を目標としたものであった。

伊藤　この考え方には非常に関心がおありでしたか。

竹本　いや、僕はね、要するにさっき言った、資本主義というのはアナーキズム・オブ・プロダクションだ。それを全部、計画的に持っていこうというのが僕の哲学であり、政策の根本なんだ。だから、国土開発をめちゃくちゃやるよりも、総合的に開発計画を立てなきゃいかんと。それが国土計画。そういう意味で、僕としては興味があったわけだね。

伊藤　これは、閣議決定もできますよね。

竹本　もちろん、したんだけど。あの時しかし、国土計画と言っても、バックボーンは何かということは、あまり議論をしなかったと思うね。

伊藤　そうですかね。

竹本　なけりゃ、おかしいけどね。

伊藤　いや、やっておられるんですよ。

竹本　ただ、計画が出来たなというような、役人的頭ですよ。

伊藤　やっぱり、きちんとした哲学があるんですよ。

竹本　その哲学を、誰が持っておったかだね。

伊藤　いや、竹本さんですよ。

竹本　いや、僕はいまのようなものを持っていて、入った時に最初に何か書いたかもしれませんね。だけど、内閣としてそういう……。

伊藤　閣議決定になった時ね。

竹本　それが分かるのは毛里ぐらいのもんだから。ちょっとそれは、国策として取り上げた形じゃなかったですね。

伊藤　いや、国策になったんですよ。閣議決定ですから。

竹本　閣議決定であってもだ。

伊藤　昭和十五年九月二十四日。

竹本　それはね、計画をしなきゃならんという程度のことを言うて、政府がそれを決めたら、あとを誰が受け継いでやるという、そんなものはなかったね。あと何もないでしょう。「国土計画設定要綱」をやっただけで、それを担っていく人は誰もいなかった。

黒沢　これ、実現したんですか。

伊藤　まあ、いろいろな計画が立案されましたけどね。

黒沢　結局、実現はしなかったんですか。

竹本　だから、何も出来てない。

伊藤　計画をつくるというね。

竹本　だから概念政治だ。企画院では、企画して計画するだけが精一杯なところだ。

黒沢　そうか、そういう性格の役所なんだ。政策官庁なんだ。

伊藤　そうです。

竹本　担当責任者がいなきゃだめだ。

伊藤　実施部門がないから。だから、戦後になって、やっと国土庁ができるでしょう。だから、国土計画委員会みたいなものをつくったんですけど、委員会ですからね。

（休　憩）

竹本　夕べ、ちょっと考えついたんだ。先生、甘粕（正彦）さんをご存知？

伊藤　名前は分かりますよ。

竹本　あれを思い出してね。夕べ、夜中に思い出そうと思っても、思い出せなかった。きょうの話で言えば、僕は過去の話は興味がないんだ。僕は、満州国（国務院総務庁参事官）を辞めて日本に帰って、正しい革新内閣をつくって、日本を再建しようというような大きな夢を持ってた。それで、その前に、僕は甘粕と喧嘩したんですよ。それは、僕は弘報處参事官で、担当が出版だったわけだ。甘粕は、雑誌を出しておったんだ。その関係で、（僕は）出版担当参事官ということだな。それで、僕が満州国へ赴任した時に、さっきもちょっと言ったけど、僕は軍人には二割引きのところがあるんだ。それで、甘粕のところに挨拶に行かなかった。

　ところが満州国では、甘粕は皇帝陛下以上なんだ。それで僕の友達が、「とにかく甘粕に挨拶に行け」と言うから、「僕は行かん。用事があったら向こうから来る。役所が頭を下げるなんて、話がおかしい」と言うて、行かなかった。大変、変なふうになって、終いには、「おまえは甘粕に殺されるぞ」なんて言われた。そういう仲だったんだが、何が切っ掛けだったか、仲良くなって……。

　それで、これはきょう話すのが初めてだけど、甘粕が、僕が帰る時に送別会をやろうと。それから、もう一つ驚いたことは、内地に着くまで、弁当、お茶を用意してくれてた。甘粕の使いの者が駅まで持って来てくれた。その前に、送別会をやった時だったかな、夕べ思い出そうと思ったけど、思い出せなかった。僕が国内に帰って日本再建運動をやるんだということは、終いには志が一致して、話したわけだね。それで甘粕は、送別会をやってる時だったか、「金を持ってけ」と言

うんだ。その時の金がいくらだったか、夕べ考えたけどよく分からん。

とにかく、当時のお金で五千万ぐらいじゃなかったかと思うんだ。そうすると、いまの金にすると、下手すると五十億ぐらいになる。それを僕に、「持って行け」と。それには僕もびっくりしちゃって、「ありがたい。けれども、いまは日本に帰って何がやれるか、どれだけやれるか、分からない。いまから帰って手を打つんだ。だから、必要な時には、改めて電報を打ちます」と言うて、もらわなかった。あれをもらっておけば、今頃……（笑）。

黒沢　民社党の一つや二つはつくれましたね（笑）。

竹本　ああ。しかし、甘粕はそういうところは、ある意味で偉い男だね。あの人も、いろいろ言うけれども、僕が付き合った範囲では、国のこと以外は全然頭にない。国のこと以外は、全然考えない。そういうことは偉かったね。その金額に、とにかくびっくりした。十年分ぐらいあったんだ（笑）。だけど、いくらだったかちょっと、まだピンと来ないんだ。

伊藤　貨幣価値が変わっちゃいましたから、分からないんですよね。

哲子夫人　竹本も、ちょっと間違ってる時があるから。

伊藤　貨幣価値が変わっていますから、その頃いくらだったのかというのは、普通思い出せないですよ。

哲子夫人　それに、満州は月給が内地よりずっと多かったですよね。

竹本　日本にはああいう、国士的な人が何人かおるんだ。

内閣情報局時代——出版統制に従事

伊藤　今度は、内閣情報局です。

第二回質問要項の第六番。——昭和十五年十二月六日に内閣情報部が情報局に昇格し、翌年十月次長に奥村氏が就任すると、同時に竹本さんも企画院から情報局総裁官房に移り、専任情報官になられます。この昇格問題そのものにも関わられたのか、奥村次長の就任以降情報局と関わりを持たれるようになられたのか、その辺の事情についてお話しください。出版課長として「出版事業統制令」を作られたとのことですが、その辺の事情をお話しください。また、陸海軍軍人がかなり情報局に入っていたと思いますが、それらの人々で、特に記憶に残る人物があったでしょうか。また村田五郎、武藤富男、橋本政実といった人々について、どのような思い出がありますか。

竹本　これは、奥村さんとの関係はなんですか。

伊藤　企画院で、内閣情報部を内閣情報局にしようということを企画されたんですか。

竹本　いや、僕はね、情報局の設置問題については、確か関係しなかったと思います。

伊藤　じゃあ、奥村さんが情報局の次長になられたので、それで付いて行ったということですか。

竹本　付いて行った。

伊藤　それは、奥村さんの指名ですか。

竹本　そうです。さっきも言ったように、電力問題は全部、僕が書いたんだから。「来てくれ」と言うので、行ったんだね。

伊藤　企画院から離れることには、あまり不満はなかったですか。

竹本　何も考えなかった。企画院も、初めはとにかく日本革新の参謀本部だという誇りを持ってましたけど、だんだん薄らいで、辞めていく時にはだめになっていた。だからもう、未練はない。

伊藤　そういう意味ね。企画院第一部ですよね。ですから、それ以外はだいたい「物動」（物資動員計画）でしょう。

竹本　「物動」、それから労務動員、それから財政金融をやっておったな。

伊藤　そういうのには関わられていないんですよね。

竹本　僕は関係ないね。

伊藤　第一部というのは、企画？

竹本　総合計画だけですね。

伊藤　その第一部も、あまり活躍出来なくなってきたということですか。

竹本　企画院自体が……。もっと簡単に言えば、翼賛会が骨抜きになったということですね。それを受けて、参謀本部のつもりだった我々の仕事もなくなったと。

伊藤　やっぱり、それは関係あるのか。出版課長になられて、出版事業統制令を作られたんですね。

竹本　それは、僕がやった。

伊藤　この話を、ちょっとしてくださいますか。当時、何でも統制令がたくさん出来ましたよね。

竹本　あれは、法律があって、その法律に基づいて……。

伊藤　それは国家総動員法じゃないですか。

竹本　あっ、そうだったかな。それに基づいて統制令が出来て、その統制令がいくつか出来たんだ。その一つに、出版事業統制令を入れた。

国家総動員法第二十条が戦時出版の統制を規定している。

伊藤　これは抵抗がずいぶんあったんじゃないですか。

竹本　抵抗は、もちろんありましたよ。大きく言えば、統制令で夢に持ってた計画経済に持って行こうという考え方が、二、三人にあった。だから、自由経済論者と計画経済論者の衝突は深刻だったですね。

伊藤　出版業者の抵抗も、ずいぶんあったんじゃないですか。

竹本　あった、あった。僕は殺されるかと思った（笑）。殺されるというのは本当で、毎日新聞の親方の久富達夫。あれが出版の統制会の理事長か何かをやってた。あの人は、いい人だけど、全然無能なんだ。それで、僕は親しくはあったから、ずいぶん助けてやったと思うけどね。正力松太郎もおった。

伊藤　読売でしょう。

竹本　あれが情報局へ乗り込んで来て。正力松太郎と、講談社の社長の野間（省一）、親父のほうだ。それから、平凡社の下中弥三郎。七人ぐらい情報局に乗り込んで来た。それで、出版課長は僕だ。要するに、「情報局を潰す」と言うんだ。「どうして潰しますか」と言ったんだ。「わけはない。いまから、ここに集まってる連中が筆を揃えて、毎週、発禁になるように記事を書く。そうすると、新聞・雑誌が一週間止まったら内乱が起こる。それでもいいなら勝負をやろう」と、こう言うんだ。正力というのは、ある意味では度胸がいいね。戦争中に内閣に乗り込んで来て、「どっちが勝つかやろう」って……。

それで、普通の役人だったら、震え上がっちゃうわけ。そいつら、

顔つきが悪いからね（笑）。それで僕は、「面白い、やりましょう。発禁になるようにやりなさい。とにかく、どうなるか勝負しましょう」と言って、喧嘩別れだ。それで、あとどうして仲が良くなったか、よく分からんがね（笑）。

とにかく情報局へ乗り込んで来て、一週間、発禁をずっと打って、内乱を起こすんだと。それでいいかと言うんだから。戦争中に、そういう啖呵を切ったんだから、偉いもんだよ。それで、誰が仲を取ったんだったか、とにかく僕は真正面に喧嘩したくせに、何の切っ掛けだったか分からんけど、非常に親しくなって……。

伊藤　正力さんとですか。

竹本　ええ。それで、だいぶ経ってから、読売新聞に『週刊読売』というのが出来た。あれは、僕が正力に認可したんだ。そのぐらい、終いには仲良くなった。だけど、いままで舞台を見て、本当に度胸がいいと思ったのは正力だね。内閣に本当に乗り込んで来て、一週間発禁を打つぞと。みんなで発禁を食らえば、物情騒然となる。内乱を起こすんだと。そう言って脅かした。

黒沢　それはやらなかったんでしょう。

竹本　僕は「面白い、やってみなさい」って言った。それで、なぜやらなくなったか、ちょっといま覚えてないんだ。やらなかった。それで後になったら、正力の雑誌を僕が認可した。あれは、最近まであったんだね。

伊藤　『週刊読売』は、いまでもあるんじゃないかな。出版というのは、新聞とは別なんですね。

竹本　出版課長は紙を持ってるわけだ。新聞用紙を持ってるわけだ。新聞の紙は、僕が持ってる。それから、新聞事業については新聞課長が持ってた。それから、検閲については内務省が持ってる。

伊藤　新聞の統合なんていうのは、誰がやったんですか。

竹本　新聞の統合は新聞課長。しかし、新聞の統合というのは、結局は紙ですからね。当時は、実権はみんな僕が持ってた。出版会社が四千からあった。新聞も……。

伊藤　新聞も、たくさんあったでしょう。

竹本　たくさんあった。

伊藤　あれを、一県一紙にしたでしょう。

竹本　ああ、あの頃ね。

伊藤　東京新聞……都新聞ですか、福田（英助）とかいう頑張った人がいるじゃないですか。何か記憶はありますか。

竹本　あの統合なんかも関係しましたよ。

伊藤　あれは、ずいぶん抵抗していたんですね。

哲子夫人　収賄で捕まったのは、何課長だったっけ。

竹本　映画課長じゃないか。

哲子夫人　二人ぐらい、捕まったじゃない……。

竹本　とにかく情報局というのは、いわゆる思想統制、言論統制の問題で、一つの大きな問題がある。それからその他に、いまの検閲。出版会社、新聞社、映画会社なんていう、広報宣伝の関係機関をみんな握ってるんです。だから、力があったんです。

伊藤　その紙の配分は、出版課長が持っていたわけですか。

竹本　僕が持っていた。

伊藤　紙がいったい、その年にどのぐらいあるかということは、企画院の「物動」ですか。

竹本　そうそう、企画院の「物動」で、割当てを持って来るわけだね。

その時に相談をして、配分をするのは僕がやる。だから僕は、家内にも心配させたけど、汚職の総本家みたいに言われた（笑）。百本を割当てれば、何百万か儲かる。戦争中だから、出せば必ず売れるでしょ。だから、紙をもらうことは一万円札をもらうのと同じですよ。だから、みんなワイワイ来るわけだ。

伊藤　危なかったですね（笑）。

哲子夫人　私は心配しなかったんだけど、父が速達を寄越したんですよ。「出版課長になったら、気をつけなきゃいかん」と。そんなもんで、私は誰かがニワトリか何かを持って来たら、「もらっていいか」って、電話をかけたの。竹本が、「ニワトリぐらい、もらってもいいだろう」って言ったからね。そのぐらい、気をつけてたの。

哲子夫人の父、柿原政一郎は代議士の経験もあり、新聞社社長の経験もあったので（「わが青春」七、昭和五十九年二月二十九日付『静岡新聞』）。

竹本　僕は、酒は飲まない。それで良かったの。投書が毎日のように総裁のところへ来るんだ。「竹本は赤坂ばかり行っとって、飲んだり食ったりやっとる」と。投書が来ても、僕が飲まんことは、みんな知ってる。だから、問題ない。

哲子夫人　でも、飲まなくても行ってましたよ（笑）。あなた、満州に行く時に、芸者の見送りが来たじゃない（笑）。待合の女将がね。

竹本　「赤坂に毎日行って飲んでる」という投書が、ずいぶん来たって。だけど、僕は全然飲まんからね。

伊藤　赤坂に行っただけですか。

竹本　行ってないね（笑）。

伊藤　いま、奥さんの証言がありましたから（笑）。女にもてるほうですか。

哲子夫人　どうでしょうねぇ。まあ、ケチだからね（笑）。

伊藤　情報局のなかに、陸海の軍人がたくさんいたでしょう。

竹本　陸軍、海軍の少将、それから大佐がそれぞれ二人か……。あと、課長、あるいは参事官みたいな形で、何人か入ってましたね。だから、もう軍人管理みたいだ。

伊藤　出版課長に直接関係のある陸海軍人は、誰ですか。

竹本　出版課長の下に、中佐が二人おった。それから、職員もおるわね。その職員の横には、海軍中佐と陸軍中佐がおった。

竹本氏によれば、竹本氏の課長就任前は、出版課の上にある「第二部長は松村陸軍少将、出版課長は海軍大佐、その下に鈴木貫太郎、古橋の両陸海軍中佐がいて、その側に文官が小さくなっていた」という状態だったが、その後、機構改革をして軍人はすべて審議室に封じ込めたという（『追憶奥村喜和男』六五頁）。

伊藤　いい人はいましたか。

竹本　あまり、いなかったな。軍人では、出版課長じゃなくて、僕の隣で一人、海軍の大佐でちょっといいのがおったが、あとはあまり目ぼしいのはいませんでしたね。ただ、軍人は卑しいのが多いね、飲んだり、食ったりが……。

哲子夫人　軍・官・面て言ったんですよね。

伊藤　「メン」て、何ですか。

哲子夫人　顔。だから、軍がいちばん御馳走を食べたりしたんでしょうね。

伊藤　官も食べたわけでしょう（笑）。「桜」に「碇」に何とかとか言うんですよね。酒は、もともと飲まないんですか。

哲子夫人　ええ。飲めない。

伊藤　体質的に？

哲子夫人　ええ。ちょっと飲むと、真っ赤になっちゃって。

伊藤　それはもう、いいですね。汚職に引っ掛からないというか……。

哲子夫人　いいでしょうか。どうか知らないけど（笑）。

伊藤　情報局のなかで、同志と言えるような人はいましたか。

竹本　いや、みんな個人的には親しい人は多かったね。意見は違っても、それぞれ一角の人物ですわね。エリートを集めたんだからね。だから、普通の役所より人は良かったですよ。

伊藤　竹本さん、「高文」を取っていないでしょ？

竹本　我々は調査局から入ったから。

伊藤　ですから、調査官とか情報官というのは……。

竹本　独自のあれだからね。

伊藤　高等官ですか。

竹本　ええ。

伊藤　高等官何等ですか。

竹本　そら、六等もあれば、五等もあれば……。

哲子夫人　あなたが何等だったかって……。私も知らないの（笑）。

竹本　五等から四等、三等ぐらいになったんじゃないか。

伊藤　それはだから、「高文」を取った人と区別はないんですか。

哲子夫人　違わなかったみたいですよ。

竹本　とにかく、役人の型へ嵌ったやつが役に立たん。だから、要するに在野の人をいっぱい採った。

伊藤　待遇は？

竹本　待遇は同じですよ。

伊藤　じゃあ、高等官何等かだったんだ。

革新官僚の同志と……

伊藤　それで、その次になりますけれども、これ（七番）ご存知ですか。

第二回質問要項の第七番。――鈴木貞一総裁の序文のある企画院研究会編『国防国家の綱領』（昭和十六年十一月刊）の執筆に関わられましたか。もし関わられたとしたら、どの部分をご執筆なさいましたか。また、他の部分の執筆者をご存知ならば教えてください。

竹本　僕はノータッチです、たぶん。ただ、意見は言ったかもしれませんね。ただ、奥村さんと僕は、意見がたった一つ違った。あの人は、「国防国家」と言うんだ。僕は、「国家国防」と言った（笑）。

伊藤　どういうふうに違うんですか。

竹本　大いに違う。国防というのは、国家が先なんだ。その国家がどうなるかということで、国防政策というものに行くわけだ。しかし、軍人が政治を支配する、国家を支配するということは、僕は反対なんだ。それで僕は、僕が書いたものや何かは「国家国防」と引っ繰り返したんだ。思想の問題です。

伊藤　これには、奥村さんも入っているんですよね。

竹本　それは入ってたかもしれない。

伊藤　奥村さんが入っていて、何で竹本さんが入っていないのかなと思って、ちょっと不思議に思ったんですけどね。

哲子夫人　情報局は、割と短かったものね。

伊藤　情報局じゃないですよ。これは企画院なんです。

竹本　とにかく革新官僚というのは、七、八人いて、全部引き摺り回していたわけだから。だから、反発があった。

伊藤　今度は、人の名前をちょっと出しますが、美濃部（洋次）さんは分かりますよね。それから林敬三、それから菅太郎、こういう人達の記憶はありますか。

第二回質問要項の第八番。――近衛内閣退陣直前に、日米首脳会談成功の場合の対策が近衛から企画院に命じられたと言います。美濃部、林敬三、菅太郎が関わったと言われていますが、ご記憶がございますか（「行政機構改革案（昭和十六、十）企画院」）。なお、菅や緋田工、杉原正巳などと、お付き合いがありましたか。

竹本　林敬三は、僕の役人生活で、いちばん親しいやつ。

伊藤　そうですか。いままで全然出てこなかったですね。

竹本　あれは、内務省切っての秀才だ。それで、企画院で僕と一緒になって、それ以来、非常に親友になりました。それから、宮内庁次長になったけどね。それから、内務次官にもなった。とにかく終戦の時は、林敬三は僕のところに来て、最敬礼した。「竹本さん、あなたがずいぶん思い切ったことを次から次へ言うので、冷や冷やしながら聞いたが、全部当たった。本当に敬服した」と言って、頭を下げた。そのくらい僕は、林君には包み隠さず、思う通りに言った。「戦争は負ける」ということをね。林君は内務省で、全国の情報を情報局長から集めとるでしょう。いちいち僕に報告して、こうこうこうだと。絶対、それは駄目だというやつばっかりだと。だけど、僕が言うのが当たったもんだからね。銀座かどこかに事務所があって、そこへ僕がおるから、わざわざ訪ねて来て、頭を下げた。それぐらい、非常に純真な人でした。僕のところには、林君の手紙が何通もある。

伊藤　林さんは、年齢的にはどういう関係になりますか。

竹本　同じくらいだ。どっちかが一つ上か二つ上か。あれは、林（弥三吉）中将の息子ですよ。とにかく彼は、戦争には本当に負けるとは思ってなかったんだ。ちょっと話が飛ぶけど、僕は初めから終わりまで、戦争は負けるという意見なんだ。それは、引っ張られることがあったんだ。戦争を妨げようとは思わなかったけど、負けると思った。その根拠を言うと、一六〇分の一だ。これは、あなたの本で、どの機会かに入れてもらいたい。

戦争は絶対に負けると。なぜ負けるか。第一に、戦争能力を決めるのは経済力だと。経済力を決めるのは鉄だと。鉄の生産は当時、満州国まで入れて、日本は四百万トンかな。アメリカは、八千万トン。だから、二〇分の一でしょ。だから、まず経済力は鉄の生産力から見たら二〇分の一だ。

「一六〇分の一説」について触れた別の文章では、アメリカの鉄の生産量九千万トンに対し、日本は四百五十万トンという数字を挙げていた（「わが青春」一〇、昭和五十九年三月十日付『静岡新聞』）。

その次、その国力を十分に発揮できない、日本の政治体制。なぜかと言えば、まず第一、統帥権独立だ。統帥権独立で国力は半分になると。従って、掛ける二分の一だ。

次に、統帥権のなかで陸軍と海軍は喧嘩ばかりやっとる。これでまた二分の一。僕は満州国参事官をやった。大連にいた。そうしたら、大連では、ずっと灯火管制だ。フッと見ると、大連の港に赤々と電気が点いてる。それで僕は、不思議なことだから聞いたの。だんだん聞いてみれば、満州国でも陸軍と海軍は大喧嘩なの。それで、陸軍が灯

火管制をやる時は、海軍は港には電気を点けてる。驚いたね。そんな馬鹿なと。だから、それだけ陸海軍の喧嘩というのは大変なんだ。だから、二〇分の一が四〇分の一になり、さらに陸海軍の喧嘩で八〇分の一になる。

さらにもう一つ、科学の力。これは陸軍の人から聞いたんだが、日本では自動車の運転は、軍人の特殊技能だったんだね。技術水準が違うということの例として、アメリカでは女子どもが、みな運転しとる。日本では特殊技能だと。その程度だから、軍人の大佐で、僕の懇意のやつがおって、「竹本、それは二分の一じゃ、だめだ。二〇分の一にしろ」と言うんだ。そんなことをしたら数がまとまらんから、やめて、僕は二分の一にした。

だから、二〇分の一×二分の一×二分の一×二分の一。それで合計すると、一六〇分の一だ。だから僕は、戦争は初めから終いまで、一六〇分の一の力だから、絶対に負けると。このことを、いつか僕は、宮様に講義したことがある。汽車のなかで、名前は忘れたが……。

哲子夫人　久邇宮。

竹本　その宮さんが、汽車のなかで一緒になった。別室を持っとって、「話をしてくれ」と言うんだ。それで汽車のなかで、部屋に訪ねて行った。そこでもって、これをやった。「一六〇分の一だから、絶対に負ける」と。その軍人さん、宮さんだけどね。とにかく「絶対に負ける」と言ったんですよ。

哲子夫人　音楽がお得意でね。

竹本　こうやって話せば、軍人でもおとなしく聞いたね。

伊藤　菅太郎という人は覚えていますか。

竹本　菅太郎というのは、満州国の革新官僚。内務省出身。それで、内務省のある程度のところには、相当大きな影響力を持っていた。それで、僕とも親しかった。終戦の時にも、もう危なくなってきてから、僕の家に何回も来ましたよ。だけど、彼は経済が分からんもんだから、「負ける」と言っても、僕の一六〇分の一なんていうような見方は出来ないわけだ。ただ、「負ける」と言ってたけど……。

伊藤　「負ける」とは言っていたんですか。

竹本　だけど、非常に純粋な男ですよ。いい男ですよ。僕は仲が良かった。

伊藤　どこで知り合ったんですか。

竹本　一緒だった。どこで一緒だったのかね。役所の関係じゃないね。同志的な結合だ。

菅太郎氏に対する聞き取りのなかで、竹本氏の名前は、戦後、政界へ進出した翼賛会関係者の一人として出て来ており、両者の接触は、翼賛・翼壮運動であった可能性もある。「翼壮組の中には社会党入りを主張した人もあったし、また翼賛会関係では、松前重義先生が社会党に、竹本孫一氏はおくれて民社党へとそれぞれ思うところに赴きましたが、結局私ども翼壮組の主力は改進党に行くことになりました」（中村隆英・伊藤隆・原朗編『現代史を創る人びと（1）』毎日新聞社、昭和四十六年、二六一頁）。

伊藤　同志的結合というのは、どういうところにあるんですか。

竹本　僕のグループに、丹羽五郎というのがおった。丹羽五郎は、兄が内務省の課長ですよ。その丹羽君が、西園寺公一と親しいんだ。それで僕は、西園寺は丹羽君の関係で会った。大して親しくはなかったけど、毎月会ってた。

哲子夫人　一日に二つか三つぐらい会があったんですよ。お役所が済んで、真っ直ぐ家に帰ったことはないから。だから、いろんな会を

やってたの。一次会、二次会ぐらいはやってた。だから、いつも夜中に帰って来るの。

伊藤　そういう継続的な同志の集まりというのがあったんですか。

竹本　戦争中は、ずっとありましたよ。

「一種のイデオロギー的には国家社会主義のようなものだな。そういうグループが色々あったですよ。そういう関係で色々の人と知り合った。柔らかいグループで、政治結社のようなものではない。我々がグループを作ったのは、一つはね、有馬頼寧さんなどを中心としたような意味で、豊福も入っておったかね、農村問題研究会というもの、これはこの間死んだ家の光の親方、宮部さんなんかを中心にしてね。今広津君というのが居ますね、官房副長官なんかやった、あれなんかと内務省のグループと一緒になって時事問題研究会なんていうのを銀座の帝劇でやっていましたね。そんなのはきちんとやってました。矢次に僕は批判的だったから、国策研究会には好意を持っていなかった。矢次とは親しかったには親しかったがね。彼等は国策を商売にしているというような、純真な立場でね批判的なものを持っていた」(昭和六十年七月十日の聞き取りより)。

伊藤　いや、戦争前はどうですか。

竹本　前にも言いましたけど、革新官僚のグループがありましたからね。

伊藤　それは、親分は誰ですか。

竹本　いまの、迫水やら奥村さんやらでしょうね、強いて親分と言えば。

伊藤　岸さんなんかは？

竹本　岸さんは、個人としては、僕は特別、関係があったけれども……。

伊藤　そういう親分ではなかったんですか。

竹本　親分じゃないですね。岸さんは同郷なんです。それで、親しい。あの人は、僕はやっぱり、頭がいちばん良かったと思うね。付き合いのなかで……。

伊藤　やっぱり、仲間というのは、迫水……。

竹本　迫水よりは、岸さんのほうが上ですよ。

伊藤　毛里？

竹本　毛里は哲学者だ。

伊藤　美濃部？

竹本　まあ、みんなグループですよ。

伊藤　秋永さん？

竹本　まあ、グループだ。そのグループは、個人的には、僕はだいたい親しかった。

「美濃部さんとは同志的意識はありましたけれどもね、仕事の連絡としてはなかったですね。毛里さんも革新官僚だね、その面であったですね。私は末輩だけれども、国策を論ずるということになればね、それは奥村さんはずばぬけていましたよ。他の人にはそれだけのオリジナリティーがないよ。役人だからね。毛里は発想でアイディアを出すと、政策として纏めるということになるとね、やはり奥村さんでしょうね」(昭和六十年七月十日の聞き取りより)。

なお、この聞き取りの中で竹本氏は、仕事上のものとして秋永グループの存在を挙げている。座長たる秋永のもとに中心メンバーとして迫水、毛里、奥村、美濃部の四人がいたという。このうち予算を握る大蔵省の代表であった迫水は、どちらかと言えばリベラリスト的要素が強く、東亜連盟的なイデオロギーを持つ毛里などとは異なる面があったが、政治的感覚がある

ので、大体みなに同調していたという。

伊藤　何か、月曜会という名前が出てくるんですけども、聞いたことありますか。

竹本　僕は見たことないね。

伊藤　何か、そういう名前のついた会合はありますか。

竹本　特別そういうような名前は、僕らのグループは持ってなかったと思いますね。

なお戦後、片山内閣の時に省庁対策として、竹本氏が中心となり、各省局長級の人材を集めて、定期的に情報を得る場を設けたが、この会合を水曜会と言った（「対談　内田健三氏と片山連立政権を語る」『平成日本の志』五四頁）。

伊藤　やっぱり、談論風発をやっていたんでしょうね。

哲子夫人　もう、そればっかりやってたんだろうと思いますよ。

伊藤　また、ちょっと人のことですけれども、この名前は分かりますか。

竹本　緋田工は、内閣調査局におった。僕も懇意だった。あの人は、教祖みたいな男だった。それで、内務省のなかで、一つの宗教的な信者がおった。

伊藤　菅さんなんかも、そのグループじゃないですか。

竹本　菅君も、あのグループに入っておったでしょうね。満州国を回った関係もあるから。だけど、緋田なんていう人は……。ただ、町のオヤジみたいなところがある。深みはない。もう一人、右翼の思想家がおるが……。安岡正篤、あれらとは違うんだ。安岡正篤は、ちょっと深いものを持ってた。

伊藤　じゃあ、その安岡さんとも関係があったんですか。

竹本　僕は、二、三度あの人の家へ行ったことがある。だけど、それ以上の付き合いはない。

伊藤　この杉原（正巳）という人は、どうですか。

竹本　杉原は、僕は全然知らん。おることは知ってたけどね。特に飯を食った関係もない。やっぱり、その動きをしていた。

伊藤　亀井さんの仲間なんですけどね。

竹本　それは知らない。

伊藤　その八番のところなんですが……。

質問要項の第八番（前を見よ）。次の「そういう動き」とは、日米首脳会談成功の場合の対策を、企画院に検討させたということ。

竹本　さあ、近衛内閣の退陣前にそういう動きがあったかどうか、知りませんね。

伊藤　日米首脳会談の話を、聞いたことがありますか。

竹本　知りません。

伊藤　でも、日米交渉の話は聞いておられました。

竹本　あまり聞いてないね。近衛内閣の次は、誰でしたかね。

伊藤　東条。

黒沢　近衛は盛んにアプローチはしていたんですね。

伊藤　いや、ルーズベルトとの交渉をしているわけですよ。それで、もしそれがうまくいった場合に、国を抑えることができるかという問題があったわけです。その時に、日本の行政改革をどういうふうにするかという問題があった。

その行政改革のことですけれども、内閣の機能強化という問題については……。

竹本　それは知りません。

伊藤　いやいや、先ほどの奥村さんの名前で出したもの（『日本政治の革新』）にも、それが非常に強く出てくるんですけどね。

竹本　まあ、パンフレット程度の……。

伊藤　いやいや、内務省の人事権と大蔵省の予算編成権を内閣が握らなければ、内閣は強くなれないと。

竹本　そういう意見は前からありましたね。

伊藤　それは、先生の主張でもあるわけでしょう。

竹本　だけど、まとまった動きはなかったと思う。個人的な意見でしょう。

伊藤　そうですかねぇ。いろんな文書がありますよ。

竹本　意見としてはありましたよね。あったけど、特に記憶に残る動きはなかったと思いますね。

伊藤　だって、先ほどおっしゃった統制をきちんとやっていくためには、内閣を強化しなきゃ出来ないでしょう？

竹本　ええ。

伊藤　計画経済をやるためには、内閣が強くなければ、とても出来る話ではありませんよね。

竹本　情勢が、そこまで熟していなかったんじゃないですかね。もう一つは、そう言っちゃ悪いけれども、我々を含めて、当時の官庁なんかの頭は、それほどロジカルじゃなかった。ただ、改革が必要だとか、何とかが必要だということを言うたり、考えたりしたけど、ほとんど個人的な意見じゃないですかね。毛里君なんかは、盛んに言うて回ってた。

伊藤　それでは、さっきの開戦の話ですけど、先ほど、「戦争は負ける」という話はお聞きしましたが、ちょっと徳富さんの話をされたでしょう。

竹本　徳富さんは、負けるとは思ってなかったでしょうね。僕は、さっきの一六〇分の一だから負けると、初めから思ってた。ただ、大川周明の『米英東亜侵略史』（第一書房、一九四二年）という本がある。あの本を読んで、とにかくアジアを彼らが侵略したということで、アジアの抵抗をしなきゃいかんというような考え方は、僕にもあった。気持ちとしてはあったけれども、特に私はそういう動きはなかったですね。一つは、私はいまでもそうだけど、経済がいちばん興味があるんだ。いまでもそれを心配して、夜眠れないぐらいだ。だけど、ちょっとした軍人たちの意見なんていうのは、あまり重きを置かないですね。

伊藤　こういう人（山本勝市）の名前を聞いたことありますか。

竹本　これは思想家ですよね。何か書物を一冊書いた。だけど私は、あの本は興味もなかったし、読みもしなかったと思うがね。

伊藤　自由主義経済論者ですからね。

竹本　そう言っちゃ悪いけど、僕は問題にしなかった。

伊藤　いちおう、名前ぐらいは知っているわけですか。

竹本　名前は知ってたけどね。何か、大きな本でしょ。だけど、この人の言うてることはね。

平成六年十一月十九日の聞き取りにおいて、竹本氏は、戦時中に使っていた「山田洋雄」というペンネームについて質問されたのに対し、山本勝市と電力国営問題で大きく意見が異なり、その論戦の時に使用したものではないかと答えている。執筆論文については、巻末の「著作リスト」を参照のこと。

伊藤　笠信太郎さんの『日本経済の再編成』というのは？

竹本　これは、いい人だった。僕も、ちょっと懇意だった。これは経済通だから、話が合った。あの人は本質的にものを見た。だから、きょう、いままでに名前が挙がった連中のなかでは、いちばん偉いかもしれん。深みがあった。

伊藤　新体制の時に、「経済新体制」ということが言われますね。あの経済新体制の動きには、先生は何か関わられましたか。

竹本　僕は別に分からなかったけど、この人（笠信太郎）が何か書いてるね。

伊藤　ええ。経済がお好きなのに、経済新体制の問題はあまりタッチされなかったですか。

竹本　ちょっと、昭和研究会とは流れが違うのです。笠さんはいろいろ関係があったし、意見もあったし、僕は敬意を払ってたと思いますがね。山本勝市なんていうのは、問題にしない。

伊藤　笠信太郎の敵ですからね。

竹本　それは本当だ。右翼の連中が担いだんだね。

伊藤　そうです。右翼の自由主義経済論者なんですよ。

〈以上〉

竹本孫一
オーラルヒストリー

第3回

[2000年8月2日 14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

季武嘉也(創価大学教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

共産主義と全体主義

竹本　これ（『日本政治の革新』）は、序文だけを奥村さんが書いた。あとは、みな僕が書いた。

黒沢　「法学士・竹本孫一君の助力に負うところ、極めて……」。負うところって……。

伊藤　負うどころじゃないんでしょう（笑）。

黒沢　全部書いたんですか。いやいや、すごいもんだね、これは……。昭和十三年か……。

竹本　僕の（文章）は拙速でね。速いけど、まずいの。

伊藤　そんなことはないでしょう（笑）。

竹本　まずいけれども、速い。

伊藤　この前、ナチスのことはどうのこうのとおっしゃいましたけれども、これ（『日本政治の革新』）を読みますと、ナチスのこともいっぱい書いてある。だから、ナチスのことはずいぶん勉強されているんですね。思い出されませんか？　ドイツやイタリアの青年運動について、ずいぶん詳しく書いていて、それを褒めていらっしゃるわけですね。ヒトラー・ユーゲントのことを……。

『日本政治の革新』第六編「国家革新と青年運動」のうち、第一五章「独伊の青年運動」が両国青年運動の紹介・検討に充てられている。

哲子夫人　そんなこと、言ってたわね。感心していた。日本に来たでしょう。

竹本　問題は何ですって？　いま先生がおっしゃったのは……。ヒトラー・ユーゲントが日本に来たことは覚えてますが、来て、何を話したかは、ちょっと覚えてませんね。浜松で講演したことは覚えてますけどね。

結論から言いますと、一つは私個人で言うと、民主社会主義なんですね。それで、その立場から利用出来るものは利用しようということで、特にナチスの場合は、反資本主義という面を大いに強調して、極端に言えば、それを利用するということだったと思いますけどね。

伊藤　この辺は、どうですか。

「このドイツの青年運動の基本的要請は、『自由と責任』である。組織に自由を与へ責任を負はせる、そこから指導者原理が生まれるのである。『小さな何でもない子供でも、其の子供に、其の子供と一緒に居る七人、八人の者の全責任を負はせて、講習なり、キャンプなりをせよと命令して、其の子供が全責任を以て働いたならば、其のことだけから人間の教養が生まれて来る。』其れが彼等の信条である。

この指導者原理を通じて、ヒトラーはドイツ青年に何を求めんとするか。その第一はナチ世界観の修得である。第二は強健なる身体である。第三は労働の奉仕である。第四は職業の再教育である。ヒトラーが之に対し、ドイツ青年大衆に与へんとするものは何か、曰く、労働に依る歓喜である。曰く、歓喜による労働である。是等は、主として、ドイツ帝国再建の歴史的任務に迄動員されたドイツ青年大衆に対する具体的運動綱領と見ることができるであろう。」（同書、二一三～四頁）

「祖国振興の熱意に燃ゆるドイツやイタリーが、その国民精神の復興と、青年大衆の訓練とに、最大の努力を傾注しつゝあるは注目すべき事象ではないか。凡ての変革は、先ず精神の革命から始まらねばならぬ。精神を変

革して、真の民族的伝統を躍動せしめ、新らしい国家社会を建設するが為には、未だ俗世の悪習に感染すること少なく、香り高き純情と鋭敏なる感受性とを有する青年大衆こそ注目されねばならぬ。イタリーに於けるバリイラー運動の発展、ドイツに於けるヒトラー・ユーゲントの躍動、真に両国政治家の慧眼を示すものである。」（同書二五一頁）

竹本　僕の考えを言いますと、結局当時の情勢のなかで、ここのところに書いてある言葉で、我々の主張に利用出来るものは、全部利用していこうと。そういう立場ですがね。特に問題になるのは何ですか。

伊藤　いえいえ、問題にしているんじゃないんですよ。この前、先生は、「ナチスにはあまり関心がなかった」とおっしゃったから……。

竹本　いや、関心というんじゃなくて、感心しなかったということでしょうね。

伊藤　いや、これは感心しているんです。

哲子夫人　それは、そう書いたんでしょうね。

竹本　だから、我々の立場から言って、全体主義というか、全体経済を目指すと。そういう立場に利用出来るものは、当時、大いに利用しようという立場だったと思いますよ。

伊藤　だけど、これは全体を通じて、共産主義に対してものすごい批判をしているんですよね。あれも、全体主義ですよね。

竹本　共産主義はね。

伊藤　だけど、共産主義はすごく反対していて、それでナチスにはかなり賛成している。

竹本　……ということですか。

伊藤　そう思います？

竹本　それは、いまでもそうですよね。我々の考えてることを、全体主義と言うかどうか、国民主義的と言うか……。計画経済というものが、一方においては共産主義の考え方に非常に近いと言われても、僕は当然だと思いますよ。

伊藤　でも、共産主義に対しては、すごく批判しているわけですよ。

竹本　僕は共産主義に対しては……。第一は、表は別として本心から言えば、要するに全体主義的なものには僕は反対だ、ということが根本にありますね。

伊藤　でも先生は、ここでは「全体主義にならなければならない」と書いているんですよ。

竹本　だからそれは、その当時のことを考えてみれば、全体的な計画経済でなければならんという、本心を言っただけだと思うね。

伊藤　でも、全体的な計画経済というのは、ソ連がやっているわけですね。

竹本　だから、全体主義的計画経済的要素については、共通面があることを、僕は認めますよ。それはそれでいいじゃないですか。ただ、僕はやっぱり、労働者の独裁政治には反対ですからね。

伊藤　そういう意味ですね。これ、もう一度、ちょっと読んでいただけますか。

竹本　これに何を書いたか、全然覚えてませんけどね。

伊藤　ついでに、もう一つだけ。「企画院第一部　昭和一五年八月三日　新政治体制確立要綱・竹本調査官」というので、こういう文章があるんです。

（前略）

第一　新政治体制確立ノ緊要性

一、世界史転換ノ現段階ニ於テ国際諸情勢ヲ積極的ニ利導シ以テ皇国ノ国

是ヲ完遂センガ為ニハ政治指導力ノ急速ナル確立ヲ必要トスルコト
二、内外革新政治展開ノタメ国論ノ発展的統一ヲ必要トスルコト
三、国内ニ新秩序、新世界観ヲ確立センガ為ニハ国内思想戦ノ実践網整備ヲ必要トスルコト
四、東亜経済自給圏確立ノ為ニハ新指導原理ノ下先ヅ国内経済体制ノ高度化再編成ヲ必要トスルコト
五、各般ノ総動員行政ハ其ノ組織ノ一元化ヲ急務トスルコト
六、思想戦、経済戦ノ完遂ハ日満支ヲ通ジテ一元的ニ企画スベク之ガ為日本自体ノ指導的責任組織ヲ整備スルノ必要大ナルコト
七、要スルニ自由主義的原理ノ下ニ体系付ケラレタル国民生活ノ各分野ニ亘リ新ナル指導原理ニ依ル其ノ再組織ガ時局ノ絶対要請タルニ至レルコト
（中略）
第三　新政治体制確立ノ基本方針
（中略）
六、新組織ハ全国民的基礎ニ於テ総理ノ補弼責任完遂ヲ強化シ、国策ノ調査、研究、立案、竝ニ其ノ実施ニ全面的ニ協力スルコト
（中略）
九、現段階ニ於ケル総力戦遂行ノ絶対要請ニ鑑ミ対立政党ヲ克服シテ一国一党的姿勢ヲ強化スルコト
十、新政治組織ノ確立強化ト平行シテ行政竝ニ運用ノ根本的刷新ヲ完遂シ、官民一体新政治体制ノ確立ニ邁進スルコト
（後略）
（『現代史資料』四四、二四〇～二四一頁）

竹本　これは、僕が書いたんだな（笑）。

哲子夫人　共産党にも仲のいい人がいて、「赤旗」も取っていたので、そう嫌いじゃないんですね。だけど、やっぱり感情的にというか、合わないところがあるんでしょうね。

黒沢　これは私案で、成案にはならなかったんですか。

伊藤　いえ、だんだん成案になっていくんです。企画院から上げていくんです。

今度は、新体制確立要綱ね。これも企画院なんですよね。これは海軍が企画院から取った資料なんですね。海軍が、そこのところにメモを付けまして、欄外に「竹本（孫一）調査官」と書いてあるんですよ。それで、「新体制促進同志会ト連絡アリ」というふうに書いてあるんですね。

秘　政治新体制確立要綱

昭和一五、八、一三

第一　方針

政治新体制確立ノ目標ハ世界ノ新情勢ニ即応シ国運ノ進展ヲ強力ニ促進スル為日本的世界観ニ基ク生活原理及組織ニ依リ国民各々其ノ職域ニ応シテ皇謨翼賛ノ責務ヲ具体的ニ完ウスベキ国民組織ヲ確立スルニ在リ。之ガ為先ヅ国民組織ノ確立ヲ指導促進スルベキ中核タル政治組織体（党）ヲ形成スルヲ要ス。（後略）
（『現代史資料』四四、三〇九～三一〇頁）

黒沢　この注は、当時から付いているんですか。

伊藤　編纂して、僕が付けたんです。ここは、その通りなんですよ。

竹本　これは、僕が書いたんですね。

伊藤　だからやっぱり、この時は、党なんですよ。国民組織の確立を

指導促進するべき政治組織体、党……。

黒沢　政党のことを……。

竹本　あの時はね、党という言葉を、軍人はだいたいにおいて嫌うんだ。家内に言わせれば、党というのは階級制度のことだと思ってるわけですよ。だけど我々は、当時の政府なり、あるいは翼賛会なりが、好んで協力してくれる表現を使わなければ話にならない、ということだと思いますよ。だから、その時は海軍が使う言葉で、利用出来る言葉を全部利用するということで、いわゆる全体主義的な表現をいろいろ使ったということだと思います。

伊藤　だから、これは党をつくらなきゃならないんですね。

竹本　あの頃は、党という言葉は嫌うんですよ。

伊藤　嫌いなんですけれども、でもここには国民組織の確立を指導促進するべき政治組織体、つまり党をつくらなきゃならないと。

竹本　先生が問題にしているのは、どこですか。

伊藤　だから、党のようなものをつくろうと。

竹本　いや、彼ら軍部は、国民組織をつくろうと言うんだ。僕らが、それを党に持って行こうというわけだ。

伊藤　それだったら、分かるんですよ。

竹本　でも、彼らの好む言葉を使わなければ……。

「新党計画」の顔ぶれ

伊藤　それで、これはどこがつくったのか、ちょっとよく分からないんですが、近衛さんの文書のなかにあるものなんですね。そのなかに、党の中心のところにいる候補者が挙がっているんですよ。代議士ではこういう人、代議士でない人ではこういう人と……。竹本さんの名前もあるんですよ。この顔ぶれで、知っている人はいますか。

「亀井貫一郎らの新党計画」のうち、「(ネ) 人事案2」の部分。

(前略)

本部輔導者及ビ局長候補者

専任セシムル者(本部組織部輔導者「三輪」ハ代議士、東京地方指導者ヲ兼ヌルモノトス)

イ、三輪寿壮、村松久義、河野密(企画政策)、小池四郎、中原謹司、小山亮、永山忠則、岡野龍一、池崎忠孝、三田村武雄[大]、依光好秋、行吉角治、今井新造、原玉重、

代議士外

ロ、平野学、穂積吾一[社二]、雨宮□□[大]、後藤基春、今村等、大蔵栄一、岸本直行、浜田勇、岩塚源弥、

輔導者、局長級ニシテ前記一ノ補充者タルモノ(右ハ各省分科委員会理事又ハ地方指導者ヲ兼ヌル場合モアリ又一応兼ネシメテ順ヲ追ッテ一ニ専務セシムルモノトス)

イ、代議士

加藤瞭造[社]、岩瀬亮、木村武雄、井上良二、金井正夫、簡牛凡夫、岸田正紀[社]、中村高一、阿部茂夫、三宅正一、吉植庄亮、山崎剣[社]二、前川正一[社]、野溝勝、馬場元二[社]、塚本重蔵、永江一夫、佐竹晴紀[社]、菊池養之輔[社]、川俣清音、長谷長二[大]、須永好[社]、川合儀一[社]、壷山徳也[社]、田中耕、渡辺泰邦、田原春次、

ロ、代議士外

安達厳（政策企劃）、斎藤瀧治、黒田新一郎、高橋英夫、竹本孫一、中山公威、平井羊二、大山口、林広吉、角田藤三郎、田村勘治、穂積七郎、広瀬健一、溜島口、近藤桂司

（後略）

（『現代史資料』四四、二一七頁）

竹本　翼賛会関係でね。

伊藤　いや、まだ翼賛会になる前なんです、これは。

竹本　穂積七郎なんかが入ってるんだよ。

黒沢　あと、知ってる人は、どなたですか。

竹本　これはみな、ほとんど知ってるよ。林広吉というのもおったね。これしかし、一緒に党組織をつくろうという相手じゃなかったね。ただ、賛成してくれる人だというので、頭のなかにはあったけれども、それほどの人物じゃないよ。

伊藤　じゃあ、このなかで同志だと思われる人は誰ですか。

竹本　安達厳は、同志の入口だ。それから、これ（斎藤瀧治）は知らない。黒田新一郎というのは、農民運動だったかな。

伊藤　革新農村協議会。

竹本　長野県だったかね。僕は、顔は知ってますよ。同志的に一緒じゃなかった。それから、これも知らんな。名前だけは覚えてるけど。林広吉も名前だけだな。田村勘治は、農民運動の先生。

伊藤　穂積さんは？

竹本　有名な、穂積だ。内閣の……。

伊藤　この人は、よく知っていますか。

竹本　よく知ってる。よく知ってるけれども、僕と彼とはここが違う。彼は、一種の思想家だね。思想家として街頭に出て行って、運動を大いにやった。しかし、僕らとはちょっと肌が違うんですね。でも、よく知ってました。

伊藤　どこに接点がありました？

竹本　さあ、どこだか分からんですけどね。とにかく、大きく言えば同じ陣営だったですからね。

伊藤　この広瀬健一というのは、知っていますか。

竹本　これも、協調会か何かでしょ。僕は、名前は知ってるけれども、付き合いはないです。溜島は、割によく知ってたけどね。これも、協調会か何かでしょ。近藤（桂司）は知らない。

伊藤　代議士のほうは、どうですか。

竹本　代議士は、加藤瞭造は知ってますよ。木村武雄も知ってる、中野正剛の一派。井上良二、知ってる。金井（正夫）、中村高一、まあ、一年生代議士みたいなものだね。このなかでは、三宅正一がいちばん懇意だ。

伊藤　そうですか。だけど、先生はあまり農民運動をやってなかったのに……。三宅さんは農民運動でしょう。

竹本　三宅正一はね、農民運動だけど、いまで言う社会党ですよ。だから、政治運動にもずいぶん関係があったですね。僕は、農民運動の面は知らない。党のほうの関係です。

伊藤　これ（三宅）、有馬さんと親しいんですよね。

竹本　その関係はあったかもしらん。

伊藤　先生は、有馬さんとは親しくなかったんですか。

竹本　割合親しかったけれどもね。とにかくあの人は、近衛さんと近いからね。そして、翼賛会の事務総長だったかな。だから、とにかく彼に我々の考えをざっくばらんに言ってね。僕なんかは、ある意味に

おいては、獅子身中の虫かもしれない。なぜかと言うと、当時の全体主義というものを、うまく利用しようということですからね。最後の頃になると、ちょっと、だいぶ違うようだった。

しかし、この前お話ししたと思うんだけれども、浅沼と僕と誰かもう一人と、三人で懇談した会がありましたね。浅沼が僕たちを呼んでくれたんだ。その時に浅沼が、「電力国営の次は銀行国営だ」ということを言った。それが、我々の本心なんだ。だから、電力国営をやって、ソビエトは五ヵ年計画が中心になるんです。要するに彼らは、電力国営がすべてだと。僕らは、電力国営の次には銀行国営だということです。それが、僕の考えなの。いまだに同じなんです。だから、それが、あまり早く出過ぎて弱ったこともあるんだ。僕らは、要するに銀行国営まで……。僕が、いまでも考えているのは、そういうことだ。ずっと一貫して……。というのは、社会党の連中にも銀行国営まで考えるのは……。浅沼さんも運動感覚でそう言ったけれども、本心でどこまで狙っておったか、ちょっと分からんですね。あの人も、運動マンだね。運動マンだから、我々の言う、理論的にこうだと言う人じゃないです。勘で行くんだ、勘でね。だから、勘だったら亀井貫一郎と同じようなもんだ。

浅沼との銀行国営に関する会話については、第一回参照。

伊藤　仲間ですからね。これは置いて行きますので、赤いマークの付いたところだけ読んでいただいて……。それから、この本は全部置いて行きます。

今度は、こっちに移ってください。九番から。

第三回質問要項の第九番。――矢次一夫の主宰していた国策研究会の機関誌『国策研究会週報』の昭和十七年五月の一九号の座談会「選挙後の政治動向を語る」に、安藤覚・今中次麿・金内良輔・河野密・中野登美雄・古沢磯次郎の諸氏と共に参加し、二〇号の鼎談「統制経済時代に於る行政の職分」を帆足計・堀真琴の諸氏となさっています。御記憶がございますか。これらの人々の内にお付き合いの深かった人がおられますか。

竹本　……親しい人？

伊藤　そもそも、矢次さんはよくご存知ですか。

竹本　矢次は、企画院に毎日のように来たんです。

伊藤　何しに来るんですか。

竹本　情報交換ですよね。よく出入りしてました。それから、もう一つは、矢次は奥村喜和男と親しかった。僕は、その関係で。僕は、矢次はちょっと怪物的要素があるもんだから、あまりしっくりはいかなかった。だけど、奥村さんの関係や何かで、しょっちゅう会ったからね。親しいと言うと、あれだが、顔はよく知ってましたね。

伊藤　顔は、一度見たら忘れられない顔ですから（笑）。

竹本　そう言っちゃ悪いけれども、いわゆる、ああいう浪人というのには、何か人を利用するだけだというような先入観がある。それで、あまり好きになれん、ということを思った。性格的にそうだと。矢次も、僕のほうはむしろ警戒しとった。だけど、よく知っていましたよ。矢次というのは、僕に言わせれば軍部を一〇〇パーセント利用した人ですね。

哲子夫人　他にも、右翼浪人みたいな人が、よく来てたね。

伊藤　これは浪人たって、大物なんですよ。彼は武藤軍務局長と仲が良かったでしょう。

竹本　要するに、企画院を軍部の相棒にするというか、小使にしようということで、全体的には矢次がやったんだろうと思いますよ。

伊藤　お金ですか。

竹本　そういうことですよね。そう言っちゃ悪いけれども、奥村さんは矢次を割に高く買ってましたけれども、僕は「あれはゲテモノだ」というような感じを持ってたから、ちょっと感じが違ってた。

伊藤　この座談会に出た人達で、親しい人はいますか。

竹本　安藤寛さんは、人がいいだけ。今中次麿は九大でしょ。学者として、ものを書いた。金内君も、翼賛会か何かにおったね。河野密は、僕はこのなかでいちばん懇意です。彼は、頭もいいほうでしたね。それから、人も、他の連中に比べれば、金のためとか何とかということでなくて、良心的でしたよ。だから僕は、河野は人間的にも割に好きだった。このなかで、いちばん親しかったでしょうね。それから、中野登美雄は早稲田の教授だね。私は、馬鹿に気が合って、中野さんもしょっちゅう企画院に雑談に来てましたよ。僕はだから、個人的には懇意でした。

伊藤　そうですか。

竹本　古沢磯次郎は新聞記者だ。

伊藤　古沢さんとは、お知り合いでしたか。

竹本　よく知ってる。彼は人がいいだけだから、特に何とかということはないが、人は真面目ないい男でした。そういう意味で、好意は持ってましたが、期待するほどの手腕のある人じゃないでしょうね。だから、このなかで、まだ一仕事やってもらいたいと思ったのは、中野登美雄だ。あの人は、早稲田の教授だったよね。教授としても、非常に純真だった。それから、勉強家だった。だから、あの人なんかは僕の意見を、サジェスチョンとしては相当利用した。気が合ったわけだ。だから僕も、中野さんにはね……。早稲田の総長にもなる可能性があったかな。

伊藤　いやあ、どうですかね。

竹本　何か、総長でもやってもらいたいなと思ったことがある。少なくとも、あの人は憲法については割に真面目に勉強してましたよ。

伊藤　こっちは、どうですか。

竹本　帆足計か。それは、経済団体の事務局長みたいなことをしとってね。あれも、半分は誤解されてるよね。社会主義者だというように、半分睨まれ過ぎたんじゃないかね。本心は、それはなかったでしょう。だけど、そう言っちゃ悪いが、帆足君は、ただムードだね。たとえば僕なんかは、電力とか銀行を国有化するとかいう戦略を持っている。帆足計は、そんな具体的な、たとえば社会主義革命を担当するという人じゃなかったね。ムードですよ。人柄は良かった。真面目だった。だけど、ただそれだけじゃないかね。平凡な代議士として、意見を言う程度のことだった。私は、だから、そう多くは期待してなかった。

伊藤　あと、堀さんはどうですか。

竹本　堀真琴さんは、学者だ。私は、あまり深い関係はなかったです。ただ、知ってる程度で……。安部先生の関係が何かあったかな。あまり詳しく知らないです。

伊藤　十番を飛ばして、十一番の太田さんですね。

第三回質問要項の第十一番。――翼賛会前後、太田正孝氏とお親しかったとも聞きますが、太田氏ついてお話しください。

竹本　太田さんという人は、選挙区が同じなんだ。

伊藤　それは、後の話でしょ。そうじゃなくて、翼賛会の頃は？

竹本　翼賛会の時は、彼は我々の上でね、政策局長だったかね。それで、時の政府の経済政策に批判を持っているという程度で、社会主義

経済的なものを持っていたとは、僕は思っていないですね。ただ、時の政府には反対だったですね。

伊藤　先生とは気が合ったんですか、合わなかったんですか。

竹本　いや、気が合うとか、どうとかというほどの深い経済論を戦わせたことはありません。ありませんが、ムードで、だいたい我々と同じような考え方を持っているという程度ですね。

伊藤　だけど、この人は政策局長でしょう。

竹本　だけど、あの人は政策局長として、いま言ったように、たとえば銀行の社会化というようなことまで考えていたかと言うと、そんなことは考えないでしょう。だから、せいぜい自民党的な感覚で、銀行の問題を取り扱う場合があれば、取り扱っているかもしれないけれども、我々のように一つの基本的なものを持っておって、銀行を料理するというのではないですね。だから、あの人の政策局長（としての考え）は、時代とともに、いくらでも変わる。

企画院事件と昭和研究会

伊藤　今度は先に行って、この企画院事件は分かりますよね。

第三回質問要項の第十二番。――企画院事件で検挙された和田博雄・勝間田清一・正木千冬・佐田忠隆・稲葉秀三・和田耕作といった人々とは、交流があったのでしょうか。また、この事件については、どのような感想を当時、お持ちだったのでしょうか。

竹本　企画院ね。企画院事件というのは、同情して言えば、当時の軍部に、あるいは右翼に狙われて、必要以上に犠牲を払わされたという点では、勝間田君を始めとして、むしろ気の毒だ。批判的に言えば、そう大したものは持ってなかった。まあ、企画院事件で、いちばんシャンとしてたのは、和田耕作さんですよ。これは頭が良かった。だから和田さんは、僕は個人的にもいちばん仲が良かったけどね。あの人は、いまで言うと、一種の社会主義経済みたいなものを、ちゃんと持ってた。その上で、いろいろなことを言ってたんですね。

あとの連中は、稲葉にしても勝間田にしても、ちょっと門前の小僧でおっただけで、付いて、同じことを言っとったけど、大したことはなかったですね。稲葉君なんかに、「おまえが書いたのは、また変わっとるじゃないか」と、僕は言ったことがあるが、晩年というか、最後の頃はすっかり変わってたよ。下手すれば、僕より右だった。勝間田なんていうのは、稲葉よりもっと悪いよ。稲葉は良心的だけど、勝間田は政治的だ。だから、もう少し政治的に、そこを利用するというところがあったです。その点で、いちばんシャンとしてるのは、やっぱり和田さんですね。あの人は頭が良かった。それで、本質を知っていた。

伊藤　和田博雄さんは？

竹本　和田博雄は、勝間田君の親分であって、そして同時に研究団体かなんかの財政金融部長でした。それで彼は、僕と同じぐらいの感覚で、社会主義的な立場からの金融国営を考えておったと思いますね。それはただ、「二割」（注・軍人のことか。四〇頁下段参照）を気にしたり、薄化粧をしたりしてごまかしていたけれども、本心はシャンとしてた。だから、二・二六だ、何だというような時でも、彼はいちばんどっしりしていますよ。だから、和田さんという人は、ある意味で

企画院ではいちばんシャンとしてましたね。奥村さんは、僕はいちばん親しかったけれども、あの人は社会主義ではなかった。電力国営はあったけれども、それは単なる技術的な立場ですよ。和田さんは初めから社会主義経済が頭にあって、その一つとしての電力というものを考えておったと思うね。

伊藤　でも、奥村さんのさっきの本は、社会主義ですよね。

竹本　まあ、奥村さんは、僕が書いたものを、そのまま本にしただけで、あの人がどれだけ何を持っていたかということは……。それからあの人は、電力は技術的な要素からいって国営にすべきだということを言っておっただけで、あとは逓信省の簡易保険や何かと同じように、そういうものは、ある程度庶民のために、いまで言えば社会化をすべきものだということを考えておった。そういう程度で、僕らのような社会主義の原則から割り出したというのとは違いますね。

伊藤　この和田、勝間田、正木……。

竹本　正木は、産業経済をやっとったけど、正木君がどこまで深いものを持っておったか、僕もあまり知りませんね。彼は、我々の考え方に付いては来た。それと、もう一つ。昭和研究会というのが一つの、ある意味では思想団体だね。それで、企画院の職員というのは、革新が多いですね。昭和研究会グループが非常に力強い、影響力を持っておったことは事実だけれども、やっぱり流れは違いますね。だから、僕や奥村さんのグループは、昭和研究会のなかに、あまりタッチしてないんだ。たまたま方向は同じだったけどね。

伊藤　和田耕作さんも、この時に一緒に捕まっているわけですよ。

竹本　あの人とは、いまも懇意です。企画院の時も懇意だったけど、社会主義的な意味での和田君の理論は、あまり聞いたことがないんだ。だから、いい人だとは思っているけど、要するにムードじゃないかね。

伊藤　じゃあ、こういう人達が捕まって、竹本さんが捕まらなかったのは、どういうわけですか。

竹本　僕は第一に、昭和研究会のグループは、極端に言えば半分馬鹿にしてた。タッチしてない。

伊藤　じゃあ、企画院事件は昭和研究会のグループということですか。

竹本　昭和研究会のグループは、ムード的には我々と同じ。極端に言うと、我々よりも先へ行った。行ったけれども、僕に言わせれば、ただそれだけのことで、一種の社会主義理論の上に立ったグループとは思わないですね。和田博雄は社会主義的なものを持っていたと思うんです。しかし、あとの人は、ただ付いて行っただけじゃないかね。昭和研究会も、だいだいそんなのが多い。それで、稲葉君なんていうのは、あの連中と一緒になって牢屋にも入ったけど、最後の頃は僕よりも、ずっと右でしたよ。

伊藤　この人達は、昭和研究会ということで捕まったんですかね。

竹本　だいたいね。これは、ほとんど昭和研究会だ。

伊藤　それと関係がなかったから、竹本さんなんかは捕まらなかったと……。

竹本　僕は関係ない。昭和研究会というのは、後藤何とかというのがおったろう。あのボスが、金も集め、人も集めていろいろやったわけだ。で、どういうことか、稲葉、勝間田は割に親しいんだけれども、僕は、あの連中を左翼の成り損ないぐらいに思ってた。どちらかと言うと、尊敬するよりも軽蔑しとったから、一緒にならなかった。だから僕は、昭和研究会のグループと行動を共にしない。

哲子夫人　片山さんと、そのほうのグループとつながりがあったか

ら、共産党のほうとは、ちょっと離れて考えたんじゃないでしょうかね。安部先生も「自由・平等・博愛」って書いてくだすって、持ってますけれどもね。

伊藤　じゃあ、これはちょっと後に回して、石原莞爾は？

第三回質問要項の第十三番。――石原莞爾の東亜連盟に共感を懐かれたということですが、石原莞爾と直接の接触はおありだったのでしょうか。その関係者では、どなたと特にお付き合いがおありでしたか。

竹本　これは、僕は本で読んだのと、満州の同志と後で親しかったから、いろいろ関係があったと言えば、あったと思いますがね。だけど、警察に取っ捕まるほどの関係はなかった。しかし、僕の考え方は石原莞爾さんと、非常に近かった。要するに、極端に言えば、我々は資本主義を批判する。それは、アナーキズムだと言っとったんだ。そのアナーキズムの資本主義というものの行く末を批判するんだけれども、時の情勢から考えて、ある程度軍部を利用しようと考えておったですね。そこが問題なんでしょうけどね。

出版課長当時、竹本氏は、石原氏らの東亜連盟の思想に共鳴し、その機関紙活動に用紙配給の面で特別の配慮をしたという（「わが青春」八、昭和五十九年三月三日付『静岡新聞』）。

伊藤　軍部と言っても、さっきの矢次と武藤さんと、それから石原莞爾は全然違うでしょう。

竹本　違う、違う。石原莞爾のほうが、極端に言えば哲学を持ってた。武藤なんていうのは、軍務局長だ。それだけの話だ。石原さんは、なかなか深い哲学がありましたよ。そして石原さんの下に、関東軍の指導的な中心人物がおる。その人は、僕もよく知っとった。小原さんて言ったかね。小原さんと、もう一人何とかという人と、それが石原莞爾の両翼だった。石原莞爾は、東条さんのことを「東条軍曹」と言ったんだからね。「あれは大将の頭ではない。軍曹だ」と言って、初めから馬鹿にしとった。だから、それだけ深みがあった。

伊藤　これは、竹本先生が戦争中に書かれた文章のリストですけどね。網羅的ではないと思いますが、記憶にある文章はありますか。

巻末の「著作リスト」参照。

黒沢　これは、本じゃなくて論文ですか。

伊藤　雑誌です。

竹本　覚えているのはないけれども、書いただろうとは思いますね（笑）。

伊藤　竹本孫一という名前ではなくて、ペンネームで書いたことはありませんか。

竹本　それはないですね。

伊藤　少しはありますか。

竹本　いや、ほとんどないと思いますね。

伊藤　書く時は、自分の名前を使った？

竹本　使った。いまの書物を、奥村さんの名前で書いたということはあっても、他の名前で書くということはない。ただ、いま言ったように、僕の本心を、戦争中の時局の関係で、少し綾を付けてものを言ったということはあるけど、名前を変えたりということはないです。

第七回の聞き取りで竹本氏は、「山田洋雄」が自分のペンネームだと認めている。

伊藤　これ、だんだん探して、また持って来ますけれども……。

竹本　古墳発掘かな（笑）。

伊藤　まだ、古墳にはなりませんけどね（笑）。

竹本　よく調べてありますね。

伊藤　石原さんと直接会ったことはありますか。

竹本　……ちょっと記憶がないですね。ないんじゃないかと思いますがね。満州国の共和会の総務部長みたいな人で、何と言ったか、名前を忘れたけど、その人は僕は懇意だったです。その関係で、石原さんの動きやら考え方は、ずいぶん知っていましたけどね。僕が直接、石原さんに会った記憶はないですね。

満州への左遷

伊藤　そうですか。それでは今度は、昭和十九年に満州に行かれますよね。

竹本　満州への転勤は、僕が左翼的な、社会主義的な考えを持っているというふうなことで、一部の軍部なんかも、だんだんに警戒を始めたと思うんだね。それから、出版課長で右翼をだいぶやっつけましたからね。そういう意味で、「転任させろ」という動きが軍部のなかにあったと思うんです。初めは軍部は、割に良かったわけですね。だけど、だんだん本心が出てくるにつれて、僕は軍部に対して批判を持っていたから、そういう意味で替えたほうがいいと。たとえば出版の企業整理なんかも、「あれは左翼の考え方だ」というようなことを言って、軍部は僕の考えに反対しましたからね。

伊藤　軍部のなかで、竹本さんに対して悪い感じを持っていた人というのは、誰ですか。

竹本　特に、悪いというのは……。具体的な名前は、ちょっといまは覚えてませんがね。というのは、軍部は初めは、僕らと全く同じ具合に、極端に言えば社会主義的なものを持っていた。それが後に、彼らが右に行ったわけだ。いわゆる悪い軍部のほうへ行ったわけだ。そういう連中が、今度は僕らを仇のように思ったわけだ。だから、たとえば、初めは関東軍の革新派というのは、僕らと同志だった。ところが、そういう意味で、僕は少し左だということで睨まれて、満州へ出されると。まあ、放り出されたわけだ。その時に、最初の頃は関東軍のなかも、我々と同じ考えだった。今日の言葉で言えば、左翼的だった。それが、関東軍のなかも、引っ繰り返ったわけだ。それに対して、我々は批判したんですよ。

　たとえば、牧大佐というのがおった。あれは、永山忠則の盟友だ。それで、こういうことがある。ちょっと名前は忘れたけど、関東軍参謀長で、さっき言ったようなインテリ。初めは一〇〇パーセント近く、考え方が僕らと同じだった。それが、だんだん変わったわけだ。それで、僕が転任して満州へ行くという頃には、もう関東軍の参謀部のなかにも、ほとんどいいのはいなかった。それで、名前は忘れたけど、確か牧大佐ではなかったかと思うが、永山氏と懇意で、日本に帰って来て、我々と会おうということになって、帝国ホテルで会った。その時に、ちょうど沖縄での戦いが問題になった。それで僕は、「沖縄は必ず負ける」と言った。

　以前申し上げたけれども、僕は初めから「日本は負ける」と言ってるんだ。その理由は、日米間の戦力比は一六〇分の一だと。そこで、その時に、僕がその大佐を相手に、「関東軍は沖縄でどうするつもりだ」と言って、えらく攻撃したんだ。僕の意見は、「沖縄は絶対負け

る」と。「いままで負けたのと同じように、当然また負ける」と言ったら、その大佐が怒って、僕を「逮捕する」と言うんだ。それで、永山代議士が止めて、逮捕はしなかったけどね。そういうふうに、軍部のなかでも、初めは僕に近いのがおったけれども、最後は僕を「逮捕する」と言うんだ。「絶対負ける」と言ったからね。

なお、昭和六十年七月十日および平成六年十一月十九日の聞き取りで竹本氏は、満州赴任当時、関東軍参謀長をしていた池田純久とは企画院調査官時代から親しかったため、赴任後、時々遊びに行っており、また両者は日本が戦争に負けるだろうという点で、昭和二十年の初め頃には意見が一致していたと語っている。

なお、池田は、昭和十二年十月に企画院調査官、十四年八月歩兵第四十五連隊長。竹本氏の満州赴任当時は、関東軍参謀副長（十七年七月～）。その後二十年七月に内閣綜合計画局長官（秦郁彦編『日本陸海軍総合事典』東京大学出版会、一九九一年、一四頁）。

伊藤　その牧達夫さんとは、非常に良かったんでしょう。

竹本　最初は良かった。しかし、最後の頃は、果たして彼が我々と同じような考えだったかどうだか、ちょっと自信がないですね。だけど、永山代議士も、初めは牧大佐には非常に心酔しとった。僕も、この牧さんには、比較的好意を持っていましたがね。

伊藤　軍務局の内政班長をやってたんですね。だから、軍部のなかの新体制の中心なんですよね。

竹本　中心でしょうね。この人は割にいい人だった。

伊藤　結局、満州には追い出されたということですか。

竹本　いや、追い出されたんじゃない、飛び出たんだ（笑）。というのは、僕は初めから満州で暮らすとか何とかという意思は全然ない。それから、僕の病気みたいなものですが、憂国病だと。国を憂うと。満州に行く時、要するに僕は軍部が追い出したというふうに、初めから思ってるんですよ。だから僕は、満州に行った時には、軍部には非常に反感を持ってましたから、軍部の身代わりである甘粕のところには挨拶に行かなかった。ところが、満州では甘粕は皇帝以上なんだ。だから、満州国の役人なんていうのは、土下座でしょ。僕はそれに反感を持って、「よし、俺はどうせ辞めるつもりだから、怒るなら怒っても結構だ」ということで、挨拶に行かなかったの。それで、甘粕はだいぶ怒ったらしいけどね。新聞に書かれたことがある。日本で、出版課長として右翼のグループや何かと大喧嘩をやった竹本が満州に来て、しかも弘報處で、甘粕にも挨拶もせんというので、大喧嘩になるんじゃないかと言って、新聞に書かれたことがある。それぐらいに、睨まれた。

ところが、そういうことで、初めはものすごく悪かったけど、何が原因だか覚えていませんが、終わりは仲良くなった。甘粕というのは、非常に軍人のいいところを持っている。非常に几帳面な男ですよ。国を憂うという考えが、やっぱりあった。何かの機会に、僕の憂国病と甘粕の憂国病が合ったんだね。それで、僕が日本に帰る時に、甘粕の代理がちゃんと駅まで見送りに来た。その前に、甘粕が僕のために送別会をやってくれた、満州で。そして、その時か、その後か忘れましたが、彼は、僕が内地に帰って終戦内閣をつくるという希望を持ってることを知っていた。だから、「その時に金がいるだろう、持って行きなさい」と言って、金一封を出した。それが、家内も知らないんだが、とにかく五十万円だったか、五百万円だったか、分からない。相当、大勝負が出来るだけの金ですよ。それを持って行けと。僕は、「い

まもらっても、私は、いまから日本へ帰って、何が出来るか分からん。だから、目安がついたら連絡しますから、その時応援してください」と言って断った。その時の金額が、いまだに分からんのだ。ちょっと、記憶がね。

伊藤　貨幣価値が変わりましたからね。五万円かもしれないしね。

哲子夫人　五十万円なんてことはないですよ。あの頃は、五百円ぐらいの給料の時だからね。

竹本　とにかく日本へ帰る時に、一仕事出来る金だからね。いまで言えば五百万か五千万ぐらいか……。その時、いくらだったか、ちょっと分からんです。

伊藤　質問の十番ですが、お仕事は？

第三回質問要項の第十番。――昭和十九年の満州国への転勤は、どのような事情からだったのでしょうか。満州国で「弘報・宣伝」の仕事をなさったとのことですが、正式にはどういう職で、具体的にどのような仕事をされたのでしょうか。また、上司に親しい方がおられたのでしょうか。武部六蔵総務長官、古海忠之次長とのご関係は？　あるいは、軍人などで親しく交わられた方々はどなたでしょうか。甘粕さんについては、前回お話がありましたが……。

竹本　公の仕事は、武藤というのが日本に帰って、僕が武藤君の代わりに行ったんですから、弘報處の参事官というか、處長代理みたいな形だった。要するに、出版・新聞（の監督）で行ったわけだ。

武藤富男、当時情報局部長（「わが青春」八、昭和五十九年三月三日付『静岡新聞』）。なお、武藤氏は昭和十四年三月～十八年五月まで満州国の総務庁弘報處長、昭和十八年五月～十九年十一月まで情報局第一部長。なお、総務庁弘報處における武藤氏の後任は、市川敏（十八年五月～二十年二月）、島﨑庸一（二十年二月～同年五月）、古海忠之（二十年五月～、総務庁企画局長と兼任）（秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、一九八一年、四〇四～五頁、および秦郁彦『日本官僚制総合事典　一八六八～二〇〇〇』二八頁）。平成六年十一月十九日の聞き取りによると、竹本氏の正式な肩書きは、総務庁参事官。

伊藤　日本にいる時と同じようなことをやったわけですか。

竹本　仕事はね。それは、そうですよ。雑誌の監督とかね。それから映画の監督もやってた。要するに、日本で言うと、情報局の満州出張所だな。だから、新聞・雑誌・映画、そんなことでしたね。だけど、それも役人としてはやるけども、僕は心は日本にあって、いつ終戦内閣をつくるかということばかりを考えていた。

伊藤　この、武部（六蔵）さんと古海（忠之）さんが、長官と総務庁次長ですね。

竹本　古海は、よく知ってる。古海は次長ですからね。次長だから、いちばん接触が多い。古海さんは出版の関係もあったけれども、役人の関係で、最後は僕が改革派だということを非常によく知っていた。それで、彼が満州国から東京に出張して、いろいろ動いて、帰って来た時に、僕に真っ先に報告した。「竹本君、日本の内地は大変だ。革新派なんていうのは、問題にならん」ということを言うて……。古海さんという人は、だから、僕が改革派だということはよく知っていました。それで、彼はいいところがあるんだ。僕が辞めてから……。僕は行った時から「辞める」って言うんだからね。その時に古海さんが、「裸になったんじゃ、困るだろう」と思ったんでしょう、僕が辞めるという辞表を出したのに、辞めさせないで、東京勤務と。満州国の東京出張所があって、そこの勤務にして、そこの嘱託にして給料をくれ

たんじゃないですかね。そういうことは、みんな古海がやってくれた。

伊藤　武部さんのほうは、どうですか。

竹本　武部というのは、内務省の役人だった。その程度の役人で、別にそういう思想とか政治工作とかの出来る人じゃなかったでしょうね。

古海は、星野直樹と仲が良かったからね。いろいろ政治家的な動きをしとった。内地に帰る時でも、僕にいろいろ相談したり、聞いたことがあったです。帰って来てから報告する時も、「竹本君、内地は手も足も出ない」と言ったことがある。

伊藤　甘粕さん以外の軍人は、もう全然だめですか。

竹本　満州から帰ってでしょ？

伊藤　満州で……。

竹本　満州では、上官は何と言ったかな……。陸軍の中将で、あの人は革新系に少し関係があった。その関係で、僕は知っとった。知っとったけど、そう深い日常的な関係ではなかったと思う。要するに、満州は、初めは国内改革派が中心だった。それがみんな、だんだん……。僕が行った頃には、カスが残ってるだけだ。だから、そう親しくしていたというのは……。いま言った、僕を捕まえると言っていた大佐なんかが、おったんだから。

前の注を参照。池田純久氏との交遊はあった。

帰国、終戦内閣構想

伊藤　ここですが……。

第三回質問要項の第十四番か？　――一年余りで辞職して帰国された背景は、どういうことでしょうか。日本の当時の戦況については、かなり深くご存知だったのでしょうか。どういうルートの情報がおありだったのでしょうか。

竹本　僕はとにかく、さっきも申し上げたように　初めから「一六〇分の一」ですからね。だから、それに共鳴する人は、案外おりましたね。たとえば、全然知らない日本の右翼というか、宮中みたいなところにもね。細かくと言うと、ちょっと分からんけど、天皇の側近にも「負ける」という意見はあったでしょう。

（休　憩）

竹本　村田五郎って、ご存知ですか。

伊藤　会ったことあります。

竹本　あの人も、最後の頃は「日本は負ける」と思ってましたね。

伊藤　村田五郎さんは、僕はこうやってインタビューしたんです。

竹本　あの人は、平沼派かな。

伊藤　そう、平沼系です。

竹本　ああいうものは、戦争反対派なんです。そういう意味での終戦派だった。それで、負けるという意味において、僕とも意見が合っていた。

哲子夫人　情報局の頃なんか、「マル秘」っていう書類を持って帰って、「戦争に負けるのは決まってる。日本が飛行機を百機つくるところを、アメリカは一日千機つくるんだから、負けるに決まってる」って言って……。よくあんな平気な顔をしてられる、あんなことを言ってられると思ったけど。無責任ですよねえ（笑）。

竹本　敗戦論としては、僕なんかはいちばん情報を持ってたほうです

よね。

伊藤　次は、十五番です。

第三回質問要項の第十五番。――昭和二十年二月に帰国され、満州国大使館参与として、国内状況を古海忠之総務庁次長に秘密電報で伝えていたとのことですが、どういうところから情報を取っておられたのですか。かつての同志、例えば毛里さんらとも連絡を取っておられたのでしょうか。また、空襲でお宅を失われるということはございましたか。

竹本　毛里君とは、役所の段階では懇意だったけれども、終戦後はあまり関係がなかった。

伊藤　終戦後じゃなくて、満州国大使館の参与になるでしょう。

竹本　古海さんは、僕は終戦後も親しかったですからね。僕が帰っている時に満州国大使館の嘱託にしたのは、古海さん。それは、縁を切らんでくれと、連絡を取ってくれということで、やったわけです。しかし、その時に僕が敗戦論だということは、とっくの昔によく知っていました。

伊藤　古海さんに、どういうふうにして連絡したんですか。

竹本　しょっちゅう連絡を取ったわけじゃないですね。だけど、たとえば彼が日本に出張した場合に、赤坂のホテルに泊まっていた時に話をしたとか、そういうことじゃないんですかね。

伊藤　でも、先生は前に回想を書いた時に、「古海さんには、しょっちゅう暗号電報で連絡した」と書いていますよ。

「満州を引き揚げる時の古海次長との約束で、私は満州国政府に私の敗戦必至論と、宮中、府中のその方向への動きを秘密電報でしきりに打った」（「わが青春」一〇、昭和五十九年三月十日付『静岡新聞』）。

竹本　電報は、秘密電報に言付けたことはあったと思いますけど、僕が独自に書いて打って、ということはあまりなかったと思うんですね。ただ、敗戦論を月に一回か二回、電報で言ってやったことがあります。

伊藤　それはやっぱり、満州国大使館を使ってですか。

竹本　ええ、大使館の秘密電報。だから、大使館の嘱託になったのは、半分は役に立ったんです。役所を使えるから。電報も、みな使える。

伊藤　いま、村田さんの名前が出ましたが、他にどんな人から情報を取りました。

竹本　一つは、宮内庁にしょっちゅう出入りしておる、情報局の嘱託がおったです。あれは、何て言ったかな。宮内大臣と懇意だったんだ。情報局嘱託だったですよ。それが僕と非常に懇意で、それでまた僕の情報を聞くのが彼の商売だったから、僕の情報を向こうの大臣のところに持って行ったり、いろいろしてたんですね。……渡辺だ。これが、時の宮内大臣とか、それから星野（直樹）さんとも、たぶん良かったと思う。何か、そういう政権の中心のところへ、嘱託でしょっちゅう出入りしてた。それが僕と同じ意見なものだから、喜んで聞いては持って帰って、報告した。渡辺君と言いました。だから僕は、宮中のことなんかは、その渡辺君を通じてよく知っていた。

伊藤　渡辺何と言うんですか。

竹本　渡辺良夫。非常に優秀な情報屋ですよ。右翼の、松平もそうだったかな。ああいうところを、とてもよく知っとった。だから、僕も非常に助かった。

伊藤　その渡辺良夫という人は、その後どうなりました。

竹本　さあ、どうだか……。

伊藤　その後は会ったことはありませんか。

竹本　ない。

伊藤　他の、軍部や何かの情報源はどうですか。

竹本　私らの情報は、八割は僕の意見です。僕の意見に従って、それをバック（アップ）するような情報が入ってくるということですね。結局僕は、右翼のやつの情報を聞いて、右翼を知っているというようなことではなかったですね。僕の意見のほうが、先ですよ。だから、それを、「そう言えば、こうだ」とか、「宮内大臣も、こう言った」とか、向こうがやってくれた。僕が自分のイデオロギーというか、立場で判断をしていた。私は、だから情報というのは、あっちゃこっちゃ聞くものじゃなくて、自分の立場、その意見に従って入ってくるものじゃないかと思いますよ。

伊藤　それは分かりますけど、入ってこなきゃ、どうしようもないですよね。

竹本　あとは、だから、いまの渡辺君なんかは、僕の意見を聞いて、「そう言えば、宮内大臣はこう言った」とか何とか、よく言ってましたがね。新聞記者なんかは、情報はいくらもないからね。村田五郎は、割に右翼の情報は持ってた。僕は村田さんとは個人的に懇意だったから、雑談をして、いろいろ情報を聞いたことがあったかもしれませんがね。

「開戦前後に内閣の中枢にいられた山崎達之輔（農相その他）、鈴木貞一（企画院総裁）の両先生から大変親しく御指導をいただいていたことも、内外情勢の判断に大変役立った」（「わが青春」一〇、昭和五十九年三月十日付『静岡新聞』）。同様の記事が『私のなかの昭和史』四四頁にもある。

伊藤　村田さんから話を聞きましたが、「村田機関」というか、情報を集めるシステムを、あの人はつくっていたんですよ。

竹本　それは、つくっておったでしょう。要するに、あの人は内務次官[マ]だからね。内務省だから、警察を使って……。しかし、そう言っちゃ悪いけど、情報屋というのは自分の頭がなくてでしょう。ただ、情報を次々に聞いて回るという情報屋が普通ですね。僕は自分の頭が九割あって、それを裏付ける意味で情報を聞くという程度で、結構、間に合ったと思うんですね。

伊藤　とにかく、早く終戦にしろという意見ですか。

竹本　そうそう。僕が満州を引き揚げたのは、それです。早く国へ帰って、終戦内閣をつくるというのが目的で帰ったんだから。

（昭和二十年）「二月十三日に下関に着いて、二十日に東京に帰って来て、それから四月、五月頃までに原稿（終戦内閣措置要綱みたいなもの）をまとめ」た（『私のなかの昭和史』四四頁）。

伊藤　その時に、誰を考えていたんですか。

竹本　終戦内閣とは思ったけれども、特に誰を担ぐというのは……。村田五郎は考えておったね、そういうのを。だけど私は、はっきりこういう内閣をつくろうと、具体的人物を描いていたかどうか、ちょっと、いまはっきりしませんね。

伊藤　だけど、誰かを考えないと、出来ないでしょう。

竹本　それは、そうだけどね。

伊藤　竹本内閣じゃないでしょうから（笑）。

竹本　石渡（荘太郎）というのがおったね。あの人を、ある程度使おうと思ったことはありますけどね。だけど、あれは大蔵省だからね。甘粕さんと、さっきの金の問題で話した時も、誰を中心にやるかという話は出たと思うんですね。近衛……。

平成六年十一月十九日の聞き取りでは、「当時、期待をかけていた人物は」との質問に対し、竹本氏は「そのときはね、やっぱり近衛かな」「村田五

郎は近衛内閣の内務大臣だとの説ですがね、説があった。それで、この辺で、要するに立派な終戦内閣を作ろうというようなことだったです。近衛さんは昭和研究会の関係もあってね。いろいろとあの当時関係深かったですよ」と答えている。

伊藤　岩田宙造という人は、知っていますか。

竹本　ええ、弁護士。直接は、あまり知りません。近衛を、もういっぺん使おうということだったかな。

伊藤　そうかもしれませんね。

竹本　翼賛会をだめにしてね。だけど、その後……。

伊藤　近衛さんの娘婿の細川護貞さんには、アプローチしましたか。

竹本　よく知ってる。

哲子夫人　家にも見えたからね。

伊藤　それは、いつの話ですか。

哲子夫人　企画院の頃。

竹本　細川君は、ある意味では、その辺の情報をよく持って来ましたね。あれは企画院で、僕と懇意なんだ。

伊藤　企画院で懇意なんですか？

哲子夫人　細川さんと、それから、南部（利英）伯爵やら、一緒だったわね。

竹本　細川君は、ある程度志を持っていたし、それからコネも持っていましたけどね。私とは、割に意気投合して会ってましたね。あれも、終戦内閣の問題でね。

『細川日記』には、竹本氏の名前は出てこない。

伊藤　あれは、近衛を担いでいるわけですからね。それから、後で高松宮……。

竹本　私は、高松宮云々については関係なかった。ただ、近衛との関係では、細川君といろいろ話をしたり、相談をしたことはたくさんありますね。だけど、ちょっと……。終戦の時に、宮中の閣議をどう持っていくかというような問題で考えたことがありましたけど、ちょっと、いま、もう少し待ってください。

伊藤　思い出したら話してください。戦争が終わったら、どうなると思っておられましたですか。

哲子夫人　捕まると思っていたじゃない？　満州国のお友達、みんな捕まったでしょ。竹本は、（昭和二十年）二月に帰ったもんだから……。

黒沢　残った人達は、みんな捕まったからね。

伊藤　早く戦争が終わればいいですけど、戦争が終わったら、日本はどうなるというふうに考えておられたのかなと思ったんです。

哲子夫人　満州でも、「（日本は）降伏する」って言うから、私がよく「そうしたら、どうなるんだ」って聞くと、「別に関係ない、また同じようにやるんだ」って言っていましたよ。

竹本　二十年になってというか、満州から帰って、終戦内閣をつくろうという夢を持っていたわけですけど、その夢は……やっぱり村田五郎の関係がいちばん強かったですかね。村田さんと僕とは、いまの社会主義の問題とは違うんだ。だけど、敗戦ということについては、一致してましたけどね。

伊藤　面白いですね。

竹本　迫水なんかを、ある程度使おうと思ったことがあったけど……。終戦内閣は、鈴木貫太郎か。ちょっと、そこは整理しなきゃいかん。松宮……。

敗戦、そして「科学と政治の会」

伊藤　だんだんと、思い出してください。それで、実際に戦争に負けた八月十五日は、どこで迎えられましたか。

第三回質問要項の第十六番。――敗戦をどこで、どのように受け取られたのでしょうか。そして、敗戦後の日本再建について（後欠）。

竹本　東京におりました。

哲子夫人　鎌倉。

竹本　鎌倉だったか。

哲子夫人　満州に行ったでしょう。だから、家に留守番を入れちゃったわけですよ。それで、本当は私は行かないで、（内地に）いるつもりだったんだけど、「不自由なものだから来い」っていうわけです。それで、家に留守番が入って、その人達が住んでいたから、疎開の意味もあって、私の母やら弟が鎌倉にいたので、それで鎌倉に半年ぐらい……。そこにいる時に終戦になって……。

伊藤　終戦になった時の感じは、どうだったですか。良かったと思われましたですか。

竹本　特に、良かったとは思わなかったですがね。というのは、宮城の前に行って、みんなが泣いたでしょ。あれに、僕も行ったですからね。だから、負けて良かったとは思わなかったと思いますがね。しかし、負けるということは、前から思っていましたからね。

伊藤　複雑な感じですね。戦争が終わって、さてどうなるだろうというふうにお考えになりました？

竹本　それは、国がめちゃくちゃになるという意味ですか。いや、僕は、そういう心配はしなかった。まず、あとの体制は我々がつくるというような、漠然とした自信を持ってましたから、そういう悲観的な心配はしない。

伊藤　じゃあ、日本再建という感じですか。

竹本　「待ってました」という感じではなかったけどね。

伊藤　もちろん、そうでしょうけれども、いよいよ、これは日本を再建しなければならないと。

竹本　再建しなければならないし、片山内閣が出来たらと。そういうことを考えましたけどね。その前は、終戦のショックで……。ちょっと、そこははっきりしませんね。負けて良かったとは、特に思わなかったという以外に、記憶がない。

昭和六十年七月十日の聞き取りでは、八月九日には「戦争をやめる」という情報を得て、鎌倉で資料を全部焼いてしまったと。「あの時はとっつかまってぶち殺される位に思っていたですね。僕は直ぐ家内の郷里の宮崎に帰っちゃったですからね」と語っている。

黒沢　その時は、役人の身分はないんですか。

伊藤　敗戦後、松前（重義）さんの関係で、逓信院の嘱託になると。満州国がなくなっちゃいますからね。いままでの話では、松前さんの話は全然出てきませんでしたね。

竹本　松前さんは、翼賛会で一緒だったもんですからね。一緒に新党をつくろうというような考え方でしょうね。

伊藤　戦後ですか。

竹本　ええ。

哲子夫人　「科学と政治の会」をつくってね。

伊藤　あれは、戦後ですか。

竹本　あれは、漠然とした新党でね。宮部（一郎）さん、松前重義、堀木鎌三、鍋山（貞親）、そんな連中が集まって、「科学と政治の会」を……。僕が言い出したんですけどね。僕が、中心でつくったんです。これは、一つの新党のバックボーンになれるというのをつくったんですね。堀木鎌三が、いちばん力になって。

哲子夫人　八木（秀次）さんも入っていたでしょう。

伊藤　八木アンテナ……。

竹本　八木さんが、いちばん上（会長）だ。

伊藤　高いからね（笑）。嘱託として、何か具体的に仕事をしたんですか。

竹本　逓信院では松前さんが総裁で、あれは給料をもらったかなあ。

伊藤　もらっていますよ、それは（笑）。

竹本　とにかく、メンバーはいいですよ。八木さんを大将にして、堀木鎌三が事務局長みたいなもんで、実際は僕で……。そして、いまの千葉三郎もおったね。それから、鍋山もね。宮部一郎も入っとったと思うんだけど。そういうのを集めて、とにかくいつでも新党が出来るように、膳立てをしとった。

伊藤　資金は、どうしたんですか。

竹本　資金は大して要らないよ。

伊藤　要るでしょう。だって、場所も必要だしね。

竹本　場所は、飯田橋の……出版会があったね。講談社の近くにね。駅の近くに、事務所がある大きなビルがある。あのビルの親方が、僕が出版課長だった関係もあって、そこの出版の関係から懇意だった。それで、事務所と食事はそこで賄った。

平成六年十一月十九日の聞き取りにおいて、竹本氏は、「科学と政治の会」について、「『家の光』福岡の会館がありますね。僕は三宅君が懇意だったものだから、あすこで月に一ぺん忍びの会をやったわけです。それはそういう情勢であの情勢ですからね、われわれは追放でどこへ行ってもいけないというわけでしょう。それが夕飯会みたいなものをやっていましてね、そこでいろいろ会合をやって、そのときの関係ですかね」と、また「『家の光』がスポンサー」と語っている。「家の光」との関係の由来については、この時は、出版課長時代の用紙配給だけを挙げていたが、昭和六十年七月十日の聞き取りでは、より一層踏み込んで、次のように語っていた。

「千石さんの『家の光』なんていうのをあれほど大きくしたのは僕ですよ。千石興太郎さんが農林省の役人が全部『家の光』を□□□って自分たちのおばすて山にしようという陰謀を組んだ訳です。困った事がある。僕は情報局出版課長の時にどういう関係か相談があった。僕は農林省をあなた喧嘩して負けないだけの腹があれば僕応援しますよといったんだ。途中でへこたれると困ると。断じてやるというから、よろしいと、それは簡単だ、農村関係という事から言えば農林省が主務官庁だ、出版といえば僕が主務官庁だ、だから早く認めた方が勝ちだ、貴方早く□□□□してくれ。それで『家の光』を社団法人かなにかの届け出して認可したんだ。それで農林省どうにもならないんだ。だから僕は『家の光』の恩人ですよ」。家の光協会が、昭和十九年、産業組合中央会から独立する際の話であろう。千石興太郎は、昭和十四年から産業組合中央会会頭。竹本とは有馬頼寧氏などがやっていた産青聯などの関係で親しくなったらしい。また、会のメンバーの宮部一郎は、昭和二十二年から四十八年まで、家の光協会の会長を務めた。

伊藤　へえー。

竹本　だから、堀木さんやなんかは、お客さんで来ていただけ。大して金は要らなかったと思いますよ。

伊藤　松前さんとは、前からそんなに親しかったんですか。

竹本　松前さんは、翼賛会からだよ。翼賛会の時に、彼は総務部長だ。そして、僕は制度部というところでね。制度部と言うけれども、実際は有馬さんと、いちばん大きな問題ね。その有馬さんに、どういう関係かな、事務総長と僕と松前さんとの関係は、いろいろ深くなったですね。そういう関係で、親しかったから。

伊藤　さっきから話が出てこないから変だなと思ったんだけど、松前さんは、有馬さんの側近ですよね。

竹本　そうそう。要するに、有馬総裁で、松前さんが事務総長ですよ。

伊藤　実際は？

竹本　そして、その関係で……。松前さんとは、親しかったから。あそこで親しかったのか、あそこで一緒だったから親しくなったのか、ちょっといま覚えていませんがね。とにかく松前さんは科学者で、政治的センスは、僕のほうがよっぽど素早い。だから、僕らの言うことを全部聞いた。ちょっと元に返るけれども、翼賛会はとにかく、初めは日本革新の新党をつくるというようなつもりだった。だから、政党なんですよ。新党なの。それをいつの間にか右翼のほうが、何か変な団体に、骨抜きにしたわけね。その骨抜きにする時のいちばん矢面に立ったのが、翼賛会。その翼賛会の骨抜き案の時に、我々が翼賛会に立てこもって籠城したことがある。その籠城が……。

伊藤　東京会館でしょう。

竹本　あれを主張したのは、僕なんだ。僕と、農林次官をした石坂……何とかって言ったな。

伊藤　石黒さん？

竹本　石黒ではなくて、農林次官をした男。松前さんも、最後は翼賛会をどうするかというような問題には、ほとんど僕の意見を聞いていましたね。結局、有馬さんが表に立っておって、事務局長は松前さんで、参謀が僕ということだった。それで、僕の意見はだいたい通ったですよ。だけど最後は、僕は討ち死にをしようという意見で……。翼賛会をね。

石坂弘。石坂は大正十三年に文官高等試験合格、同十四年に東大法学部卒業後は朝日新聞社社会部記者を経て、昭和二年に農林省農務局に嘱託として入る。満州国実業部理事官等を務めたあと、翼賛会総務部副部長。本省で総務局長（昭和二十年三月～六月）を務めたのを最後に、同年十一月退官。戦後は肥料配給公団副総裁、森林開発公団理事長、日本中央競馬会理事長等を歴任するが、農林次官を務めたことはない（秦郁彦『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、一九八一年、五一九頁。および人事興信所『第廿三版　人事興信録』上、一九四頁）。

伊藤　結局、翼賛会は最後は、平沼内務大臣にやられちゃうわけですよね。

竹本　そうそう。

伊藤　その平沼さんと仲が良かったのが、村田五郎ですからね。その村田五郎と、今度は終戦の時には仲間になるという（笑）、そういう関係でしょう。

竹本　村田五郎という人は、ある意味では人物が大きいんだ。

伊藤　確かに、そう思いますよ。

竹本　あれは、僕をとても気に入っとって、彼の自宅にも何度も行っ

たことがある。僕らの意見も、ずいぶん聞きましたよ。だけどあれは、だいたい右翼だ。

伊藤　村田さんの家というのは、世田谷のほうにあるでしょう。大きな家で……。

竹本　そうそう。あそこへ何度も行ったよ、僕は。あの人は、思想は僕とは、だいぶ違うんだ。だけど、「現状反対」ということについては、一致しとった。そして、しかも、あれは僕の上司だ。個人的には非常に良かった。ただ、僕が満州に行ったのも、半分は村田五郎が僕のことを考えて、推薦したんじゃないかと思いますよ。

伊藤　それは、あり得ることですよ。

竹本　あれは、人物がちょっと大きかった。

伊藤　いまの「科学と政治の会」は、かなり続いたんですか。

竹本　松前さんが科学で、僕が政治というだけで、そういう名前をつけて、毎月会合をやっていただけ。特に外に向かっては、あまり動いたことはなかったですね。

伊藤　その会と社会党との関係は、どうですか。

竹本　この会は社会党とは……。宮部さんがメンバーに入っとった。それから、鍋山も入っていたね。彼らも、入ったというだけで、特にどうということはなかったと思いますね。

伊藤　先生は、社会党との関係は持たなかったんですか。

竹本　いや、僕が十五年の翼賛会をつくった時には、特に社会党とは関係なかったと思います。

伊藤　いやいや、戦後……。

竹本　戦後は、いまの片山内閣をつくった時……。

伊藤　その前は？

竹本　僕は、役人もしましたからね。

伊藤　それは分かりますけど、そうじゃなくて戦後、日本社会党が出発した時に、参加しましたか。

竹本　関係なかったと思いますね。個人的に、三輪寿壮とか何とかは関係がありましたけどね。役人は、関係ないから役人だったわけでね。だから、関係なかったと思いますね。

伊藤　三輪さんは、岸（信介）さんの弁護人を確かやっていたと思いますね。

竹本　あの二人は良かった。非常に良かった。岸さんという人は、佐藤栄作と違って、人物が大きいんだ。だから、あの人は平気で右でも左でも包容する人ですよ。だから岸さんは、僕なんかだって、個人的にはいちばん親しいですよ。

哲子夫人　「竹本さんは僕の乾分だ」って言ったって、安倍（基雄）さんが書いてる。ありがたくないよね。

安倍基雄『ある政治家の独白』プレジデント社、一九九九年、二五七頁。同氏は鈴木貫太郎内閣の内務大臣を務めた安倍源基の子で、大蔵官僚を経て、昭和五十八年第三十七回総選挙に竹本氏の後継として静岡三区から出馬、当選を果たした。もともと自民党公認を取った上で、山口県から出馬することを目指していたが、公認争いに敗れたあとの活動中に知遇を得た民社党春日一幸氏から、竹本氏の後継者となるよう誘われた。これを後援会長を依頼していた岸氏に相談したところ、岸氏が「竹本君は山口県の出身でわしの乾分のようなものだ。わしは初代自民党幹事長として自民党の産みの親のようなものだが、現在の自民党に決して満足していない。日本も米国や英国のように政権交代のできる二大政党に向かわねばならない。君のような有為な官僚出身者が民社党に行くことは大賛成だ」と答えたと

いう。

黒沢　それはありがたくないね。

伊藤　顧問ぐらいにしてくれればいいのにね（笑）。

竹本　岸さんは、僕の言うことは何でも聞いてくれた。勘のいい人でね。僕と気が合った。

伊藤　「わかもと」の話まで伺いますか。

竹本　経済研究所は、ただ僕を引っ張るために、やったらいいだろうというぐらいのことで、僕はやる意思もなければ、会社もそれをやってもらおうという、特に意見もなかったと思いますね。ただ、利用価値だけの問題。

伊藤　ただ名前だけ？

竹本　実際はだから、何もしなかったと思いますね。ただ僕は、村田五郎という人がだいぶ線が太い人だから、あそこへ、そういう研究所でもつくったらどうかということで、言ったり考えたりしたことがあったと思います。

伊藤　「わかもと」が長尾欽彌でしょ。長尾欽彌とはお会いになりましたか。

竹本　僕は何度も会ったけどね。あの人は、要するに金儲けだけだ。事業さえやればいい。だから、ちょっと自己宣伝になって悪いけれども、僕の行く前は、労働組合を持て余してたんだ。僕は完全に握ったんです。極端に言えば、僕を「使える男だ」と思ったんでしょうね。だから僕の言うことは、よく聞きましたよ。それから、役所に顔もつながるしね。非常に便利な男だという評価だったと思いますね。だから、僕の言うことは何でも聞いた。

伊藤　「わかもと」の話は、またこの次に伺いましょう。

竹本　そんな話は大してないですけどね。要するに、「わかもと」なんていうのは、これは日本の経営の問題ですけど、労働組合を敵視してるわけだ。僕は、労働組合は使わなきゃいけないと。役に立つという意見だった。だから、僕はいちばん初めに行った時は、工場長、それから労働組合ということですからね。それで、組合の連中とも話をして、僕の考えをいろいろ言って、何を話したか覚えてませんが、結果的には馬鹿に話が合って、組合の連中も喜んだと思うんですよ。それで、いままでごちゃごちゃになっておったやつが、僕が行ってからピタッとなくなって、僕の言う通りに動いたですよ。だから、社長の長尾欽彌さんも、僕のことを便利な人が来たと思ったでしょう。その程度だと思うんですよ。

伊藤　村田さんは、どうして「わかもと」と関係があるんですか。

竹本　村田五郎が僕を推薦したんですよ。姻戚関係だからね。

伊藤　あっ、姻戚関係ですか。

哲子夫人　田中光顕が、何かだったわね。

伊藤　田中光顕の娘と村田さんが結婚したんですよ。

哲子夫人　それと、「わかもと」の社長の奥さんか何かが親類なのね。

伊藤　そういう関係か……。それで、近衛さんも長尾さんと関係があってね。

竹本　近衛は、大した関係はなかったと思いますね。

伊藤　いえいえ、あるんですよ。村田さんが、しょっちゅう近衛さんを連れてね。近衛さんは二号さんを連れて……。

哲子夫人　田中光顕の本妻の子じゃなくて……。

伊藤　いや、田中光顕さんはたくさん子供がいて、全部母親が違うんですよ（笑）。それで、いちばん晩年の娘さん……。だって、田中光

顕が八十何歳、九十何歳で、娘さんがまだ結婚適齢期で……。それで、村田さんが、娘さんと結婚したんですよ。

哲子夫人　それで親類なんだ、「わかもと」とね。

伊藤　今日は、ここまでにしましょう。どうもありがとうございました。

〈以上〉

竹本孫一
オーラルヒストリー

第4回

[2000年9月12日14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

季武嘉也(創価大学教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

片山内閣の誕生——総理大臣秘書官

伊藤　その本（『現代史資料』四四）と、もう一冊の奥村さんの名前の本（『日本政治の革新』）をご覧になって、何か思い出されたことはありますか。

竹本　いや、特に何もないですがね。要するに、これは僕が書いたんだけど……。僕の書いたやつを取っただけですからね。

伊藤　だから、先生がお書きになったんでしょう？

竹本　序文以外、僕が全部書いた。

伊藤　「新政治体制……」のほうは、どうですか。何か思い出されました？

竹本　「新政治体制確立要綱」は、僕が書いたことを覚えてますよ。

伊藤　覚えてらっしゃいます？　もうちょっと、後だと思いますけど。

竹本　これは僕が書いた。

伊藤　先に行きますけど、二番目のところを、ちょっと見てください。第四回質問要項の第二番。——前回の聞き取りの終わりのほうで、大政翼賛会になる前に、有馬、松前両氏と、新党を作らねばと相談したというお話がありました。この時期は、まだ東京会館の時代ではありませんので、どういうところで集まっておられたのでしょうか。

竹本　……どこに集まったかね。

伊藤　荻窪の有馬さんの家には行かれましたか。

竹本　行きましたけど、あれはまだずっと後じゃなかったかな。

伊藤　後ですか。

竹本　あそこは、二回か三回行きましたよ。

伊藤　産業組合中央金庫なんかには、行かれたんですか。

竹本　あそこは、産業組合中央金庫に行かんで、飯田橋に産業組合の本部があったんだ。そこで毎月、会合をやってた。

伊藤　それは、有馬さんを入れてですか。

竹本　有馬さんは……。

伊藤　誰と一緒ですか。

竹本　堀木鎌三なんかも一緒だったね。松前重義やらも……。有馬さんは、あそこには来たことはなかったと思うがね。

伊藤　あと、有馬さんについては、どういうことを思い出されますか。

竹本　でも有馬さんは、割に接触の機会は多かったですね。

哲子夫人　有馬さんのことは、この本（『現代史資料』四四）にたくさん出てます。すごくたくさん出てますね。

伊藤　いま、有馬さんの日記を本にしようと思って、やっているところなんですよ。

哲子夫人　よく書く方だったと見えますね。

竹本　あの人は気軽に出て来たから、何度か出てるでしょう。

伊藤　そうすると、だいたい、有馬さん、それから松前さん、竹本さんという関係なんですか。

竹本　そうね、ただの関係じゃなかったね。

伊藤　もちろん、そうでしょうけど……。

竹本　ただ、僕は有馬さんとも話が合ったし、松前さんとは特別深かったけどね。松前さんは、翼賛会の総務部長ですよ。その時に、僕は制度部長ですよ。役職は別にして、松前さんが何かやろうということ

は、みんな僕が相談したんです。だから、部屋はしょっちゅう行ったり来たりしてた。

伊藤　今度は戦後に行きますが、ちょっと三番を見てください。片山内閣に行きます。

第四回質問要項の第三番。――昭和二十二年六月一日の片山内閣成立と共に、秘書官になられます。総選挙で日本社会党が第一党になったのは四月二十五日、五月九日には社会・自由・民主・国民協同の四党代表者が会談して、四党連立内閣に意見が一致しており、五月十四日に社会党左派の鈴木茂三郎・加藤勘十両氏が外人記者に共産党との絶縁を言明しています。そして、五月十九日には四党の党首が個別に会談して片山哲首班で一致しますが、社会党左派問題で、四党連立が困難になり、五月二十日に吉田内閣が総辞職します。そして翌日、自由党総裁吉田茂が反共、野党の立場を表明します。五月二十二日に国会で片山哲が首相に指名され、やはり連立で工作をしますが、二十三日に三党連立に切り替えて、六月一日に内閣が成立するという経過を辿ります。先生は、どの時期からこの内閣の成立のために働くようになられたのでしょうか。また、以上のような経緯について、どのような役割を果たされたのでしょうか。また、秘書官在任中に先生ご自身は、GHQ関係者とどのような接触がおありだったのでしょうか。

竹本　僕は、片山内閣の生み出したものの、いろいろな事前工作には、ノータッチです。内閣はね。

伊藤　じゃあ、内閣が出来てからですか。

竹本　集まってる連中というのは、政党関係ですから。僕は、その時はまだ政党には関係してなかったから、それには関係ない。それで、僕が関係したのは、いよいよ片山さんが総理になるだろうという見通しがついた時にです。そう言っちゃ悪いけど、片山さんという人はスローモーションだからね。だから、前以てパッと、いろいろとポイントを言っておかんと、ピンと響かないんだ。そういう意味で、僕は事前のいろいろな話はしたけれども、政党関係のいざこざとか連絡には、僕はノータッチ。

それで、いよいよ片山さんが衆議院で総理の指名を受けた時に、家内は覚えてると思うが、奥さんから悲鳴のような電話があった。「いよいよ総理になったから、すぐ来てください」というね。それで僕は、日暮里か何かへすぐ飛んで行って、それからいろいろ話したわけだ。その時に話したことを、ちょっと参考に言いますと……。僕は組閣する前から、社会党に（政権が）来るかもしれんということと、それから社会党が重大なる、一種の歴史的な役割を演じるというチャンスだということを、前以て考えていた。というのは、どうして手に入れたか、ちょっといま覚えてないが、情報を読んで、社会党の内閣になると。それで、マッカーサーとどういう関係になるかということを、僕は自分で勉強しておった。

その結論を言いますと、片山内閣はとにかく出来ると。出来るけれども……。その前を言いますと、占領政策のなかで、アメリカの軍部とそうでないほうと、いろいろ意見が衝突する。そのことなんかも、何で読んだか、ちょっと覚えてないけれども、情報で、僕は全部読んでいた。そういう関係で、片山内閣で、いちばん初めに僕が片山さんに言ったことは、とにかく（マッカーサーに）面会を申し込めと。こっちから申し込んで、それを受けた形だったかそうでなかったか、ちょっと覚えてませんが……。しかし、「申し込みなさい。先手を打たなきゃだめだ」ということは、僕は言った。僕は、すべて先手主義だ。だから片山さんに、「行きなさい」と言って勧めた。それに、あの人

は有名なスローモーションだから、よほど勧めないとだめなんです。それで、「行きなさい」と。その次には、「行ってから、こう言いなさい」ということを言ったんだ。

「わが青春」一二には、アメリカの新聞「星条旗」(Stars and Stripes)や「総司令部が米本国に定例的に報告していた毎月の文書を読み」判断したと書いてある(昭和五十九年三月十七日付『静岡新聞』)。

伊藤　どういうことですか。

竹本　それは、まず第一に、いま言ったように、アメリカの司令部のなかにも二つの流れがあるということ。それで、片山さんに言ったのは……。「片山内閣なんか押し潰せ」という意見だってあるわけですね。だから僕は、その辺はちょっと言葉が悪いけれども、幡随院長兵衛の話をしたんだ。幡随院長兵衛というのは、五尺の鯉だと。切っても裂いてもよろしいと。あなたは、幡随院長兵衛にならなきゃだめだと。いまさら頼んでみたって、向こうの利害で変わることだから、どうにもならんと。哀訴嘆願したってしょうがない。だから、幡随院長兵衛で、「切るなら切る、料理するなら料理する。勝手にしろ」と言って、引っ繰り返れと。そう言ったんだ。ベッドの上で、引っ繰り返れと。ただし、言うことだけは言うて、倒れたらいいと。「私は日本の民主革命を切り拓きたい、やりたい。社会主義はその後で、まず民主革命が日本の緊急の課題だ。そのために、私は出来るだけ全力を尽くしてやりたい。それで良いというなら、大いに協力して応援してもらいたい。自分の信念は、それだ」と言う。民主革命を言った。片山さんという人は、民主主義を説くには、ちょうどぴったりの人なんだ。それが、マッカーサーに当たったんだ。

それで、マッカーサーが、初めはいま言ったように、会ってくれるかどうか分からん。会って、言えるかどうか分からん。断られると思っとったのにも拘わらず、三日目だったか、はっきり覚えてませんが、会って三日目ぐらいに、マッカーサーが声明を出した。それ、ご存知ですか。「アジアにおける三大首相の一人である」ということを言って、激励演説みたいな声明を出した。

それは、片山さんは驚いたが、何より僕が驚いた。会うか会わんかが大問題だという時に、会って、「アジアにおける三大首相の一人である」と言って、応援演説をやった。それで、いちばん驚いたのが吉田茂。それで、吉田茂の秘書が、外務省の福田篤泰と言うんだ。あれは、僕が情報局におる時に、福田篤泰が庶務課長だ。その隣に僕がおって、僕は文書課長だ。僕と福田は、だから肩書は違うけど、非常に仲が良かった。そこで、福田に片山内閣の話もしたし、片山さんが会いに行ったということまで話したと思いますよ。それで驚いたのは、いま言ったように、「アジアにおける三大首相の一人である」と。僕も驚いたが、もっと驚いたのは吉田茂でしょう。吉田茂の福田秘書官も、声明書を出すまで、そんなことは夢にも考えてなかった。要するに、それが当たったわけだね。

前掲「わが青春」一二では「アジアにおける三大クリスチャン首相の一人」と言われたとある。

伊藤　それで、吉田さんは片山内閣をすごく敵視するという感じではないんですね。

竹本　それはない。むしろ、「どうして会ったんだろうか」ということを訊いた。福田が吉田さんの秘書官という関係もあって、「おまえ、調べて来い」と言われて、福田が僕のところに来たんだ。それで、「あれは、俺が言ったんだ」と。だから吉田さんは、社会党はいままで何

のルートもないのに、どうしてマッカーサーに会いに行ったか、どうしてマッカーサーが「支持する」という声明を出したかという点を、誰よりもいちばん心配したというか、不思議に思ったわけだ。それで、福田庶務課長がすぐ呼ばれたんだね。それで、僕のところに飛んで来たわけだ。「それは、俺がやったんだ」というわけだ。

伊藤　じゃあ、「俺がやったんだ」という具体的なルートは、どうしたんですか。

竹本　それは、いま覚えてませんが、法華津君じゃなかったかと思うがね。法華津は、外務省の参事官か何かですよね。それで、僕と仲が良かったんだ。

法華津孝太。竹本氏によると外務省条約局長（「対談　内田健三氏と片山連立政権を語る」『平成日本の志』四八頁）だが、『日本官僚制総合事典』五一六頁によると、昭和二十一年一月～二十三年一月まで調査局長。

伊藤　何で？

竹本　それは、僕が企画院におったからでね。そういう関係で、法華津君も外務省の関係で、企画院の事務官をしておったかどうか、ちょっと覚えてないけどね。よく会っていたんです。だから、（片山さんが）会いに行くということは、法華津君に頼んだと思いますよ。それで、法華津がやったわけだ。

伊藤　それで、片山さんの秘書官になったのは、いつですか。

竹本　それは、いつでしょうかね。

伊藤　片山内閣が……。

竹本　出来てからね。

伊藤　最初、片山さん一人で、総理で、全部兼任するでしょう。

竹本　そうそう、そういうことがあったね。あれは何で兼任したかだね。

伊藤　まだ、閣僚の割当てがうまくいかなかったからでしょう。

竹本　もちろん。とにかく、流してはいけないから、まずサッサッサッとやっちゃえというので、兼任したことは覚えてますがね。経過は、あまり詳しく覚えてませんけどね。「全部一人でやったらいい」ということは、僕は確かに言った。法律上可能だということで……。

伊藤　それは、先生がおっしゃったわけですか。

竹本　僕が言ったと思いますよ。

伊藤　それで、閣僚の人選には？

竹本　関係ない。そういうことは、やっぱりやり方を知ってるから、ちゃんと西尾末広やら何やら、その連中に任して、僕じゃなきゃ出来ないことを、僕はやった。だから、閣僚選考については、平野（力三）が出て来たとかというのがあったけど、僕がアドバイスしたとか邪魔をしたということはない。

伊藤　だけど先生、大蔵大臣には鈴木茂三郎がいいとか……。

「わが青春」一三、昭和五十九年三月二十四日付『静岡新聞』による。

竹本　それは、言ったかもしれん。

伊藤　それは、誰に言ったと思います？　やっぱり片山さんですか。

竹本　それは、片山さんに言ったかもしれんね。

平成六年十一月十九日の聞き取りで、竹本氏はこの間の経緯を、次のように語っている。「片山さんと内閣が出来たときに僕は片山さんの家で二人で相談するときに、僕が、『先生ね、この内閣は足を引っ張るというのは茂三郎に決まっとる。だからね、茂三郎を大蔵大臣にしなさい。それで僕が側におる。大蔵省を抑えるのは僕がやる。だから大蔵大臣にしたほうがいい』と言ってね、片山さんが、ＯＫを言って、組閣の前の日に、日本中

じゃないが、東京中電話をかけたけどね、鈴木茂三郎全然行方不明、逃げたんです」。

伊藤　西尾さんとは、その前はあまり関係ないんですか。

竹本　いや、ないことはないけれども、片山内閣が出来る時には、その前に西尾さんの家へ行って、いろいろ話したことがあるね。その時に、いろいろ話をしたかもしれません。

伊藤　そのもっと前は、あまり関係ないわけですね。

竹本　あまり関係ないね。畑が違うからね。

伊藤　畑が違う？

竹本　あの人は労働運動だから。

哲子夫人　片山さんは、もう兄弟みたいに好きだったんですよ。性格が反対だから……。私の名前が「哲」で、片山さんの名前と同じだからもらったって……（笑）。そんなに、片山さんが好きだったんですよ。

伊藤　奥さん、それは間接的に自分の惚気を言っているんですよ（笑）。

哲子夫人　だけど役人の時に、お金集めで選挙違反……。竹本が役人だったから、私が名前を出させられて、それで選挙違反で捕まったことがあるんですよ。

伊藤　それは、いつの話ですか。

哲子夫人　結婚して、すぐ……。昭和十年ぐらいだったかな。その時、「僕は役人になったから、もう名前を出せないから、おまえが出せ」って言うんです。片山さんが東京女子大で教えてらしたのね。その教え子たちが、みんなで後援会を作った。内務省で調べたら、後援会を作ると選挙違反になるというので、後援会有志ということで集めればいいって習って来た。それで集めたら、私が喚び出されて、警察に行ったんですよ。二回も行ったの。

伊藤　どうなりました、それで……。

哲子夫人　初め、ちょっと理屈を言ったら、警察が怒っちゃってね。「内務省がいいって言ったのに、警察と内務省は違うんですか」って言ったら、怒っちゃってね（笑）。私、そんな悪い意味で言ったんじゃないのに。「それは、言うはずがない」とか何とか言ってね。その時、「片山さんも、いい演説をする」なんて、警察も褒めていましたよね。

伊藤　それで、何事にもならなかったわけですか。

哲子夫人　ええ、何事にもならなかったんでしょうね。二回行ったけどね。

伊藤　それで、もう終わり？

哲子夫人　ええ。

黒沢　そうすると、クリスチャンの関係で、片山先生とは戦前から付き合っておられた？

哲子夫人　いえ、そんなことはないです。竹本の、あれだけです。竹本は、結婚式もいちばん先に……。大好きでしたね。あの先生、見たところがいいものね、感じがね（笑）。すごく清潔な感じでね。

次官の人選に関与

伊藤　先生が前に書いておられるものを見ますと、政務次官の人選について、ご意見を述べられたという話ですが、記憶がありますか。政

務次官にいいのを揃えないと大変だと。事務次官かな？

英国労働党が初めて政権を取った時に、次官に人材を得られないで苦労したと、本で読んでいたため。そこで政権成立時、各省には次官候補がおおむね三人いて激しく競争しているのだから、現在の次官を皆、馘首して、次官候補の残り二人ずつを味方につけると良いと言った（「わが青春」一三（昭和五十九年三月二十四日付『静岡新聞』、あるいは「片山連立政権を語る」『平成日本の志』五二頁）。

竹本　何か言いましたけど、何を言ったか、ちょっといま覚えてませんがね。

黒沢　事務次官でしょ。曽祢益やなんかを引っ張ったんじゃないですか。

曽祢益は官房副長官の一人。竹本氏は、外交と内政をそれぞれ担当する、二人の副長官が必要だという持論で、片山首相にも進言した。さらに候補者として、外務省出身の曽祢益と、林敬三の両氏を挙げ、片山首相も承諾したのだが、結局、西尾氏の意見で、内政担当は滝川末一氏となった（平成六年十一月十九日の聞き取り、および「人生理想独凛凛」『平成日本の志』七二頁）。

竹本　いや、それは関係ない。政務次官というのは、役に立たんということを言ったのかもしらんね、何か……。

伊藤　それから、今度ちょっと七番のところを見てください。

第四回質問要項の第七番。――各省庁の総務局長級の人々を集めて、水曜日に会合をしたとのことですが、これはどういう内容のものでしたか。また、その顔ぶれの中に、後年まで記憶に残るような人がおりましたか。

竹本　これは、事の起こりから言いますと、わざとというわけじゃないんだけど、片山さんという人は「自家発電」の出来る人じゃないんですよ。いま何をやるとか、そんなことがポンポンと出てくる人じゃないんです。言われて、「ああ」という感じで出てくるけどね。だから、僕がいつも考えてたことは……。

僕はその頃は、どういうルートで手に入れたか、いまは覚えていませんが、この内閣に対するアメリカの、ＧＨＱの考え方というようなものを、英語で全部読んでいた。だから僕は、どの辺が問題になるなということは、みんな知ってた。だけど片山さんという人は、いま言ったように「自家発電」の出来ない人ですから、ブレーンを集めんと、だめだろうと。西尾さんは、そう言っちゃ悪いけども、駆け引きはうまいんだ。けれども、出身が労働組合なんだ。だから、政治はだめですよね。

そこで僕が、とにかく内閣を取った以上は、二つでも三つでも、後に残る政策を実行しなきゃだめだと。そのブレーンがいなきゃだめだろうということを、片山さんに言った。それで、「それは僕に任せなさい」ということを、僕は言った。そこで、私が各省のブレーンを集めた。

伊藤　総務局長クラスを？

竹本　総務局長を、だいたい中心として、選んだ。その人選は、まずＧＨＱに対して、非常に役に立つのは外務省でしょ。だから、僕は前から懇意だったもんだから、法華津を取ろうと。それで法華津君に、アメリカに行く時も、案内役から何から全部頼んだわけだ。だから、法華津君を引っ張るということで……。

それから、次には大蔵省関係だから、予算の大蔵が大事だということで、野田卯一を取った。野田卯一はどういう関係かな、前から僕といろいろ会合をやっとったね。

伊藤　前からですか。

竹本　ええ。それで、彼は最後は国税庁長官をやったんですよ。その時に、国税庁長官の彼を、このブレーンのなかに入れたんだ。そうしたら、野田君が「俺で役に立つか」と言うから、「いや、おまえは大蔵省の代表だ。とにかく、大蔵省が次には何の手を打ってくるか、どういう問題に取り組むかということの情報が入らなければ、閣議は何の役にも立たん」と。だから、ちゃんと政策の動きを掴むということのためには、どの省は次には何を議題にするのか、考えていることが分からなきゃいかんと。それには、各省の総務局長をまず取ろうということで、僕は狙いをつけた。

僕は企画院育ちだから、そういう点は便利がいいから、まず第一に、いま言った外務省は法華津君、それから大蔵省は野田君を取った。あれは、専売局長官になったね。その前は、主計局長をやったと思うな。そういう関係もあるから、野田君がいいだろうということで。それから、これは僕の個人的にも関係があるが、後に検事総長をやった馬場義続だ。この馬場君は、僕は個人的にも懇意な関係があって、それで馬場君を法務省の代表に選ぼうということで……。

伊藤　馬場さんというのは、お歳はどうなんですか。

竹本　歳は、僕よりだいぶ上だ。

伊藤　そうでしょう。

竹本　中学の時に、あれが四年生の時に、僕は二年生か、そのくらいだ。二つか三つ上だね。

伊藤　そんなものですか。

竹本　そういう関係で、馬場君を僕が推薦して、片山さんにも紹介してね。それから、農林省は平河（守）君が総務局長。これは、後にあまり関係なかったね。それから、商工省は松田（太郎）君。後に、何か財団の長になったね。そういう連中を七人ばかり。それで、局長会議という名前で、毎月一回、会合をやった。それは政治の話だから、そんな事務はないから、月一回。その場所は、僕の親友で矢野弁護士というのがおったんです。これは、財界の今里広記を知ってるでしょ。あの今里の日本精工の顧問弁護士か何かだ。

会合の頻度について竹本氏は、昭和五十九年三月の回想（前掲「わが青春」一三）、および平成五年十一月の対談（前掲「対談　内田健三氏と片山連立政権を語る」）では毎週水曜日と、平成六年の聞き取りでは月一回と語っている。また、会合の名称について、平成五年の対談では水曜会と、同六年の聞き取りでは一水会と語っている。

伊藤　矢野なんという人ですか。

竹本　矢野範二。名前は「はんじ」だけれども、商売は弁護士だ（笑）。いや、彼が自分で、そう言ってたんだ。それで、これの中には入れなかったけどね。今里の関係もあって、その矢野君が財界の大事な人と、よく会合をやっていた。その会合も、初めのうちは矢野君の家でやっていた。その場所を、僕に提供してくれた。

伊藤　矢野さんの家ですか。

竹本　ええ。それで、そこで毎月一回、お偉方が、各省の代表が自動車で乗り付けて来た。近所の人達が目を回したんだ。こういうのがザーッと来るからね。矢野君もびっくりした。それを毎回、やっていた。ただの雑談ですけどね。その代わり、次は何省からどういう問題が出てくるとか、どこが問題だとかいうことは、そこで話している。それで総理も、法案を上げた時に初めて、びっくりするということはなかった。それは、僕がやったわけだ。

伊藤　政策のなかで、片山内閣としては社会主義政策らしいものというと、炭鉱国管の問題があるでしょう。あれは、竹本さんの考えですか。

竹本　いや、あれは、どういう関係だったかな。僕はむしろ、炭鉱国管をやった後で、片山さんと三宅正一と……もう一人誰かおったな。何か代議士とやって……。僕は電力国営をやった。その後で、あとはいよいよ石炭だというようなことを話したことは覚えてる。初めからじゃなかったと思う。

炭鉱国管について竹本氏は、平成六年十一月十九日の聞き取りで、次のように語っている。「炭鉱国管というのは、水谷長三郎が、社会主義は国営国管だとこう思っているね。それをパーッと言うただけ。だから、事実社会主義がそういうところがあったからね、それを育てあげなきゃならんというのでね、準備があってやったんじゃない。イデオロギーで、石炭なら国管だと、こういうようなことを言ってパッと言った。だから、ちょっと僕は今、さっき言わなかったか、電力の国営をやりましたからね。電力の次に国営をやるときは銀行なんですよ、ほんとうは。それをパッと石炭へ行っちゃった。だからあまり僕も興味は持たなかったけれどもね。しかし、反対するほどのこともないからね、せっかく水谷さんが言ったんだからということで、石炭。」

伊藤　じゃあやっぱり、先生としては片山内閣としては、何をいちばん大事だというふうに考えておられたんですか。

竹本　内閣に何をやらせようかと。何をやるべきかということについて、いろいろな雑音を混ぜたけれども、特に真剣な議論で印象的に残っているものはありませんね。

伊藤　じゃあ、それは、また後で思い出したら話してください。ここに、南原さんのことが出てくるんですが……。

第四回質問要項の第八番。――南原繁氏が官邸に激励に来られたとのことですが、これはどういう関係からでしょうか。

竹本　南原さんは、僕がいちばん可愛がられた先生なんだ。僕は東大法学部の政治学科なんだ。何だか知らないけど、成績が良かったんだ。従って、僕との関係はいちばん濃かった。そういう関係もあってですね。南原先生は、僕が静岡に行って選挙をやった時に、静岡までわざわざ講演に来てくださったことがあるんです。それは、僕を応援するために……。そういう関係です。だから、政治の関係では、「南原声明」を一部利用したというか、いちばん応援してもらった。

それで、内閣を取った時も、その辺がちょっとはっきりしないんですが、僕が言ったので先生が見えたのか、先生が自発的に片山さんのところに激励に行こうと言われたんだったか、そこはいまちょっと分からない。分からんが、総理官邸に行くには僕を通じてということで、僕に連絡があって、僕が案内したことを覚えている。発起点はどこだったか、ちょっと分からんですがね。それで、片山内閣を応援して、「しっかりやれ」と言うて、帰られたんです。

伊藤　ＧＨＱの片山内閣に対する態度は、どうだったですか。

竹本　特に悪いとかいうことはなかったと思いますね、僕は。

伊藤　さっき、片山内閣についての英文の批評をずっと読んでおられたという話ですが、だいたい、いい評判だったわけですか。

竹本　特に、いいとか悪いとかという印象は、僕は持ちませんがね。

伊藤　先生ご自身は、ＧＨＱの人との接触はないんですか。

竹本　接点は……なかったと思いますね。また、必要もなかったと思う。

伊藤　そうすると、秘書官として、だいたいどんな生活をされるわけですか。さっき言ったのは、一月に一遍でしょう。毎日、官邸に行かれるわけですか。

竹本　さあ、どうだったかね。毎日、行くのは行くでしょうね、当然。普通の事務はやらんです。電話を官邸からもらいました。

伊藤　どういうことをやっておられたんですか。

竹本　平野力三と、今日会うか会わないかとかいうような問題は、たびたび問題になったね。

伊藤　片山さんが？

竹本　ええ。まあ、政務に関してだね。

伊藤　そうすると、他に秘書官が何人かいるわけでしょう。

竹本　それはいます。二、三人おった。山崎広もそうだ。あと、何人か、事務だけの秘書官もおったでしょう。

省庁との連絡のために外務省と大蔵省からも秘書官を取りたいと、竹本氏が大学の同級生である愛知揆一に相談し、外務省から竹内春海儀典課長、大蔵省から佐藤一郎が秘書官となった（『私のなかの昭和史』四九頁）。内務省からも取ったという（平成六年十一月十九日の聞き取り）。『日本官僚制総合事典』四六八頁によると、この時の総理大臣秘書官は全部で五人おり、竹内・佐藤両氏の他に、池田禎治、清水純、山崎広がいた。

伊藤　政務の秘書官は、先生と？

竹本　山崎。

伊藤　そのお二人？

竹本　ええ。

伊藤　その二人では、どういう分担をしたわけですか。

竹本　特に分担というのはないが、山崎君は、言わば事務だわね。僕は、「今日は何とかと会え」とか、「どうやれ」とかというような、政務だね。

伊藤　じゃあ、やっぱり毎日行かないわけにいかないじゃないですか。

竹本　おそらく、毎日行ったと思いますけどね。そういう事務的な打合せは、それほどたくさんはないです。

伊藤　そうすると、片山さんの日程や毎日のスケジュールの管理は、誰がやるんですか。

竹本　それは、片山事務所の鈴木君という税理士がおった。それが、だいたいやってたね。

伊藤　その人も秘書官なんですか。

竹本　いや、秘書官とは言わんけれども、事実上秘書官だね。台所から何から、全部やってた。金の問題から……。

伊藤　先生は、金の問題なんかは全然関わらない？

竹本　ノータッチ。

伊藤　何か、いい役割のような気がしますけどね（笑）。何をされてたのか、具体的なイメージが浮かばないんですけど。あまり、お話をお聞きになったことはございませんか。

哲子夫人　短かったしね。

黒沢　秘書官というのは、後で振り返ると、何をやったか分からないぐらい、忙しいだけでね。後で考えたら、記憶に残る仕事がないんですよ。山崎広さんというのは、後に西尾さんの代筆を全部するんですよ。西尾さんの書いた本というのは、山崎広さんがほとんど書いている。ですから、山崎さんが片山内閣の時の声明文とか文章を書いたんですね。

竹本　僕は要するに、アドバイスだね。こういう手を打てとか、これ

はだめだとか。

片山内閣の顔ぶれ

伊藤　そのアドバイスで、何か覚えていることはありますか。

竹本　たくさんあったでしょうね。ちょっと、いま……。その時は、僕は「わかもと」の重役をしてたんですよ。

伊藤　ちょっと待ってください（笑）。そんな、役人で出来るんですか。

竹本　だから、秘書官は政務官的なものだから、兼務が出来た。

伊藤　兼務してたんですか。それは知らなかったな。

竹本　「わかもと」の労働組合の組合長が薬学部で、勘のいい男でね。僕が抜擢して、総理と相談して四国のどこだったか、愛媛県か何かの労働部長にした。組合長から……。県庁から相談が来て、僕が推薦したのです。

徳島県知事が片山総理に労働部長の推薦を依頼してきたので、「わかもと」の米村組合長を推薦した（「わが青春」一一、昭和五十九年三月十四日付『静岡新聞』）。

伊藤　それは、秘書官の時ですか。

哲子夫人　さあ、どうでしょうか。

黒沢　労働組合の委員長を抜擢して……。

伊藤　ああ、そうか、そうか。

竹本　労働部長の時に、工場長として労働問題を処理した。だから、「わかもと」の労働組合を激励する意味で、盆踊りをやったが、片山総理が見物に来るというので、大変な騒ぎになった。盆踊りに、片山さんが総理の現職で、応援に来たんだ。それで、新聞記者なんかが、びっくりしちゃったんだ。

昭和二十二年七月、砧工場で催した盆踊り大会（前掲「わが青春」一一）。

哲子夫人　もっと面白いことは、「わかもと」の社長が社会党が嫌いでね。

伊藤　長尾欽彌でしょ。

哲子夫人　ええ。片山さんを呼ぶって言うんで、社長は欠席したの（笑）。ものすごく横暴なの。社長のほうが逃げちゃって……。

伊藤　「わかもと」との関係は？

竹本　「わかもと」は、詳しく言えば、「わかもと」の奥さんの関係の親戚が村田五郎だ。その村田五郎が、僕は情報局の……どっちが先かな。情報局で会った。

伊藤　戦争中に、情報局の次長は村田五郎で、その下にいたわけだから……。その村田五郎が斡旋して、「わかもと」へ入られたでしょう。その「わかもと」で、工場長？

竹本　工場長だ。

哲子夫人　多摩川の工場長も兼任。

「わかもと」の総務部長を引き受けたのは昭和二十一年七月。その後、翌二十二年十月に東京工場長と多摩川工場長を兼任で引き受ける（前掲「わが青春」一一）。

伊藤　で、工場長のままで、秘書官になったんですか。

竹本　そうそう、工場長のままで。

秘書官になったのは昭和二十二年六月。「わかもと」に関しては、前年七

月に総務部長を引き受けており、この年二十二年十月に工場長を引き受けた（前掲「わが青春」一一）。

伊藤　じゃあ、「わかもと」との関係は後まで続くんですね。

竹本　いや、その後、間もなく辞めたと思いますよ。

哲子夫人　「わかもと」は半年。それで、「わかもと」の兄弟会社の水産化学とかいうのが船橋にあって、またそこへ半年。だから、結局一年。

伊藤　また元へ戻って、九番を見てください。片山内閣の顔ぶれですけどね。

第四回質問要項の第九番。――片山内閣は、外務・芦田均、内務・木村小左衛門、大蔵・矢野庄太郎、司法・鈴木義男、文部・森戸辰男、厚生・一松定吉、農林・平野力三、商工・水谷長三郎、運輸・苫米地義三、逓信・三木武夫、労働・米窪満亮、安本・和田博雄、復員庁・笹森順造、行政調査部・斎藤隆夫、官房長官・西尾末広という顔ぶれでスタートしました。この中で印象のある、あるいは親しく付き合われた方についてお話しください。

竹本　これは、半分以上、僕はよく知っていますけどね。特に、何ですか？

伊藤　特に、印象の深い人は誰ですか。

竹本　それは、いちばん深い人と言えば、西尾さんでしょうけどね。

伊藤　西尾さんとは、秘書官の時には、しょっちゅう接触するわけですか。

竹本　いや、西尾さんの家には時々遊びに行った程度で、そう西尾さんと打ち合わせるような用件はなかったね。

伊藤　他の人は、どうですか。

竹本　私は、このなかでは、いちばんは和田博雄。私は代々木上原におって、彼は代々木の何とかいうところにおったんです。一つは地理的に近いということと、一つはあの人は非常に頭がいいんだ。僕は話が合うんだ。そういう関係で、よく話し合いに行った。

伊藤　もともと企画院の時代にも知っていたんですか。

竹本　企画院で知ったわけだから。農村問題だけではなく、経済にも通じていた。

伊藤　じゃあ、それ以来ですね。

竹本　ええ。あの人は、総理でも何でも、「君」と言うのが平気なんだ。「君、君、だめだよ」というようなことを、総理総裁に言うんだ。そういう愉快な人だった。

伊藤　片山さんに対して？

竹本　片山さんには言ったかどうか、ちょっと覚えてないけど……。普通の総裁なんか、みんな「君」だ。ちょっと、僕と似たところがあると思うんだけど、頭に馬鹿に自信を持っておって、位階勲等なんて問題にしないんだ。そういう点が、僕は話も非常に合った。それから、秀才だけれども、節度というものを考えていたね。それを踏み外すということは、和田さんにはなかったね。僕は、その点が偉いと思ってる。

それから、鈴木義男――法務大臣だね。これは、ただ法律的にきめ細かな議論が上手だった。文部大臣が森戸（辰男）さんだ。森戸さんとは、家内の親父も、特に懇意なんだ。そういう関係もあって、私も森戸さんとは親しかったがね。それから、あの人は閣僚中で、いちばん社会主義というものに対する理解があった。それは、西尾さんのは運動から、森戸さんのは理論からだ。だから先輩として、非常に僕は

尊敬しましたね。

伊藤　水谷（長三郎）さんは、どうですか。

竹本　あれは、愛嬌があったね（笑）。あんちゃんだね。ちょっと愉快な青年というか、あんちゃんというか……。特に教えられるということはなかった。それから、平野力三……。

伊藤　平野さんについては、何か印象がありますか。

竹本　あの人は、片山内閣をいちばん悩ました人だった。世話を焼かせたけどね。要するに、問題を起こしたり、世話の焼ける人だった。だけど、勘は良かったね。だから、僕はどちらかというと、好きなタイプでしたがね。とにかく勘がいいよ。片山さんも、ずいぶん、迷惑したというか、世話が焼けたね。

伊藤　米窪（満亮）さんというのは、どうですか。

竹本　あれは、あまり知らない。いい人だという程度で、直接関係はなかった。

伊藤　他の党の人は、どうですか。

竹本　三木（武夫）さんは、僕は個人的に良かった。

伊藤　いつからですか。この時から？

竹本　いや、この内閣の時じゃない。……どういう関係かな。自宅も近かったから、何度も行ったことがある。要するに、社会党内閣の前段階は、三木さんにやらせようというのが、僕の考えだった。そのぐらい、親しかった。

伊藤　そうですか。どこで知り合ったんですかね。

竹本　ちょっと、覚えていませんね。誰かが僕を推薦したんだな……。田中義一の息子（田中龍夫）がおったよね。あれが企画院におったんだ。その関係で僕は懇意で、彼が僕をどこかに推薦したんじゃなかったかな。何かそんな関係があった。

伊藤　ところで、まだ片山内閣になる前の話ですけど、この写真に昭和二十一年十二月三十日と書いてあるんですよね。何かご記憶はありますか。

竹本　これは甘粕（正彦）だ。これは満州国のやつだね。

伊藤　いやいや、もう二十一年ですから、戦後ですよ。じゃあ、これ（日付）が違っているのかな。

黒沢　これ、軍人だもの。軍服を着てるもの。これ（日付）が間違いですね。

伊藤　昭和二十一年は、軍服は着てないでしょう、いくらなんでもね。

竹本　これは、満州で撮った写真だよ。真ん中が、甘粕。これが長谷川大佐。

長谷川報道部長？（「わが青春」八、昭和五十九年三月三日付『静岡新聞』）

黒沢　先生は、どこにいるんですか。

竹本　ここにおる。まだ若いんだ（笑）。満州は、この話は、また長くなるけど、第一は……。

伊藤　この写真で思い出したことを話してください。

竹本　甘粕の話だ。

伊藤　甘粕さんの話は、この前聞きましたよ。

竹本　聞いたかね。どの辺まで話したか知らんけど……。

伊藤　金をやるという話まで（笑）。五百万だか五十万だか、お金をやるという話……。

竹本　それじゃあ、もうだいたい……。

伊藤　あと他に、いま記憶に残る人はいますか。このなかで親しかった人はいますか。

竹本　和田は、どこにおるかね。これが、石橋参事官。和田がいないわな。これは、満州で撮った写真であることは間違いないわ。

伊藤　西尾さんについては、いろんな印象とか記憶とかありますか。

竹本　何しろ、非常に几帳面な人だ。労働運動なんてしていた。ちょうど、いまの甘粕さんみたいだ。きちっとしている。実に几帳面な人だった。だから、人事その他についても、あの人は謀略とか何とかというようなことは、あまりないね。きちっとして、理詰めそのものだ。その意味では、偉い人だと思いましたね。

伊藤　やっぱり、西尾さんと平野さんとは相容れないというところがあるわけですか。

竹本　それはあるでしょうね。平野は、ゲリラ専門だ。神出鬼没ですよ。西尾は、几帳面なんだ。だから、合わんでしょうね。どっちも、それぞれいいところがあるけどね。

（休　憩）

伊藤　そうすると、片山さんという人は、あまりリーダーシップのある人じゃないんですね。

竹本　むしろ、ないですね。

伊藤　みんなで乗せるという感じ……。

竹本　それが一つと、あとは好き嫌いがものすごく激しい。あの人は、嫌われたら、それっきりだ。おとなしいけど、好き嫌いはとても強かった。僕なんか、嫌われなかったから、良かったほうだ。

伊藤　嫌われたのは、誰ですか。

竹本　平野さんは嫌われたほうだろうね。

伊藤　まあ、そうでしょうね。

哲子夫人　片山さんは文学者だからね。白楽天のあれを出してらっしゃるでしょ。それから、アンデルセンだか何だかを出してる。割合と文学者なんです。だから、ちょっと神経の細かいところがあるのね。

『大衆詩人・白楽天』。アンデルセンは、片山氏が「小さい時からおぼえていること、感激していること、すばらしい名詩名文だと感嘆しているもの」を集めた『わが心の愛読書』のなかで、「全篇ことごとく『神の愛情、恵まれざるものに及ぶ』精神で貫き通している」と、数篇紹介している（『私のなかの昭和史』一三二頁）。

伊藤　しかし、総理になるわけですから、ある大きな器があったことはあったんでしょうね。

哲子夫人　そうですね。本当に、立派ですもんね。

伊藤　戦後の食料難の時代は、あまり苦しい思いはされなかったですか。

哲子夫人　それは、初めはあったけどね。鎌倉にいて、それから上原に帰った時なんかはね。前に留守番していた人と同居で、それで同居していた人のほうが威張っちゃってね。大変でしたよ、こっちは小さくなって……（笑）。その方がすごく生活力のある奥さんで、買い出しに千葉のほうへ行って野菜を買ってくると、タマネギの葉っぱを、「これ要らないから。お宅、要りますか」って言うので、私、もらっていたの（笑）。買い出しに行くのが嫌で、「何がない」とは言えないですね。タマネギの葉っぱなんか食べてたから……。

伊藤　タマネギの葉っぱだって、食べられないことはないからね。

哲子夫人　情報局の時は、いろいろもらったわね（笑）。

六年間の公職追放

伊藤　じゃあ、続けさせてください。秘書官を辞められたのは、公職追放になったからですか。それとも、辞めてから、公職追放になったんですか。

竹本　僕が社会党に関係しておったんだということが、分かったというか、暴露されたというか、表に出そうになったので、迷惑をかけちゃいかんというので、辞表を出したわけです。

哲子夫人　逆でしょう？　公職追放になったからじゃない。共産党か何かに、「片山内閣の秘書官とは、こんな男だ」とか書かれちゃったんじゃない？

伊藤　「赤旗」に？

哲子夫人　ええ、「赤旗」か何かにね。

伊藤　情報局で、いろいろ弾圧をやったと。

哲子夫人　だからやっぱり、それで悪かったんじゃない？

伊藤　どっちが先なんですかね。

哲子夫人　追放になるから、辞めたんじゃないですかね。

伊藤　なるかもしれないということで……。

哲子夫人　だって、六ヶ月以上課長をしていた人は、追放になったの。竹本は一年ちょっとぐらい課長をしていたから、だから追放になる。

伊藤　自動的にですか。

哲子夫人　ええ、そうです。情報局の人は、もう課長以上は、みな追放になる。

伊藤　追放になった時は、どんな感じでしたか。

竹本　困ったでしょうね、やっぱり。公職に就けないからね。他のことは困らんけどね。

伊藤　だけど、職はあったわけでしょ。

哲子夫人　なかったのよね。職って、なかったわね。

伊藤　「わかもと」はどうしたんですか。

哲子夫人　「わかもと」は、だからそのなかの一年ぐらいは「わかもと」だったですね。

伊藤　追放になってから？

哲子夫人　ええ、追放になってからね。

竹本　情報局次長の村田五郎が、「わかもと」の親戚だ。それで、僕に「来てくれ」って言うんだ。

伊藤　「わかもと」は、何で辞めたんですか。

竹本　あれは、選挙に出た時だな（注・竹本氏によると、これは記憶違いとのことだが、正確な時期は不明）。

哲子夫人　社長と喧嘩したんじゃない？

伊藤　まだ、選挙に出るわけではないでしょう。

哲子夫人　選挙は、まだそれから四年も五年も経ってから。あの間は……何して暮らしてたんでしょうね（笑）。

伊藤　これ（グラフの写真）は、何ですか。昭和二十二年の……。その下の、これは何ですかね。

竹本　要するに、僕は「わかもと」の工場長で、その間に、あまり長い期間ではなかったけれども、生産振興というか、生産を強化すると

いう、要するに大衆運動なんだね。みんなを、ある意味でアジテーションで高ぶらして、それで僕がやってる間に生産は三倍になった。

伊藤　そのグラフが、そういうことですか。

竹本　このグラフを毎月掲げると、労働組合の連中は単純だから、非常に喜ぶわけだ。それをやったわけだ。だから、工場長というのは、一つの大衆運動だね。大衆を把握して、グーッと引っ張って行けば、僕は技術は分からんけれども、それで生産は三倍以上になっていった。だから、「わかもと」の親父は、初めは僕が社会党系だということもあるもんだから、喧嘩もしたし、警戒しとったけど、生産がどんどん伸びるんで、すっかり嬉しくなっちゃって、変わったね。

伊藤　昭和二十二年十一月と書いてあるんですよね。そうすると、もうその時は秘書官を辞めた後ですかね。

哲子夫人　そうですね。

伊藤　そうすると、秘書官を辞めた後も、しばらくは「わかもと」におられた？

哲子夫人　ええ。「わかもと」のほうが、ずっと長かったわね。

伊藤　その「わかもと」の後は、どうなったんですか。「わかもと」を、何で辞めたのかなと思って……。

哲子夫人　何か、割合と気が変わるんですよ（笑）。だって、「わかもと」を辞めて、「わかもと」の兄弟会社の、千葉県の船橋の会社へ半年ぐらい、また勤めたんですね。その時に、「通うのが大変だから、ここに土地を買ってくれ」なんて、知り合いに頼んだの。そして、その人達が探してる頃に、また辞めちゃうの（笑）。

伊藤　船橋の会社は、何と言うんですか。

竹本　ええと、水産化学……。

伊藤　それは、何をやる会社ですか。

竹本　さあ、何の会社だか……。

哲子夫人　水産化学だから、お魚か何かの関係があるんじゃない？

竹本　いやぁ、覚えてないな。何をやったか……。

伊藤　そこも短かったんですか。

竹本　一年ぐらいだろう。

哲子夫人　一年もいなかったじゃない（笑）。

竹本　いや、あれは政治に出たんだよ。

哲子夫人　政治には出られないの。追放が六年だから……。

竹本　じゃあ、何で辞めたんだったかな（笑）。ちょっと覚えてない。

伊藤　選挙に出られるのは、昭和三十年ですよね。その前、追放解除になるでしょう。追放時代は、いったいどうやって生活していたのかなと思ったんです。

哲子夫人　だから、それは覚えがないんですよね（笑）。

伊藤　奥様も記憶がない？

哲子夫人　家はあったし、引き揚げの人やら焼け出されの人やら、ずいぶん置いていたよね。

伊藤　お宅に？

哲子夫人　家に。

伊藤　それは、どこのお宅ですか。

哲子夫人　上原。

竹本　石橋君は、総務庁参事官だ。

哲子夫人　それから、栗原弁護士も一年いたし……。

伊藤　だけど、竹本先生が何もしないで家にいるということはないでしょう。だからやっぱり……追放解除の訴願はしたんですか。

哲子夫人　やらない。運動はしなかったでしょ。

伊藤　全然？　最後まで？

哲子夫人　ええ。だから、田舎に行ってみると、追放になるべき人で、「運動したから助かった」って方がいっぱいいて、「へえー、運動すれば良かったんだ」って思ったぐらいですよ。

伊藤　本人がやる気がないということですか。

哲子夫人　もう追放だから、仕方ないと思って……。意外と政治家じゃないのね（笑）。

竹本　出版課長が引っ掛かったんですかね。

伊藤　公職追放の時は、社会党には属していたんですか。

竹本　いや、社会党は、表に出たのは後のほうだけど、関係は僕は大学以来ずっとあった。ほとんど……。

伊藤　追放中は、片山さんとか、そういう人達との関係はどうだったんですか。

哲子夫人　お金をつくって上げていたじゃない。片山さんのお金をつくって上げていたわね。

伊藤　内閣が終わってからですか。

哲子夫人　ええ。

伊藤　人のお金をつくるぐらいのことが出来たんですか。

哲子夫人　そうなんです。

伊藤　ちょっと、待ってくださいよ。片山さんのお金というのは、どうやってつくったんですか。

竹本　僕がつくって上げたということはないと思いますが、いまの日本石油とか何とかは、みんな僕の関係で出来た。

伊藤　何の関係と言いました？

竹本　日本石油。あそこは、福島君やなんか、僕の懇意の人がおって、先生にも若干寄付した。それから、今里君のところもあったと思います。

哲子夫人　割と実業家の知り合いが多くてね。自分の時は、遠慮して言わないんですよね。

伊藤　それじゃあ、追放の時代、収入がなくなっちゃうじゃないですか。

哲子夫人　これは、私もよく分からない。

伊藤　でも、飢えて死んだわけじゃないんですから、何か収入があったんでしょうね。

哲子夫人　何かあったんでしょ、きっと。私が思い出すのは、有田八郎という人がいますね。あの人の選挙の時に、竹本が応援の演説をしたんですよ。そうしたら、奥さんがお礼に来たので、竹本が、またそこで一席何かやったの。そしたら、奥さんがお金が足りなかったのかと思って、後ろを向いて、お札を足してね（笑）。私、それを見てたんです。ああいうふうにして、お礼をもらったのかなと思って……。だから、そんなような収入もあったんじゃないの。

伊藤　こんな活動的な方が、何もしないでいたわけはないんですからね。いろいろ活動されていて、それに伴ってお金も入ったということだと思うんですけどね。いったい何をしていたのかなと思って……。

哲子夫人　それしか覚えてないわ。

竹本　国際労働局というのがありましてね。

伊藤　それは、ずっと前の話でしょ。

竹本　あそこは金もあって、僕は嘱託で、月に五十万ぐらいもらっとった。

哲子夫人　五十万円って、この間、二十円って言ってたじゃない（笑）。

伊藤　だけど、追放の時は、いったい、どうやって食べていたんですかね。

竹本　それが分からんね。

伊藤　財産があった？

哲子夫人　財産はないですよね。

伊藤　奥さんのほうに。

哲子夫人　いやいや……。

竹本　『政界展望』に原稿を書いたり……。それも、少しは役に立ったと思ったな。研究調査の仕事で、小遣いは稼いだと思います。

公職追放中の仕事について、平成六年十一月十九日の聞き取りで、竹本氏は次のように語っている。「一番大事なことは、『科学と政治の会』を八木さんや松前重義さんらとやっていたというのが、それが一番大きなやつ。それからもう一つは、労働問題で、産業なんとか言ったかな、『産業再建連盟』というかな、なんかそんなやつを赤松さんなんかといっしょにやっていた。結局、うれたかな、ちょっと覚えてませんがね」。

哲子夫人　原稿の下書きか何か、きっと頼まれてやったのかもね。名前を出さないでね。

伊藤　追放解除になったのは、いつですか。

哲子夫人　「六年追放」だったの。だから……。

伊藤　昭和二十二年に追放になってるんでしょ。足掛けですか？　それじゃあ、講和条約が発効するまで……。

竹本　追放解除から、すぐ選挙だったかね。

哲子夫人　それで、それが済んでから海上保安大学校に入って……。

伊藤　そうそう、海上保安大学校（事務局長兼教授）の話が、ちらっと出てくるんですけど、これはどういう因縁ですか。

哲子夫人　竹本は、海軍のつもりで入ったとかって……。

伊藤　これによると、愛知さんがいろいろやってくれたと書いてありますが……。

「これ」は、『私のなかの昭和史』五一頁あたり。

竹本　追放解除の問題？

伊藤　愛知さんが、追放解除のためにいろいろやってくれたというんですね。

竹本　あれは、僕の東大時代からの親友なんだ。

伊藤　ずっと続いているわけですね。

竹本　ずっと……。これは夢物語だけれども、ちょうど僕らが東大に入った時から席次がなくなったんだ。それで、席次を付けて順番を付ければ、僕か愛知君か、どっちかがトップになるんだ。そういう仲だから、親しかった。

伊藤　それで、海上保安庁の長官の大久保武雄さんという人から話があった、と書いてありますが……。

哲子夫人　ああ、海上保安庁の大久保さんが知り合いだったんだ。

伊藤　大久保さんという名前は、突然出てくるんですけど。

哲子夫人　奥村さんの仲間。企画院の時に、奥村さんたちと同じぐらいの地位の方で……。

竹本　五高のグループだ。確か、奥村さんより大久保が一級ぐらい下じゃないかな。しかし、僕らより先輩だ。

伊藤　それで、大久保さんから誘いがあったわけですか。

竹本　そうです。

伊藤　その時は、どんな感じで引き受けられたわけですか。

竹本　それは、海上保安隊というか、あそこは一つ夢があったわけだ。あれは、軍ではないけれども、軍に近い、別働隊としてね。大久保という長官は野心的な人だったが、それも含め海上保安隊というと、やっぱり日本の一つの大きな柱になるということで、いまの単なる海上保安庁ではないんだ。

伊藤　将来は海軍になるということですね。

竹本　ええ。もっと大きな夢があった。それで、とにかくやってやろうということで、行ったわけです。

伊藤　海上保安大学校というのは、どこに出来たわけですか。

哲子夫人　東京に、初め半年いたのよね。

竹本　あとは、何ていうところだ。離れ島みたいなところがあるわ。

哲子夫人　私は行ったことないけど、東京にあって、そしてそれが呉のほうに移ったもんだから、嫌になって辞めたのね（笑）。

「池田勇人さんが、彼は広島が選挙区なんだ。江田島はなかなかアメリカ海軍が引き揚げないということと、それと同時に、自分の選挙区にあった、呉の、いまの海上保安大学の所にあった海軍関係の学校を使ってもらいたいということになった。池田は大臣で強引だし、そう決まった。それに精神道場的な教育というのは、山の中か海の向こうの離れた所でなければだめだから、それでまたやめたんですよ」（『私のなかの昭和史』五一頁）。

伊藤　また辞めたんですか（笑）。

哲子夫人　半年で辞めたの。東京に半年で、向こうへ行って半年だね。

伊藤　向こうにも行ったんですか。

哲子夫人　行くことは行ったんです。単身赴任で……。

伊藤　何を教えたんですか。

竹本　僕は事務局長が本職だ。

哲子夫人　事務局長と、副校長って言うの……。

伊藤　じゃあ、教えることはしなかったわけですか。

竹本　教えるのも教えたけど、事務局長が本職だ。教授は兼務だ。

伊藤　何を教えたわけですか。

竹本　憲法だったと思うね。

哲子夫人　東海大学では、財政学と法学通論を教えたって言ったね。

伊藤　これは、松前さんですね。こっちで半年、向こうで半年、海上保安大学校の教授をやられて、辞めてすぐ、今度は東海大学ですか。

哲子夫人　いえいえ、東海大学はほんの講師で、ちょっと掛け持ちに……。

伊藤　両方ですか。

哲子夫人　両方じゃないけど、日本体育大学も……。収入のあれじゃないですか。

哲子夫人の『選挙裏方三〇年』一三頁には、「何でも、はじめは静岡県第一区で出ようとして東海大学（一区内の静岡市にある）の講師になったのだそうだ」とある。

伊藤　そっちが本職ですか。

哲子夫人　いえいえ。そして、間もなく選挙に出たわけですね。

伊藤　間もなくと言っても、三年ぐらいありますからね。日本体育大学は、講師ですか。

哲子夫人　体育大学は、ほんの講師よね。

竹本　講師だな。

伊藤　東海大学も？

竹本　講師。

伊藤　じゃあ、日本体育大学で何を教えていたんですか。
竹本　経済学。
伊藤　いろんなことを教えてらっしゃいますね。体育大学は、誰のご縁ですか。
哲子夫人　体育大学の校長先生が、五高の時の体操の先生。
伊藤　ああ、前に、そう言えば話が出てきましたね。
竹本　栗本義彦と言えば、有名な人ですよ。五高の体操の先生であって、それが体育大学の学長になった。それで僕に、「少し手伝ってくれ」って言われたから、経済学をやったんだ。
伊藤　そういう形で、何とか生活していたということですかね。

衆議院選挙に出馬

伊藤　選挙に出ようというお考えは、前からあったんですか。
竹本　さあ、そう言われると、ちょっと困ったな。政治家を馬鹿にしとった点があるから……。
伊藤　まあ、そうでしょうね（笑）。その政治家に、自分が今度はなるわけですからね。
竹本　だから、選挙に憧れるということはなかったと思いますがね。
伊藤　じゃあやっぱり、誰かに立候補を勧められた？
竹本　堀木鎌三とか、松前重義とか。ああいう連中とは、四、五人一緒になって、飯田橋で研究会をずっとやったことがある。堀木鎌三と松前さんと、それからもう一人は、鍋山貞親……。
伊藤　それは、前にお話になった、「科学と政治の会」ですか。
竹本　そうそう。
伊藤　それは、ずっと続いていたんですか。
竹本　続いてるんです。
伊藤　じゃあ、やっぱり、そんなところで「立候補しろ、立候補しろ」と言われたんですかね。
哲子夫人　みんな出たのよね。八木さんも出られたし、松前さんも出られたし……。
竹本　三輪寿壮に、鍋山貞親に……。
哲子夫人　何しろ、演説が好きだったからね。演説だけで当選すると思って……。
伊藤　以前の質問では、造船疑獄が出馬の切っ掛けになったというふうにお話しになってますが……。

『私のなかの昭和史』五二頁では、出馬の直接の理由として、造船疑獄に憤慨したこと、三輪寿壮氏に出馬するよう口説かれたことの二つを挙げている。

竹本　そうだったかもしれんね。いまちょっと、はっきり覚えてませんね。
伊藤　三輪さんが、一所懸命勧めたようなことを書いていますが……。

「三輪さんが私に政界に出ろと言っている時に、ちょうど静岡県から誰か人をよこしてくれという要請があったわけだ。しかも浜松というところは国鉄関係者が三、〇〇〇人もおって特に左が強い所だということで、左に対して理論闘争のできる人をよこしてくれということだった。そこで第一候補として、Nさんが挙がったんだが、彼はもう既に東京で準備を始めていて、それでNさんが僕を推薦したわけだ」（『私のなかの昭和史』五三頁）。

文中のN氏は、平成六年十一月十九日の聞き取りによると、鍋山氏のこと。

竹本　三輪さんは、前からいろいろと勧めていた。

伊藤　ちょうど、昭和三十年に社会党の左右が統一しますよね。立候補しようと思った時は、確かまだ社会党が分裂している時代じゃないかなと思うんですが……。

哲子夫人　初め、右派社会党で出たの。

伊藤　それは、何で右派社会党なんですか。

哲子夫人　三輪さんも、右派だったからね。

竹本　社会党で出るのは、僕として、考え方としては極めて自然なんだな。僕はとにかく、東大を出てから、河合栄治郎先生のイギリス労働党という本を、関係の書物を全部読んだ。だから僕は、英国労働党は、いまでも最高に支持している。だから、社会党から出るのは、極めて当たり前で……。

伊藤　それは分かりますよ。社会党のなかで、左派ではなくて、右派から出たということは、三輪さんの関係ですかね。

竹本　僕の考え方は、だいたい右派でしょうね、やっぱり……。

伊藤　右派ですか。

黒沢　だって、河合栄治郎の門下生が……。

伊藤　河合も分かりますけれども、戦争中の感じからいくと、何か左派に行くような感じですよ。だって、企画院のグループを考えたらね。

竹本　あれは、人間的に鍛えられた。勝間田（清一）君達は左派ですが、僕はカント哲学ですし、英国労働党ですから。

伊藤　和田（博雄）さんとか勝間田さんとか、みんな左派に行ったじゃないですか。

竹本　勝間田君なんかは、僕は人間的に軽蔑しとった。和田さんは、軽蔑するような人じゃない、割に純真な人だった。伝記でも分かるようにね。勝間田というのは、日和見主義で権力主義なんだ。それで僕は、左翼に行くやつは、みんな軽率なやつだというふうに、どちらかと言うと、軽蔑しとった。僕は、だから英国労働党というのは、社会党の右派という意味で好きだったわけだ。

伊藤　でも、さっき気が合うとおっしゃった和田博雄は左派じゃないですか。

竹本　あれは、僕は特に個人的に付き合うということはなかった。会合で、彼が同じ方向へ来たと思っただけで……。和田耕作も、企画院以来付き合っている。あれも、本当は少し左だね。でも僕は、勝間田君を始めとして……。稲葉修三というのがおった。稲葉は割に純真なんだ。勝間田というのは、小細工をする男だった。そういう意味で、稲葉は最後は、勝間田なんかと喧嘩したんですからね。というのは、それほど稲葉は純真だと。それが喧嘩しなきゃならんほど、勝間田君というのは、どちらかと言うと、おっちょこちょいで、僕は軽蔑しとったね。それで、そう大して学問も出来ない。ただ、動くのは動いていたけどもね。学問的に、何か憲法でも経済でも、専門的な意見というのは、勝間田君にはなかったね。ただ、左翼的なムードだけだ。

前述のように、和田博雄氏とは家が近いこともあり、「しょっちゅう行っていた」という間柄だった（「対談　内田健三氏と片山連立政権を語る」『平成日本の志』五七頁）。

伊藤　最初の選挙をやろうというふうに考えた時、どこから立候補するかという問題があったでしょう。

竹本　「静岡でやってくれ」という縁があった。

伊藤　最初から、そうですか。

哲子夫人　いえいえ、そうじゃない。中学が田川だから、田川の市長になって、あそこから出てくれという話もあったんですよね。竹本は、「あんな田舎へ行くのは嫌だ」って言って……（笑）。「東京の近くがいい」なんて、そういうことを言って……。

伊藤　東京には、いい選挙区がなかったんですか。

哲子夫人　東京は、ちょっと待っていれば、菊川（忠雄）さんが……。竹本が向こうで一遍立候補して、ほとんどすぐ亡くなったんですよね。だけど、いったん浜松で出て、あの人が亡くなったから、また東京へ帰してくれということは、言えなかったんですよね。帆足（計）さんなんか、本当に得しちゃったもの、あの人が……。

竹本　ほんの、ちょっとだったんだ。

哲子夫人　あの人は、初め無所属だったのね。それで、デンマーク体操か何かを上野の山でやってね。それで、労働組合をぐるぐる歩いていて、それで左派で出たわけでしょう。そうしたら、今度は菊川さんが亡くなっちゃったもんだから、有力になっちゃってね。菊川さんのところは、奥さんが出られて、後はだめになったからね。本当は、そこにいれば、出られたんですけどね。運命ですよね。

伊藤　何で静岡に行ったんですか。

竹本　あれはね、鈴木貞一だ。

哲子夫人　浜松のほうに、鍋山さんの子分がいたんですね。講義を聴いて感激して、崇拝している人達が……。

伊藤　どこで講義を聴いたんですか。

哲子夫人　鍋山さんのことを尊敬して、鍋山さんを講師にして勉強されていたんですね。それで、その人達が、ちょうど考えが同じだというので、竹本を引っ張りに来たんですね。まだ、二五、六かなんかの委員長の言うことについて、フワフワと行っちゃったの。

黒沢　鍋山貞親さんですよね。鍋山貞親さんは、研究会を持っているし、労働組合の幹部を集めて、ずいぶん講義をしているんですよ。おそらく浜松でも、講演会をやったと。その時に、浜松の国鉄の関係の青年が行って、その話を聞いたんですね。

> 竹本氏は、国鉄青年たちとの付き合いのきっかけを、「たまたま沼津の会合で聞いた国鉄の山下幸右衛門氏のあまりにもさわやかな弁舌にひきつけられたため」と書いている（「わが青春」一八、昭和五十九年四月十一日付『静岡新聞』）。

哲子夫人　もう、そのグループがあったんですよ。

黒沢　竹本先生も、そこで話をしたんですか。

哲子夫人　何か、そうらしいですね。それで、竹本の講演を聴いて、「来てくれ」ということになったんですね。

竹本　一つは、どこからでも出られると思ったんだ。簡単に考えてね（笑）。

> 当初、竹本氏は「輸入候補」が当選しやすいのでは、という見込みの下、静岡県第一区で出馬を考え、選挙区内にある東海大学の講師にもなったが（講師就任は昭和二十八年十二月）、うまくいかず迷っているうち、前述の国鉄の青年たちとのつながりができたという。また、浜松は工業がさかんで労働組合が多く、支持者を得られやすそうだと考えたとのこと（竹本哲子『選挙裏方三〇年』一三頁）。

哲子夫人　世間知らずなの。本当に、そうなんです。

伊藤　地縁も血縁もないわけでしょう。

哲子夫人　ないんですよ。私の妹の主人が浜松の人で、それだけの関係です。その妹の主人は、うんと迷惑したんですよ（笑）。急に、「出

るから応援しろ」って、「親類一同に、あれしろ」って……。だけど、向こうは旧家だから、みんな保守でしょう。しかも、足立篤郎さんの従兄弟かなんかになるの（笑）。それで、人がいいもんだから、もう苦労したんですよ。いきなり、「あそこへ行くから、頼む」って……。

義弟の長津久男氏。氏は磐田郡豊岡村の出身（前掲「わが青春」一八）。

伊藤　奥さんの書かれた裏方記に、その辺のことがよく書いてありますけど、ご本人としては、どうだったんですかね。いまおっしゃったように、どこでも立候補すれば当選するものと……。

哲子夫人　そうなんですね。演説で票が取れると思っていたんです。東京辺りだと、いくらかそういうことはありますからね。

伊藤　じゃあ、組合としては、国鉄の人達ぐらいなんですか。その他にも、組合はいろいろあったわけですか。

哲子夫人　あとは全繊同盟。

伊藤　この辺になると、竹本さんに聞くより、奥さんに聞いたほうが早い（笑）。

哲子夫人　竹本は、演説ばっかりですもん。東京半分でしょう。だから、地元のことは私のほうが詳しいの。

伊藤　だって、奥さんも、そこには何の縁故もないわけでしょう。

哲子夫人　ええ、私は何も縁故はないです。

伊藤　ちょっとした、ご親戚があるぐらいで……。

哲子夫人　ええ。だから私、一生、妹に頭が上がらない（笑）。

伊藤　演説は、いっぱいやったわけですね。

哲子夫人　演説は、もうそれは……。それで結局、初めに一万七千五百票取ったんですけど、その次は倍になったんですよ。三万五千票。そういうのは、本当にないそうですね。それで、落ちても倍になるんだから、全繊の人達は、また倍になるだろうと思って、三万五千がまた倍になったら当選すると思って……（笑）。それで、二度目も落ちて、三度目に五万いくら取って、それで四度目にやっと当選した。

昭和三十年二月の出馬第一回選挙での得票数は一万七二八六票（前掲「わが青春」一八）。昭和三十三年五月の二回目の選挙では、三万五七六一票（『私のなかの昭和史』六三頁）。

伊藤　その三度目の時は、次点ぐらいになったわけですか。

哲子夫人　次点ではないです。七万取らなければ、だめで、五万五千ぐらいでしたから。それでも、何しろ一万七千票ずつ伸びたということで、みんなは脅威を持って……。

伊藤　選挙資金は、どうしたんですか。

竹本　選挙資金は、どうしたかって言われても、ちょっと自信がないね。

哲子夫人　割と、いいお友達がたくさんいたんですよ。何だか知らないけど……。

伊藤　お友達だって、お金がないお友達ではしょうがないでしょう。

哲子夫人　旭化成の宮崎（輝）さんとかね。

伊藤　何で宮崎さんが、ここに出てくるんですか。今頃、急に……。

哲子夫人　どういうわけか知らないけど、ずっと応援してくださったの。お金の援助も。それから、あとは誰だろう……。

黒沢　今里さん？

竹本　いや、今里なんかは……。

伊藤　宮崎さんは、どういう関係ですか。

竹本　あれは、五高だ。五高だということと、それからあれの会社が宮崎の延岡にある。彼は、僕より一級下なんだ。そういう関係で、ず

っと続いていますね。

伊藤　選挙の事務長なんかは、誰がやるわけですか。

哲子夫人　初めは事務長になる人がいなくて、労働組合の人がなるわけにもいかないしね。いちばん最初の時は、誰がなったんだろう。

伊藤　でも、事務長がいなくては、選挙が成り立たないでしょう。

哲子夫人　まあ、最初は国鉄の関係の人か何かがなったんでしょう。それから、だんだん妹の主人の親類の方も……。割と、みんな偉いんだけど、そうでなくて、ちょっと風変わりな人がいるでしょう。そういう人が応援してくれたんです。やっぱり従兄弟で、ちょっと下町の親分みたいな人がいてね。その方なんかが、ずいぶん応援してくれた。

第一回の選挙事務長は社会党の貴志先生、義弟の従兄弟で協力してくれたのは武田晴信氏（前掲「わが青春」一八）。

黒沢　やがて後には、日本楽器とか、それから本田宗一郎さん。

哲子夫人　本田さんはね。だけど、あそこは、あまり選挙はしない。

伊藤　どうやって票が増えていったわけですかね。

竹本　僕は演説一本で……。

伊藤　演説で票が増えた？

竹本　僕が思ってるほど簡単じゃなかったけれども、演説というのは、やっぱり大きな力ですよ。

哲子夫人　それと、同情票。同情票って言うと、竹本が怒るけど、最後は本当に同情票がありましたね。三遍も落ちて、何しろ私がやせ衰えちゃって……（笑）。とても見るのも気の毒というような人がいたりしてね。やっぱり、同情票がずいぶんあったんです。同情票って、馬鹿に出来ない。値打ちのない人に同情するわけじゃないんだからね。値打ちがあって、うまくいかない人に同情してくれるんだから、同情票もありがたいんだって、私は思ったんですよね。

伊藤　同じ選挙区には、社会党の左派の人はいなかったんですか。

哲子夫人　いたんですよ。

竹本　長谷川保。

哲子夫人　本当は右派の人だけれど、左派でないと当選しないから、左派になっちゃった。

竹本　病院を持っている……。

哲子夫人　それで、あの人が「自分が落とされる」と思って、ずいぶん妨害したんですよね。だけど、最後に弁護士の白石（信明）先生が付いて、当選したんですよね。

伊藤　その選挙を、四回もやっているでしょう。四回目で当選でしょう。そうすると、その間は何をして食べていたんですか。

哲子夫人　だから、あの時は奥村さんのお金をもらって食べていたんじゃないですかね。

伊藤　奥村さんのお金って、何ですか。

哲子夫人　竹本が海上保安大学校の時に奥村さんが選挙に出て、秘書にするからと言うので、海上保安大学校を辞めちゃった。それで、奥村さんの選挙の応援演説をやったんですが、奥村さんが一万いくらしか（票を）取れなくて、やめちゃったでしょう。それで会社を始めて、その時に竹本に月給を、それからずっとくれたの。

伊藤　奥村さんとの関係は、じゃあ、ずっと続いているわけですか。

哲子夫人　ええ。で、奥村さんの会社が儲かっちゃったの。すごく儲かっちゃって……。

伊藤　何の会社をやっていたんですか、奥村さんは。

哲子夫人　輸入だよね。ドイツの農薬か何かを輸入していた。

奥村氏は昭和二十八年九月に東陽通商株式会社を設立し、取締役社長に就任した。同社の前身は香和商事会社（興亜商事？）と言い、もともと逓信省の先輩である大和田悌二氏の紹介で、顧問となり、建て直しに従事していたもの。業績回復後、奥村氏の雅号を取って、社名を改めた（『追憶　奥村喜和男』一八三、二一三頁）。

伊藤　で、給料をくれていたわけですか。

哲子夫人　ええ。約束でね。自分が落ちて会社を始めた時に、「どれだけあったら暮らせますか。二万円でいいですか」と、あの時におっしゃったから、「はい、結構です」と言って……。それで、初め二万円くださっていたの。だんだん儲かったもんだから……。

伊藤　増えてきた？

哲子夫人　増えたんじゃないですか（笑）。

伊藤　その時、奥村さんは何の党から立候補したんですか。

哲子夫人　福岡ね。

竹本　党は、民主党じゃないか……。

奥村氏は郷里の福岡四区から立候補。当初、改進党の公認候補になるのでは、との観測もあったが、結局、無所属で立った（石川敏巧「舅の思い出」『追憶　奥村喜和男』二一三頁）。

伊藤　さっきからの話は、社会主義の話だったのに、急に民主党になっちゃったんで、びっくりしちゃった。

哲子夫人　奥村さんの応援をして、秘書になるつもりだったんだからね。

黒沢　奥村さんも、波瀾万丈なんですね。

伊藤　そうですね。最後は、実業で成功したわけですね。

哲子夫人　成功したんですね。でもやっぱり、寂しかったみたいね。お金は儲かっても……。

竹本　あれは、兄弟分は誰だったっけ。出世した人で、奥村さんの同級で、大久保なんかのずっと上だ……。佐藤栄作だ。ちょっと後れてるんだな。奥村さんも、自分じゃあ、内閣を取るつもりだったんだ。

伊藤　奥村さんとの関係は、初めて知って、びっくりしました。人間的な付き合いが長いんですね。

哲子夫人　だから、何党でもあまり変わらないですね。

伊藤　あまりイデオロギーと関係ないんですね。

哲子夫人　ことに地方なんか行くと、立場でみんなね。労働組合の人が左派で出て、課長になると自民党になったり……（笑）。そうなんですよね。

竹本　僕は、いまでも考えていますが、選挙というのは必要だと思いますね。（選挙）制度は、人間形成の上でも、政治家形成の上でも、絶対に必要有益だと思いますよ。あれがなかったら、やっぱり議員が独善になるし、勝手なことをやるからね。いまの選挙制度は、少し直さんならんところは確かにありますけど、僕は選挙制度というものは、必要有益だと思いますね。結論としては……。

伊藤　やっぱり、いい経験になりましたですか。

竹本　いい経験になります。それから、大衆が分かるからね。大衆の心を捕まえられる。これは、ありがたいことですよね。

伊藤　ちょうど時間です。きょうの質問も、そこまでになっております。次回は、政治家の時代のお話を伺わせていただきます。

〈以上〉

竹本孫一
オーラルヒストリー

第5回

[2000年10月13日14:00～16:10]

〔インタビュアー〕

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

季武嘉也(創価大学教授)

竹中治堅(政策研究大学院大学助教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

統一社会党の浜松支部長

伊藤　前回は、選挙のことまで伺いました。奥様の『選挙裏方三〇年』というご本は、非常に面白く読ませていただきました。あんなに裏表もきちんと書かれたものは、ほとんどありません。

哲子夫人　あれでも、まだ……。

伊藤　言えないことがたくさんあるでしょう。

哲子夫人　そうです、遠慮して……（笑）。

伊藤　それで、最初に選挙に出られた時は、社会党が左右に分かれていますよね。いままでのお話を伺っていますと、私は左派に行ってもおかしくないような気がするんですが、何で右派だったんですか。

竹本　僕は、初めから右派ですよ、根本が……。

伊藤　いままでのお話で、政策のことを伺っていますと、何か左派みたいな気がするんですけど……。

竹本　いや、それは……。ちょっと、私には意外ですね。僕は、初めから右です。左は反対。ずーっと、はっきりしています。どちらかと言えば、僕はやっぱり南原先生のカント哲学なんだ。そういう関係から、左派――いわゆるマルキシズムは、性に合わないと言いますか。経済政策は、いまの資本主義の行き方には当然反対ですから、その意味で左と一緒になる場合もありましたけどね。だいたい、考え方はむしろ、ずっと右です。

伊藤　人間的な関係では、片山（哲）さんですか、西尾（末弘）さんですか。

竹本　西尾さんは、片山先生との関係があるから、あれだけど……。僕は、西尾さんは流れとしては同じでしたから、別に嫌ったわけではありません。だけど左は、いちばん細かいところから言いますと、勝間田（清一）君が、僕のライバルなんだ。同じ静岡県で、あれが左で、僕が右なんだ。そういう意味でね。

伊藤　選挙区は同じじゃないでしょう。

竹本　選挙区は違います。だいたい左は、我々右の側から言うと、おっちょこちょいが多い。それから、観念論が多いというようなことで、人間的にも思想的にも、僕は左とは初めから終わりまで、妥協したことはないです。

伊藤　そうですか。三輪（寿壮）さんは、どうですか。

竹本　三輪さんは、むしろ右に近いですね。

伊藤　もともと、右でしょ。

竹本　あの人は、極端に言えば、僕らよりも右かもしれんね。

伊藤　あの人は、中間派でしょ。

竹本　あの人は社会党であったから、菊川（忠雄）さんとどういう関係があったかは、僕はよく知りません。しかし、三輪さんは気持ちの上から言えば、岸信介とも良かったからね。どっちかと言うと、岸さんに近いほうですよ。だから、三輪さんは極端に言えば、僕より右だと思ってます。だけど、どういう関係かな、考え方というよりも人間的、行動的には、僕は非常に一致してましたね。違和感はなかったです。

伊藤　最初の立候補をした後で、社会党が左右統一しますよね。あれについては、どういうふうにお考えだったんですか。

竹本　僕は、特に賛成もしない、特に反対もしないということですね。というのは、政策は、もう右でなけりゃ何も実行出来ない。だから僕は、左派は初めから終いまで、センチメンタル・ギャングだと思ってる。具体論が、一つもない。ただ、観念論を振り回すだけだ。だから、センチメンタルとしては理解の出来るものもありますが、行動はセンチメンタル・ギャングだというふうに、僕はずっと思っていた。それは、一貫しています。

伊藤　二のところを見てください。奥様の本を読んでいますと、映画館の二階を借りておられたわけでしょう？

第五回質問要項の第二番。――出馬第一回の選挙の時に、その方の映画館の二階を借りておられた武田さんという親戚の方は、最後まで支持者であったのでしょうか。また「親分」というのは、どういう存在だったのでしょうか。後援会のようなものが出来たのは、いつ頃からでしょうか。

竹本　武田（晴信）さんは、最後まで一貫して僕の支持者だった。あれは、家内の親戚だった。

哲子夫人　従兄弟だったの。何しろ、長津（久男）の親戚で、ともかくも社会党なんかに耳を傾けそうな人は、この人一人だったんです。

伊藤　長津さんは、どうなんですか。

哲子夫人　長津は、東京に住んでましたからね。もう、あまり力はなかった。

伊藤　その長津さんの親戚なんですか。

哲子夫人　長津の従兄弟なんです。それで、長津に言わせると、普通の人達はみんな自民党だから、親類のなかで変わり者を探して歩いたって……。慶応を出てるのに、ちょっと愉快な方で、映画館をやってたでしょ。映画館の持ち主というのは、みんなヤクザの親分なんですよ。浜松なんかではね。

伊藤　全国的に、そうですけどね。

哲子夫人　それだもんだから、小野さんと言って、県会議長で刺青した方がいたんですけど、あの方なんかのグループというか、そういうこともあって……。

竹本　浜松の大物だ。

伊藤　それは自民党ですか。

哲子夫人　ええ、自民党です。武田さんは、別に自民党も社会党もなかったんですよ（笑）。

伊藤　気に入ればいいわけですね。

哲子夫人　まあ、割合と話が合ったというか、気に入ったんでしょうね。子分がたくさんいましたからね。

伊藤　それが、よく分からないんですよ、親分だ、子分だというのが……（笑）。

哲子夫人　でも、浜松辺りはね、私も知らないけど、武田さんのところには、もうチャッと命令すれば、何人も集まるような組織があったんです。仕事師とか、遊廓の人とか、そういうような人達がみんなで、竹本なんかを連れて回って……（笑）。

伊藤　気が合うんですかね。全然、違うパーソナリティーだと思いますけど。

哲子夫人　あまりそういうことで、潔癖というようなことはないですね。

伊藤　そうですか。いままでお話を伺っていた感じで、親分衆というのは、どういう感じになるのか、不思議に思っていたんですよ。

哲子夫人　面白かったわね、武田さんのおやじさん。犯人を匿った

りなんかする人だった（笑）。逃げてる犯人を、追われてる人を匿ったりしたことがあるじゃない。まるで時代劇みたい（笑）。

伊藤　いやあ、竹本先生が時代劇の一コマになるとは思わなかったので、ちょっとびっくりしたんです（笑）。それは、武田さんは武田さんで、後援会は後援会で、別にあるわけですか。

哲子夫人　最初の時は、後援会なんてないですからね。本当の、労組と、武田さんのだけで……。

竹本　後援的な活動は、浜松では医師会の会長をした山本（正）さん。その人が、僕と馬鹿に気が合ってね。市内に非常に力があった。婦人科医だったかな。だから、相当影響力があったですね。

伊藤　でも、だいたい医師会とか歯科医師会というのは、自民党でしょう。

哲子夫人　ええ、自民党です。

竹本　だけど、どういう関係でしたかね。僕の非常に共鳴者でしたよ。医師会は、二人おったんだね。いまの山本さんと、荻野（進）という人で、あれは副会長ぐらいか……。

哲子夫人　あれは、丙午会の関係。

竹本　そうだ、丙午の会の関係だ。

伊藤　その丙午会というのは、ご自分がつくられたんですか。

哲子夫人　いえいえ、あったんです。荻野さんあたりがつくって。

遠州丙午会は山本正氏が設立を推進し、第一回総会を昭和二十九年二月に開く（「わが青春」一七、昭和五十九年四月七日付『静岡新聞』）。

竹本　丙午会は、僕の市民後援会の中心でしたね。

伊藤　そうですか。

竹本　いまの、医師会長、副会長みたいな人から始まって、市内の有力者が、ずいぶんおったです。

伊藤　やっぱり、そういうふうな積み重ねが一万何千票になるわけですね。

哲子夫人　そうですね。

伊藤　それで、統一社会党の浜松支部長になられるでしょう。

竹本　あれは、初めからじゃなかったと思うね。少ししてからだと思う。

伊藤　そうでしょうけれども、しかし統一社会党の時代でしょ。

哲子夫人　第二回の選挙の時が、統一社会党だった。……第三回の時かね。

伊藤　いや、二回です。だから浜松は、同盟系よりも総評系のほうが強いんじゃないかと思うんですけれども……。

哲子夫人　それは比較にならない。

竹本　六対四です。七対三かもしれん。

伊藤　どうして支部長になるんですか。

哲子夫人　あれはきっと、党の本部か何かから言われたんじゃないんでしょうか。選挙じゃなくて、党の本部か何かに言われたんだよね、支部長になったっていうのは。

竹本　何だったかね、ちょっと……。市民に、僕のほうが受けがいいっていうことじゃないかな。

伊藤　他に社会党で有名な人って、いないんですか。

哲子夫人　浜松？　長谷川保。

伊藤　その人も代議士でしょう。

哲子夫人　ええ、代議士で、もう何回もやっています。

伊藤　その人が支部長じゃなくて……。

哲子夫人　あの人は、それまで県のほうか何かをやっていたんじゃないかな。

伊藤　何で左派の強いところで支部長になられたのかなと思って、ちょっと不思議な感じがしたんですよ。

竹本　僕が支部長になるのは、ちょっと飛躍的だったですよね。だけど、左派の浜松の工場の労働組合の人が、どういう関係ですかね、僕のファンになっちゃった。

哲子夫人　あれは保育園の関係。

竹本　だから、国鉄工機部の労働組合のボスが僕のファンになって、それでうちの事務所が工機部（国鉄浜松工場）のすぐそばにあったもんだから、行き帰りによく寄って、飯を食ったりしておった。そういう関係で……。

伊藤　その頃は、もう鉄労ですか。それとも国労でしたか？

哲子夫人　鉄労と国労とあったわけですかね。

伊藤　まだ国労だったんですかね。

竹本　労組の最後の対立は、もう行った時からあったと思います。

伊藤　浜松は、あとで鉄労になるような人達が、だいたい主導権を持っていたんですか。

哲子夫人　そんなことないわね。浜松は、やっぱり工場が左派国鉄で、駅のほうが国労でね。鍋山さんの、それこそ息のかかった人。

竹本　駅は右で、工場のほうは左。

哲子夫人　浜松工場というのは、二千人くらいいる工場です。あそこが左派だったの。

伊藤　そうですか。でも、いまのお話は工機部ですよね。

哲子夫人　ええ、だからその工機部の人とは、まともなことでなくて、新築祝いに呼んだり何かして……。あの人、いつもうちに寄ってビールを飲んで行っているうちに、だんだん親しくなっちゃって……。

伊藤　個人的な関係ですか。

哲子夫人　ええ。

伊藤　じゃあ、工機部の支部として応援してくれたわけではないんですか。

哲子夫人　それこそ工機部の支部は、「竹本を応援するな」というようなことだったんじゃないですか。工機部に、すごい人がいたのよね。

竹本　ボスか？　何て言ったかね。

哲子夫人　すごい選挙上手で。

伊藤　それは左派ですか。

哲子夫人　左派で、すごいのがいたんですよ。

竹本　左派の連中は、僕の経済論には共鳴しとった。資本主義の批判はね。

哲子夫人　そう思ってるけど、本当は敵にされたんですよ。

伊藤　それで、日本社会党の浜松支部長は分かるんですけど、他に何か党のなかで役職は持っていましたか。

竹本　支部長になる前は、何もなかったと思うね。

伊藤　党の県連の政策審議会長というのは、記憶していますか。

竹本　あまり……。

伊藤　日中文化交流協会理事には、ご記憶がありますか。

竹本　日中関係は何かあったけども、名前だけですよ。記憶はないです。要するに、長谷川代議士がずっと前から当選していますから、ほとんどその地盤だったんだけれども、その足元に僕のファンがどんどん増えたわけだ。それで、ますます喧嘩が激しくなった。

社会党分裂、民社党の結成

伊藤　この第二回の選挙の時に、日本楽器が入ってくるでしょう。日本楽器は、組合が支援したんですか。それとも、会社も支援したんですか。

哲子夫人　統一社会党の時は、日本楽器は労組が支持したかもしれないわね。統一の時は、中立系はあまり圧がかからなかったからね。だから、たぶん支持したんじゃないでしょうか。

伊藤　後で、日本楽器は全面的に支持したと。

哲子夫人　二回ぐらい、社長が一所懸命になってやったことがあったわね。

竹本　日本楽器というのも、名前は派手で、数も多いんですけど、思想的には明確なものは持ってなかったね。だから、あるところまでいって、僕のほうへ引っ繰り返っちゃったりね。

伊藤　でも、ずっと支持していたわけではないんですね。

哲子夫人　労組のほうはね。

伊藤　会社のほうは？

哲子夫人　会社のほうは、二回ぐらい支持したでしょう。それから一回、全然違った人を支持した時があったね。あの社長、ちょっと気まぐれなんですよ。

伊藤　社長は、何て言いましたっけ……。

哲子夫人　川上（源一）。

伊藤　それで、奥様の本を読んでいると、「企業ぐるみ選挙」だと。

哲子夫人　ええ、二回ぐらいやったの。

季武　この第二十八回（総選挙）の時は、川上さんは自民党の候補者を推したと思うんですけど。それで、労組は竹本さんのほうを……。

哲子夫人　誰だったっけ……。高原さん……。実力者の重役が竹本を支持したもんだから、それでだんだん社長も支持するようになったんですよね。

「日本楽器の高原文六氏も後援会づくりには格別の工夫と熱意とを傾けていただいた」（「わが青春」一九、昭和五十九年四月十四日付『静岡新聞』）。

竹本　あれも、長谷川支持だった。それがいまの高原、その他二、三人、僕のファンが出来て、だんだんこっちに向いてきた。最後は社長が算盤で、僕が中央に顔があることを知って、何とか僕を利用したいという意味で……。中央や何かの顔のつながりが、左の代議士よりも僕のほうが数倍大きいから。

哲子夫人　キジを売るのを頼まれて……。あそこの社長のところに山があって、キジを飼ってるんですよ。農林省か何かに世話をして上げてね。それで、馬鹿に喜んだみたい。

伊藤　結構、いろいろ実利もあるんですね。それで、一般的な選挙の話ですけれども、公認候補になると、いったいどのぐらい党本部はお金を出してくれるんですか。

竹本　……公認料、もらったかなあ。ちょっと、覚えてないな。

哲子夫人　最初の時は、西尾さんがくださったわね、個人的だか何だか知らないけど。

伊藤　分かりませんか？　公認料なのか、西尾さんの資金なのか……。

哲子夫人　分からない。新聞紙に包んでくださった。

伊藤　やっぱり、あの頃は新聞紙ですか（笑）。厚みがありました？

哲子夫人　ええ、割合とたくさんあったんじゃないでしょうかね。だけど、何回も落ちたから、終いには、もう党ではくれなかったみたいですよね。

伊藤　でも、公認料っていうのは、いちおう決まったものをくれるんじゃないんですかね。

哲子夫人　民社党は、あまりくれないよね。

竹本　くれたことないね。

伊藤　民社党は、だめですか（笑）。

黒沢　特に、一回から三回までは左右の党の激突ですから、党として、本部としてじゃなくて、派閥として、右派なら右派から行ったんでしょうね。

哲子夫人　春日（一幸）さんとか、ああいう方が少し援助してくだすったんじゃない？

伊藤　三回目の前に、昭和三十四年に知事選に出られるということがありましたよね。

竹本　どういう経緯だったかね、知事選に出た。第一は、左には候補がいないということだね。だから、僕はとにかく、自分の選挙地盤をつくるのにいいチャンスだということで、喜んで出たですね。

哲子夫人　第一、統一で一緒にやったからね。だから、いままで歩かないところをいっぱい歩いて、ものすごく勉強になったの。

竹本　だから、知事選はプラスになったですね。

哲子夫人　抱き合わせで歩くんです。左派のほうなんか、キューッと組織が締まっているから、市会議員の候補と、県会議員の候補と、市長の候補と、県知事の候補というふうに、四人で歩くんです。会合なんかでも、その四人が出ることが出来るわけ。だから、いままで行ったことのないような工機部へやらにも、みんな顔出しが出来たのね。

伊藤　じゃあ、その後の選挙に、ずいぶん役に立ったということですか。

哲子夫人　ええ、そうなの。すごく役に立った。

伊藤　でも、統一は、この時までですよね。

哲子夫人　でも私は、とても、がっかりもしたんです。あんなに違うものかと思って……。そう言っちゃ何だけど、全繊の選挙とね。

伊藤　全繊は、だめですか。

哲子夫人　だめと言っちゃ悪いけれども……（笑）。

竹本　それは、四倍ぐらい違うね。千人おったって、全繊はほとんど女の子でしょ。その上、選挙の訓練がないんだから、まったく烏合の衆ですよ。左派はその点は、いわゆる筋金入りが多い。ことに国鉄は、左派の中心ですからね。

哲子夫人　教組やらね。

伊藤　全逓もあるでしょう。

哲子夫人　たとえばポスターを貼りに行くんでも、各学校、それから国鉄バスとか、そんなのが全部使えるんですよね。運動員になるんですよ（笑）。本当に、うらやましかったです。

竹本　教組はインテリが多いから、そのうち僕に取られちゃった。

伊藤　それで、次の六番のところを見てください。社会党が分裂しますよね。後で民社党になりますが、西尾さんが追い出される。その時は、大会に出席されていましたか。

第五回質問要項の第六番。――この年（昭和三十四年）の九月の社会党大会で、左派が西尾末広氏を統制委員会にかけるという提案をして可決され、

西尾氏を中心にして離党して社会クラブをつくりますが、この大会にはご出席だったと思います。この分裂騒動を、どのようにご覧になっておられたのでしょうか。やがて河上派の離党議員と合同して民主社会主義新党準備会が結成され、民主社会党になっていきますが、先生は西尾グループとして行動されたのでしょうか。河上派は分裂して、河上丈太郎自身は社会党に残留しますが、この辺の事情をご存知でしょうか。

竹本　大会があったら、出席したでしょうね。僕は、とにかく初めから終いまで、左派には行ったことないですよ。だけど、西尾さんの小使的な役割は、一切やってない。

伊藤　付いて行っただけと。じゃあ先生は、西尾派と言っていいんですか。

竹本　西尾派というかね……。派とか、何とかというのはあまり意識したことはないですね。

哲子夫人　あんなにお金をくれたんだからね（笑）。

伊藤　それは、そうですね。

竹本　お金、くれたか？

哲子夫人　最初の時に、ご挨拶に行ったら、お金をくれたわよね。

竹本　そうか、覚えてないな。

伊藤　でも、右派だって、西尾さんの他に河上丈太郎の一派もあるでしょう。河上派なんていうのは、河上さんがクリスチャンだしね。

哲子夫人　でも、応援に来てくだすったわね、河上さんは。

伊藤　でも、河上さん自身は、左派に残るんですよね。

哲子夫人　だけど、その前にね。それから、浅沼さんもね。

伊藤　分裂の時は、どういうふうにお考えだったんですか。

竹本　いや、分裂の時は、僕はもちろん右ですよ。

伊藤　もちろん、そうでしょうけど……。

哲子夫人　あの時、新聞記者が「新党、新党」って言って、みんないい気持ちになっていたのよね。新聞は、新党が出来たって言うんで、かなり……。みんなも割合と無責任に、「いい」って……。そう言う人が、浜松辺りにいてね。だから、案外、いいと思ってたんじゃないかしら。

竹本　その時は、はっきり覚えてないけどね。

地盤固め——東海学院の設立

伊藤　ちょうど、その年ぐらいに東海学院をつくられるんですね。

竹本　要望があったからね。

伊藤　奥さんがつくったわけじゃないんでしょう。

哲子夫人　私は、ブルドーザーで行った後をならしただけの（笑）。

竹本　要するに僕は、学校をつくれば一つの地盤にもなるし、むしろ賛成だったですね。だけど、町のなかにも、そういうものを欲しいという声があったですね。

伊藤　だけど、学校をつくるのには資金が要るでしょう。

竹本　お金は、いくらもしやせんでしょう。

伊藤　要るでしょう。だって、学校をつくるんですから。

哲子夫人　お金は、もう何だか知らないけど、小学校の古校舎をもらってね。

昭和三十四年二月二日の発足当初、学院は浜松市鴨江の元洋裁学院の校舎

二教室を間借りしていた。その後、市の協力により、旧兵舎で旧北星中学校舎の払い下げを受けると、学院用地が決定し、同年七月十二日に校舎を三方が原から東伊場に移して、上棟式を行った。この間、平山（博三）市長（当時）、元浜松北校長の皆川氏、弁護士の白石信明氏、経営者協力会長の松井貫之氏、中部中学校ＰＴＡの大鹿武夫氏の尽力が大きかったという（『東海学院のあゆみ―十周年記念誌―』昭和四十四年、竹本文書六―六五、五～七・二四頁）。

伊藤　「もらって」と言ったって、ただじゃないでしょう（笑）。

哲子夫人　さあ、どうでしょう。それで、いちばん安い建築屋に建ててもらったら、嵐があったら傾いちゃったの（笑）。

竹本　古校舎をもらったりなんかしたからね。学校をつくるのに、金は、特に要ったという印象は残ってませんね。

哲子夫人　だから、あなたがお金を使わないから、みんなが苦労したのよ（笑）。だって、初めは水道も引いてくれなくてね。終いには、引きましたけどね。中学校が、すぐ隣だったのね。竹本が、「水ぐらい、中学にもらいに行けばいい」って。そうすると、私が生徒の出席を取るでしょう。「何々くん！」「水をもらいに行った」っていうの（笑）。どうにもしようがなくて……。

竹本　学校をつくる時に、金の心配をしたことはないけどね。

伊藤　それは、ご自分が心配しなかったということでしょう。誰かが心配したに決まっているんです。先生は、理事長ですよね。どういう人が理事になったんですか。

哲子夫人　初めは校長だったのよね。

伊藤　ご略歴には、理事長兼校長と書いてありましたけど……。

竹本　校長だな。理事長というのは、誰がやったかね。

伊藤　ご自分でしょう。

竹本　荻野さんか。

哲子夫人　ずいぶん偉い人を呼んで来ましたよね。白石（信明）先生とか、山本（正）先生、荻野（進）先生……。みんな、お医者さんや何かを理事に呼んで来たんですけどね。あれは、中部中学校ＰＴＡの大鹿（武夫）さんが、中学浪人が出て困っていた。「みんな不良化するから、何とかしてくれ」って言われて、それでつくったんです。中部中学のほうの応援が、だいぶあったんですよね。

歴代理事のうち、白石弁護士、山本・荻野両医師らは遠州丙午会のメンバーでもある。皆川（英夫）氏は、夫人が東京女子大学出身で哲子夫人の先輩に当たり、後に竹本氏の選挙事務長まで務めた（『八十年短き一夜の夢なりし』一二〇頁、『選挙裏方三〇年』一八四頁）。

竹本　「学校をつくってくれ」って言って来たのは、誰だった？

哲子夫人　大鹿さん。

伊藤　大鹿さんというのは、どういう人ですか。

哲子夫人　洋裁店なんですけどね。中部中学のＰＴＡの会長か何か。

伊藤　それで、生徒から授業料を取って、運営したわけですか。

哲子夫人　そうです。

伊藤　この頃は、竹本先生は選挙の時以外も、ずっと浜松におられたんですか。

哲子夫人　いいえ。半分もいなかったわね。選挙の時以外でも、東京が多かったですよね。

伊藤　僕は、それがよく分からないんですよ。東京へ何しに行っていたのか……。

哲子夫人　私、分からないけど……。

竹本　それは、ちょっと分からんね。ただ、僕は企画院育ちで、官僚のベストメンバーみたいなグループを持っていた。その連中との会合は、ずっと続けていましたから、そういうことはあったと思う。

伊藤　たとえば、どういう人ですか。

竹本　要するに中心人物になった人は、みな、その前から常時連絡があったわけですね。飯田橋に産業組合の事務所がある。あそこで、宮部さんとか永山貞則とか、それから堀木鎌三とか千葉三郎とか……。それから、松前。そういう連中と、ずっと会合を持ってた。事務局長が、だいたい僕だね。そういうことをやるので、顔のつながりは、ものすごく広いです。

伊藤　東京で……。

竹本　ええ。それは、ずっと維持しておったんですね。企画院時代にも、僕はだいたい、会合はよくやったほうですね。だから、それがみな、一つの地盤になったわけですよ。

伊藤　もう、そういう人達が、東京でいろんな重要な職に就いたりしているわけですよね。

竹本　ええ、ずっとね。

伊藤　だから、東京での地盤というのは、そういうことですね。

竹本　東京ではね。

伊藤　先生は、選挙の時以外は？

竹本　当選する前は、半々でしょうかね。

伊藤　奥様は、だいたい浜松にずっとおられたわけですか。

竹本　ええ、ずっといたの。

伊藤　東京には、あまり行かないで？

哲子夫人　ほとんど行かなかったですね。家も売っちゃったから。

伊藤　じゃあ、家もないのに、どこにいたんですか。

哲子夫人　あそこの家を売っちゃってからは、鎌倉にうちの母がおりまして、鎌倉なんかにも世話になったりしていましたね。初めは家があったから、妹たちに留守番をさせて、自分はしょっちゅう東京へ帰っていましたけどね。だから、当選するまでは家がないから、私なんかも何か用があって東京に来ると、第一ホテルに泊まったりね。

伊藤　じゃあやっぱり、ご自分もホテルに泊まったりされていたんでしょうね。

哲子夫人　でも、自分一人では、なかなかホテルなんか泊まらないと思うんだけど……。お金がないからね。

竹本　「科学と政治の会」というのをつくったんですね。

伊藤　それは、ずーっと続いてるんですか。

哲子夫人　いやいや、それは続いてはいないね。

竹本　ちょっと覚えてないがね。

哲子夫人　浜松に行ってからは、その「科学と政治の会」は関係ないでしょ。

竹本　いやいや、堀木鎌三や松前さんとの関係だから、最後まであった。

哲子夫人　講師も、してたからね。

伊藤　何の講師ですか。

哲子夫人　東海大学と日本体育大学のね。

伊藤　それは、ずっとやってたんですか。

哲子夫人　ええ、それは、しばらく行ってましたね。

伊藤　だけど、当選するまで、ずっとじゃないでしょう。

竹本　月に一回か二回か、講義に行くだけですよ。

哲子夫人　二、三年行っただけだわね。

伊藤　そんなものですか。そうしたら、いったい東京で何をしていたのかなあ……。

竹本　東京にいる時、家はどこにおったかな。

哲子夫人　だから、東京の家を売っちゃってからは、家はなかったわけよ。鎌倉に時々……。だけど、鎌倉も遠いからね。どうしていたのか知らない。他には……。弟も横浜だったし……。

伊藤　そんなにしょっちゅう離れていて、心配じゃなかったですか。

哲子夫人　心配しなさ過ぎちゃったんです（笑）。私、心配しない質なのね。気楽な質なの。

伊藤　じゃあ、奥様が東海学院で、ずっと教えておられたわけですか。

哲子夫人　まあ、中学浪人ですからね。小学校の校長をしたような方とか、中学校の先生をしていたような、歳を取った方がいらして、そういう方のほうが向いているからと。私は、「難しいから奥さんやってくれ」って言われて、文法とか。

伊藤　国語のですか。

哲子夫人　文法とか文学史みたいな、ちょっとのことだけ教えてましたけどね。男の子の、それこそ悪い子で、教えるのも大変でしたしね。

伊藤　経営としては成り立ったんですか。

哲子夫人　初めは、たいそう良かったんですよ。初めは、四十人ずつぐらいの二クラスでやって……。塾の先生を講師に頼んだら、その先生に引抜きをやられちゃってね。竹本がドイツに行った留守を見計らって、やられちゃって、それでもう生徒が十人ぐらいになった時があるんですよ。その時なんかは、大変だったんですけどね。

伊藤　でも、いちおう、その後ずっと……。

哲子夫人　それからは、だんだん、中学校の校長なんかをしていたような、優秀な方が教えてくださったりして、割と評判が良くなったもんだから、割と良かったんですよ。

伊藤　それで、その翌年は安保の年で、選挙がありますけれども、安保の時は、どういうふうになさいました。

昭和三十五年十一月の衆議院選挙。

竹本　反対か、賛成かということか……。

伊藤　ええ。

哲子夫人　右派というか、同盟のほうは、あまりやらなかったのね。だから、やらなかったんじゃないですかね。同盟系の人達は、あまり安保のあれに入っていなかったでしょう。

竹本　反対はしない。僕も、むしろ安保は反対じゃないですね。

伊藤　安保の後に、選挙があるんですよね。その選挙のことについては、ここに「竹本経済研究所」って書いてありますけども、何か実態のあるものだったんですか。

哲子夫人　最初に行って、家に看板を掛けたんですよ。それのことじゃないかしら。

竹本　経済研究所というのは、ちょっと記憶にないですけどね。ただ、中小企業の相談というのはあった。

昭和四十四年九月現在の「経歴書」には、主な現職の一つとして「遠州中小企業経営相談所長」とある（『東海学院のあゆみ』一五八頁）。

哲子夫人　看板を掛けたわよね。そうしたら、おばあさんが二人やって来て、「お金を貸すところかと思った」って（笑）。

伊藤　それは傑作ですね（笑）。

哲子夫人　その程度で、浜松では全然、竹本は知られてなかった。

竹本　そうそう、そいつは覚えてる。

季武　この時から、浜松市の保守的な有力者が支持し始めたというふうになっているんですけど……。白石弁護士って言うんですか。

哲子夫人　この方は、だいたい第一回の当選した時の選挙事務長で。この方がもう選挙ボスで、頭が良くて、もちろん自民党のほうだったんですけどね。

伊藤　それが、ちょっと分からないんですけど……。

哲子夫人　白石先生も同い歳ぐらいで、若い時はやっぱり左だったそうです。

竹本　町の勢力は、白石さんと、山本という病院長の二人が、いちばん力があったですね。あの二人が支持してくれたということは、当選の大きな原因でしょう。

伊藤　でも、この時は惜敗しちゃったんでしょう。

哲子夫人　ええ、まだその時は選挙事務長でなかったんです。

伊藤　でも、いちおう応援はしてくれた？

哲子夫人　応援はしたけれども、様子を見に入ったぐらいのことでしたね。労働組合がやったんです。

『選挙裏方三〇年』一二二頁に、哲子夫人は、「私が浜松教会員であったおかげで白石先生と主人も親しくなり、先生が選挙事務長をして下さったおかげで第一回の当選を果たしたのだから」と書いている。白石氏とは、丙午会と教会という、二つの接点があったということらしい。

季武　次回からは白石さんが中心になって、竹友会という後援会ですか。

伊藤　まだ、竹友会までいかないんですね。

竹友会の結成そのものは、かなり前かもしれない。

「浜松でいよいよ第一回の立候補をするときまったとき、私は八谷さんはじめ竹本の親しい友人に集まってもらった。また途中でやめるといい出したら今度は大恥をかいて人の前に出られなくなると思ったからだった。竹本には父親も兄もなく、相談に乗ったり意見をしてくれたりする先輩もないので、いつまた気が変わるかわからない。竹友会という竹本後援会を作り、選挙に出るときも、やめるときもみんなの意見を聞かなければならないようにしようと思ったのだった。竹本に忠告したり意見したりしそうな人はあまりいなかったが、それでも私一人でいうよりはよかった。社会党右派の人たちは党から頼まれて立候補しても一回落選するとそのままやめてしまう人が多いが、竹本はその竹友会のせいもあったのか、一回落選したあとでいちはやく私が浜松に引っ越してしまったためか、気の短い、気の変わり易い竹本にしては三遍も落選してもあきらめずとうとう当選にこぎつけたのであった。」（『八十年短き一夜の夢なりし』二〇〇頁）。

哲子夫人　ええ。まだ陰ながらの程度だったですね。それで、その次に白石先生が選挙事務長になったら、もうみんなが「今度は勝つ」って言ったんですね。

伊藤　でも、三回目の時も、「今度は勝てる」と思ったでしょう。

哲子夫人　それは、労働組合の人が思ったの。それは、なぜ思ったかと言うと、一万七千五百票が、その次に三万五千になって、倍になったから、三万五千がまた倍になれば、当選すると（笑）。それだけのことなんですよ。

伊藤　でも、人気はものすごくあったわけでしょう。

哲子夫人　ええ。だから、倍になったということで、また今度も倍になると思ったぐらい、人気があったからね。

伊藤　でも、倍にはならなかったけど、ずいぶんまた増えたわけでしょう。

哲子夫人　ええ。やっぱり一万七千増えたんです。

竹本　毎回、増えたわけだ。

伊藤　それで、結局次点ですか。

哲子夫人　次点と言うんでしょうかね。七万ぐらいなきゃ、当選出来ないんですから。

竹本　当選するには、七万二千だ。

哲子夫人　それで、新聞が面白がったのは、第一回の当選した時と、その次に当選した時と、票が全部同じだったのね。全然、同じだったの。それで新聞に出たんですよ、珍しいって……。

伊藤　当選してからですね。

哲子夫人　珍しいって、新聞に出たのね。だって、死ぬ人もいれば、越す人もいるし、新しく入ってくる人もいるでしょ。それなのに、どうして、こんなに同じになってるんだって……。歴史に残るんじゃない（笑）。

（休　憩）

初のヨーロッパ旅行

哲子夫人　元市長の横光さんが支持することになったのは、後藤文夫っていう人がいましてね。あの人が竹本の五高の先輩で、出入りしてたんですよ。そうしたら、横光さんの同級生か何かでね。それで、東京から、「竹本さんを頼む」って電話してくださって、それで応援してくださったの。

この「横光さん」？

伊藤　いままで後藤文夫さんの名前は、全然出てこなかったように思いますけどね。

哲子夫人　どういうわけだか、後藤さんの家によく行ってましたよ。私は知らないけど、あの奥さんは子爵かなんかの出の方なんですってね。

伊藤　後藤文夫さんとのお付き合いは、いつ頃からですか。

竹本　後藤さんは、要するに企画院時代でしょうけどね。彼の自宅が、渋谷の駅のすぐそばだ。金光町か。後藤さんは、確か五高ですよ。だから、五高の関係だったかな。山崎達之輔と後藤隆之助の二人は、僕の先輩でね。それと、いまの堀木さん。

伊藤　後藤隆之助は、また別でしょう？

竹本　いやいや、後藤文夫だ。

伊藤　後藤隆之助さんも知ってるんでしょう？

竹本　後藤隆之助は、勝間田系の親分だ。

伊藤　そっちのほうの親分ですか。何となくよく分かりました（笑）。

竹本　隆之助は、なかなか力があったけど、僕はあまり親しくもないし、特に好意は持ってなかったね。後藤文夫は、非常に懇意だったですね。あの人は真面目な官僚で、優秀な官僚で、そして政治家的な広がりはなかった。だから、私がいちばん個人的に懇意だったのは、先輩では山崎達之輔です。山崎さんは、後藤なんか初めから官僚として問題にしなかった。馬鹿にしとった。だけど、後藤さんは官僚としては、それなりに一個の人物だった。

とにかく、あの人は勉強をよくしましたよ。それで、僕はロイド・ジョージの本を何度か持って行った。それは面白いから、内容をちょっと話したことがある。その本を確か、読んだんじゃなかったかね。それから、労働党の関係の書物なんかも僕が教えて、後藤さんはとにかく読んだですよ。だから、官僚の優秀な、真面目な存在だったですね。だから後藤さんは、戦争中のことでも何でも、閣議のことをいちいち僕に話してくれた。閣議の様子を僕に全部話してくれたのは、山崎達之輔と後藤文夫だ。この二人は、大事な問題はね。

山崎達之輔なんかは、僕が非常に気に入っている先生。自宅に何度も行った。それで、山崎達之輔の一の子分で……何て言ったかね。有名な代議士がおった。官房長官か何かやった、当時の党の幹部で、山崎の子分だけど、あの人なんかが来ても、僕が話してる時は待たしているんだ。山崎さんは、そのぐらい信用してくれた。あの人はやっぱり真面目だから、批判を聞くんですよ。どういう意見か、なぜそうなるかというようなことを、山崎さんは聞いた。後藤さんは、本を読むほうが中心でしたね。「これを読んだらいいですよ」とか。だから、確か労働党の本なんか読んだんですよ。山崎さんは、本は読まなかったけれども……。山崎、島田俊雄、あの二人が自民党の大幹部でしょ。

伊藤　政友会。

竹本　だけど、大事なことは、全部話してくれたね。

伊藤　じゃあ、かなり古いお付き合いなんですね、山崎さんなんかとは。

竹本　ええ。あれは大臣をした人で、何て言ったかな。政友会の幹部で、山崎さんのところへよく来ていましたよ。だけど、いつも待たしていた。

伊藤　三回落選して、四回目に当選なさるんですけれども、その前に片山さんのお供をして、ヨーロッパに行かれますね。そのことを、ちょっと話してくださいませんか。どこへ行かれたんですか。

哲子夫人　何しろ、一月かかったのね。

伊藤　もっとかかったんじゃないですか。

哲子夫人　どうだったかしら。長くかかったわね。全部行ったでしょ。ドイツもイタリーも行ったし……。

昭和三十六年六月、クリスチャン・アカデミーの招待で五十日間の欧州旅行に出かける。イギリス、西ドイツ、フランス、イタリー、オーストリー、オランダ、エジプト、デンマーク等の政治情勢を視察した（『私のなかの昭和史』一三一頁、昭和四十九年四月現在の「経歴書」）。

竹本　全部行ったのかね。覚えてない。

伊藤　だって、外国に行かれたの初めてじゃないですか。

竹本　僕が行ったのがですか。初めてかもしれんな。

伊藤　どんな印象だったのか、ちょっとお聞きしたいんですが……。

哲子夫人　何しろ、あの時はスライドのフィルムをたくさん買って来て、写して回ったわね。

竹本　福島なんかも行った時だろ？

哲子夫人　そうそう。

伊藤　星島（二郎）さんと、松浦（周太郎）さん？

竹本　そう、星島さんは一緒に行ったんではないが、イギリスで一緒になったんですね。

伊藤　松浦周太郎さんは？

竹本　あれは、やっぱりイギリスだったかな。夕飯か何かが一緒になった程度ですよ。

伊藤　じゃあ、片山さんと一緒に行ったのは、先生だけですか。
竹本　いや、日石の福島君というのがおったしね。それからあと、民社党の受田新吉さんが一緒だった。
哲子夫人　何か、ぞろぞろたくさんだったわね。
竹本　同盟関係の、何とかという人がおった。
哲子夫人　あれは後の時じゃない？　同盟の人と一緒だったのは、私と一緒に行った時じゃない？
竹本　そうだろう。
哲子夫人　片山さんの時は、あなたは……。
竹本　ヨーロッパには何度か行ったから、わけが分からんね。
伊藤　片山さんと一緒に行ったのは、何のために行ったんですか。
哲子夫人　クリスチャン・アカデミーじゃない？
竹本　そうだ、クリスチャン・アカデミーだ。
伊藤　クリスチャン・アカデミーって、何なんですか。
哲子夫人　ドイツにアカデミーがあるんですよ。
伊藤　そこから招待されたか何かですかね。
竹本　クリスチャンの、一種の文化団体みたいなもので、各国の政治家が、みなメンバーになっていました。そこで、向こうへ行った時も、イギリスへ行った時も、総理以下何とかかんとかに、みな会わせてくれたですね。
伊藤　それはドイツですか。
竹本　あれはドイツへ行った時か……。
哲子夫人　クリスチャン・アカデミーは、私がくっ付いて行った時に、片山さんが「この前に、ご主人と一緒に来た」って言ってたから、その前に、あなたが行ったんだなと思ったの。
竹本　とにかく、片山さんと行って……。そうだ、ドイツにも行ったね。それからイギリスへ行って、それで労働組合の会合やなんかにも、いろいろ出たことがあるんですね。
伊藤　それは、後の時の話と違いますか？
哲子夫人　さあ、それはちょっと私もよく知らないけど……。
伊藤　何をしに行ったわけですか。
竹本　ただ、いわゆる旅行に行ったようなもんで、使命とか具体的なものはなかったですね。
伊藤　目的は、特にないと。
竹本　ただ、行ってみようというぐらいのものです。
伊藤　それは分かりますけど、クリスチャン・アカデミーって、竹本先生は、その時はクリスチャンじゃないでしょう。
哲子夫人　いや、クリスチャンでなくてもいいんです。クリスチャンと話をする場所があって、話をする相手はクリスチャンでなくてもいいわけ。
伊藤　そうですか。片山先生はクリスチャンですけどね。
黒沢　日本にもクリスチャン・アカデミーというのが財団法人であるんですよ。
哲子夫人　いま京都にあって……。
黒沢　確かその頃は、社会党に杉山元治郎という人がいて、彼がずっと長い間、理事長だったんです。
哲子夫人　あっ、杉山さんは一緒に行かなかった？
竹本　先に行ったんだ。
黒沢　世界的に支部があるんでしょうね、きっと。
伊藤　一種の文化団体なんですかね。

黒沢　そうでしょうね。やっぱりクリスチャンの政治、経済……。

哲子夫人　何しろドイツ人だから、議論するのが好きだから、何とかの議論の会ばっかりやって……。だから、日本でも京都で……。初めは大磯にあったのよね。

黒沢　大磯アカデミーハウスというのがありましてね。

哲子夫人　でも、潰れちゃったのよね。

伊藤　初めてヨーロッパに行かれて、印象はどうだったんですか。外国に行かれたのは、初めてでしょう。その時に、ヨーロッパの印象はどうでしたか。

竹本　ドイツの労働者の問題とか、それから英国労働党の政権を投げた後の問題ですね。そんな問題が、ちょっと印象に残ったと思いますがね。

伊藤　ただ、当時、まだ昭和三十六年ですから、日本だってそんなに豊かな時代じゃないですよ。

哲子夫人　それで、まだ行く人は限られていたんですね。何かわけがないと行けなかった。

竹本　だから、僕と福島と、あと誰がおっただろう。もう一人、インテリが来ておったな。それから、社会党の代議士で、おとなしい人だ。これは全然、意見も何もなかった。

伊藤　当時、日本もようやく少し復興してきて、成長し始めたばかりですからね。経済的に、ヨーロッパのほうが豊かだと思いましたか。あまり、そういうご記憶はありませんか。

哲子夫人　私、覚えてるけど、あなた英国に行って、「敗戦国の日本人のほうがきれいな洋服を着て、英国の人は、すごく継ぎの当たった貧乏な恰好をしていた」って言っていましたよ。

伊藤　その時の紀行文みたいなものは、何か書いておられますか。

竹本　何か書いたのがあるかね、どこかに……。

季武　『私のなかの昭和史』というのに……。

哲子夫人　あれは、後のドイツの選挙の時に行ったのじゃないかしら。当選してからね。

伊藤　何か書いておられますかね。書いていると面白いんですけれども……。

哲子夫人　何か演説したんでしょうけどね。あちらで、どうだったとかってね。

伊藤　これ（「ヨーロッパ旅行記」『私のなかの昭和史』六七頁）は、それから十年ぐらい後ですからね。この時は奥さんもご一緒だったんですか。

哲子夫人　ええ、そうなんです。二度目の時に、私は一緒に連れて行ってもらったの。

伊藤　でも当時のことだから、何かに書いているはずですよね。珍しいことですからね。まだ、外貨の持ち出し制限もあるし……。写真をご覧になって、思い出されたら、またお話を伺いたいと思います。

衆議院議員に初当選

伊藤　さて、それで今度は第四回目の、いよいよ当選なさった選挙です。やっぱりその時も、さっきお話がありましたように、支持のいちばんの母体は労働組合なんでしょうが、竹友会が相当大きな働きをし

たということですか。

哲子夫人　今度は相手が白石さんだから、それまでは町の人が出てくると、「何も知らん」と思って、同盟の人は（話を）聞かなかったんだけど、やっぱり白石さんは名前が通っていて、選挙上手で有名だったから、労働組合の人も一任したんですよね。

伊藤　そうですか。労働組合と別にではなく、一緒にやってくれたわけですか。

哲子夫人　ええ。

伊藤　組合と保守系の人達が一緒にやるというのは、なかなか普通は難しいものですけどね。いちばん最初にお伺いした親分さんなんかも、竹友会に入るわけですか。

哲子夫人　はい。その方は慶応を出ていて、なかなか頭がある人だから、白石先生なんかとも親しくしてましたからね。

黒沢　そうすると、インテリ・ヤクザですね。

哲子夫人　そうなんです（笑）。

伊藤　参謀の飯田さんという県議は、民社ですか。

哲子夫人　富士紡。

黒沢　じゃあ、民社党ですね。

伊藤　「唯一人の市民代表」というのがキャッチフレーズだと言いますけれども、何でそうなんですか。

竹本　さあ、覚えてないね。

伊藤　そういうのは、選挙参謀が言うんでしょうからね。

黒沢　「アメリカ追従外交の不可」というのは、いまも変わりませんね。終始一貫、この頃から、これを言っているんですね。

伊藤　そうすると、この選挙の時に、自民党が一人落ちて、竹本さんが入ったということですか。

哲子夫人　足立篤郎さんが落ちたの。

伊藤　だから、長谷川さんというのは社会党でしょう？

哲子夫人　ええ、当選したの。

伊藤　革新系が二人当選したということですか。

哲子夫人　そうなの。

伊藤　でも、竹本さんは半分保守系で。

哲子夫人　だから本当は、社会党は感謝しなきゃいけないわけですね。だけども、やっぱりそう思わないんですね。

伊藤　けしからんというわけですか。

哲子夫人　それこそ、ヤクザなんかが事務所に来ていましたからね。悪く言う人もいましたよね。

伊藤　今度はだけど、竹本先生ご自身も「当選だな」と思っておられたんでしょうね。

哲子夫人　さあ、どうでしょう。

竹本　そうね……。ちょっと覚えてませんね。特に、当選は大丈夫と思ったかどうか……。

伊藤　奥様の本を読んでいると、途中まで、次点と（最下位当選）のあたりをウロウロしていて……というのが書いてありますけどね。

哲子夫人　布団をかぶって、泣いていたんですよ（笑）。それで、髪を洗って、それこそ布団をかぶって泣いていたら、「当選だから、事務所へ出てこい」って言われて、もうこんな髪で行っちゃったわけです。当選すると思わないもんでね。だから、自治会長でも、みんな泣いたんだから。やっぱり、一遍、落ちたと思ったからね。

竹本　「だめだ」と思ったら、当選したんだ。

哲子夫人　足立さんのところで、万歳やったんだからね。
黒沢　そうしたら、みんなこっちは落ちたと思うわね。
伊藤　それは、テレビはずいぶん罪なことをしたわけですね。
哲子夫人　時々ありますね。
伊藤　しかし、七万一千五百六十九票ですから、前よりずいぶん上がったわけですよね。着実に上がってきた。
哲子夫人　そうなんです。
伊藤　やっぱり、その力というのは、さっきおっしゃった白石さんたちの力ですか。それから、前に奥様は、「同情票と言うと、怒るかもしれないけども」と言われましたが、やっぱりそれはあったんでしょうかね。
哲子夫人　そうだと思いますね。
伊藤　ご本人は、どう思っておられますか。
哲子夫人　本人はもう、そんなこと思わないでしょうけどね。
伊藤　同情票というのも、あったと思いますか。
竹本　それはあったでしょうね、非常に。
哲子夫人　三回も落選したんだからね。
竹本　当選する時は、ほとんどが同情票じゃないかね。それは、僕の経済政策や何かに共鳴するから、「あいつを落としちゃ気の毒だ」という、そういう意味の同情票ですね。政策を半分理解した、そういう支持者の支持はあるんで、これも言わば同情票でしょう。そういうのが中心だと思います。
伊藤　同情票の意味が違うんですね。
竹本　選挙の通は、「政策で訴えるのは、あまり効果がない」というようなことを言いますけど、私はそうじゃないと思う。政策で行く以外には、特に「輸入候補」だとか、新しい候補とかは方法がないですからね。だから、私の選挙は、みんな因縁情実じゃないんだから、政策に対する共鳴というか、同情というか、それが中心だと思いますね。私は、だから政党というものは政策さえしっかりすれば、必ず勝てると、いまでも思っている。
伊藤　それが、民社で裏切られるんですよ。竹友会の中心になった白石さんは分かりましたけど、横光元市長さんは、自民党ですか。
哲子夫人　もともとは自民党でしたけど……。あの方は、ちょっと市長をしていて、今度は公選になったでしょ。前、官選の時に市長だったの。それで公選になって、市長に出るという時に、ちょっと長谷川さんと……。長谷川さんに裏切られたか、何かあったんだわね。そういうことがあったから、ちょっと、もう社会党にも自民党にもあまり好意を持ってなかったわけね。それで、後藤さんからも、お話があったから。あまりはっきりと、自民党というグループには入ってはいなかったと思いますね。
伊藤　じゃあ、寺本さんという方は、どうですか。
哲子夫人　寺本さんというのは、私は知らないんだけど……。寺本さんって、磐田ですか。
竹本　知らない。
伊藤　じゃあ、岩崎さんというのは、どうですか。
哲子夫人　岩崎さんは、あの人はだいたいが自民党の人から言うと、ちょっと馬鹿にされて……。本当に、もう庶民が相手なんですよ。だから、自民党だとも言えないような人なんですね。
竹本　あの人なんか、どの程度、我々の政策を理解して共鳴しているのか、ちょっと分からんですね。悪く言えば、要領がいいもんだから。

哲子夫人　でも、浜松の人は、みんな代議士に割と優秀な方が多いの。ですから、田舎と言っても、割合に点が辛いというところがあるんですよ。足立（篤郎）さんでも、竹山（祐太郎）さんでも、太田正孝さんでも、それから栗原さんという方も……。それで、中村孝八ですか、あの人も、そうだったんですよ。割合と、いい政治家がね。いまでも柳澤伯夫さんだとか、割合と頭がありますよね。熊谷弘さんとかね。だから、程度が割合と高いんですね。だから、受け容れられたんじゃないかと思いますね。

伊藤　これから後、ずっと連続で当選されるわけですよね。その間に、支持層が変わったりということは、あまりなかったんですか。

竹本　それはないでしょう。支持層は膨れるばっかりだから……。

哲子夫人　でも、票は同じだから（笑）。全然、それから増えなかったんだから。竹本さんの指定席って言われたぐらいで……。

黒沢　いやいや、十万を超えたことがありますよ。昭和五十一年に十万六千票取ったんですよ。

哲子夫人　ああ、そういう時がありましたね。五十一年と言うと、何回目？

伊藤　当選してから五回目です。

黒沢　あとは同じ、七万三千票。

伊藤　だいたい、それぐらいで固定したわけですね。じゃあ、特に新しい人達が入って来たわけでもないし、古い人が出て行ったわけでもない。

哲子夫人　ただ、市長選のことで、ちょっとミソをつけたというか、白石先生と仲違いしちゃって……。

伊藤　浜松市長選挙ですか。

哲子夫人　市長選なんかに出なくてもいいのに、民社党にいても、したいことが出来ないから、市長になろうかと思ったんですって……。うちの父が最後に市長になったから、そう思って……。そうしたら、相談をしない人だから、白石先生にも日本楽器の社長にも相談しなかったんですね。若い青年たちに担がれて、出ようかと思ったんですって……。ところが、鈴木の社長も何も、みな、いままで支持した人が全部反対で、それで仕方がなくやめたから、担いだ人達がちょっと怒ったんですね。それで、また出るって言って、結局やめたので、ちょっと……。

伊藤　それは間が悪かったですね。

哲子夫人　それで今度は、日本楽器の社長が、「竹本を落とせ」って捩り鉢巻でやったもんだから、ひどい目に遭っちゃって……。

黒沢　でも、当選したんでしょ。

哲子夫人　当選したんです、最後の時です。だけど、本当に大変でした。すごかったですよ。あの人、ちょっと気が変なの。

伊藤　気が変な人が、こっちを向いてくれればいいんですけどね（笑）。

哲子夫人　だから、こちらもやっぱり油断したのよね。

伊藤　当選するまでの間に、選挙違反という問題はありませんでしたか。

哲子夫人　ありましたよね、つまらないことで。三田明の……。

伊藤　何で三田明なんですか。

哲子夫人　それが、白石先生の息子さんが音楽家で、頼まれたか何かで券をたくさん買ったから、事務所の人にくれたわけですよ。それでみんな、やってもらう人に、お土産に持って行ったりしたんですよね。それで、選挙違反になっちゃったわけ。あの頃は、竹本も相当恐

れられていたから、事務所にスパイが入ってたの。そのスパイが運転手になって入っていて、それですっかり……。もう、大変だったんです。秘書も選挙違反で捕まって、それから労働組合の岡部さんという委員長も捕まって、大変だったんですよ。

伊藤　当選しちゃったから、竹本先生は東京へ行っちゃうでしょう。

哲子夫人　それで、白石先生から電話がかかってきて、「書類を全部焼け」って言うから、家にいた書生さんと二人で夜中に書類を焼いたり……（笑）。

伊藤　ご本人は当選して、意気揚々で東京に行かれたと思いますけど。

哲子夫人　ええ、そうなんです。私はもう、捕まって監獄へ入っている人達に差し入れを持って行ったりね。奥さんにお世辞を使ったり、大変ですよ（笑）。でも、本当に、ちょっとしたことなんですよね。

伊藤　現金を配ったわけでもないのに、そんな大げさなことになるんですか。

哲子夫人　現金だと、目立たないんです。前に、パン屋さんが捕まったことがあってね。まだ、落選していた頃のことです。パン屋さんの組合が、竹本がパンが好きだったからか知らないけれど、竹本支持でね。選挙をしたことのない人ばっかりだもんだから、純真で、パンに「竹本孫一」って、名刺を付けて配ったのね（笑）。それで、「マルトパン」も、三年間公民権停止になったの（笑）。

季武　新聞なんかを見ていますと、当選される前から、青年層とインテリ層に人気があったと書いてあるんですが、実際に、そうだったんですか。

哲子夫人　そうなんです。家で二水会という勉強会をしたんです、三軒長屋の真ん中の家にいる時に……。

伊藤　いちばん最初の頃ですね。

哲子夫人　それで、もう本当に入り切れないくらい青年たちが……。あの頃は、大学へ行きたくても行かれない人がいっぱいいた時代ですから。いまなら来ませんけどね。大学さえ行きたくない人もいるし……（笑）。高校卒で、上の学校へ行かなかったとか、国鉄の人とか、会社の人達で、優秀な人が来たんですよ。とても熱心に、英国労働党の本とかの勉強会をしていた。

竹本　国鉄の人が多かったね。あれは、優秀なのがおったですよ。

哲子夫人　だから、知事選の時だったか、長谷川さんが感心して、「竹本さんは、いつの間に、こんなに青年を集めた。いい青年を集めましたね」って。いい青年が集まったんです。

季武　その青年というのは、組合とは違うんですか。

哲子夫人　組合の人も入っていました。

竹本　二、三人いたね。

哲子夫人　それから、専売とか何とか、左派のほうの人達も、女の人なんかでね。

伊藤　予備校だけじゃなくて、そういう学校的なことというのは、ずいぶんいろいろやったわけですね。

哲子夫人　そうなんです。私は、ＹＷＣＡで源氏物語を教えたでしょ。

伊藤　それは、浜松のですか。

哲子夫人　浜松。それで、婦人会の人達に割と知り合いがたくさん出来て……。

伊藤　それは、やっぱり選挙ということがあるから？

哲子夫人　まあ、大して熱心にする人はないけれども、でもやっぱり皆さん変わらずやってくれるから。

「政策の竹本」として

伊藤　議員になられてからの活動は、次回にお聞きしますけれども、その前にちょっと、民社のことを伺っておこうと思うんです。だいたい議員になられてからは、民社党のなかで西尾さんの直系として活動されたんですか。

竹本　言葉で言えば不明確だけれども、流れから言えば西尾さんの線は、僕はだいたい賛成でしたけどね。子分みたいな関係じゃなかったですね。

伊藤　親分・子分ではないでしょうけれども、民社党のなかのグループとしてね。民社党も、なかはゴタゴタするじゃないですか。

黒沢　でも、竹本先生の場合は、そういうグループではないですね。

竹本　経路から言えば、西尾さんの関係でしょうね。

黒沢　たとえば西尾さんと曽祢さんとか、そういう関係はかなり密接だったんですけれども、竹本先生は、たとえば西尾にしたって西村にしたって春日にしたって、直系でべったりということではないんですね。

伊藤　いろいろなグループの外側に、超然としているという感じなんですか。

黒沢　外側でもないんですけども、親分・子分みたいな恰好ではないんですね。

哲子夫人　春日さんに言われたでしょ。「白鳥は悲しからずや……」っていう牧水の歌を言って、「竹本君も、少しみんなと一緒にやってくれるといいがな」って（笑）。

黒沢　その通り。

哲子夫人　書記長とか、ああいうことは嫌いでしょ。

竹本　春日さんは、いつも僕に、「もう少し馬鹿になって、みんなと付き合ってくれ」って、よく言った。

黒沢　やっぱり、竹本先生は別格だったですね。政審会長というのが、歴代で竹本先生がいちばん長いんですよ。だから、「政策の竹本」で、誰が委員長になろうと、全部、政審会長は竹本先生なんですね。それから、キャリアから、お人柄からして、自分が権力を握ろうとして党内で策動するようなことをしないでしょう。だから、誰からも嫌われてはいないんですよ。一目置かれているんですよね、やっぱり。そして、実際の政策を全部立案しているわけですから。ですから、先生は誰の子分にならなくたって、いいわけですよね。

伊藤　政審会長は、いつからですか。

竹本　政審会長は十年やったですからね。ずいぶん早くからだったです。僕が二回目に当選した時じゃないかな。というのは、大蔵次官の平田（敬一郎）、それから後の日銀総裁の森永（貞一郎）、あの二人が僕と同じ高校なんです。しかも、二人とも親友なんだ。あの二人が、僕が当選した時でしょうね、二人揃って「春日一幸のところに行ったんだ」と。そして、「竹本は、政策については絶対だ。我々は責任が持てる」と言って、えらく推薦したらしいんだ。それで、春日一幸が後で言いましたけど、「大蔵省と日銀が、あんなに力を入れているんだから、これなら間違いないと思ったので、（君を）よく知らんうちに政審会長にした」と。だから、僕の政審会長は、あの二人のお蔭だ。

あの二人が推薦した。

僕は、数字が好きで五高の理科へ入ったんだ。それから一年経って、初めてだったと思うが、理科から文科へ変わることが出来る制度が出来た。体操以外の全科目について、試験を行うと。それで、一年後の試験でしょ。僕は平田のノートを借りて勉強して、転科の試験を受けて、通ったのは僕一人だ。与太話を言えば、ノートを借りて転科して、それで一学期に百二十人の文科甲類のトップになった。平田が、「ノートを貸すんじゃなかった」と、冗談をいつも言ったけどね。ノートを借りて、平田のお蔭で、僕は文科へ変わった。それから、その平田と日銀の総裁の森永が、春日さんに直談判をやっている。それで、あの二人のお蔭で……。後で春日さんから聞いたんだけれども、「よく分からんけれども、大丈夫だろうと思って、政審会長にした」と。

伊藤　じゃあ、森永さんたちは、春日さんなんかとは親しかったわけですかね。

竹本　そんなに親しいことはないけれども、森永君は大蔵省の官房長をやりましたからね。それで、春日さんは大蔵委員もやったし……。

伊藤　ああ、そういう関係ですね。西村さんになったり、春日さんになったり、委員長はどんどん変わってきますよね。西尾さんは、何で辞めたんでしたっけ……。

竹本　やっぱり、ちょっと限界に来たんじゃないですかね。西尾さんという人は、結局、民社党書記長ですよ。それで、西村さんのほうがよっぽど政策には詳しい。何しろ勉強もしたしね。西尾さんは、政治は勘だけだね。勘は間違いなかったけれども……。だから、ある時期が来たら、ちょっと限界が来たんじゃないですかね。「左か右か」という時には間違いないと思ったけれども、個々の政策については、僕なんかも西尾さんからサジェスチョンを受けたことは一回もないわね。西村さんには、意見がありましたよ。

伊藤　春日さんは、どうですか。

竹本　春日さんは、政治の駆け引きも八面六臂だね。政策にも、組織運動にも、何でもやったね。やれる人でした。そういう意味では、馬鹿にエネルギッシュですね。

伊藤　よく、「春日節」って言われていましたね。

竹本　春日さんも、僕と少し違ったところがあったと思うけどね。

伊藤　それは、政策ですか。

竹本　政策なんかでもね。いちばん僕と違った点は、あの人は僕以上に感情的に「左派反対」だ。僕は、感情的に左派に反対じゃないんだ。政策は反対だけれども、感情論で左派に反対というような要素は、僕には少なかったですよ。春日さんは、もう頭から徹底的に反対だ。そういう点で違っていましたね。だから、少し行き過ぎだなと思って、僕は春日さんにアドバイスしたことが、三回や四回はありますよ。そこまで行かんでいいじゃないかと。一通り理解のある人でしたけどね。

伊藤　少し一般的な話を伺いますが、社会党との関係はどうですか。まったくない？

哲子夫人　個人的には親しい方がいたわね。

竹本　僕は、個人的に社会党で嫌いだという人はあまりいませんでした。いまでも……。

伊藤　じゃあ、社会党との関係は悪くはないわけですね。

竹本　僕は、悪くないと思うね。いまの土井（たか子）君なんか、ものすごく親しいですよ。一つも反対はない。ただ、結論的に政策の面で違うところはあるかもしらん。

伊藤　ずいぶん違うと思いますよ（笑）。

竹本　感情論は、僕はあまりないんだ。

伊藤　共産党は、どうですか。

竹本　春日さんは反共で凝り固まっていた。僕は、そんなことはない。だから、正森（成二）なんていうのは、大蔵委員のなかでいちばん仲が良かった。というのは、彼も僕の質問には賛成が多かった。それから、僕も彼の言うことには、特に反対はなかった。だから、政策面で、対処面か何かの関係で、違うところもあるでしょうけどね。政策の現実の問題で、共産党と僕が違ったことは、あまりないと思いますね。

伊藤　じゃあ、逆に伺いますけれども、反共産主義なんですか。

竹本　春日さんは反共だ。

伊藤　先生は反共ではないんですか。

竹本　僕は反共ではない。

伊藤　その辺りが、社会党左派のような気がしてしょうがないんだけど……。

竹本　だって、資本主義を批判するということにおいては、同じでしょう。しかし、共産党が「暴力革命をやる」と言えば、その時は反対だ。それ以外の経済政策に関しては、僕は一つも反対じゃない。だから、不破（哲三）君だって、いまいちばん僕は仲がいいと思う。それから、いまの書記長（志位和夫）、あれは僕は知らないけどね。

哲子夫人　去年だか、「赤旗」に載ったわね。

伊藤　何で「赤旗」に載ったんですか。

哲子夫人　意見を言ったのが……。

伊藤　その辺の立場が面白いですよね。

竹中　安保は賛成なんですか。

竹本　僕は反対じゃないですね。とにかく、いまの段階において、日本を守るのに安保条約があったほうがいいか、ないほうがいいかということになれば、具体的な措置としては必要じゃないかということでね。

伊藤　日本に軍備があれば、別でしょうけどね。

竹中　現状を踏まえれば安保があったほうがいいということですけれども、憲法九条はどうお考えですか。

竹本　これは憲法論になるけれども、第九条はいまのままに置いておいて、国の防衛問題について、別に一項目立てるということでいいと、僕は思っている。やっぱり、第九条は大きな人類の理想を語ったものだから、それは残しておいたほうがいいと。あれを削ってしまって、反動右翼みたいなことになったら、世界のためにも日本のためにも良くない。やっぱり、将来、世界は平和で一つになるという理念を謳っているんだから、その意味において第九条を親の仇のように扱う必要はない。ただ、現実には自衛隊もあるし、また自衛隊も必要なんだから、そこを一項立てる。備考ではなくて、第二項か第三項に残したらいいという意見です。

伊藤　これは、一つの考え方なんですよね。非常に面白い。それは、他の国の憲法だって、第九条みたいなものはあるんですから。あるんだけど、ちゃんと国防軍も持っているわけだから、それはいいんですよ。その辺も、もう少しこの次に……。今度は議会での論戦の問題になりますので、伺っていきたいと思います。

今日は、本当にありがとうございました。

〈以上〉

竹本孫一
オーラルヒストリー

第6回

[2000年11月15日14:00～16:00]

〔インタビュアー〕

季武嘉也(創価大学教授)

竹中治堅(政策研究大学院大学助教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

政策審議会長として

季武　先生は、昭和四十二年に民社党の政策審議会長になられます。

竹本　当選したのは……。

季武　昭和三十八年ですね。

竹本　そうしたら、だいぶ後だね。

季武　中央執行委員は一年後ですか。その後、昭和四十二年からずっと政策審議会長をやっていらっしゃいますね。そこで、政策審議会というものについて、お話を伺いたいと思います。まず、政策審議会のメンバーは、国会議員なんですか。

黒沢　国会議員ですが、名前は覚えておられないでしょうね。大会ごとに、次から次と替わりますからね。

竹中　何人ぐらいいらっしゃるんですか。

黒沢　二十人ぐらい。

竹中　みんな国会議員の方ですか。

黒沢　国会議員です。

季武　スタッフは、どうなんですかね。

竹本　スタッフは、割に良かったんです。足達英徳君とか梅澤昇平君とかという人がいましたからね。足達君というのは、大阪府立大学か何かの経済学部を出た、非常に優秀な人で、いまでも元気でやってますけどね。スタッフは良かったけど、そう言っちゃ悪いけど、代議士に目ぼしい人はいませんね。そう言うと大変悪いけど、代議士で相談相手というのは……。

黒沢　大内啓伍さんがおりました。政策審議会の事務局長をやっていました。

竹本　審議会におったかね。

黒沢　ええ、おりました。初めの頃は、まだ当選していませんから、代議士じゃないんです。

竹中　大内啓伍ですよね。

黒沢　そうです。まだ、政審の事務局長です。

竹本　だけど、彼が政策を具体的に準備したというのは……。議論はしたけど、まとめて案を出すというのは、あまりなかったんじゃないかね。

竹中　そうしますと、先生は、ほとんどご自身で政策を考えられていたんですか。

竹本　そうです。

哲子夫人　何でも独りで考えるの。

竹本　ワンマンだから（笑）。僕は、そう言っちゃ悪いけど、独りで間に合うんだ。だから、人に頼っていないんだ。手助けしてくれたのは、いちばん役に立ったのは、足達君です。

竹中　どういうことをなさるんですか。

竹本　これは大学で経済が専門だったもんだから、この人は使えましたね。それには部下がおった。しかし、横におって協力した政審の副会長とか会員というのに、記憶に残るものは何もないね。

黒沢　足達英徳、それから大内啓伍がおりました。それから梅澤昇平。

竹本　梅澤君は外交だ。

黒沢　そう言えば、先生、あの方もおりましたよ、満鉄出身の白髪の

米山雄治さん。

季武　そうすると、普通の代議士の方は、どんどん替わっていって、会長だけがずっと替わらないで、会長とスタッフの方で運営されていたんですかね。

竹本　スタッフは、いまの足達君以外には、ちょっと考えつかんね。

黒沢　藤村明さんもおりました。これは農業問題をやっていました。

季武　黒沢さんもいらっしゃったんですか。

黒沢　私は、党本部の書記局のほうにおりました。

竹本　国会議員で、相談相手は誰かおったかね。

黒沢　これはもう、私のほうが知っているかもしれません。

季武　会長としまして、普段は、先生はどういう活動をされていたんですか。

竹本　それは、特に記憶にないけれども、当然のことをしていたでしょうね。民社党としては、何を打ち出していくかということが中心でしょうね。何か、国会で質問したやつがありましたか。……ここ（資料・竹本孫一氏の衆議院本会議における発言要約）に書いてあるね。だいたい、このことでしょうね、当然のこととして……。これは三十九年か。いま問題は、三十八年ですか。

季武　政策審議会長時代の話ですね。

竹本　四十二年……。

黒沢　政策審議会の活動と言っても、第一に政府与党の自民党と、野党の社会主義政党との間には違いがあるんです。自民党は政調会と言って、政調会では国会議員がかなり踏み込んでやるんですけど、民社党や社会党の場合は、かなりスタッフの人達が長い間務めておりまして、そこでいろいろ事務的な作業をやります。どんなことをやっていたかと言うと、国会には常任委員会などの各委員会がありますよね。その各委員会に対応した恰好で、様々な問題が次々と出て来ますね。それに対して、党としてどう対応するかということが、日常的になされております。ですから、竹本先生は政審会長として、全部それを束ねているわけですよ。個々の議員は、それぞれいずれかの委員会に属して、大蔵なら大蔵、社会労働なら社会労働の政策について、専門的に審議はやりますけれども、全体を見渡していたのは竹本先生ですね。

そういうふうに、日常的に国会の常任委員会に対応した恰好で、民社党の政策審議を行い、それから法案の賛成・反対を打ち出していくんです。さらに、そのほかには、民社党独自の政策というものを、党の大会の度に立案していきます。これは、国会から出てこなくても、今度は逆に民社党が打っていくという恰好です。政策審議あるいは政策形成過程で、党独自の主体的な立場で打っていくということも、またあるわけですね。ですから、国会から出て来たものに自動的に対応していく形のものと、党として独自の政策を立案するという、その両方の政策形成過程が政策審議会の仕事のなかにあります。

竹中　そうすると、委員会で各民社党の先生方が審議に参加される場合の、その下調べみたいなものは、政策審議会の事務局の方がやられるわけですね。

黒沢　はい。

竹本　だから、政策審議会は、半分は国会議員の政策のスタッフの代わりに原稿を書いたり、作ったりということが中心だったですね。僕は僕自身の考えがあるから、いまの金融の問題だとか、電力の問題だとか、大きな問題を考えておったということだと思いますね。

季武　たとえば政策審議会で決まったことは、そのまま党の方針にな

りますか。

竹本　だいたいね。

季武　違ったということはありますか。

竹本　いや、別に違った印象はないですがね。

季武　政策審議会の最後の決定は、先生がされるんですか。

竹本　政策審議会としてね。しかし、結局、するとか、しないとか言って、議論になったとか、論議をしたとかということはあまりないと思いますね。自然にまとまっていた。

季武　じゃあ、あまり党内で政策対立というのは？

黒沢　それは、党大会の度に政策を打ち出しますから。そうすると、党大会の議案書の審議という恰好で、そこで議論します。

季武　党大会で、いろいろあると。

黒沢　議案書になるまでの間に議論をし、そこでだいたい成案を得るんです。もちろん、大会でも議論しますけどね。かつて社会党時代は、それが大喧嘩になったけれども、民社党時代になってからはあまりないですね。ですから、先生のご記憶のなかに、そんな大議論になった記憶がないというのは、そういうことだろうと思います。

竹本　だいたい総理の演説に対する質問とか何とか、その日のデイリーワークが中心だね。

季武　次の質問に移らせていただきます。今度は西村（栄一）委員長時代の話になりますが、前の西尾（末広）委員長が辞められて、党としては相当大きな衝撃があったと思うんですね。西尾さんが辞められてから、民社党をどの方向に持っていくかというような議論はあったんでしょうか。

第六回質問要項の第二番。――昭和四十二年五月、大黒柱であった西尾末広委員長が勇退し、西村栄一委員長が就任しますが、この時、今後の党運営の方法、党勢拡大の方法、および新たな活動方針等について、どのようなことが話し合われたのでしょうか。また、西尾委員長時代と比較して、党内の雰囲気はどのようなものであったのでしょうか。印象としては、従来のイデオロギー闘争的な面が薄れ、現実政治問題（沖縄、物価、福祉等）のほうに重点が移っていったように思われますが、これと関連して政策審議会長としての先生の役割はどのようなものであったのでしょうか。

竹本　そういうところには、議論はなかったと思いますけどね。ただ、西尾さんという人は、ご承知のように政策というよりも、やはり政治家だ。だから、政策ということを中心に党を動かさなきゃならんということを、はっきり打ち出したのは西村栄一さんだね。

季武　政治の西尾、政策の西村と言うんですかね。

竹本　ここに書いてあるように、強いて言えば西尾さんはイデオロギーを中心にしたような議論で、党の基本的立場を目標にする。西村さんは、政策を引っ提げて闘っていくというような感じでしたね。

季武　政策中心になりますと、ますます政策審議会の存在の価値が高まるんじゃないですか。

竹本　それはまあ、そうでしょうけどね。僕が引き継いだ後は、日常の政策活動のお手伝いをするという程度のことが中心だったと思うね。ただ、僕は僕自身の意見があるから、後でいろいろ申し上げるけれども、それを実行に移すように努力しましたけどね。要するに、沖縄とか物価とか福祉とかいう当面の問題についての資料を集めて、簡単に言えば、議員が質問したり、意見を述べたりするのに参考になるデータを作るということが、中心じゃなかったかと思いますね。

季武　党は党として、先生は先生として、別の意見があるとおっしゃ

られましたが、もしこの時期にそういう別の考え方があったならば、お話し願いたいんですけれども……。

竹本　……ちょっと難しいね。

黒沢　この時分の党としての政策で、一つは沖縄返還問題で民社党がイニシアチブを取ったこと。つまり、西村さんがイニシアチブを取って、そして実現に持っていった。だから、首相の佐藤栄作さんの仕事を、相当やったんですよ。ですから、沖縄返還問題についても、先生は相当関わっていたんじゃないですかね。

季武　ああ、そうですか。

黒沢　それから、一九六八年（昭和四十三年）頃は、大学紛争が盛んな時ですね。従って、大学管理法制定の問題が国会のなかで大きな位置を占めていました。ですから、安保問題も絡んで、大学紛争と、それから沖縄返還問題、この辺が西村さんが委員長になって相当力を入れたところですね。

季武　いま黒沢さんから、先生は沖縄返還問題に関して活動されたという話が出ましたが……。

黒沢　先生というか、党としてね。西村さんが委員長になってから。たとえば「本土並み返還」とかいうのは、この当時、民社党が打ち出したんですね。当然、政策審議会でも、そのことを議論しているはずなんです。

竹本　僕が独自に持っていた沖縄問題への意見というのは、記憶がないね。だいたい、みんなと同じような考え方で、特には……。

黒沢　党としての考え方は、みんな一緒だったということですね。

竹本　政策審議会として、どういう苦労をしたかと言うならば、やっぱり足達君を呼んで訊いてもらうのがいちばんいい。あれが、だいたいみんな知っているから。それから、僕はとにかく、たとえばここにも出ている、銀行法の改正とか何とかいうような大きな柱を打ち出して、それで党を引っ張っていく、あるいは国会を引っ張っていくという仕事が中心でしたからね。だから、日常の政策審議会活動というのは、事務局長の藤村明君がだいたい中心で動いた。

　ここに自動車税と書いてあるけど、こういう、その時その時の問題があって、それに民社党は特に自動車と関係が深いから、いろいろ意見を述べたということで、特に民社党がその問題を取り上げてやったというよりも、問題が出てきて対応したという程度ですね。僕は、個人的に言えば、そういうものはあまり得意じゃないんだな。好きじゃないんだ。自分でイデオロギーを持って、いまの銀行法にしても、その他の問題にしても、「これをやるべきだ」というゾルレンの問題が中心だ。だから、党全体の動きを語ることは、民社党政策審議会の歴史を語ることになりますね。だから、それは足達君か何かに訊いてもらわなきゃしょうがない。

黒沢　もし必要があれば……。それについての本がありますからね。

季武　次に三番目の、春日委員長時代のことについてお話を伺いたいんですけれども、この時も先生と春日委員長は大変に仲が良かったわけですよね。

第六回質問要項の第三番。――春日一幸委員長就任以来（昭和四十六年）、政権獲得を目指す動きが活発化していくように思われ、例えば昭和四十八年には革新連合政権構想（共産党と社会党左派を排除、自民党若手の一部を吸収）を打ち出しますが、他党との連立の仕方について様々なアイデアが党内にもあったと思います。それを巡って、党内で路線の違いはあったのでしょうか。

竹本　春日委員長と僕とは、意見が食い違ったことはありません。だいたいにおいて、ほとんどぴったり一致していましたね。

大蔵委員として活躍

季武　春日委員長時代の頃から、中道連立政権という構想が出て来ますよね。本を読ませていただきますと、先生は、自民党の福田赳夫さんとずいぶん親しいようですけれども、たとえば福田さんなんかも含めた連立構想というのは、考えておられましたか。

竹本　いや、特にそういう意味での連立を考えたことは、僕はなかったと思う。ただ、経済問題については、僕と福田君は九〇パーセントは同じでしたね。彼はいろいろしゃべっていますが、銀行協会の総会で、銀行の連中が会場いっぱい集まっているところで、「だいたいにおいて、私の言ってることは、ここにおる竹本君の意見だ」と言ったことがある。それで、終わってから、びっくりして静岡銀行の頭取が飛んで来て、「本当にそうでしたか」と言ったことがある。私は選挙区が静岡だからね。そのぐらいに一致していたというか……。福田君の手紙がたくさんありますから、本当はお見せするといいけどね。そのぐらいに、財政金融の基本的な問題については、最後は違うかもしれませんが、取り敢えずやれること、やるべきことは、福田君は僕と一致していました。

季武　たとえば佐藤総理大臣時代、福田さんは大蔵大臣もずいぶんやられていますが、佐藤内閣の財政方針について、先生はどういう印象を持っておられましたか。

竹本　それは、ちょっといま、佐藤内閣が何をやったかという記憶がないんだがね。ただ、佐藤内閣の考え方に、僕は甚だしく対立したという印象は持ってないね。佐藤さんは、僕は同郷なんですよ。そういう点もあって、何となく大事なことについては……。いちばん僕が合うのは岸信介だ。岸さんのほうとは特に気が合うんだけど、佐藤さんも、特に僕が反対しなければならなかったということは、あまりないですね。だから予算委員会での質問も、ずいぶん佐藤内閣時代にやっていますが、特に食い違ったという点はなかったと思う。とにかく僕は、抱負は持っているけれども、とんでもないことは言わないんだ。現実のなかから、ここへ追い込んでいくということになると、突飛なことを言えないからね。その点では佐藤さんや福田君の考えと、現実の対処の問題では、そう食い違いはないと思うんだ。終局は違うけれども、取り敢えずのところは、だいたい納得出来る線だったと思いますね。

竹中　いま、佐藤首相とか福田首相とずいぶん連絡を取られたというふうにおっしゃいましたが、どういうふうに連絡を取られていたんですか。

竹本　それは、国会の質問応答や何かで……。別室で、特に相談することはないです。

哲子夫人　大蔵委員会の写真に一緒に写ってるみたいですね。

季武　そうですね、写真がずいぶんありましたね。

竹本　別に協議会を持ってたとか、そんなことはないです。

哲子夫人　大蔵委員会の人だけで旅行をしたり……。よくしましたもんね。外国旅行なんかね。

竹中　大蔵委員会の理事同士で？

黒沢　それはもう、相当親しくなりますよ。

季武　じゃあ、先生が福田さんと知り合ったのは大蔵委員会ですか。

竹本　もちろん、そうでしょうね。……どこで知り合ったかね。でも、いちばん親しかったことは間違いないからね。

季武　大蔵委員会で、他の政党で親しい人というのはいらっしゃいますか。

竹本　それは、社会党の堀昌雄だ。堀と僕と、武藤山治で……。

哲子夫人　アメリカへ一緒に旅行したりね。

竹本　それからもう一人、社会党がおったな。そういう連中は、割に個人的に親しかった。

季武　そういう方々と、考え方も似てきますか。

竹本　全部一致してはないと思うけれども、しかし当面の政策については、堀君や武藤君とはまったく同じでしたね。

黒沢　彼らも社会党の政策審議会のメンバーですよね。

季武　そうですよね。

竹本　あの連中が社会党の政策を動かしていて……。

哲子夫人　社会党の田辺（誠）さんも、親しかったんじゃない？

竹本　あれは、政策は動かしてない。堀君、武藤君と、僕と三人かな。あの頃の政策は――大蔵委員会は、我々の考えで全部動かしていたね。武藤君、堀君というのは、僕とそう違っていませんでした。

黒沢　社会党の右派ですからね。成田知巳も社会党の政審会長が結構長かったけれども、成田知巳さんは左派ですからね。成田知巳とは仲はどうだったんですか。

竹本　成田は、遠くからものをいろいろ言ったけれども、大して親しくはなかった。

黒沢　それは、そうでしょうね。思想的にも違いますからね。

季武　その頃、たとえば大蔵委員会があって、竹本先生、堀さん、福田さんというメンバーがいらっしゃって、当時の自民党の出して来たいろいろな法案も、あまり皆さんのお考えとは外れないような法案でしたか。

竹本　いや、納得出来ないときには質問をしたり、意見を言ったりしてね。しかし、特に我々が絶対反対だというような問題は、出てこなかったと思いますね。あの頃は、自民党は誰だったかな……。しかし、予算委員会は別としても、大蔵委員会は僕と武藤が頑張ったら、他の人は出る余地がないよ。予算委員会の場合は人数が増えるから、必ずしも、そうはいかないけどね。大蔵委員会は、極端に言えば我々の思う通りだ。ただ、共産党の正森がおった。あれも、少し違うところがあったけど、七割～八割までは、だいたい我々と同じ考えだ。ことに金融社会化の問題はね。金融の問題について、彼はしっかりした意見を持ってた。僕と、だいたい同じ意見を持ってた。

竹中　正森先生も、大蔵委員会にいたんですか。

竹本　大蔵委員だ。あれは、共産党の論客ですよ。彼は、そう言っちゃ悪いけど、僕の支持者なんだ。僕の言うことには、次から次へと賛成だ。それは、僕のほうが詳しいもの、実際に言って。僕はずっと、共産主義で言ってることの理想には、非常に似たものを持ってるわけだ。ただ彼らは、方法について、きめ細かなものがないわけだ。スローガンみたいなものばかりでね。だから正森なんかは、初めは僕の質問演説なんか注意しなかったと言っておった。しかし後には、僕の質問の時から頭を切り換えていった。だから、正森は僕の言う通りです

よ。共産党が正森で、社会党が武藤で、大蔵委員会はだいたい引っ張ったんだ。

竹中　自民党では、大蔵委員会にどういう方がいらしたんですか。

竹本　目ぼしいのはいないね。大蔵委員会は、僕や武藤の独壇場だったね。自民党が、誰か意見を言うたかね。

黒沢　水田三喜男は？

竹本　おとなしい人だったから、特に気の利いたことは言わないね。大臣をしたやつが、誰かおったね。一人ぐらい……。ちょっといま、名前を覚えてないがね。僕と武藤と、あと正森を入れたら……。

季武　でも、傍から見ますと、やはり共産党と先生では、ずいぶん違うような気もしますけれども……。

竹本　しかし、現実的に出来ることしか、僕は言わん。出来ることしか言わんということになると、共産党は大きな夢は持っておっても、結局僕の言う通りしか出来ない。だから、まったく同じじゃないですかね。特に正森は、初めは僕の言うてることは、ピンと来なかったらしいんだ。彼自身が、僕に言ったことがある。途中から、どうも僕の言うことと、方向も着眼も同じじゃないかということになって、それから僕の意見に特に注目したと。それで、委員会でも、僕の言う通りに動いてる。正森君という人は、非常に勉強家でしょう。だから、話せば分かる。だから、彼は僕の意見に、終いはしっかり引っ張られたね。

季武　ちょっと戻りますけれども、昭和四十七年に佐藤栄作さんが辞めて、田中角栄か福田赳夫かという時がありましたよね。あの時に先生は、どのようにお考えになられていたのか。

竹本　角栄は、大蔵委員会や予算委員会で、「竹本君、参ったよ」と言ったことが二、三回ありましたよ。トイレで一緒になったりすると、「参った、参った」と、何度も言ったよ。

季武　それは、議論で参ったということですか。

竹本　そうよ。他に参るものはない（笑）。田中角栄というのは、分かりはいいんだ。非常に早いんですよ。だから、だいたいにおいて、話せば分かる。しかし、まだ福田のほうが深みがあったね。角栄はポンポンと言うままで、はったりが多いからね。だから、いちばん僕が角栄と衝突したのは……。あの人は言うてることはいいんだが、話が飛躍的なんだ。勘だけですからね。計画的じゃないんだ。だから非常に飛躍的で、しかしそれだけに荒っぽいというか、理詰めでいかれると参っちゃうんだ。それで、彼が、「参ったよ、参ったよ」と言ったことが何度もある。何でだったか、ちょっといま覚えてないがね。

しかし、僕は、角栄という人は使える人だと思ってますよ。ちょっと理解したら、真っ直ぐに走っちゃうからね。だから、あの人は、むしろ恐れる必要はなく、使えばいいんだ。それで、こっちが攻める時は、理詰めでいく。こっちが三つぐらい質問すると、勘がいいんで、「これはここで落とす」ということが分かるんだね。そうすると、彼は、自分がいままで考えてきた、言ってきたことと違っていても、パーッと変わる。だから、質問の初めと終わりでは、角栄は言うことが違うんだよ。しかし、そのぐらい回転が早いんだ。

哲子夫人　北海道の中川一郎さんも、仲が良かったじゃない？

竹本　あれは、大蔵委員会だ。中川が自民党の大蔵委員だった。中川君というのは、割に頭が良かったよ。人柄も良かった。僕は、割に好意を持ってたね。分かり合える。

竹中　自民党では、福田さんと田中さんと中川さん、佐藤さん……。

他に、どういう方と行き来がありましたか。

竹本　いま、自民党のボスで二、三人、動いているのがおるだろう。あの連中とは、初めからですよ。いま、自民党の幹部で動いている人。

哲子夫人　後藤田（正晴）さんと、親しかったでしょ。

竹本　自民党の、いま大ボスになってる山中貞則も、そうだ。山中は僕と割に仲が良かったんです。あれは、ちょっと頭がいいですよ。だから、僕と話が合った。あのクラスが、自民党に二、三人おりましたよ。すぐには名前が浮かばんけれども……。

竹中　村山達雄さんは、どうですか。

竹本　あれはおとなしいだけで、正直だったけどね。でも、真面目な人だ。

季武　他の政党との交遊範囲というのは、大蔵委員会を通したものが多かったんですかね。

竹本　大蔵というか、予算委員会を通じてですね。

季武　話は、また違いますけれども、昭和四十七年に佐藤栄作が辞めて、田中か福田かという時がありましたけれども、その時、先生は別に政治的な活動はされませんでしたか。どっちを応援するとかということは……。

竹本　いや、それはしません。

季武　そういう政治活動は、一切しない？

竹本　僕は、いま印象を言えば、角栄はそんなに嫌じゃなかった。ただ、意見は違って、「あれは土建屋だ」と言ったことがあるがね。土建屋的なところがある。だからあの人は、言えば、分かりは早いんだ。大蔵委員会でもそうだが、質問してると、初めと終わりでは答弁の内容が変わるんだ。そのぐらい回転が早い。だから僕は、角栄は使える人だと。むしろ期待をしたと言うとおかしいけれども、使える人だということで評価をしましたね。だから、あれは使えばいいんだ。

黒沢　基本的には、他党の総裁選挙は関係ないです。

季武　あまり、エールを送るなんていうことはないですね。

黒沢　特にその頃は、いまと全然違いますから。

竹中　先ほどの、質問の三番ですけれども……。

竹本　春日一幸の考えで、結論は違うことはあったけれども、争うというほどの形はなかったね。というのは、あの人は独断的にどんどん動く人だから……。それに、ちょっと党内に、対抗した意見、見識を持った人はいなかった。だから、だいたい春日一幸が引っ張っていく。

竹中　春日一幸さんの時に、民社党はどういった連立構想がありましたか。

竹本　連立を中心として討議したことは、ちょっと僕は記憶がないですね。ただ、飯を食ってる時なんかにね……。いかなる連立を、どういうふうな形でつくるべきかというような党内討議は、僕はなかったと思いますよ。ただ漠然と、春日一幸がそう考えていて、他の人がちょっと意見を言う程度のことは、何回かあったと思いますけどね。いかなる連合政権をつくるかということについて、議論をしたことは、僕はなかったと思いますね。

季武　それは、あまり実現性がないということですか。

竹本　そうでしょう、まだね。

季武　本気では考えていなかったと。

黒沢　そうです。

「個の解放」とネオ・ナショナリズム

季武　次に四番ですが、先生は政権ビジョン委員会の委員長になられますけれども、これは政策審議会が名前を変えたものですか。

第六回質問要項の第四番。――政権ビジョン委員会とは、政権獲得を視野に入れたものと思われますが、昭和五十三年六月に、先生は「中道プラス保守の大連合」論を主張されています。また、佐々木委員長（昭和五十二年十一月就任）は中道政党結成を示唆していました。この頃は、自民二五〇、社会一二〇、公明五五、民社二八、共産一九、新自由クラブ一七、社民連三、という状況でしたが、民社党のこのような主張に対し、他政党の手ごたえはどうだったのでしょうか。また、自民党の一部や、社会党の反社会主義協会派との連絡はあったのでしょうか。

黒沢　違うんです。政審とは別に、全党的に委員会をつくったんです。

季武　この政権ビジョン委員会のつくられた経緯と、その活動内容を、ちょっとお話し願いたいと思います。

竹本　これは、ただ民社党が自分で政権獲得と言っただけで、客観性があまりなかったからね（笑）。だから、いろいろと、ここで言うほどの反応はなかったと思いますよ、残念ながら。現実性がないもの。

「政策中心連合政権時代と民社党」（竹本孫一『八十年代への挑戦』一九七八年、二一～三五頁）では、委員会設置の背景として、前年昭和五十二年十二月の総選挙で中道諸勢力が伸び、連合政権実現が射程距離に入ったと判断したことを挙げている。

季武　でも、民社党としましては、やはり自分たちの将来ビジョンを出すわけですよね。それで、連合政権の可能性があまりないとすると、当時は党内の雰囲気はどうだったんですかね。

竹中　政権の可能性がないとすると、どういう形で政策を実現していこうと考えられたんですか。

竹本　まあ、それは政府を説得して、と言うかね。予算委員会等で議論して、取り敢えずは個々の政策の実現を図るということでしょうね。内閣として、「こういう内閣をつくれ」と言ってみても、力の関係で現実性がない。

哲子夫人　歳を取り過ぎて出ちゃったの。落選を長くしたでしょう。五十八で、初めて出たでしょう。だから現実的になっちゃって、そういう情熱が足りないんじゃないですか。もう少し若い時に出れば、坂本龍馬みたいに……（笑）。

黒沢　ただ、ここの議席数にあるように、それは今日のような政党の流動化の時代と違うから、社公民プラス天下同憂の志ぐらいで、おだをあげとったけど、客観的に見て、天下を取れる状況じゃないものね。ただ、にも拘わらず、なぜ……。ビジョン委員会は、通称、竹本委員会と言ってたんですよ。竹本委員会と言って、先生のお名前を付けて、ビジョン委員会をやったんですよね。なぜ、そんなビジョン委員会をつくったかというのは、結局、対社会党戦略もあったんですよ。社会党右派対策、つまり江田さんたちが出るか出ないかという状況の中で……。

竹中　彼らを取り込もうと。

黒沢　そう、それもあるし、それから公明党が自分たちの方向性を失ってたんです。その時に民社党も、やろうじゃないかと。新自由クラ

ブもあるじゃないかという恰好で中道連合を考えて、それを一つの束にすれば、自民と社会の真ん中に入って、一つの政治勢力になるじゃないかと。天下は、すぐには取れないけれども、一つの塊は出来るじゃないかと。その時に竹本先生は、政策のほうでの責任者を務めたわけです。佐々木良作さんは、春日と一緒に政界工作をやったんですよ。でも、先生がおっしゃるように、天下を取って内閣を組織するみたいな、客観性と現実性はないんですよ。

竹中　じゃあ、先生は江田さんあたりとは、そんなにご関係はなかったんですか。

黒沢　公明党では矢野絢也、社会党では江田三郎、それから民社党では佐々木良作さんがやっていた。

季武　それに対する党の反論というのは、ないわけですね。佐々木委員長が社公民路線で、いろいろ政治工作をしているわけですよね。それに対して、党内からは反論はないですよね。

竹本　極端に言えば、その問題そのものが、問題ではなかったよ。佐々木の趣味ですよ。

竹中　実現可能性は、あまりなかったということですね。

竹本　あの人も、発作的にバーッと動く人なんだ。だから、たとえば連立政権をつくろうと思って、どの党と、どの党と、どういうふうに組むか、政策は何にするかということを、基本的に相談するということはないんだ。連合政権をつくったらいいと言う。あの人は、そう言っちゃ悪いけど、非常に発作的な人なんだ。パッと、それだけだからね。まだ、春日一幸のほうが、耕す努力がある。これと手を握って、こういうことを……という耕す努力がある。佐々木は思いつきで、パッと言うだけだよ。

（休　憩）

季武　次の五番目ですが――コピーして来たんですけれども――政権ビジョン委員長の時に、先生は「八〇年代への政策ビジョン」というのを書かれたと思います。これは、やはり先生個人の意見がずいぶん反映されているものなんですか。それとも、党として、なかで討議されて出来たものなんですか。

第六回質問要項の第五番。――先生は、昭和五十三年に新たな政策ビジョンを発表されています（『八十年代への挑戦』三七～四七頁）。この基本構想と、そのポイントをお教え下さい。

竹本　だいたい、こんなのは九〇パーセントは、バーッと、自分で書いちゃう。

季武　じゃあ、ほとんど先生が独りでお書きになられたようなものですか。

竹本　ええ。

季武　この基本的なポイントは、何でしょうかね。

竹本　ちょっと、いま記憶がありませんがね。どういう契機で、これを書いたのかは、ちょっと、いま記憶がない。ただ、いま見ると、僕の考えだなと思いますがね。

季武　これは、一九七八年に書かれています。具体的にお聞きしますが、この文章のなかで、たとえばネオ・ナショナリズムという言葉を使われているんですね。ちょっと読んだだけでは、どういう意味か分からなかったんですが、いま思い出されますか。

「（前略）それから教育の改革あるいは精神、文化面に対しても、基本的な取り組みが必要である。今や個の解放と人間尊重を基底に、民主主義を通じて民主主義の上に出なければならない。社会の連帯性と、民族の歴史

の重さを想わねばならない。教育、労働運動、圧力団体等々すべてについてネオ・ナショナリズムが施策の指導理念として見直さるべきであろう(後略)」(民社党政権ビジョン委員長竹本孫一『一九八〇年代への政策ビジョン(試案)』一四頁)。また、『政策ビジョン(試案)』第七項は「教育の改革とネオ・ナショナリズムの確立」(同書二三〜二四頁)である。

竹本　これは、いま読んでみると、僕の考えそのものだが……。ただのナショナリズムで、頑迷固陋な国粋主義じゃ困ると。やっぱり民主主義を理解して通った上の、要するに民主主義を通じて民主主義の上にと。ローマ法を通じてローマの上にというのがあるだろうと。民主主義は個の解放なんだから、個を解放しただけじゃあ、バラバラになっちまう。それを、民族を中心にして、基盤にしてまとめるというのが、僕の考えです。だから、そういうのを特にネオ・ナショナリズムと言ったと思いますね。

季武　どうやったら、それが確立されると考えておられましたか。

竹本　それは、教育以外ないわね。

季武　教育内容?

竹本　教育改革というのは、経済改革、金融改革以上に大事なんですよ。というのは、要するに民主主義というのは、簡単に言えば個の解放なんだから、個を解放しただけじゃあ、バラバラになるだけだ。それをまとめるには、民族でまとめる以外ない。それから、国連で世界をまとめる以外ないというわけで、個の解放だけではだめだという意見なんです。だから、まとめるものがなけりゃ……。それは、やっぱり民族ですよ。だから、資本主義に対しても、僕はそうだ。私有財産でいろいろやるということは、アナーキズムですよ。結局、個の解放はアナーキズムで、資本主義も現にアナーキズムになっている。だから、そのアナーキズムを抑えるためには、一方では社会主義的な計画経済が必要だし、一方から言えば民族が必要だ。だから、いまの政治経済は、簡単に言えばアナーキズムだということです。

季武　このなかでも、計画的市場経済とおっしゃられているわけですけれども、特にそれまでの先生のご主張と違う点はありますか。

「これからの日本は、資源の問題、労働力の問題、あるいは環境保全の問題、物価、市場の問題等あらゆる立場から考えて、当面七%、五〇年代後半には五〜六%の経済成長を安定的に確保すれば大成功であろう。そのための構造改革が必要であり、価値観、文化観の転換が必要なのである。インフレは困るがデフレも困る。要は国民本位の計画的市場経済体制を確立して、経済に活力と規律とモラルを奪還することである。高度成長期の循環不況の一つとして、思いつきの臨時対策では間に合わない。哲学と発想の転換並びに構造の改革が必要なのである」(前掲同書、一五頁)。

竹本　違わないでしょう、おそらく。

季武　それまでの先生の考えられたことと、この『一九八〇年代への政策ビジョン』は同じですか。

竹本　よく読んでみないと分からんけれども、同じだと思いますね。あなたが疑問を持たれるのは、どこですか。

季武　実は、これが一九九〇年に先生が書かれた文章ですけれども、僕が見た限りでは、あまり違わないんですね。そういう意味で言うと、同じなんですかね。先生が国会議員になられて、政策審議会の会長になられて、それ以降、あまり大きな考えの変化というのはなかったですか。

竹本孫一「新時代のグランド・デザイン」(『わが道を往く』富士社会教育センター、一九九一年所収、九一〜九五頁)。該当部分は一九九〇年十二

月のもの。現時点での必要事として、政治の粛正改革、外交軍事面の強化、計画的市場経済の枠組み作り、教育文化の刷新強化の四点を挙げる。

黒沢　私から見ると、先生のお考えは大学時代から、また卒業してすぐに安部磯雄先生のところへ行って、社会主義に入ってから今日まで、ずっと終始一貫していますね。ですから、この本（『わが道を往く』）も、ビジョン委員会の時に書いた文章も、ほとんど変わってないと思いますよ。

季武　あまり時代状況とは関係なく……。

竹本　僕は終始一貫して、権力で押さえ付けるのは反対で、個の解放だと。しかし、個の解放だけではアナーキズムになるんだ。だから、どこかで締め付けなきゃいかんということで、僕は一貫してますがね。

季武　次に六番……。これは、さっきだいぶ聞いちゃった話ですね。

第六回質問要項の第六番。――国会では長期にわたり大蔵委員会に所属されていますが、このように長期にわたりますと、委員会の運営や他党との交渉などに精通されたのではないかと思います。大蔵委員会の運営面に関する先生の業績について、お話しください。また、国会演説を読みますと、数字や金融制度にもお詳しく、しばしば外国の経済学者等の説を引用されていますが、どのように勉強されたのでしょうか。ブレーンは、いらっしゃったのですか。

竹本　ブレーンというのは、いません。自家発電だ。ただ、簡単に言うと、政治哲学という面では東大の南原教授、これはドイツ哲学だね。理想主義だ。それから、河合栄治郎、これは英国労働党だ。この二人から学べる範囲のことは、ほとんど全部吸収したと思っていますよ。

竹中　ただ、衆議院議員になられてから、どなたか、そういう学者みたいな方で付き合いがあった人は、おられますか。

竹本　議員になってからも、南原さんなんかとは最後までずっと付き合ったというか、教えていただいた。それから、蠟山政道さんも、民社党の顧問みたいなものだからね。だから、だいたい、何らかの形で関係は持ってましたね。

竹中　あと、大蔵委員会以外に参加された委員会は？

竹本　予算委員会。大蔵委員会は、おそらく僕がいちばん多く質問しているでしょうかね。何を質問したか、ちょっと、いま覚えていないけれども……。

竹中　それ以外の委員会に参加されたことは？

竹本　それ以外は、まずないですね。

哲子夫人　お終いに、北海道と沖縄の特別委員会の委員長になったでしょ。

季武　一度だけ、沖縄及び北方領土に関する特別委員会の委員長をやられていますよね。確か、先生の前の委員長が稲富稜人さんで、民社党ですね。あれは、民社党へのポストの配分だったんですかね。

竹本　それは、いろいろバランスの関係でなったんでしょうね。僕も、ちょっとなっただけだけれども……。

季武　これは、短い期間でしたかね。あと、先生の演説を読んでいますと、いろいろ外国の文献が引用されていまして、ずいぶん勉強されていらっしゃるということが分かったんですけど、いつ、どこで勉強していたのかなと。

竹本　僕は英語を読むのは、とても速いんです。日本語より速く読める。英語は、読むのも話すのも自由自在だった。いまはちょっと、耳が遠いからね。だから、議員のなかで、外国のものをいちばんよく読んだのは、僕かもしれんね。

季武　議員になってからも、ずいぶん読まれていたんですか。

竹本　英国労働党の資料は、全部読んだ。

季武　議員になってからも？

竹本　なってからも……。

哲子夫人　国会図書館なんか、よく行って……。

季武　議員になってからもですか。

哲子夫人　ええ。

季武　まさしく、国会図書館（笑）。

竹本　国会図書館は優等生だ。新聞に書かれたことがある。

季武　じゃあ、本当にブレーンは、いらっしゃらないんですかね。

歴代総理との関係

季武　次に七番ですが……。これも話しちゃったんですね。

第六回質問要項の第七番。――佐藤首相在任期間（昭和三十九～四十七年）中、先生は民社党を代表して、しばしば重要な質問をされています。その議事録を読みますと、なりふり構わない高度成長政策を採った池田勇人氏に対し、先生も佐藤首相も、安定成長を主張され、また社会資本の充実という基本的な点でも一致しているように思われます。もちろん、相違点も多々ありましたが、先生は佐藤内閣をどのように見ておられましたか。

竹本　佐藤さんの本が最近、出たでしょ。あのなかに、僕のことを書いてあるところがあるよ。こんなこと、言っていましたよ。

季武　この佐藤の日記は、伊藤先生が編纂されて、それから僕も手伝って出版したんですけれども、概ね佐藤さんは悪口が多いんですよね。他の議員の質問を自分が受けて、悪口をずいぶん書いているんですよ。先生は、書かれていないわけですよ。褒められているんですね。

昭和四十一年二月十一日、「山中吾郎、大原亨、竹本孫一、三君の質問をうける。竹本君の質問は、じみだがよく勉強して随一の出来ばえ。民社大よろこび。（後略）」（『佐藤栄作日記』第二巻、朝日新聞社、一九九八年、三八二頁）。

昭和四十三年二月二十七日、「（前略）僅かに十五分ばかりで予算委員会に出席。阪上安太郎君を初め竹本孫一君、更には畑和君の三人の質疑をうける。阪上君と竹本君は至極まじめな質問。建設的な質問で大変よかった。然し畑和君のは最初から不愉快、面白くない。然し中身はない。（後略）」（同前第三巻、二四三～二四四頁）。

昭和四十六年二月九日、「（前略）十時から竹本孫一君の質問。この人らしいおだやかな論理を展開する。教へられる点が多い（後略）」（同前第四巻、二六八頁）。

竹本　それは、そうですよ。佐藤は、質問・応答の時でも僕に非常に敬意を払ってくれた。それは、他の議員に対する態度とはまるっきり違ってた。それは、だから二つあるんですね。一つは同郷だから、そういう親しみがある。もう一つは、僕は絶対破壊的なことを言わないから、非常に喜んだ。

季武　たとえば、佐藤総理とは、議会以外で接触する場はありましたか。

竹本　それ以外では、ない。

季武　同窓会みたいなものもないですか。

竹本　いやいや、そんなものはない。だから、佐藤という人は、案外

真面目な人だと思ってますよ。建設的なことに対しては、割に謙虚に話を聞いた。

季武　佐藤栄作は、若い時から奥村喜和男さんと仲がいいんですよね。先生も確か、奥村さんと仲がいいという話をされていましたよね。

竹本　奥村さんを中に入れて、親しく付き合うということはなかったですね。なかったけれども、結果的に、おっしゃるように佐藤さんも奥村さんも、五高なんです。僕も五高なんです。僕は電力国営の関係で、奥村さんと一心同体ですよね。奥村さんも佐藤さんとは、他の関係でずっと良かったですね。

季武　じゃあ、次に八番についてお願いします。

第六回質問要項の第八番。――田中角栄首相が誕生し、「日本列島改造論」を提唱しましたが、これはある意味では、先生の言われる「経済の計画性」とも共通する部分があると思いますが、どのように受け止められたでしょうか。また、田中内閣の中国承認は、それまで「一つの中国、一つの台湾」の立場を取ってきた民社党にとって、特に台湾との関係について、どのような影響があったでしょうか。

黒沢　二つ問題がありますからね。まず、後半のほうの、「一つの中国、一つの台湾」論ですが、特に民社党には結成の時から、曽祢益という外交官出身の国会議員がおり、この曽祢さんあたりが強力に、「一つの中国、一つの台湾」論を唱えていたんですね。一九七二年（昭和四十七年）の、例の日中国交正常化以降、こういうことになったんだけれども、民社党の事実認識としては、いまでもこういう状況だということで、そのまま継続していますからね。ただ、政府間の外交的・政治的な問題として、現在の中国政府が「一つの中国なんだ」と言っていることは尊重するという言い方で、民社党も了解しているはずですよ。

竹中　じゃあ、政府と一緒だということですか。

黒沢　「政府間交渉で正常化したことは認める」ということですよね。そのことによって、党内で大問題になったということはありませんね。ついでに述べておきますと、曽祢さんが書記長の時代に、つまり結党直後の頃、台湾独立運動をやっていた青年たちが、日本から台湾に強制送還される事態が起こった。その時に、民社党本部に「助けてくれ」と言って、これらの青年たちが来た。そうしたら、曽祢さんが外務省に掛け合って、その青年たちが台湾に返されたら死刑ですから、「それだけは止めてくれ」と言って、これを止めたことがある。そして、その方々は、ずっと日本に残ったんです。その残った方々のなかに、金美齢さんという人がいる。その人が、いま陳水扁総統の顧問ですよ。

竹本　とにかく台湾は、我々には非常に親近感を持っていました。自民党なんかよりもね。親類付き合いだ。少し中国を刺激する点を考慮したところはあるけれども、だいたい台湾は絶対的に、いまでもそうです。

黒沢　質問の最初のほうの「列島改造論」については、どうですか。これは経済問題ですが……。

竹本　「改造」ということを考える着眼点は、我々とだいたい似ているかもしれんね。そういう意味で、僕は角さんにも好意は持っていた。角さんは、予算委員会で、いちばん僕が強く攻撃したと思うんだ。しかし当時、僕はいちばん好意を持っていたかもしれん。というのは、いま言ったように、日本の改革を彼なりに考えていましたからね。

季武　「列島改造論」ですけれども、国土総合開発と言いますか、要するに企画院時代から、そういうような考え方はあったわけですよね。

戦後、いろいろな国土計画が出来ましたけれども、そういうものに関しまして、先生のご意見はいかがでしょう。戦後になりまして、第何次全国総合計画――「四全総」「五全総」と。こういう計画に対しまして、どのような印象を持っておられましたか。

竹本　僕は、将来の社会主義計画、あるいは社会主義社会というものと似たようなもので、その前段階であるというふうに思っていました。

季武　じゃあ、賛成でしたか。

竹本　賛成です。国の資源も何も、総合開発計画をやろうと。それは国土計画でもあるわけだから。要するに、国全体を計画経済で、計画的開発利用ということを言った。

季武　そうすると、もちろん違っている部分はいっぱいあるでしょうけれども、こういう点に関しましては、基本的に自民党のやっていることは支持されていたわけですか。

竹本　僕は、自民党にこういう計画がどれだけあったか、ちょっと分からない。仮に自民党にあっても、自由経済で、全体的な計画性が実現されるはずがない。

季武　そういう意味では、むしろ民社党のほうが近かったわけですね。

竹本　非常に厳密に言えば、民社党がやれば、まだ本格的な、いまの開発計画、その他の計画性というものは完結しませんよ。所有権の問題があるからね。

竹中　三木内閣は、どういうふうに見られてましたか。

竹本　三木さんは、個人的に非常に親しかったけどね、考え方も似てたから。僕は、彼の家に何度も行ったことがある。

竹中　三木内閣については、どういうお考えですか。

竹本　三木内閣に、何か問題があったかね。

季武　ロッキードの後始末だからね。

竹本　三木さんは漠然と、半分が一緒で、半分が違ってたと思ってますがね。彼の自宅へ行ったことが何回もある。そういう点では、相通ずるものがあったと思います。ただ、あの人の限界もあった。

竹中　三木首相とは、どういった経緯で親しくなられたんですか。

竹本　よく分からんけどね。我々の考えを実現する初めの段階では、三木さんは協力が出来ると思ってたね。しかし、どこまでかというのは、いまちょっと、はっきり覚えてませんけどね。何かちょっと、僕はあの人の政策で、我々の考えつかんようなものを評価しておったと思いますね。

黒沢　戦争直後、確か三木さんは国民協同党なんですよね。

竹本　三木さんには、とにかく保守にしては進歩的な要素があった。

黒沢　協同党から別れて、民社党に入ってきた代議士もいるんですよ。たとえば、北海道の小平忠さんは、三木さんと同じ国民協同党だったんですよ。どちらかと言えば、協同組合の理念ですから、民社党の理念に非常に近いんですね。だから、考え方としては近いだろうというのは、そこがあったと思うんです。ただ、自民党に行った三木さんとは、今度はだいぶ距離が出来たんじゃないかなと。

竹本　三木さんも、半分は改革派だったんだ。

季武　さっきの先生の演説ですけれども、先生のほうが、いわゆる経済の計画化を言われるのに対して、三木さんはにべも無く「自由経済体制だ」と突っぱねている討論があったんですけれども、これなんかを読みまして……。

昭和五十年十月十八日、第七十六回国会、衆議院本会議における竹本氏の代表質問。竹本氏は質問のなかで、資本主義経済の欠陥と「計画的な市場

経済」確立の必要性を主張し、その一階梯として民社党が提唱する経済安定・計画化基本法を挙げる。対して、三木首相は「（前略）やはり、いろいろと自由経済に対してはルールというものが必要であるということは、私も考え方は変えてないわけであります。しかし、自由経済体制にかわる好ましい経済体制というものは、日本の場合、私はないと思う（後略）」と述べている（「第七十六回国会・衆議院会議録第七号」昭和五十年十月十八日付『官報』号外）。

竹本　三木さんが言いそうなことだよ。その程度、限度においては、正しい。最後のところは、三木さんと違うわけだね。

季武　違っていますね。三木さんが変わっちゃったんですかね。

竹本　三木さんは、やっぱり最後は自由経済なんですよ。我々は最後は統制経済……。

季武　協同主義ですもんね。何で三木さんは変わっちゃったんですかね。

竹本　三木さんは、大部分において、僕は意見が違ったことはないですよ。自由経済の矛盾ということについて、考えが一致しとったと思うんです。だから、特に政治的に、政界浄化ということについては、三木さんは熱心だった。ある意味で、清潔だったから。

竹中　大平首相とは親しかったですか。

竹本　割に親しかった。大平という人は、わけの分からないような答弁をしとったけど、全体は勘が良くて、ちゃんと理解しとる。僕とは、ある意味では、いちばん気が合ったかもしれん。

哲子夫人　あの人、もともとクリスチャンなんですよ。

竹本　クリスチャンという面だけでなくて、経済問題なんかでも、大平君は、要するに僕の質問に対するいちばんの共鳴者だった。だから僕は、大平君は割に高く評価していました。

季武　大平さんとは、古くからの付き合いではないんですか。

竹本　どの辺から始まったかは、分からんがね。相当古いでしょうね。何より深みがあった。あれは、人間的に信頼出来る男だ。あれは、福田と仲が悪かったかな。何かあったけど、僕は両方と親しかった。言語不明瞭だけど、大平君というのは、僕は好きな人物でしたね。

季武　戦後の歴代の総理大臣のなかで、先生はいちばん誰を評価されますか。

竹本　ちょっと考えたことがないね。しかし、三木さんでも大平さんでも福田さんでも、高く評価しますね。というのは、極端に言えば、民社党や社会党には大した人がいないんだ（笑）。いや、ほんとに。残念ながら……。たとえば、いまの福田なら福田にしても、あれだけ問題を理解していて手が打てる人は、革新にはいませんよ。僕は、だいたい政策本位だから、保守のエリートは相当高く評価すべきだと思いますね。革新は街頭演説だけだもの（笑）。中身がない。データだって、現実の経済のデータを、いちばん頭に詰め込んでいたのは田中角栄でしょう。あれは頭に入っとる……。

民社党低迷の理由

季武　最後の質問の十番ですが、民社党はなぜ伸びなかったか。

第六回質問要項の第十番。――今回、改めて民社党結党の際の綱領を読み直してみましたが、実はその格調の高さに圧倒されました。その時、逆に

何故このような民社党が結局、大きく飛躍することがなかったのだろうかとの疑問を持ちました。大まかに言えば、戦後日本は、民社党の主張するような産業政策、福祉政策も徐々に実施され、また中道勢力も着実に伸びてきたのですが、民社党自身は停滞していました。この要因は何でしょうか。また、戦後日本の中での民社党の存在意義についてお話しください。

黒沢　三つの要因があるでしょうね。一つは、やっぱり国際政治の枠組みの反映というものがあったということですね。米ソの冷戦構造が国内政治に反映したわけですから、従って、それは社会党を中心としたソ連側のマルクス・レーニン主義の政党と、それから米国側の自由民主主義の自民党による、いわゆる「五五年体制」ですね。結局、そうならざるを得ない。その間に、中間の政党が存在し得ない。従って、その枠組みそのものが、ぶち破られない限りは、その中間にある政党は大きくなることは出来なかった。だから、冷戦構造が崩壊した時に、いよいよ民社党の出番が、本当は来るはずだった。その時に、慌てて解党をして、新進党に合流したのが大きな間違いですね。

それから二つ目は、支持基盤の問題ですね。民社党は先ほどあったように、労働組合を大きな支持基盤としていた。その労働組合が、大きく三つに分かれていました。社会党系、共産党系、民社党系と。社会党系と民社党系、つまり総評と同盟というふうに見ると、その労働組合の支持基盤の割合が、総評が四百万、同盟が二百万なんです。選挙をやりますと、その結果は二乗比で現れるんですね。つまり、四の二乗対二の二乗で現れるんです。そうすると、一六対四なんですね。四百万と二百万だから、二対一の違いじゃないかと言うけれども、一回選挙を戦いますと、不思議なもので、これは「ランチェスターの法則」ですが、結果は二乗比で現れるんですよ。一六対四なんですね。そうすると、議席数の割合は四対一になります。たとえば、民社党が三十六年間存在した間に、平均して議席が三〇議席だとします。そうすると、社会党はそれの四倍なんですね。だいたい一二〇議席なんです。その平均値が、三〇議席と一二〇議席がずっと続いてきたというのは、何のことはない、支持基盤とその支持者の占拠率の違いなんですよ。だから、思想的に正しかったとか間違っていたとかは、関係ないんですね。国際政治の枠組みと、さらに国内における支持基盤の割合ですね。それが、二つ目の理由でしょうね。

それから三つ目は、民社党自身の努力不足ですね。そういうふうな枠組みのなかで、非常に苦労したものですから、「社公民」とかいうことをやったんですよね。それは社会党対策もあったけれども、そのなかで主体性を失ってくるわけです。取り分け創価学会＝公明党と結び付きますから。そうすると、本来の民社党の支持者が離れていったんですね。

竹中　創価学会とは、いつぐらいから関係が深くなったんですか。

黒沢　佐々木さんの時からです。例の社公民路線から。

竹中　選挙協力が始まって、公民でバーターしてという……。

黒沢　得るものもあったけれども、失うものもあったんです。その轍を、いま自民党が踏んでるんですね。ですから自民党は、これでだめになる。つまり、創価学会の協力がなかったら、当選出来ないと思う人達が出てくるわけですね。そうすると、いままで創価学会に反発していた自民党本来の支持者が、どんどん逃げていくんですよ。取り敢えず、この三つです。

季武　戦後の、自民党の総理大臣についても評価されるというご意見を伺いましたけれども、やはり先生の言われている主張が、自民党政

権によって、少しずつは実現されていくわけですよね。

竹本　少しずつね。

季武　そういうことについて、大きく言いますと、日本のやっていく方向は、ほぼこれでいいんだと、間違っていないんだという印象を持たれておられましたか。

竹本　言葉では、なかなか難しいですよね。僕は民主党ですけれども、いまは民主党政権が出来て、いわゆる三年ぐらい政権を握って政治をやっていかないと、いま、たとえば民主党が正しいかどうかということを言う具体的なデータがないんです。ただ、言葉で言うてるだけだもんね。だから、希望で言いますと、民主党は政権を握るということを、まず第一にやらなきゃならん。政権を握らなけりゃ、いかなる改革も出来ない。いままで握ってないから、大したことは出来ないんだ。ただ、ムードがあっただけだ。ムードはあったかもしらんがね。

たとえば例を挙げると、銀行の主なところを押さえる。これが、僕の長年の主張だ。いま何も押さえていない。そういう意味でね。それから、たとえばもう一つ、鉄鋼なら鉄鋼ぐらいの基幹的なものをピシャッと押さえなきゃ、手が打てないです。何も押さえていない。だから、少しムードを言っただけである。民主党の理想から言えば、言うてみただけで、手に付いたとまでは、僕は言わない。

もう一つの例を言うと、僕の一つの大きなスローガンは、銀行の国家管理ですよ。ところが、銀行なんていうものは、いま古い銀行の体制が九九パーセントで、新しい銀行のあり方なんていうものは、ほとんど話にならん。そういうわけで、僕は銀行法の改正を……僕がつくったんだからね。あなた方、読んでごらんなさい。銀行法の改正で、銀行法の第一条を、僕はもっと強く書いたんだ。ところが、それは削られて、半分に縮減したんだ。半分は、銀行法の第一条の第二項ですよ。第一条の第二項にちょっと、僕の願いは半分入っている。しかし、銀行法を全部改正して、いま中小企業を助けるにしても、労働者をどうするにしても、産業再編成をするにしても、最後は、みな金融ですよ。それを押さえるという力がなければ、何も出来ない。

「（前略）私は銀行法改正について、第一条に目的条項を新設し、銀行の社会的責任、公共的役割を明らかにする必要があると思います。

一、銀行は国民経済の健全な発展のため、通貨価値の維持安定に協力する

二、銀行の業務を通じて資金の適正な配分に寄与し、国民福祉の増大および経済の秩序維持に努める

三、銀行業務の公共性にかんがみ、監督の適正を期するとともに、信用維持と預金者の保護に徹する

そういうことを盛り込もうということです（後略）」（民社党政策審議会会長・衆議院議員竹本孫一述『銀行法改正について』昭和五十年六月、一一頁、なおほぼ同内容のものを『八十年代への挑戦』二五一～二六八頁に所収）。また、昭和五十六年四月二十四日、衆議院本会議での代表質問を参照。

昭和五十六年六月一日公布の改正銀行法より抜萃（『法令全書』昭和五十六年六月号、大蔵省印刷局、二三頁）。

（目的）

この法律は、銀行の業務の公共性にかんがみ、信用を維持し、預金者等の保護を確保するとともに金融の円滑を図るため、銀行の業務の健全かつ適切な運営を期し、もって国民経済の健全な発展に資することを目的とする。

2　この法律の運用に当たっては、銀行の業務の運営についての自主的な努力を尊重するよう配慮しなければならない。

だから私は、民主党はまず第一に政権を握るということです。政権を握って、その次に銀行法の改正をやると。僕はいまでも、その思いは、まだ捨てていない。とにかく、中小企業なんかを助けると言ったって、どう助けるかということになれば、すべて金融ですよ。

それからもう一つは、資本主義のいちばん悪いところはアナーキズムだ。生産の計画からやるためには、金融の計画が先だ。そいつを押さえるやつがいない。だから、社会主義という言葉が、いいか悪いかは別として、社会化を本当に実現しようと思えば、民主党はまず政権を握って、次にはいまの銀行法の改正をね。僕は、第一条を変えただけで、半分やって終わったんです。だから、第二条というか、次に銀行法を改正してね。

要するに、経済の幹を、根幹を押さえなきゃ改革は出来ませんよ。だから私は、バラバラのアナーキズムが、いまの経済だと思う。たとえばいま、森内閣はパーだから、百兆円ぐらいの金を使ったでしょ、ばら撒いて。ばら撒いたけど、重点がないんだ。何の役にも立たん。どこかへ消えちゃった。そういう意味で、やっぱり経済の建て直しをやろうと思ったら、金融を押さえなきゃだめです。金融を建て直さなきゃ……。それがいま、全然、まだ緒に就いてないんだ。

その次は、もう一つ言うと、やっぱり党の再編成が必要ですね、民主党の。そのためには、まず前以て、労働組合を半分引っ繰り返さなきゃだめだ。労働組合は、ただ要求だけなんだ。責任を担うという組合じゃない。英国の労働党が強いのは、労働組合が、「我々が英国の経済を背負っているんだ」という、誇りと信念を持っている。それを鞭撻したのは、H・G・ウェールズですよ。H・G・ウェールズは労働組合に乗り込んで行って、「諸君の言うことは、よく分かる。しかし、大事なことは行動だ。諸君は行動で、英国を背負って立つという誇りと責任体制が出来ておると思うか」と。それで一席ぶって、H・G・ウェールズの最後の結論は、「諸君の言う気持ちはよく分かる。同情もする、理解もする。けれども、ただワイワイ騒ぐだけではだめなんだ。諸君、願わくはセンチメンタル・ギャングになるな」と。日本の労働組合は、センチメンタル・ギャングですよ。ワアワア言うだけで、何も押さえていない。

私はだから、まず政治家がプリンシプルを持って、政策を持って、建設的な行動に出る。第二は、それを下から押して進める、協力をする、そういう集団が出来なきゃいかん。いま、それがない。それが全国に広がって、政府を支える組織にならなきゃだめだ。いまは支えるどころか、せいぜいセンチメンタル・ギャングの集団。そこを直さなきゃだめだ。そういうことをすればいい。だから、日本の改革というのは、まだ第一ページだ。第一章にもならん。そういう意味で、改革の道というのは、長いですね。

季武　どうもありがとうございました。

〈以上〉

竹本孫一
オーラルヒストリー

第7回

[2001年1月17日13:35～15:45]

〔インタビュアー〕

伊藤　隆(政策研究大学院大学教授)

季武嘉也(創価大学教授)

竹中治堅(政策研究大学院大学助教授)

黒沢博道(財団法人富士社会教育センター常務理事)

竹本哲子(夫人)

三木敏子(夫人の姪)

(於：ライフニクス高井戸「小会議室」)

余力を残して

伊藤　（質問要項の）一番の、浜松市長選に出ようと考えたことと、それから結局やめたことですが、これについてはどうですか。

第七回質問要項の第一番。――昭和五十年に浜松市長選に出馬された際のお気持ちと、結局やめた経緯を、お話しください。

竹本　市長選のことは、全然記憶がないですね。

伊藤　でも、一度出ようかなと思ったんでしょう？

竹本　浜松の市長選は、何だったっけ……。

哲子夫人　あれで大騒動で、日本楽器の社長に憎まれちゃったんじゃない。あなたが相談しないで……。

浜松市長選については、哲子夫人が『選挙裏方三〇年』三一～三九頁、『八十年短き一夜の夢なりし』一二八～一二九頁に書いている。

伊藤　川上（源一）さんですか。

哲子夫人　ええ。あれから怒ったんですよ。応援したのに、相談しないで、市長になるって言って……。選挙事務長の白石さんだって、怒ったのよ。

竹本　何で出るって言ったのかな。

伊藤　勧めたのは、誰なんですかね。

哲子夫人　若い人達。酒井さんとか、若い市会議員や何かが、「市長になれ」って勧めたのね。あなたが市長になろうかと思ったのは、結局、民社党がパッとしないでしょ。だから、せめて浜松市で思うことをやろうかということだったんじゃない？

伊藤　そうしたら、それが大騒動になっちゃったと。

哲子夫人　ええ。

竹本　一つの自分のビジョンを活かす場だと。あそこは人口が五十万ぐらいですから、相当大きいんですよ。だから、一通り自分のビジョンを活かしてやれるなと。特に、経済的には豊かなんです。（日本）楽器があるでしょ、自動車があるでしょ。そういうことで、割に経済的には豊かなんです。だから、一つの政治的基盤をつくるということで、やろうと思えばやれるから……。普通の市長と、ちょっと桁が違って、大きいし、静岡県全体を振り回せるというので、「やってみるかな」というような気持ちはあったと思いますね。

伊藤　自動車というのは、どこの工場ですか。

竹本　いまのスズキ自動車もあれば、日産もあるし……。

伊藤　いろいろあるんですか。

竹本　だから、産業的にも、静岡県でいちばん豊かなんですよ。だから、一通りの仕事は出来るというような意味で、基盤をつくる意味にもなるし、面白いだろうと。庭をつくるような意味で、やってみるかなというような……。僕はだいたい、抽象論が嫌いですからね。具体的に建設をするということができれば、一つの三年か四年かの経験としてはいいじゃないかと。その前にも、だから知事に担がれたことがあるんです。知事よりは市長のほうが、具体的ですよね。

伊藤　衆議院議員というのは、どこまでいってもワン・オブ・ゼムですよね。何か出来るわけじゃないでしょ。市長は、自分で考えれば、出来ると。

竹本　すぐ出来るからね。

伊藤　やっぱり、それは魅力だったんでしょうね。

竹本　それは、いちばんの魅力ですね。

伊藤　だけど、川上さんは賛成しなかったわけですね。

竹本　あの人は、とにかく僕に非常に期待したんですね。なぜかと言うと、日本楽器なんかの税の問題を、僕は極めて簡単に解決した。僕は大蔵省が地盤みたいなものですから、顔があるから、アッという間に解決したんです。それで、非常に有力な、税に対する発言権が出来たと、喜んだわけです。それを僕が、「市長に出てもいい」なんていうことを言い出したもんだから、怒った。僕は、市長は箱庭趣味みたいなもので、庭づくりのようなつもりでね。ちょっとぐらいは、三年か四年ぐらいは、いいじゃないかと思ったんですがね。だけど、川上さんは、えらく怒ったそうです。

伊藤　選挙事務長も怒ったそうですけど、何という人ですか。

竹本　白石（信明）君だ。あれは、川上の系統だ。川上さんとは、だから、それが喧嘩の元だ。

伊藤　そうすると、その次の衆議院選挙は大変でしたね。

竹本　だろうと思いますね。

伊藤　（質問の）二番目に行きますけれども、議員を辞めようというのは、どういうことですか。

第七回質問要項の第二番。――第三十六回総選挙で当選されて、昭和五十八年総選挙には出馬されず、引退なさったと思いますが、引退の決意をなさった経緯を、お聞かせ下さい。

竹本　さあ、記憶にないな。

伊藤　その時は、未練はなかったですか。まだ代議士をやっていたいとか……。

竹本　二十年やったから、もう一区切りだったということだと思いますね。それから、もう歳を取って、辞めた時は七十八ぐらいじゃなかったか。だから、だいたいこの辺だと思ったんですね。

伊藤　それと、民社党も、あまり伸びないでしょう。そういうこともあったんですか。民社党の将来ということで……。

竹本　いや、伸びないということは、理由になりませんね。自分で伸ばせばいいんだから（笑）。僕は、まだ本気になれば、相当戦えるという自信を持っているしね。自惚れですけどね。国会の論戦で、僕に敵うやつはいなかった。だから、行き詰まって辞めるというようなことは、なかったと思いますね。

　与太話になりますけど、僕がいちばん仲が良かったのは福田赳夫ですよ。福田さんは、どういう席でも、僕の上には絶対に座らん。そのぐらい、彼は僕に敬意を払っておった。それで、懇談会とか何とかがありますね。そういう時でも、常に、絶対に、僕を立てて、だから僕の意見は全部通った。だから、そういう点では、僕は党の総裁にはならなかったけれども、意見は僕の意見がいちばん通ったですね。だから、その点はもう、極端に言えば満足をして、だいたいこの辺でいいと思って辞めたんだと思いますね。議員生活では、野党ということを特に嫌う人もいますけれども、僕の意見は全部通ったんだから、それを理由で辞めるということは、考えなかったと思いますね。

哲子夫人　この方は、何でもああいうふうに決めちゃうけど、みんなが「辞めてくれ」って言ったんですよ。最後の選挙は、川上さんにもあれされて、歳を取ってるから、大変だったんですよね。

伊藤　何が大変なんですか。

哲子夫人　選挙運動するにしても、朝一番から行って……。竹本な

んかでもやったけれども、それにしたって七十五でしたから、みんなも気を遣うでしょ。それで私も、本当に大変だったんです。何しろ、十人に一人は日本楽器の息のかかっているというところでね。だから、もう本当に……。それで支持者の人にも、「先生、いい加減に、今度は辞めてもらいたい」と言う人も、ずいぶんいたんです。とても大変だって……。これから先は、ますます大変になるって……。こちらも、あまり無理して、歳を取って、落っこちたりするのも嫌だからね。

伊藤　でも、竹本さんとしては、未練がありましたか。

哲子夫人　でも、耳が悪いから。もう自分でも困ってたからね。

伊藤　じゃあ、あまり未練はなかった？

哲子夫人　さあ、どうでしょうか。新聞なんかで馬鹿に煽てられちゃって、まだ余力を残して辞めるというんで、褒められちゃって……。だから、かえっていい気持ちで……。

引退関連記事のスクラップは、竹本文書一―三五二～三九七にある。

竹本　とにかく議会は、立法から言えば、非常に封建制がありますからね。しかし、予算委員会があるでしょう。だから、予算委員会で頑張れば、敵も味方もないでしょう。圧倒しちゃうから。総理以下を抑えちゃうから。だから、議会というところは、力さえあれば、こんなありがたい場所はない。私は、いまでもそう思ってる。だから、少数党であっても、何であっても、演壇に立てば、こっちのものですよ。あとは力です。そういう点では、自民党の数が多いと、発言するチャンスが多いということはあっても、一回はありますからね。そこで抑えておけば……。

私は議員というのは、ちょうど四十七士の討ち入りみたいなものだと。入って行ったら、あとは真剣勝負ですからね。そこで頑張れば、経歴だとか党派の数が多いとか、そんなことは問題じゃない。だから私は、議員としての活動には、全然不便も矛盾も感じたことはないです。いま言ったように、福田さんを相手に、法案の修正だって、僕はいくつもやっていますよ、一人で……。ちゃんと言質を取ればいいんですから。言質を取るまで、追い込めばいいんでね。だから、銀行法の改正でも何でも、数で言うと野党の意見が通るなんていうことは考えられないけど、福田さんが総理なら、彼が総理時代は、「分かりました」と言ってやっちゃうからね。だから、法案の修正なんかだって、僕はずいぶんやりましたよ。一人でやるんだ。うちの党でも、一緒にやるやつはいないからね。総理もしくは大蔵大臣に、直通ですからね。

だから、私は少数党の悲哀というものは、国会には二十年間おりましたけれども、あまり感じなかったですね。幸いに、いま言ったように福田さんや、それから宮沢君なんかだって……。あれは、初めはいまのようにボケてなかったから（笑）。大平派の代表が二人おって、一人が宮沢で、もう一人が大平だ。大平のほうは、むしろ実際家ですからね。だけど、宮沢はちょっと論客なところがあって、僕とも予算委員会でずいぶんやりました。だから、僕は自分の意見を述べる、あるいは法案を修正させるということで、少数党なるが故にという悲哀を感じたことはあまりなかった。だから、そういう不満はなかったですね。だから国会は、ある意味においては、実力本位だと。発言の機会がないと、ちょっと困りますけどね。少なくとも一回はありますからね。だから、その時に、ちゃんとやればいい。それで、ことに大臣級になれば、この人がどのぐらいの議論をするかということが分かるから、敬意を表しますよ。だから私は、議会はある意味で、実力闘争の場だと思ってますね。

伊藤　いちばんの場は、やっぱり予算委員会ですか。

竹本　いちばん派手なのは、本会議ですね。本会議は、バッと、デモンストレーションみたいなことで派手ですけれども、政策の意見を通すということになれば、本会議はただ儀式で終わりですから、予算委員会で、ちゃんと抑えなきゃいかん。だから、予算委員会がやっぱりいちばん面白いし、私は予算委員会で、不便も矛盾も感じたことはないです。全部、通ったから。おそらく少数党で、あれだけ法案を通したのは、他にはいないんじゃないですかね。それは自民党でも、頭のいいやつは、みんな認めていましたよ。

自民党では、ちょっとやんちゃ坊主で、力があるのは山中貞則ですよ。あれが自民党のなかでは、最高の一人だ。彼は僕とは、いちばん仲が良かった。だから、割に僕の意見は、ちょっと言えば、彼がぐるぐる回ってくれる。だから、不便は感じなかったですね。

伊藤　面白い議員生活ですね。質問をつくる時に、かなり調べられたりするわけでしょ。

竹本　調査と言うと、調査になるかもしらんけれども、少数党でしょ。とにかく、質問をつくれるような頭のあるやつはいない。だから質問の時に、敵に、自民党にやらせればいいんですよ。「その資料を出せ」とか、みんな向こうへ……。それでやるから、別に僕は何もやらない。その点、国会は面白いし、それから楽ですね。いろいろ議論しても、最後の焦点は五分か十分で、そこだけ自分が握っておれば、あとは質問の時に、敵側に材料を出させればいいんです。だから私の質問は、極端に言えば、質問のポイントを向こうが教えてくれる。追い込んで行けばね。特に私は、徹夜で勉強してなんていうことはやらない。結構、その場でやっていける。僕は回転が速いんだ。だから、追い込んで、資料を出させるということで……。ただ、野党で大事なことは、言質を取るということですよ。追い込んで言質を取れば、あとは向こうがやります。法案を修正する、あるいはこのまま答えを出すというようなことを、全部敵側にやらせる。負担させるということです。

大蔵省の人脈を活かして

伊藤　じゃあ、今度は（質問の）三番に行ってください。社団法人日本経済研究協会の理事長をやっておられますが、これはどういう団体ですか。

竹本　これは、私がつくったんだけどもね。一つは、斎藤君だ。斎藤という秘書がおりまして、それに仕事をつくってやろうということです。それから、僕も、そういう会を一つ持っとったほうがいいという程度でつくった。結果においては、私がそれをつくるということになった時に、いちばん協力したのが愛知揆一と平田敬一郎。この二人は大蔵省の最高のスタッフだ。あの二人が、僕の親友なんですよ。

自慢話になって悪いけれども、東大は私どもが頑張った時から、席次がなくなったんです。愛知は、仙台の二高のトップだ。僕は、熊本の五高のトップです。他には、名前ぐらいはありますけど、実際問題として、問題になるやつはいなかった。だから、愛知は大学のライバルでもあるし、いちばんの親友でもある。それから、仲が良い親友の平田が、大蔵次官になる。だから、そういう関係を温存しておくという意味で、ちゃんと会をつくっておこうということで、経済研究協会

をつくった。あれを、いちばん進めて、いちばん協力したのは、平田と愛知です。だから大蔵省は、研究協会と言えば飛んで来ます。親方の二人が、僕の親友だと分かっていますから。

伊藤　これは、他にどういう人達が入っていたわけですか。

竹本　特に、入った人というか、平田と森永がおればね。あれが、一級下なんだ。平田と愛知と、森永もおるから、僕は名前だけで、何でも出来る。

日本経済研究協会「趣意書」によれば、前年のＩＭＦ（国際通貨基金）八条国への正式移行、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）への加盟をふまえ、「経済の二重構造を是正し、流動する国際経済情勢に適応しつつ諸問題の解決を図って、日本経済の均衡ある発展を達成するための調査研究機関として」設立した由（竹本文書四―四〇九～四一五）。添付の名簿によれば、顧問として田中角栄、福田赳夫、堀木鎌三、片山哲、宮沢喜一、春日一幸、平田敬一郎、森永貞一郎、吾孫子豊、木村秀弘、米本卯吉、藤井崇治、奥村喜和男、湊守篤、宮崎輝、岩佐凱実、今里広記、森永為貴、上村健太郎、藤井丙午の各氏。参与として鶴田瑞夫、滝田実、和田春生、堀江忠雄、矢島の各氏と、個人名は確定しないが中小企業庁、通産省、建設省、農林省の代表者を迎えている。役員は会長・竹本孫一のほか、副会長・栗原勝、理事長・八谷政行、理事・田中国隆、福島寿、米信春雄、菊地弘泰、寺尾浄人、田島光春、黒川宗雄、松本修造、小倉一春、会田甚作の各氏、また理事事務局長・斎藤慎一氏という陣容。

伊藤　そうすると、これは民社系とは全然関係ないんですか。

竹本　関係ない。

伊藤　民社の人は入ってない？

竹本　民社は関係ない。

実際は春日一幸氏が顧問に入っており、中小企業対策の研究が課題となっている（前掲「趣意書」）。

伊藤　この協会は、いまでもあるんですか。

竹本　いまもあります。まだ名前だけ残っている。

伊藤　やっぱり理事長ですか。

竹本　そう。しかし、名前だけだけどね。だけど、僕の名前なら、まだ便利な面もあるでしょう。何と言ったって、大蔵省がいちばん有力で便利ですよ。

伊藤　研究協会というのは、事業はどんなことをやったんですか。

竹本　たまに出版をやってるんじゃないかな。それから、講演会とか。

伊藤　ご自分も講演なさったりとか。

竹本　もちろんです。あの研究協会は、とにかく僕と愛知と平田が組んでるんですから、大蔵省は普通の局長なんかは、最高の敬意を表しますよ。

伊藤　事務所は、どこにあったんですか。

竹本　事務所は、有楽町駅の近くだ。

昭和四十二年度事業報告によれば、事務所は千代田区丸ノ内三―四、日石ビル内（竹本文書四―三九〇～三九五）。

伊藤　いちおう、まだそこに看板が残っていると。

哲子夫人　でしょうね。電話をかけたぐらいで、知らないけれど……。

竹本　大蔵省は、とにかく中の団結が強いですよ。だから、親方を握っていると、すべて顔は、みんな向こうが知っている。

伊藤　声をかければ、誰でも協力するわけですね。

竹本　そう。大蔵省は、そういう意味では派閥の団結が強い。愛知に、

ちょっと言ったら、どこへ行ってもね。いちばん面白かったのは、いつか四国の高知かどこかへ行った。そうすると、そこの局長が挨拶に来た。「何の用か」と言ったら、「いや、先生に一度お目にかかりたい」とか何とか言ってね。それはみんな、ちゃんと知ってるんです。そういうところですよ。それから、大蔵省は部落根性が強いでしょう。

伊藤　利用出来るところですね。じゃあ、その次の富士社会教育センターのことですが、これは黒沢さんのところですね。

第七回質問要項の第四番。――富士社会教育センターの顧問をされていましたが、この団体とのご関係は何時から、どのようにして始まったのでしょうか。

竹本　西村栄一さんは、僕は割に個人的に親しかった。そういう関係もあってですね。富士社会教育センターをつくるという時に、僕は名前だけのつもりだったが、西村さんが団体の権威付けというか、活動面を強化するという意味で、「ちょうどいいから君、中へ入ってくれ」と言うので入った。たまたまというか、幸いに、僕が静岡県連の会長だ。

財団法人富士社会教育センターの本部は、静岡県御殿場市にある。昭和四十年に富士政治大学校建設用地を同地に決定後、昭和四十二年に財団法人設立準備委員会が発足し、竹本氏ほか八名が委員となった（『創立十年』富士社会教育センター・富士政治大学校・昭和五十四年）。

伊藤　最初から？

竹本　はい。

伊藤　これは、どういう団体なんですか。

竹本　要するに、民社党の外郭団体というか……。

伊藤　教育ですか？

竹本　まあ、自分たちの同志の基盤をつくろうということが狙いだったと思います。

前掲『創立十年』によれば、当初の活動は御殿場本校における労組単位のセミナー開催であったが、次第に地方研修会の開催と、これら修了生を主な対象とした通信教育の実施、出版活動、理論委員会による研究会や講演会の開催等も行うようになった。

竹本　まあ僕は、個人的にはいちばん親しいのは西尾さんだった。それから、その次が西村さん。その次が春日一幸だ。このルートは個人的に親しいものだから……。

伊藤　個人的に親しいんですか。だいたい、いまおっしゃった名前は、あまり理論家ではない人達ですね。

竹本　理論家じゃないけど、民社党で目ぼしいやつというのは、いまの連中ですよ。西村さんという人も、ああいう人で、押しが強かったけれども……。向こうさんから言っても、相談相手に他に誰がおるかということになると、僕は政策が中心だけれども、僕なんかはいい相談相手じゃないですかね。それから、西村さんにしてみれば、別組織をつくろうということになれば、僕が静岡県連会長だから、どうしても組んでおかなきゃいかんという意味もあったと思うし……。

伊藤　じゃあ、次に行ってください。この「山田洋雄」という名前に、ご記憶がありますか。

第七回質問要項の第五番。――先生が戦時中「山田洋雄」というペンネームで、『国民評論』という雑誌に時々お書きになっておられたことが、「山本勝市」日記で分かります。これは事実のように思われますが、如何でしょうか。そうだとしたら、この『国民評論』という雑誌は、どういう雑誌だったのでしょうか。

竹本　これは、僕のペンネームだ（笑）。山本勝市は、僕は軽蔑してるんだ。だから、彼が何を言ったか、彼の雑誌を僕は読んでないから分かりませんがね。おそらく、本当でしょう。

伊藤　山本勝市は自由経済論者ですから、「統制経済論者の竹本孫一なんていうやつは……」なんて書いてある。

竹本　『国民評論』というのは、社長が小林五郎だったかな。あれはハッタリだけで、頭のない男だ（笑）。だから、『国民評論』という雑誌を武器にして、我々の宣伝活動に使おうと、僕が考えた。それで、あの雑誌を始めて、力を入れる。あの時は、役に立ちました。

伊藤　小林さんのスポンサーは、誰なんですか。

竹本　さあ、スポンサーは知りませんね。

伊藤　先生、これ（山田名の論文リスト、巻末の「著作リスト」参照）を見てください。その雑誌に、ずいぶん書いておられるんですよ。

竹本　これは、みんな僕だね。覚えていませんけど、僕に決まってる。

伊藤　これ、だいたい新体制の頃ですからね。大政翼賛会の前後です。

竹本　そうでしょう、だいたいね。

伊藤　何でペンネームを使ったんですか。

竹本　役人だから、このほうが簡単でいいと思ったんでしょうね。大した理由はないです。だから、『国民評論』は、ある時には僕らの機関誌だったんです。小林五郎という社長は、自分では何にもない人だったけど……。

伊藤　小林五郎って、どういう人ですか。

竹本　単なる雑誌の経営者だ。

伊藤　これ、平成六年に、先生からいただいた名刺なんですよ。「財政金融研究会会長」とある。

竹本　さっきのやつですね。

伊藤　同じですか？

黒沢　いや、違う。

竹本　さっき言った財政金融研究会。

伊藤　さっきのは、日本経済研究協会です。

竹本　同じだと思います。二つは、名前が違うだけ。斎藤がやっているやつだ。

黒沢　財政金融研究会は、相馬さんがやっているんですよ。

竹本　いまは相馬だ。

伊藤　前は？

竹本　もともと……。

昭和五十五年、竹本氏は財政金融研究会会長に就任した。その折の「ごあいさつ」によれば、同会は「昭和二十四年、大蔵省内に財政金融調査会として発足して以来、三十年余の長きにわたり内外経済の現状及び将来について調査研究を行ない、その成果を会員企業に提供してきた伝統ある研究調査団体」である。事情により一時活動を休止していたが、関係者の努力により昨（昭和五十四）年再建され、かつて運営に参加していた関係で、竹本氏が会長に就任することになったという（昭和五十五年二月十五日付『財政金融情報』二〇〇〇号）。機関誌『財政金融情報』二〇〇〇号には、竹下登大蔵大臣ほか通産・外務両大臣、経済企画庁長官、日銀総裁が寄稿し、名刺広告には銀行、証券会社が目立つ。

黒沢　相馬さんは、事務局長みたいな役割は長いんじゃないですか。

竹本　まあ、勝手に名前を貸してあって、動いてもらったというだけで、特に何ということはない。

伊藤　相馬という人は、どういう人ですか。

竹本　相馬というのは、いちばん最後ですね。

伊藤　もともと、どういう人ですか。

竹本　あれも、極端に言えば、僕が助けてやったんだ。

黒沢　秘書的な役割じゃないかな。現実に国会議員の秘書をやったことはないと思うけど、若い人ですよ。僕らより若い人です。

竹本　相馬君というのは、いろいろやってるようだけど、いい男だから、僕は少し救ってやったという形でね。あれは満州（中国東北地方）なんかに、顔がありますよ。

伊藤　じゃあ、先生の側近みたいな人ですか。

竹本　そうですね。

伊藤　その人のためにつくったと。

竹本　いまちょっと、満州でやっているやつがだいぶ苦しくなって、忙しいらしい。最近、半年以上会わないですね。だけど、非常に真面目な男です。見所はあると思ったから、助けてやった。

伊藤　じゃあ、さっきおっしゃった日本経済研究協会の斎藤さんは、どういう人ですか。

黒沢　秘書。

竹本　あれは、役所におったやつを、僕が「来ないか」と言ったら、辞めて来たわけだ。それ以来、ずっと一緒にいる。

伊藤　どこの役所ですか。

竹本　どこでしたかね。大蔵省じゃなかったような気がしますね。

黒沢　もう長い間、秘書をやっていまして……。

竹本　どこか役所におったですね。確か、海上保安庁でした。

伊藤　まだ、お元気でやっているわけですか。

黒沢　元気です。この前、ちょっと病気でしたが……。従って、先生が現役を辞めた時に、斎藤さんのために、この団体をつくってやったんじゃないですかね。

伊藤　もっと古いんじゃないですか。

竹本　辞める前から……。

伊藤　じゃあ、財政金融研究会は辞めてからじゃないですか。

竹本　愛知、平田と仲がいいから。

伊藤　それはだから、日本経済研究協会のほうでしょう。

竹本　両方だ。大蔵省の関係で、財政という名前を付けたと思うんだ。

黒沢　なるほど。じゃあ、分からないわ。斎藤さんは、長い間秘書をやっていましてね。

豊富な外遊経験

伊藤　これを見てください。先生は、ずいぶんたくさん外遊をしているでしょう。特に、昭和四十九年の中国訪問では、鄧小平にお会いになったということですね。中国へ行かれた時の記憶はございますか。

第七回質問要項の第七番。――昭和三十六年の片山さんとのヨーロッパ行き、昭和三十九年の東南アジア視察、昭和四十年の北米視察、昭和四十四年の西ドイツの招待での西独・仏・伊・英・スイス・ソ連視察、昭和四十五年の大蔵委員会のヨーロッパ視察、昭和四十六年のインド・アフリカ・仏・独等視察、同年の民社党の訪米視察団への参加、昭和四十九年の訪中、昭和五十二年のヨーロッパ視察ほか、外国への旅行についての思い出をお話しください。

竹本　鄧小平に会った記憶はないな。

伊藤　中国で、何か記憶はありますか。中国に行かれたということは？

竹本　それは行ったけど、あの時に誰に会ったかなあ……。

伊藤　何かにチラッと、鄧小平に会ったということが書いてありましたので……。行かれた時は、確か中国とソ連との関係が非常に悪くなっている時期ですよ。

「私は、七四年八月藤山団長とともに訪中議員団の一員として北京を訪れ、約四五分間にわたって鄧氏にもお目にかかった。がっしりとした体格と、実務家らしい意見には強い印象を受けたが、いちばん強い印象は、『ソ連はスキがあれば必ず出て来る』とのソ連批判だった。地下壕はそのために深く掘られ、食糧の備蓄もそのためだった」（『私のなかの昭和史』一〇六～七頁）。

「私は一九七四年中国を訪問したときに、鄧小平党副主席が、『日本は自分の国を守ることについて、コンセンサスがないのは何故か』ときかれたこと、および、『日本はアジアの一員としての責任を忘れないようにして貰いたい』『スキがあれば必ず乗ぜられる』と述べたことを印象深く記憶している」（前掲書、一七六頁）。

竹本　鄧小平に会ったかなあ……。

伊藤　会った人を覚えています？

竹本　記憶がない。

伊藤　外国に行かれた時には、だいたい帰って来てから、何か文章を書いておられますよね。

竹本　だいたいね。

伊藤　それを探しましょう。

竹本　会ったと言われれば、そういう気もするけど……。ちょっと、はっきり記憶がないですね。

伊藤　何をするために中国に行ったんですか。

竹本　それは出張で行ったんでしょう。

伊藤　出張は出張でしょうけれども、議員団か何かで行ったんですか。誰と一緒に行かれたかは？

竹本　二、三度行ったけどね。

伊藤　だいたい、北京ですか。満州のほうにも行かれましたか。

竹本　満州は……。僕は、満州にちょうど半年ぐらいおったですからね。

伊藤　戦後に中国に行った時には？

竹本　役人の時に行って……。

伊藤　役人の時の話は、この前伺いましたけれども、民社党の時代は？

黒沢　春日さんと行ったかどうか？

竹本　ちょっと……。

伊藤　外国に行ったことで、いちばん印象に残っているのは何ですか。たとえば、西ドイツは？

竹本　いちばんの印象というのは、なかなか難しいですね。しかし、イギリスに行っても、ずいぶん会っていますからね。それから、ドイツに行った時も、それからアメリカもあるし……。

伊藤　誰に会ったことが、いちばん印象に残っていますか。西ドイツで会われた方で、印象のある人は？

竹本　あまりにも多いから……。

伊藤　これ（『私のなかの昭和史』）を見てください。藤山（愛一郎）さんは、どうでした？

竹本　あの人は、ああいう人だから、ただ敬意は表する程度だね。

伊藤　たとえば鄧小平は、あまり記憶がないですか。

竹本　あまり記憶はありません。

伊藤　ヨーロッパでは、どうですかね。ハンガリーに行ったり、それからオランダでしょう。ドイツにも行かれた。

竹本　ドイツは、いちばんあれですよ。

伊藤　今度は、イギリスに行かれて……。

竹本　英国は、いちばん僕は懇意で親しい。

伊藤　誰と？

竹本　いや、名前は、ちょっと出てきませんがね。僕はいまでも、頭のなかは、半分以上は英国なんです。だから、英国には最大限度の好意を持っている。いまでも、いちばん好きです。

伊藤　西ドイツの社民党は？

竹本　これは、行ったことは覚えています。

伊藤　人としては、あまり覚えていませんか。ここに、具体的にミューラーという人の名前が出ていますが……。

竹本　ミューラーというのは、僕は直接……。

伊藤　これを読むと、直接会っているんですよ。「私は車中、キリスト教と共産主義の問題について、同行のミューラー博士と多くの有益な議論を戦わせることができた」と。

「西独社民党を訪ねて」（『私のなかの昭和史』七七～八九頁）。これは、一九六一年八月に片山哲氏、星島元衆議院議長、杉山元治郎氏らとともに、ミューラー博士のクリスチャン・アカデミーに招待されて、ドイツを訪問したときに、ミュンヘンで書いたもの。

竹本　ミューラーというのは、確かに議論したと思います。

伊藤　経済学者ですか。

竹本　さあ……。

伊藤　社民党の人？

竹本　社民党で……。

伊藤　アイヒラーという名前は覚えていますか。

竹本　ああ、アイヒラーには会ったね。

伊藤　ここに、ちゃんと書いてあるんです。「西ドイツ社民党の理論的指導者」と。

竹本　これは、非常に幅があった。

伊藤　やっぱり、外遊はあまり覚えてないですか。

竹本　あまり覚えてないですね。

伊藤　じゃあ、他のことで補うことにして、先へ行きます。八番の、この二つの会社については覚えていますか。

第七回質問要項の第八番。――東陽通商株式会社、広島臨港産業株式会社とのご関係は、どんなものですか。

竹本　東陽通商は、いまでも健在ですよ。

伊藤　何の会社ですか。

竹本　輸入の会社です。

伊藤　貿易ですね。これは、どういう関係があるんですか。

竹本　科学技術のいちばん先端を行く、日本の機械工業や何かの進歩に必要なものは、だいたいここが持っている。だからいま、いちばん儲かっている。これは、僕と奥村喜和男さんがつくったんです。

伊藤　それは、いつの話ですか。戦争が終わってからでしょう。

竹本　奥村さんが情報局を辞めて……。今里広記が、ここと何か関係があった。今里が、我々を使おうと思って、そういう会社をつくった。あの会社は、だから、いちばん先端を行く、しかも、いちばん儲けが

大きい。いまだって、株を一万持ってる。

『追憶　奥村喜和男』二八〇頁によれば、昭和二十八年九月、奥村氏が東陽通商株式会社を設立し、取締役社長に就任した。また、同書一八三～四頁、二一三頁によれば、同社の前身はＧＨＱと取引があった三井物産系の興亜商事であり、奥村氏はその再建整理を逓信省の先輩であった大和田悌二氏から依頼され、経営が軌道に乗った時点で、自分の雅号・東陽を取り社名を改めたという。同社は「フィリッピンとの賠償の船舶の輸出に成功し、また、ドイツの工作機械や英国のエレクトロニクスの機械を輸入し、一方農薬にも手を染め次第に事業は発展して行き、昔の右翼から、社会党の領袖までが出入する程になった」という（同書、二一三～四頁）。なお、竹本氏は、奥村氏の選挙出馬を応援しようと、海上保安大学校を辞職したが、奥村氏が落選したため、その後奥村氏から貿易会社の月給という名目で生活費を貰っており（第四回最後のほうを参照）、この貿易会社が東陽通商であろう。

伊藤　そうですか。いまもある会社なんですね。じゃあ、奥村さんの関係で、そこに？

竹本　奥村さんと僕は、会社の最初の幹部になったんだ。僕は現役の監査役だ。奥村さんは常務取締役だ。

伊藤　そうすると、先生にとっては、かなり大事な会社ですよね。場合によっては、政治資金なんかをくれたかもしれないでしょう。政治資金を出してくれましたか。多少、お金の援助をしてくれましたか。

竹本　もう、だいぶ前だね。

伊藤　じゃあ、いまはもう先生は関係ないんでしょう。いまでも関係あります？

竹本　役はないけど、忘年会には必ず出る。この間も、出て来た。

伊藤　これは、東京にある会社なんですか。

竹本　八重洲口の日本銀行の、すぐ隣です。最近、社名を変えた（東陽テクニカ）。日本最高かどうか知らんが、一流であることは間違いない。

昭和五十四年五月現在の同社『社員住所録』（竹本文書四―二五四）によれば、本社は東京都中央区日本橋本石町、大阪支店と水戸・筑波・名古屋・横浜の各営業所、福岡出張所があり、海外駐在員事務所がパリ、デュッセルドルフ、ロンドン、マニラにあった。

伊藤　奥村さんとの関係は、ずっと後まで続いたわけですね。

竹本　要するに今里広記がおって、奥村さんと通じ合って、民間とのコネは、今里がみんなやったりね。

伊藤　じゃあ、もう一つの会社はどうですか。

竹本　これは、僕の関係です。広島臨港というのは、家内の親父が広島におって、つくった会社で……。

三木　いま、主人が社長をしているんです。

伊藤　奥さんのお父さんですか。臨港産業というのは、何をする会社ですか。

三木　土地会社。

竹本　埋め立てもやったかもしれません。

黒沢　こちらの女性（三木敏子）の旦那さんが社長なんです。

伊藤　いま社長なんですね。

哲子夫人　はい。その前は、うちの父だったんです。

伊藤　いや、驚いたな。

哲子夫人　いまは高島産業って、名前を変えました。

季武　柿原政一郎さんは、広島とはあまり関係がなかったんですか。

哲子夫人　いえ、広島で仕事をしていたんです。ですから、故郷は宮崎の高鍋で……。

季武　で、岡山に……。

哲子夫人　岡山で、若い時は大原孫三郎先生のところで……。

季武　その後、広島に？

哲子夫人　その後、広島です。ですから、経済的には、ほとんど広島で、それを宮崎へ持って行って……。

昭和五十七年一月の広島臨港産業株式会社の取締役会は、宮崎支社で開催している（「取締役会開催ご通知」竹本文書二―五七）。取締役会長は長津久男氏（哲子夫人の妹夫君）。

竹本　僕は、経済実業にはあまり興味はないんです。ないけれども、いまの広島臨港にしろ東陽通商にしろ、関係したところは、みんな内容が非常にいいところですね。運が良かったというか……（笑）。

伊藤　そういう関係があったんですか。

竹本　だから東陽通商は、僕が財界で頑張る意思がないものだから、ちょっちょっと手綱引きをやって、すぐ辞めちゃったんです。

伊藤　でも東陽通商は、そんなに簡単に辞めたわけじゃないでしょ。

竹本　東陽通商も簡単に、広島と一緒に辞めちゃった。辞めたけど、株は残ってる。

伊藤　そんなすぐに辞めたわけじゃないでしょ？

竹本　東陽通商はね……。

伊藤　十年とか二十年とかは、やっておられたんでしょ？

竹本　一期はやっただろうね。僕は要するに、金儲けには興味がないんだ。

伊藤　あまり関係ないとおっしゃいますが……。また、後で伺います（笑）。

戦前・戦後の交遊関係

伊藤　また、話が遡りますが、「科学と政治の会」はいつ頃まで続いたんですか。

竹本　そう言われると、ちょっと記憶がないがね。

伊藤　かなり後まで？

竹本　この連中は　その頃はみんな現役ですからね。

伊藤　中心は、やっぱり松前（重義）さんですか。

竹本　本当にやったのは、誰だったかなあ。しかし、みんな僕は親しいんだ。

伊藤　八木（秀二）さんというのは、どういう人ですか。

竹本　科学界の代表ということと、それからあの人も、いろいろやっとる仕事があったからね。

伊藤　千葉さんは、どうですか。

竹本　千葉三郎は、代議士のなかでは科学技術に特別興味があった。

伊藤　だいたい、改進党の代議士ですよね。堀木（鎌三）さんというのは、どういう方ですか。

竹本　堀木さんは、国鉄の親方だね。僕と、いちばん懇意だった。

伊藤　どこで懇意になったんですか。

竹本　あれは……。改革問題があったんだな。

伊藤　国鉄のですか。

竹本　政治関係で。

伊藤　やっぱり戦争中からの関係ですかね。

竹本　戦後だね。

伊藤　三輪（寿壮）さんは、戦前からですね。

竹本　ええ。

伊藤　松前さんは、前からでしょう。

竹本　僕と懇意なのは、みな翼賛会だ。これはだいたい、僕の懇意な人ばかりだ。

伊藤　松前さんは、ずっと社会党でしょう。

竹本　社会党というよりも、松前党だね。

伊藤　社会党のなかでも、あれは特別ですか。

竹本　ええ。特に、社会党に松前さんが……。社会党の松前じゃなかったね。

伊藤　松前の社会党というわけでもない。でも、先生は民社党でしょう。

竹本　この時は、まだ民社党……。

伊藤　いや、そうなんですけど、後々松前さんとの関係がどうなったのかなと思ったんです。

竹本　いや、最後まで悪くはなかった。それで、僕は東海大学の講師をしたんです。

伊藤　それはだけど、そんな長い期間じゃないでしょう。じゃあ、その次の質問に行きます。静岡新聞に、よく書いていますね。

竹本　鍋山さんと動いて、静岡新聞が信用を取り戻して頑張るというような形になって、それを応援したわけだ。

伊藤　鍋山さんが関係あるんですか。

黒沢　だから、静岡新聞が共産党にやられたんじゃないですかね。それを建て直したということじゃないですか。

伊藤　先へ進みます。十一番ですね。奥村さんのことは、いま分かりました。平田さんも分かりました。元朝日新聞社長の広岡さんとは、ずっと関係がありましたか。

第七回質問要項の第十一番。――奥村喜和男・平田敬一郎・広岡知男・山崎靖純・村田五郎・愛知揆一・徳富蘇峰などの諸氏とのご関係は、民社時代まで続いたのでしょうか。

竹本　クラスメートだ。

伊藤　クラスメートは分かりますけれども……。

竹本　僕が、理科から文科へ変わった。それで、変わってから、広岡の組に入ったんだ。それが一つと、彼は野球で天下に有名な男だったから、そういうこともあって、割に僕と気が合った。

伊藤　戦後も、ずっとですか。

竹本　いまでも、いちばん懇意だ。

伊藤　単なる個人的な関係だけですか。

竹本　そうですね。五高会というか、五高の同窓が集まる会の、彼はメンバーです。僕は発起人の一人です。

伊藤　仕事を通じての関係は、あまりないですか。

竹本　仕事の面では、ないね。野球の選手だから。今でも、よく会います、五高生の会で……。

伊藤　山崎さんは？

竹本　もう死んじゃったね。あの人は、東洋経済の石橋（湛山）と並んで……。一方は、思い切ったインフレ論だ。山崎さんは、ちょっと二割ぐらい……。あの頃、三勇士がおったね。石橋、山崎……。

伊藤　高橋亀吉も、そうですか。

竹本　亀吉は、方向は同じだけれども、特に……。東洋経済（石橋湛山）と山崎靖純、高橋か……。

伊藤　親しかったんですか。

竹本　親しい。山崎靖純は、ちょっと理想主義のところがあった。それで、僕とよく気が合った。

伊藤　それは、戦前・戦後を通じてですか。

竹本　そうですね。日本経済革新派だからね。

伊藤　村田（五郎）さんとの関係は、後まで続きましたか。

竹本　これは情報局の次長で……。

伊藤　彼が国民協会の会長になった頃まで、付き合いがありましたか。

竹本　少し政治的にも関係があったが、僕は戦後、少し生きた経済をというような意味もあって、「わかもと」に関係していた。あれは、「わかもと」の工場長をやったんだ。「わかもと」の社長と親戚なんだ。だから、僕を「わかもと」の重役に推薦したのは、村田五郎だ。

伊藤　村田さんはその後、国民協会の会長になりますけどね。

竹本　戦後政治で、彼は一つの大きな役割を持った。

伊藤　でも、先生とは、あまり関係なかったわけですか。

竹本　いや、どちらかと言うと、自民党的なんだが……。

伊藤　ほとんど、自民党なんです。

竹本　だから僕とは、それだけ違う。

伊藤　でも、自民党になったら、あまり関係がなくなりましたか。

竹本　そう。

伊藤　愛知さんは、さっき伺いましたので、分かりました。

竹本　愛知は、いちばん親しかったから。

伊藤　徳富さんは、どうですか。

竹本　蘇峰先生は、さっきの手紙だ。

［封筒表書］

大日本熱海市伊豆山押出一一九

徳富猪一郎先生

御侍史

［同裏］

新京市至聖大路政府官舎三〇三ノ一一六

竹本孫一拝

二月四日

［本文］

謹啓　先生には新年と共に益々御健闘遊ばされ祖国の為慶賀の至に存じます。其後は全くの御無沙汰に打過ぎ申訳も御座ゐませんが、先生の言報其の他に於ける御健闘振りは常々新聞を通じて存じ上げて居ります。祖国興亡の危機に際して之を強調し、之が打開の方途を示されつゝある先生の御活動を拝し全く感謝感激の外はありません。殊に先般言報理事会に於て決定発表せられた時局救済、難局打開の十大項目は満州国に於てすら多大の反響を呼んで居ります。某満系優秀分子は、満州国にもせめて先生の十分の一の指導者が欲しいと感激を以て語りました。情報国策宣伝に関係した小生二ヶ年の生活で最も印象的な言論報国会の創設も今に至って大に意義ありしことを痛感致して居ります。総て先生の御陰で感激の外はありません。降て小生も在満一年漸く満州の事情も解し得るに至り之から本格的に活動すべき段階で御座ゐますが、内地の危局を外に満州に滞在するに忍びず、今回意を決して辞表を提出、一浪人として空襲下の東京に帰ります。先輩よりも上司よりも大に自重を説かれましたが、国亡びて山河なし、況んや役人をやと卑見を申述べ、遂に上司の御承諾を得ました。二月中旬帰

京の上は奥村氏と相談の上、祖国のため決死の御奉公を致度と存じます。熱海にも是非御邪魔して先生の御指教を賜度と存じます。その節は何卒宜敷願上ます。

乍筆末先生の御健康を祈上ます。

先ハ右御報告申上ます。

敬具

二月四日

東京都渋谷区代々木上原町一二九五

竹本孫一拝

徳富先生

御侍史

伊藤　戦後も、お付き合いはありましたか。

竹本　熱海で何回か会った。

伊藤　じゃあやっぱり、戦中・戦後かもしれませんね。

竹本　ええ。

株で読む日本経済

伊藤　じゃあ、質問の十二番に行きます。先生は、株取引にご関心があるんじゃないかというふうに聞いていますが……。

竹本　経済の動きを、情報を早く握るには、株がいちばん早い。だからその意味で、円がいくらになった、株がいくらになった、為替がいくらになったという、生きた経済の指標を掴むには、証券がいちばん早い。だから、あとで時間があればちょっと言いますが、僕は、日本経済を三パーセント成長に持っていかなきゃだめだという意見なんです。戦後日本の政治を建て直すということで、いろいろいまの自民党はやっている。あれは、みんなパーだ。問題にならん。掴み所を持ってない。経済を知らない。どこを掴んでいいか、どこを押さえていいか知らない、低能と言っちゃ悪いけれども、頭のない連中が暗中模索してる。いまは、それですよ。だから、その時に、日本の経済をパッと掴むには、大雑把に掴むには、今日の株がどうなったかというのが、いちばん早い。だから、私が株に興味を持っているのは、早めにと言いますか、情報を手に入れるいちばん手っ取り早い方法は株だという意見からなんです。

伊藤　ご自分でも、株をおやりになりますか。

竹本　いや、ことに株をやるということはない。いま暇で退屈だから、たとえばソニーならソニー、ドコモならドコモというような株は買いますよ。それが、どのぐらいあるかということは……。いま売っちゃったけどね。だけど、絶対に僕は損しない。

伊藤　儲かりましたか。

竹本　儲かりました。だって、富士社会教育センター等に、この間、約三千万円寄付した。

伊藤　株で儲かったから？

竹本　いや、株とは関係ないけどね。二千万円、ポッと寄付した。それは、一つは退屈をしない、一つは日本経済の実態を掴むということには、株がいちばんいい。

伊藤　株を買ってみようかな（笑）。竹本先生に教えてもらって、株を買わなきゃならない。

竹本　僕は、子供はいないし、酒は飲まんし、あまり道楽がないんだ。だから、みんな寄付だ。

伊藤　多少は、株で儲かったお金もあるわけですか。

竹本　もちろん儲かった。それは、経済を見るには株の動きがいちばんいいでしょう。だから、僕はいまの政府の連中は、馬鹿ばっかりだと言うんです。政府の金をばら撒いて、三パーセント成長も達成し得ないで、もちろん自分も何ら儲からなくて、アップアップしている。全く感心できないくらいです。

伊藤　じゃあ、それとの関係で、質問の十三番。高度成長についての先生の評価というものを、ちょっと教えてください。日本は、戦争に負けてぺちゃんこになったでしょう。そこから、あれだけ経済成長して、先進国になった。これは、いったいどういうふうに評価したらいいものかと。高度成長ということを、先生はどういうふうにお考えですか。

竹本　日本国民のエネルギッシュな経済の力というのは……。僕は、日本の経済成長力は三パーセントじゃなくて、本当は四パーセントだと。四パーセントだけれども、いま政府がぐうたらだから、一パーセント割り引きして、三パーセントは行けると。ジャパン・アズ・ナンバーワンというのが、僕の信念だ。それは、勤勉で、小利口で、科学技術の基礎知識もあって、このぐらい条件が揃えば、いちばん恵まれておる。だから日本は、政治がしっかりすれば、四パーセント行くと思うけれども、ちょっと割り引きして、三パーセントは可能だと。必要であり、可能であるという意見なんだ。それができないのは、いまの政府が、ただ金を撒くばかりなんだ。総理大臣が、日本経済は誰が担っていくか、支えていくかという戦略を、全然持ってない。だから、いまはＩＴ時代で、ＩＴ革命ということで、みんな人が言うから言ってるだけでね。日本経済の本質を考えて、ここがいちばんの強みだ、だから、これを伸ばすという意味の戦略的意味があって、言うてるんじゃない。ただ、流行りで言ってる。日本には、いま戦略がない。だから、戦略があって、その戦略に従って……。たとえば、僕がいま大蔵大臣になったら……。

伊藤　ご自分が大蔵大臣になったつもりで、続けてください。

竹本　まず第一に、日本経済は世界のどこへ出しても負けはしないという、必勝の信念が根底になきゃいかん。そういう自信がない。あとは戦略。まあ、簡単に結論を言えば、四パーセントは成長する可能性があるけれども、リアクションや何かを考えながら、三パーセント成長に持って行く。それで、三パーセント成長に持って行く時は、選手を決めなきゃいかんのよ。それを担っていく産業は何だと。いま政府には意図的に、この産業を育て上げて、日本を高度成長に持って行くという考えはないでしょう。ただ、「みんながしっかりやってくれ」と言うだけで……。

　私が、たとえば大蔵大臣だったら、十ほど企業を選んで、個別に会うか、一緒に会うか、二通り方法がありますけど……。まあ、どちらでもいいが、とにかく、たとえば鉄鋼……。結論から言うと、私はやっぱりソニーだと思うんだ。日本の先頭を切って行けるのは、ソニーですよ。それは、歴史もあるし、迫力もある、力もある。それで、ソニーを総理大臣が呼んで、頭を下げて、「三パーセント成長に持って行きたい。ソニーは何パーセントになるのか、そしてその際には何が必要であるか」ということを、まず三時間ほど話を聞くんですよ。そして、それを実行すればいい。そういう連中を、ソニーと松下（電器）

と、自動車、鉄鋼、それからいまの銀行、証券……。「三パーセント成長に持って行くために、おたくはどれだけあれば、責任を持って三パーセント成長を成し遂げてくれるか」ということを、まず総理大臣が懇談する。……何も、やらんでしょ。そうしたら、暗中模索だ。だから、昔で言えば、真田十勇士がいなきゃだめなんです。霧隠才蔵みたいなやつや猿飛佐助も要る。そういう特技を活かして、「おまえは、どこまで責任を持ってくれるか。どうすればいいのか」ということを、懇談する。そうすれば、それでだいたい検討が出来る。

伊藤　しかし、いま日本の金融は危ないじゃないですか。

竹本　いま、いちばん危ないところを言えば、ぐうたらな金融ですよ。これは、ちょっと、そこまで言っていいかどうか分からんが、腹を決めて、場合によったら国家管理でやると。中央突破は、金融を押さえていく。新しい騎手が乗る時の馬は、金融ですよ。その金融が暴れ馬みたいになって、全然手綱を握っていない。騎手も決まってない。これじゃあ、日本経済は収拾つかん。ただ、これは話が、ちょっと横に飛びますがね。

伊藤　別に横に飛んでいるわけじゃありませんから、どんどん話してください。

竹本　僕は、情報局の出版課長をやった。その話をすると、出版界というのは、新聞社と出版会社と二千ぐらいある。そして、みんな仇同士で、ものすごく戦ってる。僕が出版課長になった時に、いちばん反旗を翻したのは、読売の社長の正力だ。あれは、ああいう豪傑だから、何だったか忘れたが、僕と大喧嘩をやった。そういうことがあって、大変なことになった。それで結論は、「政府が、官僚が威張ってやってたら、一戦を交える」と、正力君がそう言ったんだ。「どうするんだ」と訊いたら、「わけはない。新聞十社が全部申し合わせて、毎日発禁になるような記事を書く。そうすると、十日間も発禁が続いたら、日本は革命が起こる。いまの弱体内閣が吹っ飛んじゃう。それでいいなら、勝負しよう」と、正力は僕にそう言ったんだ。「面白い、やりましょう」と（笑）。浪花節だ。それで、僕はすぐ、旺文社の社長やら講談社の社長やら、朝日なんかの友達やら、産経の政治部長やら、そんな目ぼしいやつを個別に、または一緒に呼んで、「とにかく宣戦布告だ。向こうが言うんだから、こっちもやる」と言って構えたけど、結局戦争にはならなかった。だけど正力は、「政府を潰すか、我が社が潰れるか、やりましょう」と言った。

　いまだって、そうですよ。主な会社を呼んで、「製造会社が潰れるか、石油会社が潰れるか、証券会社が迷うか、どれが潰れるかやりましょう」という構えが、政府に何もない。だから、僕はだめだと言うんだ。その構えをしたら、あとはやっぱり、いちばん大事なのはハイテクだから、ソニーやドコモも入れて、それから証券会社を一つ……。いま、呼んでやらなきゃいかんのは、銀行だ。「おまえたちは、アメリカ資本と、どこまで戦う腹を持っているか。敵は誰だ。武器は何だ」と言って、訊きますよ。そうやって訊いて、「よし、それじゃあ、ここまでは俺が応援する。あとは、おまえがやってみろ」というものをやらなければ、戦争にならんですよ。いまは、全くそれがない。私だったら、いまの正力と同じだ。決戦覚悟で、何をすべきかということについて語らなければいかん。あとは、僕はよく真田十勇士と言うけど、十勇士がおらなきゃだめだ。「この内閣のために、一緒に討ち死にをします」という、腹を決めたやつが十人、各業界に一人ずつ必要ですよ。いま、誰もおらん。そういうのはないでしょう。

伊藤　財界と政治が、少し離れていますからね。

竹本　財界も、ぐうたらなのばっかりだ。

日本再生の戦略

伊藤　また後で、経済の話は伺うことにして、少し古い話になりますが、質問の十四番の中道連合政権構想について……。その「カナメ政党」としての民社党ということを、先生はいろいろお書きになっていますね。

第七回質問要項の第十四番。――昭和五十四年・五十五年頃、中道連合政権構想について語っておられます。また、その「カナメ政党」として民社党を位置づけ、八〇年代に政権を取りたいと語っておられます。この構想について、現在はどのようにご判断されていますか。

竹本　これは、いまは残念ながら、ちょっと出来ないですね。というのは、いまの民主党には、それをやる構えがない。全然構えがない。僕は、もう引退しているから、出て行ってやればどうかと思うけど、遠慮してますからね。時期が来て、相手がおれば、行ってやろうと思う。というのは、いまの鳩山（由紀夫）君なんていうのは、どうですかね？　第一は、経済を知らん。経済を知らなきゃ、何かやろうと思っても、明日株が下がって、会社が引っ繰り返ったら、もうだめです。だから、経済を押さえながら理想を続けるということで、どこを押さえるかという、そういう戦略がない。

伊藤　先生は、八〇年代には政権を取りたいというふうにおっしゃっていますが、これは全く当てが外れたと。

竹本　いまの民主党が、これほど無力とは思わなかった。あの人がおるから大丈夫だぞと。これは君に頼む、これは誰に頼むということを、指示するような人がいない。そう言っちゃ悪いけど、皆さんで右往左往するだけで、何もない。哲学がない、戦略も弱い。人がいないね。

伊藤　じゃあ、民主党のなかで、目ぼしい人はいない？

竹本　ちょっといま、いませんね。

伊藤　逆に、自民党のなかにもいないんでしょ？

竹本　まあ、使うという意味においては、加藤紘一君は使えるかなと、ちょっと思ったんだけど、この間のあれ（いわゆる「加藤の乱」）で、おそらく終わりだろう。いまの野中広務は、言うてることはだいたいピントが合ってるんだけど、徳がないのかね。

伊藤　まあ、徳はないでしょうね。あの人に徳を求めるのは無理でしょう。

じゃあ、先に行きます。先生は、今日も統制経済ということを主張されますよね。けれども、計画的市場経済という言葉も、先生はよくお使いになりますね。

第七回質問要項の第十五番。――先生は今日も「統制経済」を主張されますが、「計画的市場経済」ということは可能なのでしょうか。ソ連の統制経済の崩壊と、他方におけるアメリカのアメリカ流グローバル・スタンダードの世界化という状況を、どのようにご判断でしょうか。

竹本　要するに、計画的市場経済というのは、森羅万象、これだけある経済の舵を取る人が、ちゃんとしてなきゃいかんということ。中央経済計画處が要るということ。

伊藤　ゴスプランみたいなものですか。

竹本　ゴスプランだ。それはだから、資本主義というものは、要するにアナーキズムですよ。アナーキズム・オブ・プロダクションだ。だけど、それを抑えるには、金融以外ない。金融は、二つある。一つは、さっきの本にもちょっと書いたように、いまアメリカがいいように日本を利用している。だから、それを蹴飛ばさなきゃだめだということ。そして、日本の経済を動かしていくには、何と言っても銀行にいかなきゃいかん。ところが、政府の相棒として仕事が出来るような銀行は、いまはない。だから、銀行管理というか、腹を決めてですね。

伊藤　国が管理すると。

竹本　ええ。計画経済には柱がいる。その柱は金融ですよ。

伊藤　だけど、ソ連の場合、統制経済をやって大失敗して、潰れたでしょう。

竹本　統制経済というのは、戦争と同じなんだ。主力部隊が要るんだ。主力部隊を決めないで、あれもこれも、みな統制だと。そんなことをしたら、全部意気消沈で、気合が抜けちゃう。だから、それも失敗の元です。統制経済では、急所を押さえなきゃいかん。経済の急所は、金融ですよ。金融だけは、ピシャッと押さえなきゃね。だから、形だけ言えば、金融については、政府だって、いま日銀にいちおう総司令官をやらせておいて、それで日銀を押さえている。それを、もっと合理的に、金融を通じて経済全体を押さえるという点を、はっきりしなきゃいかんと思う。全部押さえるなんて、人間技では出来ない。

伊藤　だけど、実際にはアメリカ流のグローバル・スタンダードと言って、あらゆる統制を外していこうという方向に、世界は向かっているでしょう。こういうふうな流れには、先生は絶対反対だということですか。

竹本　いまは極端に言うと、アメリカ中心の、アメリカ本位の統制経済ですよ。アメリカは世界経済すら、ドルを機軸に統制しています。

伊藤　統制経済ですか。

竹本　いまは、たとえば日本が金利を決めるのだって、アメリカの目的の通りに決めているんだ。いま日本には、金融の自主性はないでしょう。金利をゼロにすると、誰が決めた。アメリカでしょう。日本の金利をタダにしておいて、そしてアメリカは六パーセントにして、何千兆円の金をアメリカに流している。だから、日本の景気をコントロールするのは、アメリカのためだ。そういう考え方は、だめだ。そこに気が付いているのは、理論が荒っぽいけれども、いまの東京都知事の石原慎太郎ですよ。あの人の本を、読んでごらん。急所だけは、だいたい、そういうことを睨んでる。結局最後は、世界経済を日本が握るのかアメリカが握るのか、その戦いですよ。その腹を決めて、勝負するというところまで行かなきゃいかん。

伊藤　いよいよ日米経済戦争だな、これは。それで、いままでのことも全部含めて、将来の日本は、いったいどうあるべきなのか。

竹本　私は、いちばん最後に申し上げようと思っている。経済政策は一、二、三、四、五だ。一は何か。今日、経済をいちばん動かす直接的なものは、為替相場だ。だから、日本の為替は（一ドル）百十円を目標にする。いま百二十円に下がっとる。しかし、為替相場を思うようにコントロールするという力が、政府にあるわけだから……。

伊藤　あるんですか。

竹本　だから、（一ドル）百十円に持って行くと。百二十円では、ちょっと、いま少し下がり過ぎた。百十円が、ちょうどいい。百円では強くなり過ぎる。だから、百十円ぐらいがいい。いま百二十円だから、

ちょっと弱くなり過ぎて、少し損をしているということですね。為替相場を、一つは世界経済の窓口に、一つは日本経済のコントロールの御本家ということで……。為替相場を百十円に抑えれば、第一は輸出が盛んになる。それで、息がつける。いまの日本の経済に息をつかせるためにも、為替を安くして、輸出をさせて、それでいくと。

伊藤　いま百十九円ですからね。

竹本　それを百十円にする。

伊藤　円高にすると。

竹本　円は、いまよりは高いほうがいい。いまは、少し安過ぎる。要するに、宮本武蔵の二刀流と同じ。為替と円相場の二刀流で、世界経済を斬りまくるということが必要なんです。全然、それを使わんじゃないか。

伊藤　為替相場を、政府は、ある程度コントロール出来る？

竹本　できますよ。

黒沢　さっきの産経新聞の記事は、アメリカがそれをコントロールしているということで、しかもそれはアメリカのみの国益に従ってと。

竹本　為替なんていうのは、いざとなれば、なくても空売りすればいいんだから……。勇気さえあればいい。だから、私の一、二、三、四、五を言いますと、一は為替が百十円。これによって、一つは、いまアメリカに為替相場はコントロールされているけど、それをやめて、日本の考えで、日本が自主的に為替相場を百十円に持って行く。いまアメリカは、金利を押さえ、為替相場を押さえて、自分の経済が豊かになるようにコントロールしているわけだ。その自主権を日本が確保するためには、たとえばの話として、日本はアジアに根を下ろす。アジアが日本のバックグラウンドだということを忘れちゃいかん。そうしないと、日本は孤立無援になる。

二番目は、金利二パーセント。金利ゼロはアメリカの謀略。アメリカは金利が六パーセントになるんだから、アメリカに三十五兆円が流出しとる。いまアメリカを脅かすには、日本の金利引き上げがいちばんいいんだ。しかし、野党が馬鹿だから、黙っとる。野党の総裁（党首）が、「アメリカの金利は何だ！」と言う。「他国に行って、金利稼ぎさえすればいいのか、どんなことをやってもいいのか」と言って、「半分呼び戻す」と言うと、アメリカの発言権は半分になる。だから為替相場は、大きな戦いの武器だ。

伊藤　金利でしょ。

竹本　為替と合わせてね。金利というのは、真面目に働いた金を貯金すると、付くわけだ。これは、経済の最大のプリンシプルだ。だから、金利がタダなんていうことは、第一に資本主義に反する。第二には、経済の根本を間違えている。だから、働けば利子が付く、金利も利子が付くということにしなければ……。それを、日本銀行も馬鹿、政府も馬鹿だから、たとえ一時にしろ、金利をゼロにした。あんな馬鹿なことをしちゃいかん。やっぱり、働いた金には利子を付けるということにして……。その利子も、金利は安いほどいいというのもあるが、しかし大衆の貯金というものは、生命線なんだ。それをタダにするなんていう馬鹿なことは、絶対にいかん。だから、金利を二パーセントに引き上げることによって、貯蓄奨励をやるということが、二番目です。

伊藤　二パーセントですか。

竹本　金利は、最低二パーセントですよ。

三番目は、日本の経済成長率を三パーセントにする。うっかりすれ

ば、五パーセントぐらい行っちゃう。だけど、いまみたいに行き過ぎても、今度はゼロになっちゃう。あるいは、マイナスになる。だから、それを計画的に、銀行なら銀行に、「三パーセントにする時は、おまえのところはいくら金を出すか」ということを、注文を付ければいいんだ。とにかく、いま日本の資本主義は、全く無計画の成り行き任せだ。そんな馬鹿なことはない。ちゃんと、経済はこう持って行くと。三パーセント成長のためには、金融はどのぐらいが良いか、その金融は誰が責任を持つかということを考えてやらなければいけない。

それから一つは、いまの不景気のいちばん大きな原因は、消費萎縮でしょう。消費がないから、不景気なんだ。消費がないのは、金利がタダになったからだ。貯金をしたって、何の金も入らん。いま、いちばん経済をへこましてるのは、弱気になってるのは、中小企業の貯金をしている連中です。金利がタダになって、自信喪失だ。自信がなくなった。だから、購買力が振わない。

それから四番目は、三パーセント成長を支える四大産業と、企業を決める。それは、いま言ったように、一つは鉄鋼、二つ目は自動車。自動車は、アジアは小型だ。ちょうどいいんだ。ホンダ、スズキだ。こういうところは、ちょうど小型なんだ。だから、自動車でアジアを席巻するということです。三つ目は電機・情報産業だ。ソニー、その他のハイテクです。それからもう一つ、日本の経済を支えるものを何にするかというと、四つ目はやっぱり金融です。日本銀行のような能力もないものが、あそこで頑張ってるだけではだめで、やっぱり金融は政府の文字通り懐刀にしなきゃいかん。だから、金融は政府のいちばん忠実な、そして有力なサーバントとして使う。

最後は、「五大国の連合をつくれ」という意見なんだ。というのは、日本は、まず第一に英国と結べと。英国と結んで、アメリカを抑えると。

伊藤　日英同盟だな。

竹本　日本と英国が結ぶことによって、ソ連（ロシア）、中国をうまく抑えれば、アメリカを抑えることが出来る。そうすると、日英にドイツを入れて、ソ連（ロシア）と中国を入れて、この四大国を日本の味方にして、世界を牛耳るというか、発言権を持つ。世界に味方がいないような政治では、話にならん。だから、英国を中心とした五大国だ。僕は、だいたい英国贔屓なんだ。

だから、第一は哲学、第二は戦略。その戦略の担い手を、五人なら五人ぐらいちゃんとつくって、毎日のように相談をしながら、あそこが悪いとか、ここが悪いとかということで、平気でものが言えるようにしなければね。全く、いまは何も持たんで、ただ馬鹿な総理がお経を読んでるだけで、一つも動きにならん。これじゃあ、日本経済は、どうにもならん。

伊藤　そのことと同時に、日本の安全保障の問題ですね。

竹本　第一は、経済が引っ繰り返ったら、安全保障はない。だから、安全保障の第一は、日本経済を強固にすること。それは、私は経済が専門だから経済のことを言うけど、しかしそうでなくても、日本の経済がその日暮しで危なくなったら、安全保障は、言うのは簡単だけれども何もできない。だから私は、第一の安全保障は生活の安定だ。生活に希望を持たせると。それには経済だ。その経済を、第一は為替相場、第二は金融、この二つをテコにしながら、経済を三パーセント成長にする。そうすれば、全体がうまく動くという意見です。だから私は、一、二、三、四、五で、すべて終わり。

伊藤　というのが、施政方針です（笑）。施政方針を伺ったところで終わりということで、よろしゅうございますか。何か代表質問でも、おありになりますか（笑）。

竹本　いまの自民党は、哲学がなくて、戦略がない。何をどうしようというのか、そのためにどこをどうするのか……。だけど、言うても分からんやつばかりだから……。

伊藤　希望がないですね。

竹本　希望がない。本当に最近、憂鬱なんです。たとえば、民主党に喝を入れて、政策を引き継がせるというのが、いちばん具体的な方法だ。ところが、その民主党が、あの連中じゃあ、とても問題にならん。

哲子夫人　ここ（民主党の名簿）に、昔の民社党の人の名前がダーッとあって、こんなにいたのかしらと思って……（笑）。

黒沢　いまの先生の頭のなかでは、かつての民社党が民主党に引き継がれたという、大方は、そういう感じなんですね。ですから、その連続性のなかで、お答えいただいているんだろうと思いますがね。

伊藤　そうだと思います。どうも長時間にわたって、本当にありがとうございました。

〈以上〉

あとがき

竹本孫一氏のオーラルヒストリーは、平成十二年六月八日から翌十三年一月十七日まで、七回に亘って、竹中治堅氏、季武嘉也氏、黒沢博道氏と私が質問者になって行われた。お生まれから学生時代、内閣調査局、企画庁、企画院、情報局、満州国、片山内閣総理大臣秘書官、衆議院議員（民社党）を通じての御記憶をお話しいただいた。本書は、その記録である。ただ竹本氏が御高齢で、耳が遠く、奥様の哲子さんに御協力をいただいたが、かなり記憶がなくなったり、曖昧になっているところがあった。しかも、転居の度に殆ど文書類を捨てられたとのことであった。そこで、親戚の方に貸しておられた前の住居の物置に残されていた文書類をいただいてきて、黒沢良氏等に整理して貰い、それに竹本氏が出された出版物や雑誌などに発表された文章、さらに後述のように私がかつて行った三回の竹本氏への聞き取りの記録などで補注を付けた。その作業は、鈴木亜紀子さんが担当した。

事の発端は、平成十二年四月二日に中野サンプラザで開かれた「和田耕作先生の出版を祝う会」に、かねてから和田氏とお付き合いのあった私が出席して、お祝いの言葉を述べたことであった。その時に、和田氏が私に富士社会教育センターの黒沢博道氏を紹介した。私がオーラルヒストリー・プロジェクトの話をして、「民社・同盟系の人々のオーラルヒストリーを行いたいので、協力して欲しい」と頼んだところ、黒沢氏は竹本孫一氏と天池清次氏の名を挙げ、「自分も応援したい」とのことであった。既に九十三歳になられている竹本氏を先に始めようということで、黒沢氏が交渉した結果、竹本氏の了承が得られたので、第一回がその年の六月八日、竹本氏のお住まいである杉並区高井戸のライフニクスの小会議室で始められたのであった。

ところで、私はかつて竹本氏の聞き取りを行ったことがあった。最初は昭和五十九年四月二十一日で、第二回は昭和六十年七月十日に行った。場所は、議員会館の中の食堂であったと記憶する。そして第三回目は、楠精一郎氏が連絡して、私と季武氏が加わり、平成六年十一月十九日に京王プラザホテルで行った。前の二回は、私が当時近衛新体制の研究をしており、そのためにお話を伺ったのであった。そしてその縁で、私と今井清一氏で編纂していた、みすず書房の『現代史資料四四　国家総動員2　―政治―』の月報に、竹本氏に「企画院から情報局へ―私の体験記―」という文章を書いていただいた。第三回目は、今回と同様なオーラルヒストリーを企画して、中途で挫折したものであった。今回のオーラルヒストリーの補注を付ける際に、それらの談話速記を一部利用することが出来た。

また、参考のために、清水唯一朗氏の作成になる「竹本孫一著作リスト」と、鈴木亜紀子さん作成の「略歴」を付けた。

なお、竹本氏にいただいた「竹本孫一関係文書」は、政策研究大学院大学で整理の上、目録を作成して公開する予定である。

最後に竹本氏を始め、本記録作成のために尽力された方々へ、深く感謝する。

平成十四年五月十五日

政策研究大学院大学教授　伊藤　隆

追記　竹本氏は五月三十日に亡くなられた。突然のことであった。本書をお見せすることが出来なかったのは、遺憾至極であった。心からの御冥福をお祈りする。

竹本孫一著作リスト（年次順）

（＊印は、竹本氏のペンネーム「山田洋雄」名で書かれたもの）

『非常時日本と財政危機』（全国青年時局会議、一九三二年）
「高橋財政の再吟味」（『我観』十三巻二号、一九三五年二月）
「農村電化と電力国営」（『電力問題研究』十一月号、一九三六年十一月）
「新たなる極東協同体の建設へ」＊（『国民評論』一九三七年一月）
「戦時革新内閣論」＊（『国民評論』一九三七年十二月）
『電力国営と日本の革新』（東京啓明社、一九三八年）
「電力共同修正案を繞りて」（『国民評論』十巻四号　特集・議会は革新を語り得るか、一九三八年四月）
「物価取締の諸方策に就て」＊（『国民評論』一九三八年九月）
「電力国営その後の問題」＊（『国民評論』一九三八年十月）
「民政党の新経済政策」＊（『国民評論』一九三八年十二月）
「青年指導研究座談会」（座談会）（『青年指導』五巻四号、一九三九年四月）
「戦時統制経済の新段階」（『科学主義工業』二巻一二号、一九三九年五月）
「日本国策の科学性と道義性」（『科学主義工業』三巻二号、一九三九年七月）
「日本戦時経済の動向」（『市政研究』五巻六号、一九三九年十一月）
「新物動計画の完遂過程」＊（『国民評論』一九四〇年七月）
「強力新党の政治性格」＊（『国民評論』一九四〇年八月）
「国土計画の現段階的意義」（『工業国策』三巻一一号、一九四〇年十一月）
「国土計画と文化問題」（『放送』十巻一二号、一九四〇年十二月）
「国土計画に就て」（『道路』三巻一号、一九四一年一月）
『新しい政治　―その理論と実際』（森の道社、一九五六年）
「池田経済政策への一つの批判　―紅林氏の新著を中心に」（『東海大学論叢商経研究』一一号、一九六二年十二月）

『激流にたたかう　―しのびよる共産革命と一九七〇年の政治危機を語る』（春日一幸との共著）（日本経済研究会、一九六八年）
『新しい針路を求めて　―ヨーロッパの旅』（日本経済研究会、一九七〇年）
「潜在的軍事大国をめざす田中構想」（『革新』二七号　特集・日本列島改造論批判、一九七二年十月）
「国民福祉四倍五ヵ年計画を実現しよう、民社党提案」（『革新』二九号、一九七二年十一月）
「改造論の公害四倍増か、民社党の福祉四倍増か」（『都市開発』一一六号　特集・「日本列島改造論」への各党対策、一九七二年十二月）
「悪性インフレを退治せよ」（インタビュー）（『革新』三四号、一九七三年五月）
「自衛隊は果して違憲か　―ただし無原則な拡大には反対」（大内啓伍氏との対談）（『革新』四〇号、一九七三年十一月）
「日本経済の新しい進路　―民社党の経済ビジョン」（『革新』五三号、一九七四年一月）
「〝経世済民〟をめざす民社党からの提案」（インタビュー）（『革新』四五号、一九七四年四月）
「混合経済体制を確立しよう」（『革新』四六号、一九七四年五月）
「理解すべき中国の実情　―国交回復三年目の課題と展望」（永末英一氏と対談）（『革新』五二号、一九七四年十一月）
「三木新政権と民社党の進路」（『同盟』一九九号、一九七五年一月）
「なぜ銀行法改正が必要か　―経済社会の健全な発展の為に」（『革新』五五号、一九七五年二月）
「独禁法改正案の問題点」（『革新』五六号　特集・生活防衛への視点、一九七五年三月）
「底割れ寸前の景気に活を」（インタビュー）（『革新』六三号、一九七五年十月）
「戦火なきアジアへの平和構想（海外調査団派遣の成果）」（座談会）（『革新』六三号、一九七五年十月）
「不況克服の途をさぐる」（加藤寛氏との対談）（『革新』六四号　特集・安定経済への指針、一九七五年十一月）
「民主社会主義社会建設への軌道　―総選挙政策解説座談会」（座談会）（『革新』七一号、一九七六年六月）
『自衛隊は果して違憲か』（竹本孫一、一九七七年）
「深刻な不況状況を克服して安定経済へ　―福祉型経済へ転換しよう」（『革新』七九号、一九七七年二月）
『八十年代への挑戦　―明日の生きがいを生む日本改造計画―』（富士社会教育センター、一九七八年）
「保守政権の限界と経済政策」（『革新』九二号　特集・袋小路の日本経済と打開策、一九七八年三月）
「円高問題解決への処方箋」（『革新』九五号、一九七八年六月）
「一九八〇年代への政策ビジョン（試案）―政策中心連合政権時代来る」（『革新』九六号、一九七八年七月）

平成 14 年度　文部科学省科学研究費補助金〔特別推進研究(COE)〕
研究成果報告書〔課題番号 12CE2002〕
発行：2002 年 8 月 26 日《無断転載禁》

政策研究大学院大学（政策研究院）
C.O.E.オーラル・政策研究プロジェクト
〒162 - 8677　東京都新宿区若松町 2 − 2
Tel：03(3341)0458　Fax：03(3341)0446